

国道 474 号（飯喬道路）
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

－飯田市内その3－

しろやま 白山遺跡 やまもととおつか 山本大塚遺跡 てらさわ 寺沢遺跡 なんまつ 並松遺跡
たけさ なかはら 竹佐中原遺跡（縄文時代以降） もりばやし 森林遺跡 さが まつ 下り松遺跡
たいこぼら 太鼓洞遺跡 よこやま 横山遺跡 くめ がじょうせき 久米ヶ城跡 くめ おおはた 久米大畑遺跡
くめうえだ 久米上田遺跡 くめうえのたいら 久米上ノ平遺跡 くめうえのたいらみなみ 久米上ノ平南遺跡 ほんぼら 本洞遺跡

2009. 3

国土交通省中部地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



西上空から山本地区を望む



下り松遺跡3区 縄文時代遺構群 南から

序

三遠南信自動車道は、三河、遠江、南信濃の三地域を結ぶルートとして、完通した暁には、人の移動や物資の流通に大きな役割を担い、広域的な経済・文化圏の形成に寄与することが期待されています。三遠南信自動車道の一部である飯橋道路建設用地内の遺跡保護については、平成 11（1999）年から長野県埋蔵文化財センターが記録保存を実施しています。本書は、このうち飯田市山本地区に所在する 15 遺跡の発掘調査報告書です。

長野県南部を貫く天竜川に沿って延びる伊那谷は、古来より文化伝播の通廊でありました。弥生時代には稲作文化が伝わる道となり、古代には美濃国から上野国へ続く当時の幹線道路である東山道が通っていました。伊那谷の南端に位置する飯田市周辺は、この通廊の南の玄関口として、また、秋葉街道や三州街道などの集束点として、西や南からの文化と信濃の文化の接点となる地域であり、人や物の動きの歴史を考えるうえで重要な地域です。この地に残された人々の活動の痕跡は旧石器時代から近世にわたり、これまでも多くの先達によって発掘調査が行われ、数々の成果が示されてきました。

本書に報告する 15 遺跡のなかには、遺跡の中心部分から外れる調査となったため、遺構・遺物とも確認されなかった遺跡も少なくありません。しかし、いくつかの遺跡では貴重な成果を得ることができました。その詳細は各遺跡の報告をご覧くださいと思いますが、下り松遺跡では縄文時代中期の集落の姿が明らかになり、森林遺跡では、これまで山本地区では不明瞭であった弥生時代後期の集落が捉えられ、当地域における該期の集落構造を追究する新たな資料を提供しました。また、山本大塚遺跡では近世前半の土葬墓が確認されています。竹佐中原遺跡は、日本列島の旧石器文化の始源に関わる石器群が発見されたことで全国的に注目を集める調査となりましたが、それについては別書で報告いたしますので、本書には縄文・弥生時代および古代の調査成果を収録しました。

飯橋道路の建設に伴う発掘調査は、今後も継続して行われます。長野県埋蔵文化財センターは、現在、天竜川東岸地域の調査を進めており、それによって得られる資料とともに、本書に報告した遺跡の調査成果が、飯田市をはじめとした伊那谷地域の歴史解明の一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘から報告書刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただいた国土交通省、飯田市、飯田市教育委員会などの関係諸機関、地元的地権者や関係者の方々に深甚なる謝意を申し上げます。

例 言

- 1 本書は長野県飯田市に所在する下記 15 遺跡の発掘調査報告書である（踏査・立会報告を含む）。
白山遺跡、山本大塚遺跡、寺沢遺跡、並松遺跡、竹佐中原遺跡、森林遺跡、下り松遺跡、太鼓洞遺跡、横山遺跡、久米ヶ城跡、久米大畑遺跡、久米上田遺跡、久米上の平遺跡、久米上の平南遺跡、本洞遺跡
- 2 ただし、旧石器時代に関わる部分、竹佐中原遺跡・森林遺跡の層序・地形環境については、『国道 474 号（飯喬道路）埋蔵文化財発掘調査報告書 2- 飯田市内その 2-』において詳細な報告がなされるため、本書では調査経過の項などで簡潔に触れるにとどめた。
- 3 調査は、一般国道 474 号（飯喬道路）建設および関連工事に伴う事前調査として実施し、国土交通省中部地方整備局（平成 13 年まで建設省中部地方建設局）からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 各遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』17～23 ほかで紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は、本書の記述が優先する。
- 5 本書に掲載した地図は、飯田市発行の飯田都市計画基本図（1:2,500）・飯田市地形図（1:10,000）・飯田市遺跡分布図、国土地理院発行の地形図（1:25,000 時又、1:50,000 時又）、国土交通省飯田国道事務所作成の地形図（1:1,000）をもとに作成した。
- 6 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は 2002 年以前の日本測地系（旧測地系）による。
- 7 発掘調査にあたって、以下の機関・諸氏に業務委託もしくは協力を得た（敬称略）。
測量・航空写真撮影：(株)アイシー、(株)日本空間情報技術、新日本航業(株)
放射性炭素年代測定：(株)加速器分析研究所
石材鑑定：国立大学法人 信州大学理学部教授 原山 智
石器実測・トレース：(株)アルカ
黒曜石産地推定：独立行政法人国立高等専門学校機構 沼津工業高等専門学校教授 望月明彦
遺物写真撮影：(株)長野フジカラー
報告書編集：(有)アルケーリサーチ
- 8 竹佐中原遺跡で後期旧石器時代を遡る可能性をもつ石器群が発見されたことを契機として、竹佐中原遺跡等調査指導委員会を組織した。指導委員の方々には、竹佐中原遺跡の調査だけでなく、他の遺跡の調査についてもご指導いただいた。ご芳名を記して感謝します（敬称略）。
指導委員 戸沢充則 大竹憲昭 小野 昭 神村 透 佐川正敏 佐藤宏之 松島信幸
- 9 以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力をいただいた。ご芳名を記して感謝します（敬称略）。
岡田正彦 小林正春 坂井勇雄 渋谷恵美子 下平博之 寺平 宏 羽生俊郎 馬場保之 原山 智
望月明彦 山下誠一 吉川金利 吉川 豊 飯田市教育委員会生涯学習課 飯田市上郷考古博物館
飯田市山本支所 飯田市国県事業課 阿智村教育委員会 三遠南信道対策委員会
- 10 発掘調査の担当者、発掘補助員、整理補助員は第 3 表に記載した。
- 11 本書は、調査研究員 若林 卓・鶴田典昭が執筆を行い、調査第 1 課長 上田典男が校閲し、調査部長 平林 彰が総括した。若林と鶴田の分担は以下の通りである。
鶴田典昭：第 3 章第 2 節 3（3）、第 4 章第 1 節 3（4）、第 4 章第 2 節 3（3）、第 5 章第 1 節 5（2）
若林 卓：上記以外および編集
- 12 本書付録の C D には以下の内容を収録した。
土器観察表、石器観察表、放射性炭素年代測定結果報告書、黒曜石産地推定結果報告書
- 13 本書で報告した遺跡の記録類・出土遺物は飯田市教育委員会に移管される予定である。

凡例

- 1 遺構番号は、遺跡別に遺構種ごとに付してあるが、発掘時の番号を変更しなかったため欠番がある。
- 2 実測図の遺物番号は、遺跡別に土器ごと、石器ごとの通し番号となっている。ただし、山本大塚遺跡の近世墓 S K 03・S K 04 出土遺物については、遺物種類を問わず 2 基合わせた通し番号となっている。実測図の遺物番号は表、写真とも共通する。
- 3 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として以下の通りである。

主な遺構実測図

竪穴住居跡 1:60 住居内施設 1:30 土坑・墓壙 1:40 溝 1:50・1:100

主な遺物実測図

土器・陶器 個体 1:4 破片 1:3 金属製品 1:2 錢貨拓影 2:3
石器・石製品 2:3 石鏃 石匙 石錐 搔器 削器 楔形石器 玦状耳飾 火打石
1:2 打製石斧 横刃型石器 石錘 磨製石斧 磨石 凹石 敲石 石庖丁
紡錘車 硯 砥石
1:3 磨石 凹石 敲石
1:4 1:6 石皿

- 4 遺物写真の縮尺はおおむね実測図と同縮尺である。ただし、以下の場合がある。

山本大塚遺跡 打製石斧 1:3

竹佐中原遺跡 磨製石斧破片・打製石斧・横刃型石器 1:3

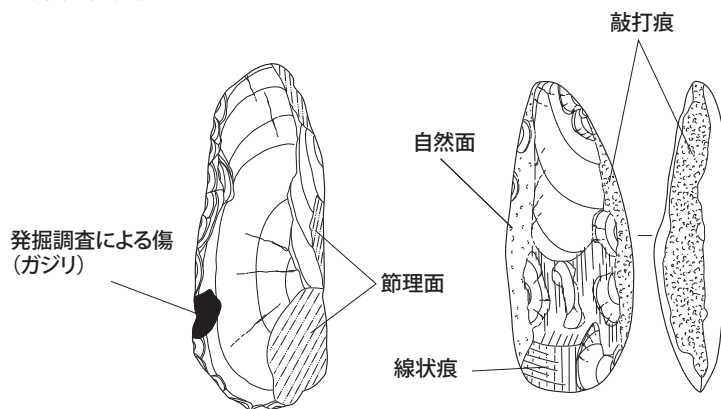
下り松遺跡 横刃型石器・打製石斧 1:3、石皿 1:5

- 5 基本層序および遺構覆土、観察表中の土器胎土の色調は『新版 標準土色帳』による。
- 6 竪穴住居跡の床面積は、竪穴の下端線を床外縁としてプランメーターで計測した。
- 7 土器観察表の法量は、() が復元値、< > が残存値を示している。
- 8 実測図中の網掛け部分や記号、模式的表現は特に断りのある場合を除いて以下の事象を示している。

遺構図 濃い網掛け：被熱赤変部分 薄い網掛け：焼土粒分布範囲

●：土器出土位置 △：石器出土位置 □：礫出土位置

遺物図 石器（下図参照）



目次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

第1章 発掘調査の経緯と方法	1
第1節 発掘調査の経緯	1
1 一般国道474号（飯喬道路）の建設計画	1
2 埋蔵文化財の保護協議と長野県教育委員会による分布調査・試掘調査	1
3 長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査と受委託契約	1
第2節 発掘の方法	4
1 遺跡名称と遺跡記号	4
2 調査グリッドの設定と呼称	5
3 遺構名称と遺構記号	5
4 遺構の発掘	6
5 写真と測量	7
第3節 整理の方法	7
1 基礎整理作業	7
2 本格整理作業	8
3 資料の収納	8
第2章 遺跡の環境	10
第1節 遺跡の位置と地理的環境	10
第2節 周辺遺跡と歴史的環境	12
第3章 アクセス道路部分の調査	18
第1節 白山遺跡	18
1 遺跡の概観	18
2 調査の概要	20
第2節 山本大塚遺跡	21
1 遺跡と調査の概観	21
(1) 遺跡の概観 (2) 調査の経過 (3) 層序	
2 検出遺構	26
(1) 近世墓 (2) 土坑 (3) 溝	
3 出土遺物	33
(1) 近世墓出土の遺物 (2) 土器・陶器 (3) 石器	
4 小結	40
第3節 寺沢遺跡	43
1 遺跡の概観	43
2 調査の概要	43
第4節 並松遺跡	46
1 遺跡の概観	46
2 調査の概要	47

第4章	インターチェンジ部分の調査	48
第1節	竹佐中原遺跡	48
1	遺跡と調査の概観	48
(1)	遺跡の概観	
(2)	調査の経過	
(3)	層序	
2	検出遺構	54
(1)	竪穴住居跡	
(2)	建物跡	
(3)	土坑	
3	出土遺物	64
(1)	縄文時代の土器	
(2)	古代の土器	
(3)	中世以降の焼物	
(4)	石器・石製品	
4	小結	68
第2節	森林遺跡	70
1	遺跡と調査の概観	70
(1)	遺跡の概観	
(2)	調査の経過	
(3)	層序	
2	検出遺構	73
(1)	竪穴住居跡	
(2)	土坑	
3	出土遺物	79
(1)	縄文時代の土器	
(2)	弥生時代の土器	
(3)	石器・石製品	
4	小結	83
第5章	本線部分および工事用道路部分の調査	86
第1節	下り松遺跡	86
1	遺跡の概観	86
2	調査の経過	86
(1)	平成12年度	
(2)	平成13年度	
(3)	平成15年度	
3	層序	88
4	検出遺構	92
(1)	竪穴住居跡	
(2)	建物跡	
(3)	竪穴状遺構	
(4)	土坑	
(5)	流路跡	
5	出土遺物	111
(1)	土器	
(2)	石器・石製品	
6	小結	148
第2節	太鼓洞遺跡・横山遺跡	151
1	遺跡の概観	151
2	調査の概要	151
(1)	太鼓洞遺跡	
(2)	横山遺跡	
第3節	城山山麓の調査	156
1	久米ヶ城跡	156
(1)	遺跡の概観	
(2)	調査の概要	
2	久米大畑遺跡・久米上田遺跡	158
(1)	遺跡の概観	
(2)	調査の概要	
3	久米上ノ平遺跡・久米上ノ平南遺跡・本洞遺跡	160
(1)	遺跡の概観	
(2)	調査の概要	
第6章	結語	162

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図	飯喬道路と発掘調査遺跡の位置	2	第 40 図	SB04 実測図	77
第 2 図	調査グリッドの設定と呼称	6	第 41 図	SK01 実測図	79
第 3 図	周辺遺跡分布図	11	第 42 図	土器実測図	80
第 4 図	調査範囲図	18	第 43 図	石器実測図 (1)	82
第 5 図	アクセス道路部分の調査遺跡	19	第 44 図	石器実測図 (2)	83
第 6 図	土層柱状図	20	第 45 図	調査範囲図	87
第 7 図	調査範囲図	22	第 46 図	土層柱状図	89
第 8 図	土層柱状図	23	第 47 図	遺構全体図	90
第 9 図	遺構全体図	24	第 48 図	1 区遺構配置図	91
第 10 図	2 区南遺構配置図	25	第 49 図	3・4 区遺構配置図	92
第 11 図	4 区遺構配置図	26	第 50 図	6 区遺構配置図	93
第 12 図	近世墓実測図	28	第 51 図	SB01 実測図 (1)	94
第 13 図	土坑実測図	29	第 52 図	SB01 実測図 (2)	95
第 14 図	SD01・02 実測図	32	第 53 図	SB02 実測図 (1)	96
第 15 図	SD03~07 実測図	34	第 54 図	SB02 実測図 (2)	97
第 16 図	近世墓出土遺物実測図	36	第 55 図	SB03 実測図	98
第 17 図	土器実測図	38	第 56 図	SB04 実測図	99
第 18 図	石器実測図	39	第 57 図	SB05 実測図	101
第 19 図	調査範囲図	44	第 58 図	ST01 実測図	102
第 20 図	土層柱状図	45	第 59 図	土坑実測図 (1)	105
第 21 図	調査範囲図	46	第 60 図	土坑実測図 (2)	106
第 22 図	石器実測図	47	第 61 図	土坑実測図 (3)	107
第 23 図	インターチェンジ部分・本線部分の 調査遺跡	49	第 62 図	土坑実測図 (4)	108
第 24 図	竹佐中原遺跡・森林遺跡調査範囲図	50	第 63 図	土器実測図 (1)	112
第 25 図	土層断面図	52	第 64 図	土器実測図 (2)	113
第 26 図	遺構全体図	53	第 65 図	土器実測図 (3)	115
第 27 図	SB03 実測図	55	第 66 図	土器実測図 (4)	117
第 28 図	SB02 実測図	57	第 67 図	土器実測図 (5)	119
第 29 図	SB01 実測図	58	第 68 図	土器実測図 (6)	120
第 30 図	ST01 実測図	59	第 69 図	土器実測図 (7)	122
第 31 図	土坑実測図 (1)	61	第 70 図	土器実測図 (8)	124
第 32 図	土坑実測図 (2)	63	第 71 図	土器実測図 (9)	125
第 33 図	土器実測図 (1)	65	第 72 図	石製品実測図	127
第 34 図	土器実測図 (2)	66	第 73 図	石鏃の欠損分類	129
第 35 図	石器実測図	67	第 74 図	打製石斧長幅比	131
第 36 図	土層柱状図	71	第 75 図	打製石斧の欠損分類	131
第 37 図	遺構全体図	72	第 76 図	横刃型石器・剥片 A 長幅比	131
第 38 図	SB01・SB03 実測図	73	第 77 図	石器実測図 (1)	137
第 39 図	SB02 実測図	75	第 78 図	石器実測図 (2)	138
			第 79 図	石器実測図 (3)	139

第 80 図	石器実測図 (4)	140	第 87 図	石器実測図 (11)	147
第 81 図	石器実測図 (5)	141	第 88 図	太鼓洞遺跡・横山遺跡調査範囲図	152
第 82 図	石器実測図 (6)	142	第 89 図	太鼓洞遺跡土層柱状図	154
第 83 図	石器実測図 (7)	143	第 90 図	横山遺跡土層柱状図	155
第 84 図	石器実測図 (8)	144	第 91 図	城山山麓調査地点位置図	157
第 85 図	石器実測図 (9)	145	第 92 図	久米大畑遺跡・久米上田遺跡 調査範囲図	159
第 86 図	石器実測図 (10)	146			

挿表目次

第 1 表	年度ごとの調査概要	3	第 6 表	土坑一覧	109・110
第 2 表	受委託契約一覧	3	第 7 表	遺構別器種組成	128
第 3 表	調査体制	4	第 8 表	器種別石材組成	129
第 4 表	周辺遺跡一覧	14・15	第 9 表	遺構別剥片点数	134
第 5 表	近世墓副葬品一覧	37	第 10 表	黒曜石産地分析結果	136

写真目次

PL 1	白山遺跡 寺沢遺跡	PL14	下り松遺跡 出土土器
PL 2	山本大塚遺跡 土坑、近世墓、4 区南全景、出土 石器	PL15	下り松遺跡 出土土器
PL 3	山本大塚遺跡 出土土器・陶器、近世墓出土銭貨	PL16	下り松遺跡 出土土器
PL 4	山本大塚遺跡 近世墓出土遺物 並松遺跡	PL17	下り松遺跡 出土土器
PL 5	竹佐中原遺跡 全景、縄文時代竪穴住居跡、土坑、 弥生時代竪穴住居跡	PL18	下り松遺跡 出土土器
PL 6	竹佐中原遺跡 弥生時代竪穴住居跡、古代竪穴住 居跡、建物跡、出土石器	PL19	下り松遺跡 出土土器
PL 7	竹佐中原遺跡 出土土器	PL20	下り松遺跡 出土土器・石器
PL 8	森林遺跡 全景、縄文時代竪穴住居跡、弥生時代 竪穴住居跡	PL21	下り松遺跡 出土石器
PL 9	森林遺跡 弥生時代竪穴住居跡、土坑、出土土器	PL22	下り松遺跡 出土石器
PL10	森林遺跡 出土石器	PL23	下り松遺跡 出土石器
PL11	下り松遺跡 全景、3 区縄文時代遺構群	PL24	下り松遺跡 出土石器
PL12	下り松遺跡 縄文時代竪穴住居跡	PL25	太鼓洞遺跡 横山遺跡
PL13	下り松遺跡 縄文時代竪穴住居跡、土坑、自然流 路跡、3 区南壁土層断面	PL26	横山遺跡 久米ヶ城跡 久米大畑遺跡 久米上田遺跡 久米上の平遺跡

第1章 発掘調査の経緯と方法

第1節 発掘調査の経緯

1 一般国道474号（飯喬道路）の建設計画

三河（愛知県）、遠江（静岡県）、南信州（長野県）の3地域を結ぶ三遠南信自動車道は、長野県飯田市の中央自動車道を起点として、静岡県浜松市三ヶ日町の東名高速道路までを結ぶ延長約100kmの自動車専用道路である。長野県内は起点側から、飯喬道路・小川路峠道路・青崩峠道路の3区間に分かれている。飯喬道路は、中央自動車道から分岐する飯田市山本地籍の飯田南JCTから飯田南IC（その後、双方を合わせて飯田山本ICとなった）、天竜峡ICを経て飯田市上久堅の飯田東ICに至る延長14.6km区間として、平成2（1990）年11月1日に基本計画が決定され、平成4（1992）年度に事業化が決定した。平成9（1997）年2月5日には整備計画が決定となり、平成9年度から建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所が用地取得を開始した。また、平成11（1999）年には飯田南ICへのアクセス道路となる延長1.4kmの国道153号バイパス（以下、アクセス道路と呼称する）の設計協議がなされ、設計が確定した。その後、平成16（2004）年度に飯田東IC～喬木IC（喬木村氏乗）間が小川路峠道路から編入され、飯喬道路は延長22.1kmとなった。

2 埋蔵文化財の保護協議と長野県教育委員会による分布調査・試掘調査

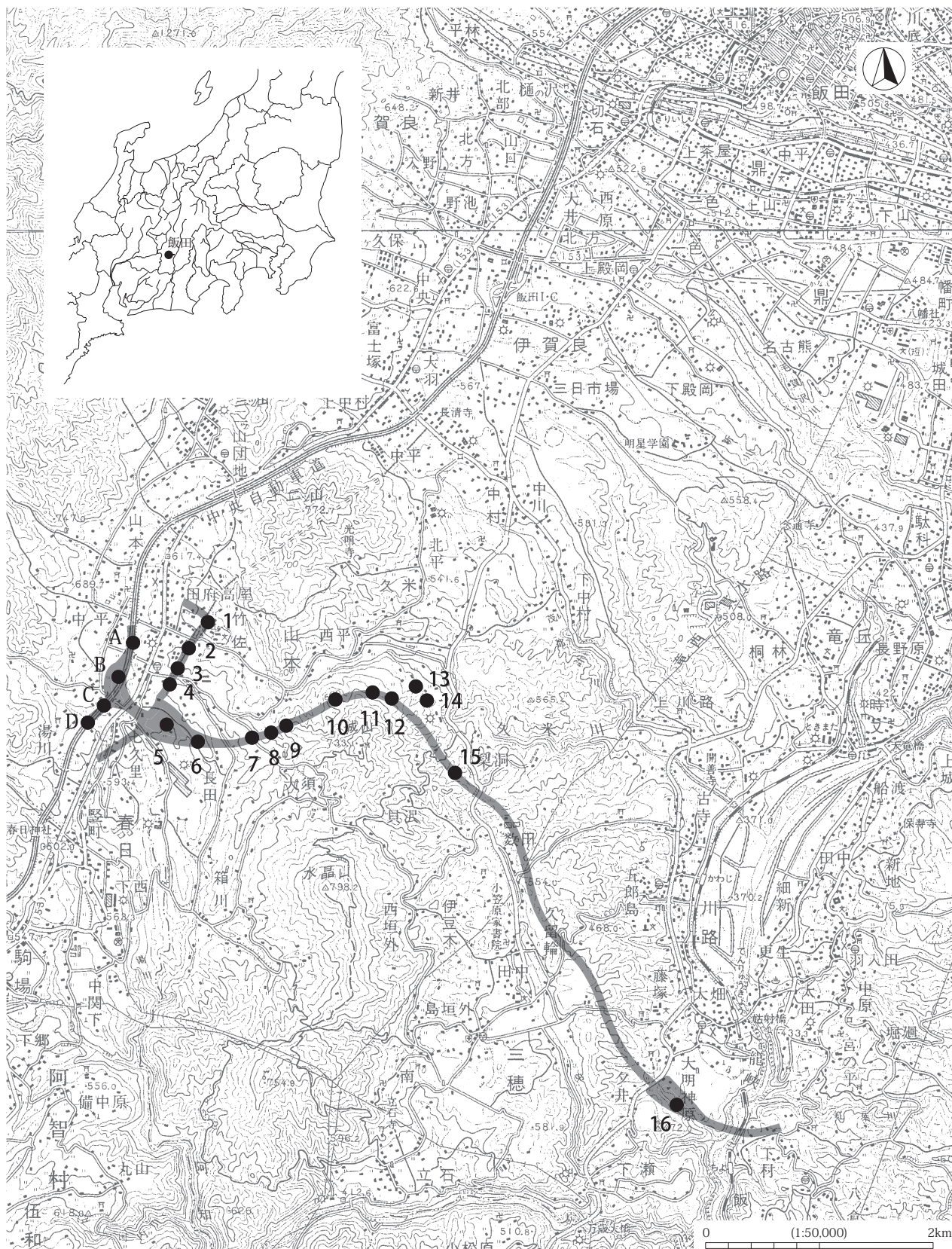
飯喬道路建設事業用地にかかる埋蔵文化財の保護については、建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所（現国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所）と長野県教育委員会が平成5（1993）年から6年（1994）にかけて協議を重ねた。その結果、保護措置は記録保存とすること、そのための発掘調査は、飯田国道工事事務所が財団法人長野県埋蔵文化財センター（現財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター、以下、「長野県埋蔵文化財センター」と呼称する）に委託して実施することが確認された。

長野県教育委員会は、平成6（1994）年7月21日の協議結果を受けて、飯喬道路事業用地内の遺跡を確認するため、同年11月に、飯田市教育委員会の協力を得て、飯田南JCTから飯田東IC間について現地踏査を中心とした詳細分布調査を実施した。その結果をもとに長野県教育委員会は、埋蔵文化財包蔵地として発掘調査等保護措置が必要な部分と、埋蔵文化財が存在する可能性が高く今後試掘調査等により内容把握の必要な部分を分別し、遺跡別に保護措置内容と対象面積をまとめた。しかし、事業用地は森林や今まで開発が及ばなかった場所が多く、十分な資料が得られなかったため、試掘調査を実施して遺跡の詳細な内容や範囲を把握する必要があると判断された。長野県教育委員会による試掘調査は平成9（1997）年度から平成11（1999）年度さらに平成13（2001）年度に行われた。その結果、面的な本調査が必要な遺跡とその範囲もある程度把握されたが、未取得地もかなりあり、本調査と併行してさらなる確認の必要があると判断された（長野県教育委員会1997・2000・2003）。

3 長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査と受委託契約

長野県埋蔵文化財センターによる飯喬道路事業用地内の発掘調査の実施については、平成9（1997）年度から現実化への動きが強まり、飯田国道工事事務所・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センターが、実施に向けての調整協議を続けた。そのなかで、アクセス道路事業用地内の埋蔵文化財についても、長野県埋蔵文化財センターが記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

第1章 発掘調査の経緯と方法



1 白山遺跡 2 山本大塚遺跡 3 寺沢遺跡 4 並松遺跡 5 竹佐中原遺跡 6 森林遺跡 7 下り松遺跡 8 太鼓洞遺跡 9 横山遺跡 10 久米ヶ城跡
 11 久米大畑遺跡 12 久米上田遺跡 13 久米上の平遺跡 14 久米上の平南遺跡 15 本洞遺跡 16 川路大明神原遺跡
 A 山本西平遺跡 B 石子原遺跡 C 辻原遺跡 D 赤羽原遺跡 (既報告)

第1図 飯橋道路と発掘調査遺跡の位置 (1:50000)

第1表 年度ごとの調査概要

年度	遺跡名	所在地	工事区分	調査種別	調査期間	調査面積㎡	主な遺構・遺物
平成12	竹佐中原	飯田市竹佐	飯田南IC	面的調査	11/30～12/8	4,860	土坑、縄文土器
平成13	山本大塚	飯田市竹佐	アクセス道路	トレンチ調査 面的調査	6/25～7/5 11/26～12/21	1,400	溝・土坑、縄文土器、 古墳中期土器、中世陶器
	並松	飯田市竹佐	アクセス道路	トレンチ調査	6/1～6/13	200	縄文土器・石器
	竹佐中原	飯田市竹佐	飯田南IC	トレンチ調査 面的調査	7/4～12/21	6,500	旧石器集中部(A地点)、縄文 土器・石器、古代住居跡
	森林	飯田市竹佐	飯田南IC	トレンチ調査	7/13～7/18	1,300	—
	下り松	飯田市竹佐	本線	面的調査	8/2～8/10 11/12～12/19	5,700	縄文土器・石器・球状耳飾
	久米上田	飯田市久米	工用道路	工事立会	9/26	—	—
	久米上の平	飯田市久米	工用道路	工事立会	5/9、9/26	—	—
	久米上の平南	飯田市久米	工用道路	踏査	4月	—	—
平成14	本洞	飯田市伊豆木	工用道路	工事立会	5/9	—	—
	並松	飯田市竹佐	アクセス道路	トレンチ調査	7/24	240	縄文土器・石器
	竹佐中原	飯田市竹佐	飯田南IC	トレンチ調査 面的調査	4/11～12/20	13,250	旧石器集中部(B地点)、 局部磨製石斧、弥生住居跡
	森林	飯田市竹佐	飯田南IC	面的調査	9/3～12/20	9,350	ナイフ形石器、縄文中期・弥生 後期住居跡
	久米ヶ城	飯田市久米	本線	踏査	7/4	—	—
	久米大畑	飯田市久米	本線	トレンチ調査	5/16	15	—
	久米上田	飯田市久米	本線	トレンチ調査	5/16	45	—
	白山	飯田市竹佐	アクセス道路	トレンチ調査	7/4	40	—
平成15	山本大塚	飯田市竹佐	アクセス道路	面的調査	8/5～9/17	4,400	土坑、縄文土器・石器、近世墓
	寺沢	飯田市竹佐	アクセス道路	トレンチ調査	7/1～7/4	260	—
	竹佐中原	飯田市竹佐	飯田南IC	面的調査	5/12～10/23	12,500	旧石器剥片、縄文中期住居跡
	森林	飯田市竹佐	飯田南IC	面的調査	4/8～5/23	4,300	旧石器剥片
	下り松	飯田市竹佐	本線	面的調査	4/3～6/13	4,500	縄文中期集落跡
	久米ヶ城	飯田市久米	本線	踏査	10/9	—	—
平成16	竹佐中原	飯田市竹佐	飯田南IC	面的調査	10/13～11/29	2,100	旧石器集中部(C地点)、 縄文中期土坑
	太鼓洞	飯田市竹佐	本線	トレンチ調査	4/13～4/22	250	—
	横山	飯田市竹佐	本線	トレンチ調査	4/13～4/22	300	—
	久米ヶ城	飯田市久米	本線	踏査	6/1、7/8	—	—
平成17	竹佐中原	飯田市竹佐	飯田南IC	面的調査	4/18～9/3	1,600	旧石器集中部(C・D地点)
平成18	竹佐中原	飯田市竹佐	飯田南IC	面的調査	9/4～11/14	2,740	縄文土器・石器

各遺跡の調査面積合計㎡
 白山 40、山本大塚 5,800、寺沢 260、並松 440、竹佐中原 43,550、森林 14,950、下り松 10,200、太鼓洞 250、横山 300、久米大畑 15、久米上田 45

第2表 受委託契約一覧

年度	契約期間	契約額(円)	作業内容	発掘遺跡	整理遺跡
平成12	4月1日～3月16日	152,139,157	発掘、基礎整理	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡
平成13	4月1日～3月18日	158,103,502	発掘、基礎整理	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡
平成14	4月1日～3月18日	100,563,063	発掘、基礎整理	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡
平成15	4月1日～3月19日	80,013,749	発掘、基礎整理	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡
平成16	4月1日～3月18日	92,900,540	発掘、基礎整理、本格整理、 報告書刊行	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡
平成17	4月1日～3月20日	62,753,174	発掘、基礎整理	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南JCT関連遺跡
平成18	4月1日～3月31日	46,572,798	発掘、基礎整理、本格整理	山本地区諸遺跡、 井戸端遺跡	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 井戸端遺跡
平成19	4月1日～3月31日	55,896,542	発掘、基礎整理、本格整理	井戸端遺跡、 下村遺跡	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 井戸端遺跡、 下村遺跡
平成20	4月1日～3月31日	85,824,762	発掘、基礎整理、本格整理、 報告書刊行	下村遺跡(鶯ヶ城跡)、 芦ノ口遺跡	山本地区諸遺跡、 川路大明神原遺跡、 下村遺跡(鶯ヶ城跡)、 芦ノ口遺跡

第3表 調査体制

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員								
平成12年	佐久間鉄四郎	小林秀夫	百瀬長秀	青木一男								
平成13年	深瀬弘夫	小林秀夫	百瀬長秀	青木一男	上田真	大竹憲昭	西嶋力	藤原直人	若林卓			
平成14年	深瀬弘夫	小林秀夫	百瀬長秀	大竹憲昭	藤原直人 若林卓							
平成15年	深瀬弘夫	市澤英利	平林彰	石上周蔵	大竹憲昭	藤原直人 若林卓						
平成16年	小沢将夫	市澤英利	平林彰	石上周蔵	大竹憲昭	土屋哲樹 若林卓						
平成17年	仁科松男	市澤英利	平林彰	鶴田典昭	若林卓							
平成18年	仁科松男	市澤英利	平林彰	鶴田典昭	若林卓							
平成19年	仁科松男	平林彰	上田典男	鶴田典昭	若林卓							
平成20年	仁科松男	平林彰	上田典男	鶴田典昭	若林卓							
平成12～18年度 発掘補助員												
伊藤和恵 伊東裕子 井上範 井ノ口隆勇 岡庭まつ子 片桐正良 金澤勢津子 金田都 神戸鶴三 北川彰 北沢一嘉 北沢兼男 北沢照美 吉地竹虎 木下貞子 木下由紀子 木下義男 木下力弥 胡桃澤庄治 榊山修三 島岡吉人 清水恒子 下平隆司 所沢ちづ子 関口達喜 竹村和子 竹村訓一 竹村サダエ 竹村定満 谷村悦子 中島育子 中島俊明 中島広海 中野満里子 中野充夫 仲村信 中村地香子 中山健次 西浦しげ子 西野トミ子 野竹園麿 林伸好 原清子 福岡勝利 牧内修 牧内福一 牧ノ内昭吉 松井明治 水野明子 簗島正三 森本和宏 森本照子 森山昭吉 山田康夫 和地サダ子												
平成18～20年度 整理補助員												
浅井とし子 阿部高子 石田多美子 市川ちづ子 井原真弓 臼田知子 宇賀村節子 大林久美子 小日向教博 窪田順 小林知子 近藤朋子 斎藤いつみ 坂口信子 坂田恵美子 塩野入奈菜美 清水栄子 鈴木幹子 高橋康子 武井洋子 鳥羽仁美 中村智恵子 西村はるみ 日向富美子 本原さとみ 矢島美雪 柳原澄子 山下千幸 渡辺恵美子												

飯橋道路事業用地内の発掘調査は平成11(1999)年に開始された。初年度は飯田市川路の天竜峡IC・SA予定地にある川路大明神原遺跡の発掘調査を行った。翌平成12(2000)年、本書が対象とする飯田市山本地区諸遺跡の調査が始まり、平成18(2006)年まで発掘作業を、平成18年度～20年度に本格的な整理作業を行った。第3～5章で遺跡ごとの調査状況について述べるが、年度ごとの調査概要は第1表のとおりである。調査は長野県埋蔵文化財センターと事業主体である建設省中部地方建設局、平成13(2001)年度からは国土交通省中部地方整備局が年度ごとに受委託契約を交わして実施した。平成12年から20年までの、受委託契約一覧は第2表に、調査体制は第3表に示した。

なお、飯田南JCT関連の4遺跡(山本西平、石子原、辻原、赤羽原)については、平成17年度から日本道路公団中部支社さらに同年10月に中日本高速道路株式会社へと事業主体がかわり、これら4遺跡の発掘調査報告書は平成18年度に刊行された(長野県埋蔵文化財センター2007)。

第2節 発掘の方法

長野県埋蔵文化財センターでは、調査法の共通認識と調査の統一性を図るため『遺跡調査の方針と手順』を作成しており、これを基本とした上で、各遺跡の状況に応じた計画・方法を策定して発掘調査を行った。

1 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は、下記のとおりである。遺跡記号は、記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字アルファベット3文字で略表現した記号である。1文字目は長野県を9分割した地区記号で、下伊那郡・飯田市を示す「I」、2文字目および3文字目は遺跡名をローマ字表記したなかの二文字を選択したものである。各種の記録類や遺物の注記に遺跡記号を利用している。なお、下り松遺跡については、当初、IKM(くだりまつ)としたが、その後、地元での呼称に従って、ISM(さがりまつ)に変更した。「さがりまつ」と読むことについては飯田市教育委員会の了解を得ている。遺物の注記には、平成13(2001)年度第一次調査検出遺物にはIKM、その後の検出遺物にはISMを使用した。

白山(しろやま)遺跡: ISY
寺沢(てらさわ)遺跡: ITR

山本大塚(やまもとのおつか)遺跡: IYO
並松(なんまつ)遺跡: INM

竹佐中原（たけさなかはら）遺跡：ITN	森林（もりばやし）遺跡：IMB
下り松（さがりまつ）遺跡：ISM	太鼓洞（たいこぼら）遺跡：ITB
横山（よこやま）遺跡：IYY	久米ヶ城跡（くめがじょうせき）：IKJ
久米大畑（くめおおはた）遺跡：IKO	久米上田（くめうえだ）遺跡：IKU
久米上の平（くめうえのたいら）遺跡：IUT	
久米上の平南（くめうえのたいらみなみ）遺跡：IUM	
本洞（ほんぼら）遺跡：IHB	

2 調査グリッドの設定と呼称（第2図）

竹佐中原遺跡、森林遺跡、下り松遺跡では、以下の方式で調査グリッドを設定した。その他の遺跡では、調査グリッドの設定は実施していない。

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（ $X = 0.0000$, $Y = 0.0000$ ）を基点に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画した。

大々地区は 200×200 mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。竹佐中原遺跡、森林遺跡は同一台地に隣接するため、統一してⅠ～Ⅺまでを設定した。

大地区は、大々地区を 40×40 mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を 8×8 mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25の算用数字番号を与えた。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

小地区は、大地区を 2×2 mの400区画に分割したもので、大地区の北西角を起点として東西軸上に西から東へA～Tまでのアルファベット、南北軸上に北から南へ01～20の算用数字を付し、両者の組み合わせで「A01」のように小地区名を表した。

なお、グリッド名の実際の表記においては、読み取りやすさを考え、各地区番号の間に適宜ハイフンを挿入することがあり、本書の図中でもそうした表記になっている場合がある。

大々地区から中地区までのグリッド杭の打設は測量業者に委託して実施したが、小地区は中地区を基準に長野県埋蔵文化財センターが設定した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

3 遺構名称と遺構記号

遺構名称は検出時に決定するため、遺構の性格に適合しない場合がある。そのため遺構は、主に平面形状や分布の特徴を指標として区分し、遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため遺構記号を用いた。

遺構番号は時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付けたものは原則として変更していない。ただし、一部の土坑を建物跡の柱穴に変更した場合があり、変更前の番号は欠番として処理した。また、発掘の結果遺構でないことが判明したものについても欠番とした。

発掘作業および本書で用いた遺構記号には以下の種類がある。

S B：2 mを目安とし、平面形がそれ以上の大きさの 【例：竪穴住居跡、竪穴状遺構】

方形、長方形、円形、楕円形の掘り込み

S K：SB よりも平面形が小さな掘り込み、穴 【例 土坑、墓壇】

S T：SB より小さな掘り込み 4 基以上が一定間隔で 【例 建物跡】

竪穴住居跡の発掘は、土層観察用のベルトに沿った先行トレンチで、床面の確認を行うとともに、土層

4 遺構の発掘

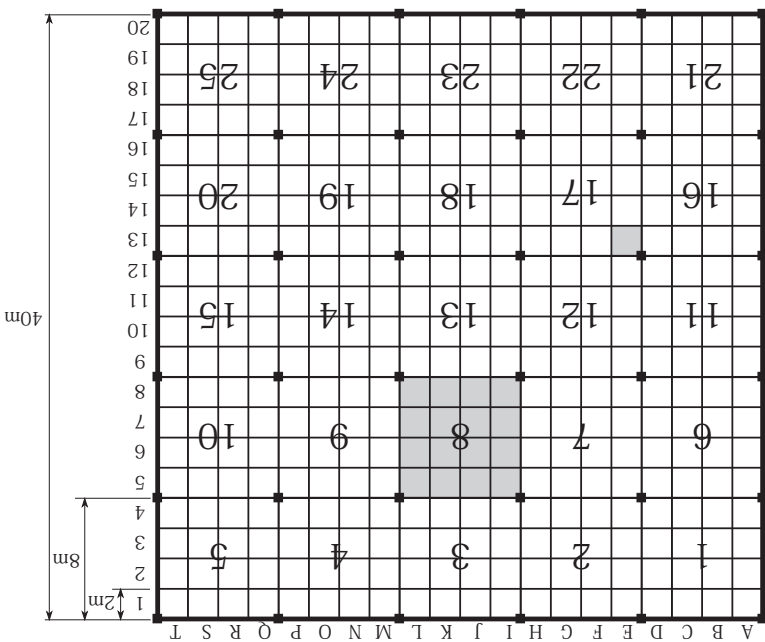
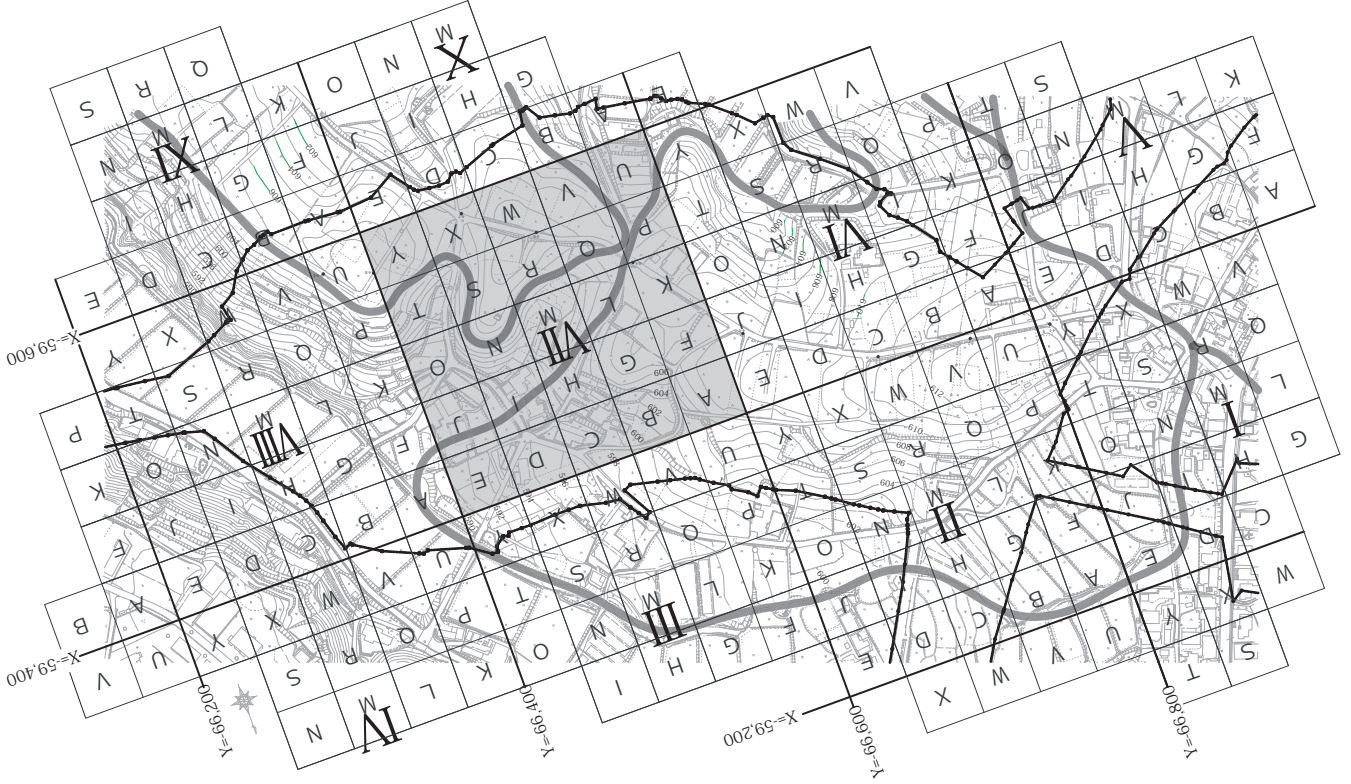
S X : 以上に記した以外の不明遺構

S D : 帯状の細長い掘り込み・落ち込み

多角形状に並ぶもの

【例】溝跡、流路跡

第2図 調査グリッドの設定と呼称



▲ 小地区(2m) VIIAE13
 ▼ 中地区(8m) VIIA8

U	V	W	X	Y
P	Q	R	S	T
K	L	M	N	O
F	G	H	I	J
A	B	C	D	E

▲ 大地区(40m) : A・B・R...
 ▼ 大々地区(200m) : I・II・III・IV...

の堆積状況を把握してから覆土全体を掘り下げた。検出時に竪穴プランが不明確であったものは、先行トレンチを想定プランの外側まで延長して、断面で壁の立ち上がりを確認した場合がある（森林遺跡S B 01）。覆土の掘り下げは可能な限り分層発掘を行った。床面では精査を行い、柱穴、炉、周溝などの住居内施設を検出した。ベルト部分の掘り下げと住居内施設の調査は、多くの場合、併行して進めた。

土坑と建物跡の柱穴は、覆土を半截し、土層の堆積状況を観察した後に完掘した。ただし、覆土中に遺物がまとまって出土した場合は、それより上位を全体に掘り下げ、遺物の出土状態を記録してから下位の掘り下げへと進んだ。

溝および自然流路跡は、全体のプランを検出した後、延長方向に直交するベルトを複数箇所設定し、それぞれの土層堆積状況を観察しながら掘り下げた。

遺構内遺物の取り上げは、まとまりをもって出土した場合、あるいは床面（底面）出土の遺物は、その出土状況図を作成して取り上げた。

遺構外の遺物の取り上げについては、出土位置と標高を記録（ドット図を作成）して取り上げた場合、中地区単位で取り上げた場合、調査区単位で取り上げた場合がある。後二者の場合でも、「中央部」「東南部」などと、なるべく位置を限定するようにした。基本としたのは中地区単位の取り上げである。出土層位については、縄文時代以降の場合、遺物・遺構の検出面が表土直下一面であるため、表土（耕作層、造成層を含む）および攪乱（自然営力によるものを含む）出土を除き、検出面一括である。なお、ローム層中の遺物（旧石器時代遺物）については、発掘時に認識し得たものはすべて出土状況図およびドット図を作成して取り上げた。

5 写真と測量

(1) 写真

遺跡の景観や遺構の撮影にはモノクロネガフィルム（フジネオパン）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム）を併用した。サイズは35mm（135）および6×7（120）で、カメラは各々ニコンFM2（35mm）およびペンタックス67（6×7）を使用した。35mm撮影はすべての対象に対して行い、6×7撮影は選択的に使用した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼付けは業者委託とした。また、平成13年度には山本地区全景と下り松・森林・竹佐中原遺跡、平成17年度には竹佐中原遺跡の航空撮影を業者委託により実施した。

(2) 測量

遺構図・土層図の作成と、一部の遺物ドット図の作成は、簡易遣り方測量により、調査研究員およびその指導の下に発掘補助員が行った。縮尺は1：20を基本とし、必要に応じて1：10図を作成した。遺構配置図は遺構個別図と業者委託の単点測量による地形図を合成した。なお、ローム層中の遺物（旧石器時代遺物）については、発掘時に認識し得たものはすべて出土位置（X,Y,Z）を業者委託により測量した。

第3節 整理の方法

1 基礎整理作業

平成12（2000）年度～18（2006）年度の冬期間に、当該年度の調査で得られた遺物や記録類の基礎整理作業を行った。遺物の洗浄と出土箇所（遺構）ごとの仕分け、写真の現像・焼付け・アルバム貼付（収納）・注記は基本的に発掘作業期間内に終了させており、基礎整理ではその補足と以下の作業を行った。

遺物は注記を行い、材質（種別）・取り上げ単位ごとの数量・大まかな器種を確認して台帳に登録した。図面は調査研究員および発掘補助員が手測により作成した原図、測量業者作成の原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら、矛盾を調整し、記録漏れを補った。写真については台帳登録を行った。なお、モノクロフィルムはベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムについては、35mmはマウントを付け、6×7はマウントを付けずに収納している。写真の注記は、35mm カラーリバーサルはマウントに、その他はアルバムに、遺跡名・撮影日・地区・撮影内容・撮影方向を記している。

2 本格整理作業

報告書作成に向けて、記録類相互を調整して遺跡の所見を総合し、調査成果を公表できるように整備する作業を平成18（2006）年度～20（2008）年度に実施した。

図面類は、基礎整理作業で作成した修正図をもとに、個別遺構図、土層図、遺構配置図（全体図）などを作成した。製図ペンでトレースを行ったものと、アドビイラストレーター10を用いてPC上でデジタルトレースしたものがある。

遺物は土器・陶磁器、石器・石製品、金属製品に大別して整理作業を進めた。

土器は重量・破片数を計測して遺構・グリッド単位に接合を行った。遺構間の接合も試みたが接合する例はなかった。さらに分類を行い、図化するものを抽出した。図化する土器のなかで脆弱なものは実測前に接合補強と復元作業を行った。図化は手実測により、長野県埋蔵文化財センター規格の実測用紙に図化した。縮尺は原則として1：1である。破片資料については拓本も多用した。トレースは製図ペンを用いて行った。図化した土器については観察表を作成した。

石器は分類と計測を行いながら、図化するものを抽出し、観察表を作成した。石器の整理は、出土量の多い川路大明神原遺跡（長野県埋蔵文化財センター2009）と一連で進めており、作業の迅速化を図るため、実測・トレースの一部を業者に委託した。実測は、表面・裏面・側面を基本とし、必要に応じて上面・下面も図化した。長野県埋蔵文化財センターで行った実測・トレースはすべて手作業による。

金属製品が出土したのは山本大塚遺跡の近世墓のみであり、点数も少ないため、すべてを図化した。銭貨は拓本、その他は実測した。なお、長野県立歴史館の施設を利用して錆落とし、脱塩、樹脂の含浸などの処理を行っている。

遺物の写真は業者委託により実施した。撮影にはカラーリバーサルフィルム（フジクローム）を使用した。サイズは、単体写真は35mm（135）、集合写真は6×7（120）を基本とした。図化した遺物すべての写真撮影は行っていない。

図化するために抽出した遺物には、遺跡ごと、材質ごとに通し番号（管理番号）を付け、図化・台帳登録など各種作業の管理に用いた。

報告書の編集については、業者へ委託した。

3 資料の収納

遺物・実測図面・写真は、報告書刊行後、長野県教育委員会から飯田市教育委員会へ譲与の上、保管される予定である。

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けた上で、出土遺構・地点別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

実測図面は、手実測遺構図、委託測量図、遺物実測図別に通し番号（図面番号）を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真収納台帳に登録し、アルバム（ファイル）に収納した。

引用・参考文献

- 長野県教育委員会 1997 『大規模開発事業地内遺跡 遺跡詳細分布調査報告書』
長野県教育委員会 2000 『大規模開発事業地内遺跡 遺跡詳細分布調査報告書 2』
長野県教育委員会 2003 『大規模開発事業地内遺跡 遺跡詳細分布調査報告書 3』
長野県埋蔵文化財センター 2007 『中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション埋蔵文化財発掘調査報告書 石子原遺跡・山本西平遺跡・辻原遺跡・赤羽原遺跡』

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境 (第1・3図)

本書で報告する諸遺跡は、日本列島のほぼ中央、北緯35度、東経137度付近に位置し、天竜川右岸の飯田市山本地区に所在する。山本地区は飯田市合併前の山本村にあたり、江戸時代には山本・竹佐・久米の三村に分かれていた。山本地区は、飯田市街地から南西10kmほどの郊外にあり、北は飯田市伊賀良地区、東は三穂地区、南は阿智村、西は清内路村に接している。なお、本書では、かつての山本村・竹佐村・久米村域をそれぞれ山本・竹佐・久米と略称する。

諏訪湖に源を発する天竜川は、長野県南部を貫いて流れ下り、静岡県浜松市と磐田市の境を成して遠州灘に注ぐ。木曾山脈と伊那山地に挟まれた天竜川流域に南北に長く広がる盆地を伊那谷(伊那盆地)と呼ぶ。伊那谷は、南北の長さ約60km、幅が4～10kmほどあり、天竜川の氾濫源とその両側に形成された段丘、支流の扇状地から成る。幾段にも及ぶ複雑な段丘地形と、支流が段丘を深く刻んだ田切地形の発達、伊那谷の地形上の特色となっている。伊那谷の南部、下伊那地域に属する松川町から飯田市にかけての部分は飯田盆地と称される。飯田盆地の南端は、飯田市南部にある天竜峡で、伊那谷の終点をなす。それより南方は山地が迫って平地は狭隘となる。山系と水系が複雑に入り組み、河川沿いの山間に狭い小盆地が点在する地形が三河・遠江にかけて広がっている。

飯田市街から国道153号線を南西方向に向かうと、右手に木曾山脈前山の裾野が押し寄せ、左手に二ツ山の山塊が迫る。この間の鞍部を越えると、前面に飯田盆地とは隔たった小盆地(阿智盆地)が開け、山本・竹佐に入る。南北に連なる標高770m前後の二ツ山・城山・水晶山・西山が東を限り、標高1300mを超える高鳥屋山・梨子野山に西を、下条山地の北端に南を画された阿智盆地は、天竜川からの距離約6km、標高差は300m近くあり、標高600mほどもある高原状の地理的環境にある。微地形的には東南に延びる細長い馬背状の台地と、その間の小河川沿いの低地部とが交互に続く地形を成している。こうした台地は、この地域で最も古く形成された扇状地が、その後の浸食により開析され、分断されて幾筋かの残丘状の台地として残ったものである。古期扇状地の開析と併行して、木曾山脈前山の山麓部では新しい扇状地が形成され、古期扇状地を覆っている(松島1973)。阿智盆地を流れる小河川は、南の箱川や湯川など阿知川水系と、北の久米川・坊主川・宮沢川などの久米川水系に大きく分かれ、その分水嶺は石子原遺跡と下り松遺跡を結ぶ杵原台地である。

久米川に沿って東へ進み、二ツ山と城山の間を抜けて久米へ入ると、阿智盆地とは異なる地形が展開する。北西部に二ツ山、南部に城山の山塊が大きな範囲を占め、東は川路丘陵から続く山地が迫る。二ツ山・城山山麓には、張り出した尾根と、それに抱かれた谷地形(洞地形)が発達している。阿智盆地と違って平坦な地形は少なく、山麓の緩傾斜地や久米川沿いに小範囲の平坦地が点在する。なお、二ツ山の東裾にあたる北東部は、比較的なだらかな地形を成しており、伊賀良地区の段丘面へと移行する。ここには三穂地区から伊賀良地区中村へ抜ける道筋が通っている。久米川は城山の北裾沿いに東流し、伊賀良地区を流れる茂都計川を合わせた後、天竜川に注ぐ。

上記のように、阿智盆地が広い範囲を占める山本・竹佐と、山地主体の久米とは地形環境が大きく異なっている。今回報告する15遺跡のうち、竹佐所在の遺跡のほとんどは、阿智盆地北部の古期扇状地が開析されてできた台地に立地する。また、久米所在の遺跡は城山の北～東麓の緩傾斜地や洞地形に立地している。久米ヶ城は竹佐と久米にまたがる城山の山頂部に城郭施設が築かれている。



第3図 周辺遺跡分布図 (1:25000)

第2節 周辺遺跡と歴史的環境 (第3図、第4表)

飯橋道路の建設に伴う今回の発掘調査では、遺構の有無、遺物の多少など、時期による違いはあるものの、旧石器時代から近世に至る各時代の資料が得られた。ここでは、周辺に分布する遺跡の発掘資料を中心に、山本地区の歴史的環境について概観したい。以下、時代ごとに述べる。なお、第3図・第4表で網を掛けた遺跡が、本書報告の遺跡である。

旧石器時代 中央自動車道建設に伴う石子原遺跡 [310] の発掘調査で出土した石器群は、報告書で「前期旧石器時代末」と位置付けられた(長野県教育委員会 1973 b)。飯橋道路建設関連の調査でも、石子原遺跡で黒曜石製のナイフ形石器が検出され、竹佐中原遺跡 [331] では、後期旧石器ナイフ形石器文化初頭の石器群と、さらにそれを遡る可能性をもつ石器群が発見された(長野県埋蔵文化財センター 2005)。周辺では、阿智村の中原遺跡 [8] で槍先形尖頭器が発見されており、箱川原遺跡 [333] の出土遺物のなかにも旧石器時代の可能性をもつ石器がある。山本・竹佐を含めた阿智盆地は、複数の時期にわたる旧石器時代遺跡が集中する地域であり、後期旧石器文化の始まりを考えると重要な地域といえる。

縄文時代 石子原遺跡で早期押型文土器(立野式)期の集落が確認されており(長野県教育委員会 1973 a、長野県埋蔵文化財センター 2007)、現在のところ、これが山本地区で最も古い縄文時代の遺跡となる。また、押型文土器と早期末の土器の出土が記録されている山本大明神原遺跡 [296] がある。前期は白山遺跡 [322] などで土器が確認されているものの、その様相ははっきりしない。

中期になると下伊那では遺跡数が激増する。山本地区においても、台地上、山麓扇状地、谷間など至るところに該期の遺跡が分布しており、発掘調査により遺構が確認された例も多い。中期中葉の竪穴住居跡5軒を確認した白山遺跡(飯田市教育委員会 1981)をはじめ、箱川原遺跡(下伊那誌編纂会 1991)、湯川(柳田)遺跡 [315](長野県教育委員会 1973 a、飯田市教育委員会 1997)などで中期後葉の集落跡が調査されている。飯橋道路の建設に伴う今回の発掘調査でも、下り松遺跡 [329] で竪穴住居跡5軒を含む中期中葉から後葉の集落跡、竹佐中原遺跡で中期後葉の竪穴住居跡が調査された。中期中葉から後葉にかけて、阿智盆地北部の隣接する台地上に集落展開が活発化する状況を捉えることができる。

後期から晩期については、辻原遺跡 [312](長野県埋蔵文化財センター 2007)、山本大明神原遺跡、山本西平遺跡 [309]、箱川中尾遺跡 [353] があるものの、確認された資料は断片的である。遺跡数は少なく、下伊那の他地域と同様、中期に比べて遺跡数が激減する傾向を示している。

弥生時代 山本地区では前期の遺跡は確認されていない。中期についても沖平南遺跡 [323] で中期末の土器が発見された(飯田市教育委員会 2006)のみである。つづく後期は、下伊那全体において、それまで天竜川の氾濫原に近い低位の段丘面を主な生活域としていた人々が、高位の段丘面や扇状地に進出・拡散して集落を形成する動きが顕著になる時期である。山本地区においても山本中平遺跡 [303]、箱川長田遺跡 [357]、光明寺付近遺跡 [341] など10遺跡で後期の遺物が確認されており、遺跡数は格段に増加する。とはいえ、断片的な遺物の採集にとどまり、集落の存在は確実と目されながらも、発掘調査による遺構の確認は長らく果たされていなかった。最近に至って、久米川沿いの低地部に位置する沖平南遺跡で住居跡が確認され(飯田市教育委員会 2006)、竹佐中原遺跡・森林遺跡 [332] でも、本書で報告するように、台地上に営まれた集落跡を調査した。天竜川から離れた高位地帯へ進出した集落の具体相が、山本地区でも明らかになりつつある。

古墳時代 古墳は山本地区で13基確認されている。発掘調査が行われた古墳としては石子原古墳 [山

73] があり、墳丘から4基の埋葬施設が検出され、出土遺物から6世紀初頭の築造であることが明らかになった(長野県教育委員会 1973 a)。さらに、古墳の周囲で検出された方形周溝墓5基は時期を決定する材料を欠くものの、古墳との関連から古墳時代である可能性が高い(長野県埋蔵文化財センター 2007)。また、発掘によるものではないが、金掘塚古墳[山72]からは内行花文鏡・双龍環頭柄頭がみつまっている(下伊那誌編纂会 1955)。ただし、いずれも後期の小規模な円墳であり、前方後円墳が集中する天竜川沿いの座光寺・上郷・松尾・竜岡地区に比べて古墳数は著しく少なく、また、中期の小古墳が比較的多く存在する三穂地区とも異なる状況にある。

一方、古墳時代の集落については、高野遺跡[338](飯田市教育委員会 1989)と石子原遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2007)で前期の住居跡が各1軒調査されているのみで、その様相は明確ではない。今回の調査でも、山本大塚遺跡[324]で中期の土器1点が検出されたに過ぎない。ただし、後期の遺物が採集された遺跡は決して少なくはなく、今後、発掘調査により該期の集落跡が明らかになる可能性は充分あると思われる。特に久米においては、三穂地区と伊賀良地区を結ぶ道筋の周辺に該期の遺跡が集中し、古東山道のあり方と関連する可能性も考えられる。

古代 今回の飯橋道路建設に伴う調査により、竹佐中原遺跡で8世紀後半～9世紀初頭の住居跡1軒が検出された。また、高野遺跡の調査では、平安時代初頭の集落で鉄製錬が行われていたことが判明した(飯田市教育委員会 1989)。他に該期の遺構の調査例はなく、遺物散布地も多くはないため、古代の状況は明らかになっていない部分が多い。しかし、令制東山道が山本・竹佐を通過していた可能性が高いことには注意しておきたい。近年の発掘調査成果を踏まえた研究の進展により明らかになった古代駅路の直進性ということを考慮すれば、山本と竹佐の境を通る三州街道(伊那街道)が、阿知駅と育良駅を結ぶ路線を踏襲しているとする見解(原 2005)は有力な説である。阿知駅は阿智盆地の南部に位置する阿智村駒場周辺に比定されている(下伊那誌編纂会 1961)が、駅馬30匹を常備した阿知駅は、神坂峠を挟んだ坂本駅とともに東山道の中でも最大規模の駅であり、その維持・運営には大きな負担が伴ったであろう。阿知駅を支えた社会的・経済的基盤は、駒場周辺の狭い範囲に限定されるのではなく、山本・竹佐を含めた広い範囲に及んでいたことが推測される。令制東山道の実態を考古学的に明らかにしうる資料を秘めた地域として、今後、当地における調査の進展が期待される。

山本地区には、古代に遡る可能性をもつ寺院として、久米の光明寺がある。同寺には「保延六年」(1140)の銘をもつ薬師如来坐像があり、それ以前の創立と考えられている。なお、寺伝では、養老年間(717～723)に行基が結んだ庵を発端とし、天平13年(741)から七堂伽藍および十二院坊が造営されたという(下伊那誌編纂会 1961)。

中世 中世の集落跡は山本西平遺跡(飯田市教育委員会 1998 b)、沖平南遺跡(飯田市教育委員会 2006)で発掘調査が行われている。山本西平遺跡で検出された掘立柱建物・柱穴群、竪穴状遺構、区画溝は、時期を限定する資料に欠け、鎌倉時代後半から室町時代までの長い時間幅が想定されたが、居館址的な様相を示すことが指摘された。墓域の調査例としては、山本大塚遺跡の火葬墓群がある(下伊那誌編纂会 1991)。

中世の山本地区は伊賀良荘に属していたと考えられている。伊賀良荘は11世紀中頃には成立しており、鎌倉時代の初め、北条時政が伊賀良荘の地頭に任ぜられ、その後、地頭職は北条氏一門である江間氏に受け継がれた。伊賀良荘の範囲は、鎌倉時代には、現在の飯田市伊賀良地区を中心として、北は飯田松川から南は阿知川にいたる天竜川西岸地域であったとされる。北条氏の滅亡後は、伊賀良荘は小笠原氏の支配するところとなった。江間氏が伊賀良荘地頭であった時代を通して、伊賀良井をはじめとした灌漑用水の整備が行われ、室町時代に至って、小笠原氏による開発がさらに大規模に進められたことが推測されてい

る。(下伊那誌編纂会 1967)。当然、山本地区の開発も大いに進展したことであろう。中世城郭である久米ヶ城 [21]・麦種城 [19]・西平城 [20] は小笠原氏統治下の築城とされる(山本村誌編纂委員会 1957)。武士団の屋敷地は城の周辺に存在していたと考えられるが、箱川八幡社境内 [360 御堂寺遺跡付近] で発見された備蓄銭(山本村誌編纂委員会 1957) は、久米ヶ城周辺の屋敷地との関連を想像させて興味深い。

天文 13 (1544) 年に伊那郡の攻略を開始した甲斐の武田氏は、小笠原氏をはじめとした伊那の諸族を下し、天文 23 年 (1554) には全伊那郡を掌中におさめた。武田氏は治水工事や軍用道路の整備を進め、各所で城塞を造築・修築した。元亀 2 年 (1571) には大島城(松川町)に大改修を施している(下伊那誌編纂会 1970・1980)。また、三ツ山の茶臼ヶ城 [18] は武田氏が築いた烽火台とされる(山本村誌編纂委員会 1957)。現在に残る久米ヶ城の遺構は 16 世紀後半の特徴を示しているが、大島城と同様に、武田氏統治下で大規模な修築が行われた可能性が考えられる。

近世 江戸幕府成立後の山本・竹佐・久米は、初期には変動があったものの、天和年間(1681～1683)以降は、旗本近藤氏と美濃高須藩松平氏の所領となり、明治維新に及んだ。竹佐と久米は松平領であったが、山本は近藤領と松平領が入り組み、それぞれの支配を受けていた(山本村誌編纂委員会 1957)。近藤氏の山本陣屋跡(居館跡) [山 93] は山本西平遺跡の一角に、松平氏の竹佐陣屋跡 [山 94] は田府高屋遺跡の一角にある。その石垣が現在に残り、当時の名残をとどめている。

山本と竹佐の村境を成すのが三州街道(伊那街道)である。三州街道は、中山道の脇往還として、塩尻から三河に通ずる重要な街道であった。また、山本・竹佐は清内路街道の起点でもある。清内路街道は三州街道と木曾の中山道を結ぶ路線として賑わった(山本村誌編纂委員会 1957)。

発掘調査が行われた近世の集落跡は、山本西平遺跡があり、溝・掘立柱建物・柱穴群が検出され、居館址的な様相が認められた(飯田市教育委員会 1998 b)。墓域の調査例としては、石子原遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2007)、山本大塚遺跡(本書)がある。山本大塚遺跡では、長軸を揃えて隣接する 2 基の長方形墓壙が検出された。副葬品から 17 世紀後半から 18 世紀前半の年代が推測されるものである。石子原遺跡では楕円形ないし長方形の墓壙が 27 基確認された。17 世紀から 18 世紀にかけてのものが主体とみられ、下伊那における近世前半期の埋葬についての良好な資料を提供した。特に埋葬形態の分析から幾つかの被葬者グループが把握され、出土人骨の DNA 分析により血縁関係をもつ被葬者の存在が明らかになった。周辺に居住する複数の家族が営んだ集団墓と評価しうる。なお、1972 年の中央自動車道建設に先立つ石子原遺跡の調査では、この墓域の隣接地から 30 基以上の墓壙が確認されており、その殆どに寛永通宝や煙管が伴っていた(長野県教育委員会 1973 a)。一連の墓域に属する近世墓といえる。

現在、山本地区にある観音寺(臨済宗妙心寺派)、西林寺(臨済宗妙心寺派)、浄玄寺(浄土宗)の 3 寺院は、中世末から近世初頭に創立されている。その年代は観音寺が元亀 4 年(1573)、西林寺が慶長 12 年(1607)、浄玄寺(浄土宗)が慶長年間(1596～1615)である(山本村誌編纂委員会 1957)。このうち、浄玄寺は石子原遺跡の近世墓群から北西 500 m ほど離れた山裾にある。観音寺は山本大塚遺跡と同じ台地上にあり、近世墓の検出地点から約 200 m 北東に位置する。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1981 『白山遺跡 長野県飯田市立山本小学校建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
 飯田市教育委員会 1989 『高野遺跡』
 飯田市教育委員会 1997 『湯川遺跡』
 飯田市教育委員会 1998a 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
 飯田市教育委員会 1998b 『山本西平遺跡』
 飯田市教育委員会 2006 『沖平南遺跡』

- 下伊那誌編纂会 1955 『下伊那史 第3巻』
- 下伊那誌編纂会 1961 『下伊那史 第4巻』
- 下伊那誌編纂会 1967 『下伊那史 第5巻』
- 下伊那誌編纂会 1970 『下伊那史 第6巻』
- 下伊那誌編纂会 1980 『下伊那史 第7巻』
- 下伊那誌編纂会 1991 『下伊那史 第1巻』
- 長野県教育委員会 1973a 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 飯田市市内その2-』
- 長野県教育委員会 1973b 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 飯田市市内その3- 石子原遺跡の旧石器』
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 『国道474号(飯橋道路)埋蔵文化財発掘調査報告書 1 長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007 『中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション埋蔵文化財発掘調査報告書 石子原遺跡・山本西平遺跡・辻原遺跡・赤羽原遺跡』
- 原隆夫 2005 「第2篇 第3章 第1節 上手線」『信濃の東山道』 長野県文化財保護協会
- 松島信幸 1973 「II. 1. (2) 遺跡および周辺の地形と地質」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 飯田市市内その3- 石子原遺跡の旧石器』 長野県教育委員会
- 山本村誌編纂委員会 1957 『山本村誌』

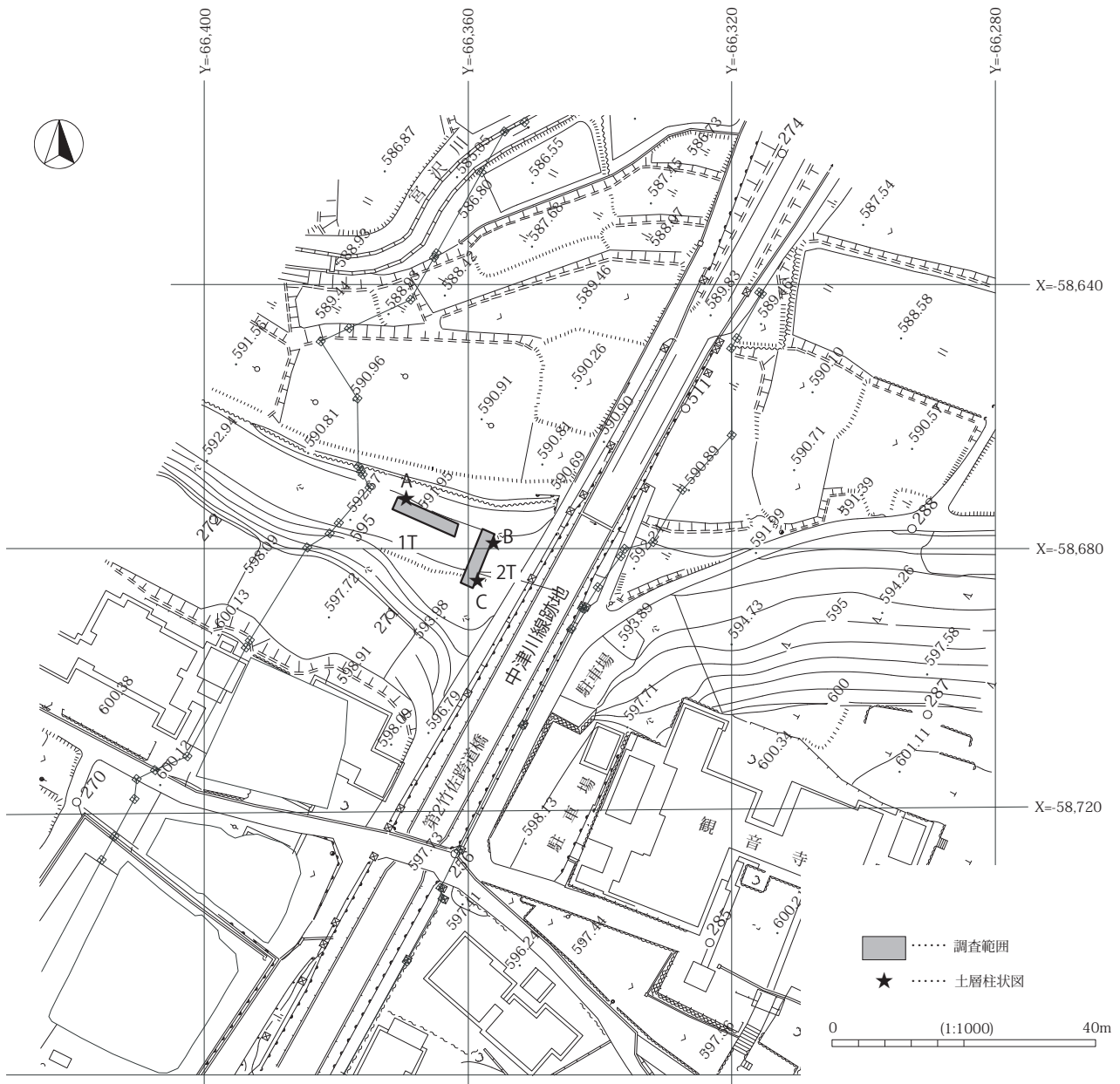
第3章 アクセス道路部分の調査

第1節 しろやま 白山遺跡

1 遺跡の概観 (第5図)

白山遺跡は飯田市西部、山本地区竹佐地籍に所在し、高鳥屋山の東南麓に広がる扇状地が、小河川の浸食により分断されてできた、東西に長い残丘状台地の先端部に立地する。標高は580m～601mを測る。台地の北～東側は宮沢川・久米川、南側は坊主川が浸食した谷となっている。

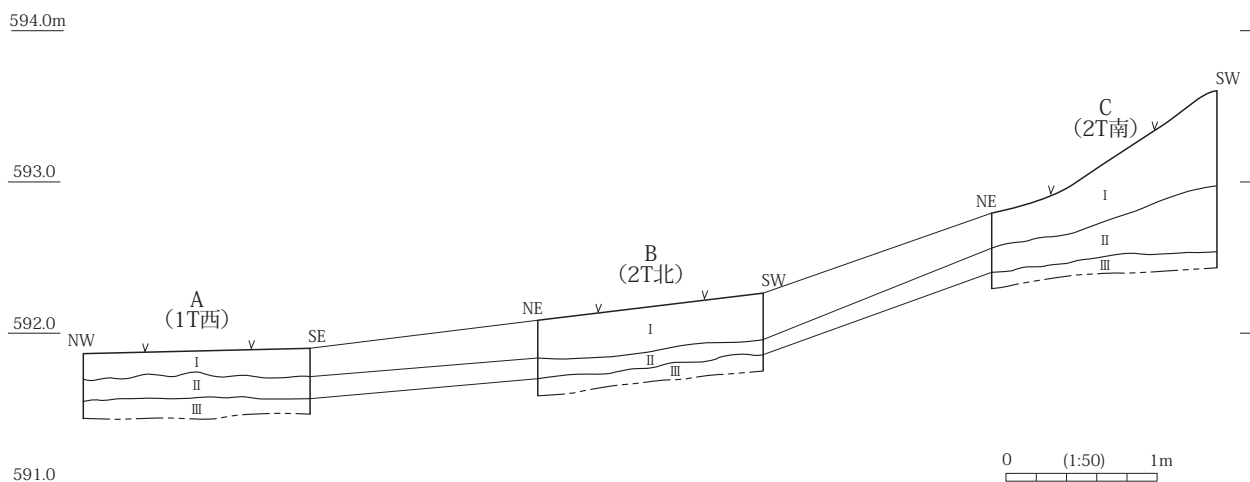
『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会 1998)によれば、遺跡の範囲は東西約400m、南北200mを測る。遺跡範囲の大部分は台地頂部に含まれるが、西北の一部で斜面から谷沿いの低地部に範囲が及んでいる。昭和52(1977)年、飯田市立山本小学校の建設に伴い、遺跡東部で発掘調査が行われ、縄文時代中期中



第4図 調査範囲図 (1:1000)



第5図 アクセス道路部分の調査遺跡 (1:6000)



第6図 土層柱状図 (1:50)

葉の住居跡 5軒が検出された(飯田市教育委員会 1981)。

遺跡の東～南東側の久米川沿いの低地部には、縄文時代中期の沖遺跡、弥生時代後期の住居跡と中世の建物跡が発掘された沖平南遺跡(飯田市教育委員会 2006)が立地する。同じ台地の南西側には山本大塚遺跡(本書)があり、南側の一段低い段丘面には寺沢遺跡(本書)がある。さらに南方の杵原台地上には、並松遺跡(本書)、縄文時代中期の杵原遺跡が立地している。

2 調査の概要(第4・6図、PL1)

アクセス道路は、国道153号から分岐して宮沢川の谷沿いに東南へ0.4km伸びた後、南へほぼ直角に屈曲して旧国鉄中津川線跡地に合する。中津川線は飯田(飯田線)と中津川(中央線)を結ぶ鉄道路線として着工されたが、ついに完成を見ることがなかった。ただし、山本地区内においては、台地を掘り割り、低地部に土手を盛り上げて路盤の大部分が完成している。アクセス道路ルートは、中津川線跡地を取り込んで、ふたつの台地と谷を貫いて南へ延び、竹佐中原遺跡が位置する箱川原台地上の飯田南ICを経て、再び国道153号に接続する。

今回の発掘調査地は飯田市竹佐881地番ほかに所在し、アクセス道路が台地北側の斜面にぶつかる地点、中津川線掘割の西脇に位置する。1977年の山本小学校建設に伴う発掘地から200mほど西の、遺跡指定範囲の西端部にあたる。標高は592m～594mである。調査前は荒地となっていた。

調査は平成15(2003)年7月4日に実施した。幅2mのトレンチを斜面の等高線に平行に1本、直交して1本、計2本設定し(1T・2T)、重機を用いて掘り下げた。土層は両トレンチ全面で以下の三層を確認した。I層は層厚20～30cmの現表土層である。II層は礫混じりの黒褐色土で、層厚は平均20cmだが、斜面の上部ではやや厚い。III層はシルト混じりの黄褐色砂礫層で、礫は10cm以下の垂角礫が主体である。地山となる扇状地堆積物と思われる。III層上面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。遺物はI・II・III層とも全く出土しなかった。

以上の状況から面的調査は必要ないと判断し、記録作成を行って調査を終了した。生活の痕跡は調査地点には及んでいないと考えられる。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1981 『白山遺跡 長野県飯田市立山本小学校建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
 飯田市教育委員会 1998 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
 飯田市教育委員会 2006 『沖平南遺跡』

第2節 やまもとのおつか 山本大塚遺跡

1 遺跡と調査の概観

(1) 遺跡の概観 (第5図)

山本大塚遺跡は飯田市西部、山本地区竹佐地籍に所在し、高鳥屋山の東南麓に広がる扇状地が、小河川の浸食により分断されてできた、東西に長い残丘状台地に立地する。標高は590m～610mを測る。台地の北側～東側は久米川とその支流である宮沢川・坊主川の浸食による谷となっている。

『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会1998a)によれば、遺跡の範囲は東西約330m、南北約230mを測り、古墳時代後期および中世の遺跡とされている。遺跡東縁の台地端に小高い円墳状の小丘があり、大塚古墳と呼ばれていた。90年ほど前、この小丘の西半部を開墾した際に直刀1口を発見したと伝えられ、畑の地表に土師器片の散布がみられたという(下伊那誌編纂会1955)。しかし、1969年の国鉄中津川線建設工事に先立つ発掘調査では、古墳であるか疑問視されるとともに、小丘の西側に中世の火葬墓群が発見された(下伊那誌編纂会1991)。この小丘は『飯田の遺跡』には山本大塚古墳として記載されている。今回の発掘調査により、本遺跡は、縄文時代中期・古墳時代中期・近世の内容も含むことが明らかになった。

同じ台地の東側には白山遺跡(本書)が隣接している。宮沢川の谷を挟んだ北側の台地には縄文時代中期の田府高屋遺跡が位置し、その一角に江戸時代の竹佐陣屋跡がある。西方の扇状地に広がる山本西平遺跡では縄文中期の住居跡のほか、中・近世の掘立柱建物跡・溝等が確認された(飯田市教育委員会1998b)。南の一段低い段丘面には寺沢遺跡(本書)が立地する。なお、白山遺跡内には、中津川線跡地の東側に面して、元亀4年(1573)創立の臨済宗妙心寺派に属する観音寺がある。

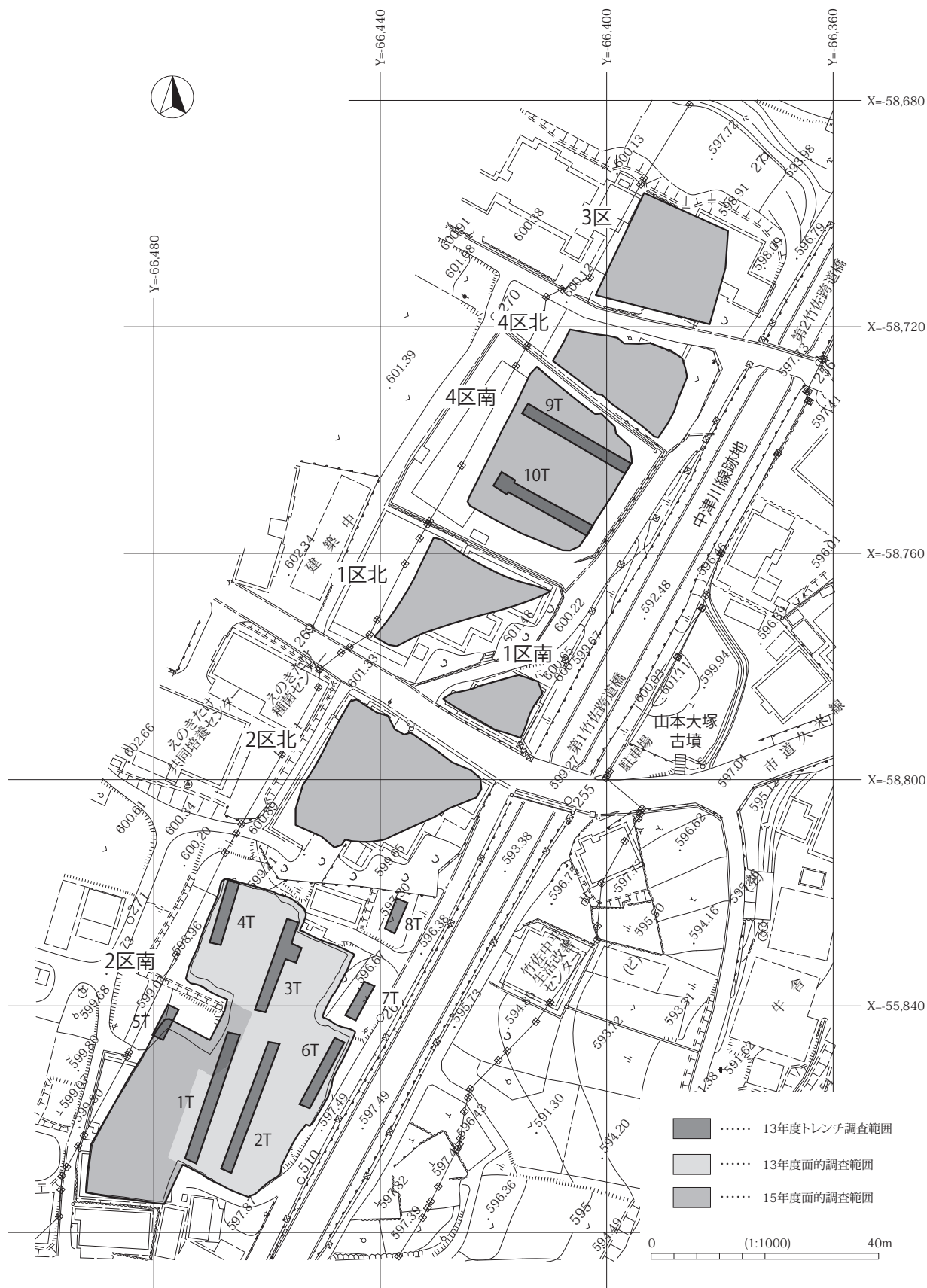
(2) 調査の経過 (第7図)

今回の発掘調査地は飯田市竹佐699地番ほかに所在する。遺跡範囲の東端部にあたり、中津川線跡地の西側に沿って台地を南北に横断する、長さ200mほどの細長い範囲である。標高は592m～594mを測る。調査前は主に宅地であり、一部畑地として使われていた。用地取得や上物撤去などの関係から、平成13(2001)年と平成15(2003)年の二年度に分けて調査を実施した。調査総面積は5,800㎡である。

平成13年度はトレンチ調査と遺跡南端部の面的調査を行った。調査面積は1,400㎡である。トレンチ調査は、遺跡の概況を把握することを目的として、6月25日から7月5日にかけて実施した。調査対象範囲の南部に1T～8Tの8本のトレンチ、北寄りの部分に9T～10Tの2本のトレンチを重機を用いて掘削した。トレンチ調査により、旧地形は、並行する三筋の尾根状微高地が東西に延びており、その間は浅い谷状低地となる状態が明確になった。9T～10Tは北微高地と中央微高地間の谷状低地部に、1T～8Tは南微高地からその北側の谷状低地部分にあたる。1T～8Tでは、時期不明確ながら土坑と思われる落ち込み数基が検出され、縄文時代および中世の遺物が出土した。9T～10Tでは、遺構は検出されなかったが、縄文時代の遺物が出土した。

これを受けて、11月26日から12月21日に、南微高地からその北側の谷状低地部分にかけて面的調査を行った。トレンチでみつかった落ち込みはすべて風倒木痕であったが、新たに土坑1基(SK01)、溝2条(SD01・02)を検出した。遺物は縄文土器・石器、古墳中期の土器、中世・近世陶磁器が出土した。

平成15年度は8月5日から9月17日に残件部分について面的調査を行った。前回の調査により、縄文時代～中近世の遺構・遺物の分布が予想されたため、当初から面的調査を実施する計画を立てた。調査面積は4,400㎡である。現道等により分割された七区の調査区を設定した。地区番号は北から3区、4区



第7図 調査範囲図 (1 : 1000)

北、4区南、1区北、1区南、2区北、2区南である。表土除去を行った順に番号を付したため順繰りに並んでいない。混乱を避けるため、整理段階で番号を振り直すことはしなかった。調査区内の表土および大部分の谷埋積層は重機で掘り下げた。3区は北微高地（台地北縁部）にあたり、3基の土坑（SK 05～07）が検出された。4区北・南は北微高地からその南側の谷状低地部分にあたる。4区南で縄文時代の遺物、中近世の陶磁器、近世以降の溝4条（SD 03～06）が検出された。1区北・南、2区北は中央微高地にあたるが、遺構は検出されなかった。2区南は南微高地からその北側の谷状低地部分にあたる。平成13年度調査区を南西に拡張する形で設定し、近世墓2基（SK 03・04）、土坑1基（SK 02）、溝1条（SD 07）が検出された。なお、4区北・4区南は山本児童センターに隣接しているため、その周囲を安全柵で囲い、調査終了後は速やかに埋め戻して復旧した。

(3) 層序 (第8・9図)

本遺跡の層序は以下の通りである。土層の観察は主に調査区の西壁で行った。

I層：現表土。造成土・耕作層および攪乱を含む。耕作層は締まりのある灰褐色土主体。

II層：谷状低地部を埋積する土層。以下のように細分される。

II-1：10YR2/1 黒色土 10YR3/1 黒褐色土が斑状に入る。

II-2：10YR3/2 黒褐色土 谷中心部に向かうにつれ黒色が強くなる。

II-3：10YR2/1 黒色土 II-1 とほぼ同質。微高地部に向かうにつれ黒色が失せる。

II-4：10YR2/1 黒色土 比較的サラサラしたシルト。粘性少ない。小礫・粗砂をわずかに含む。

II-5：10YR3/2 黒褐色土 色調は異なるがII-4 と同質。微高地部に近づくにつれ黒味が増す。

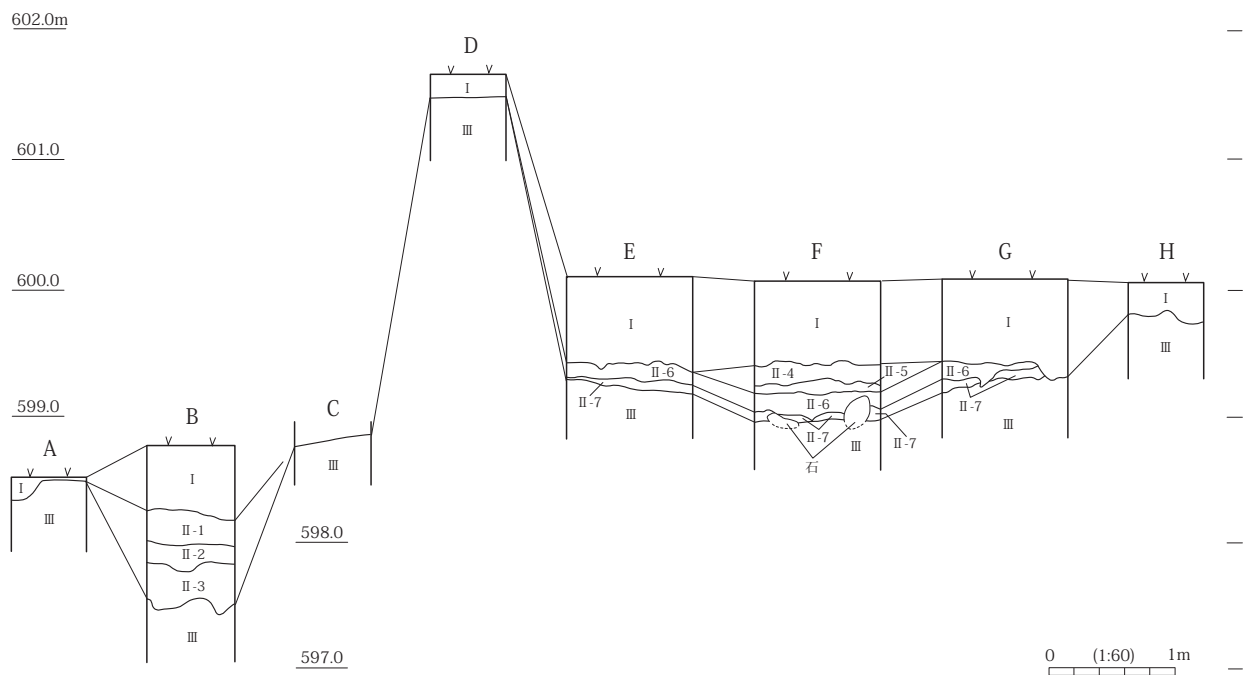
II-6：10YR3/1 黒褐色土 色調は異なるがII-4 と同質。微高地部に近づくにつれ黒味が増す。

谷中心部では10～50cmの角礫・亜角礫が混じる。

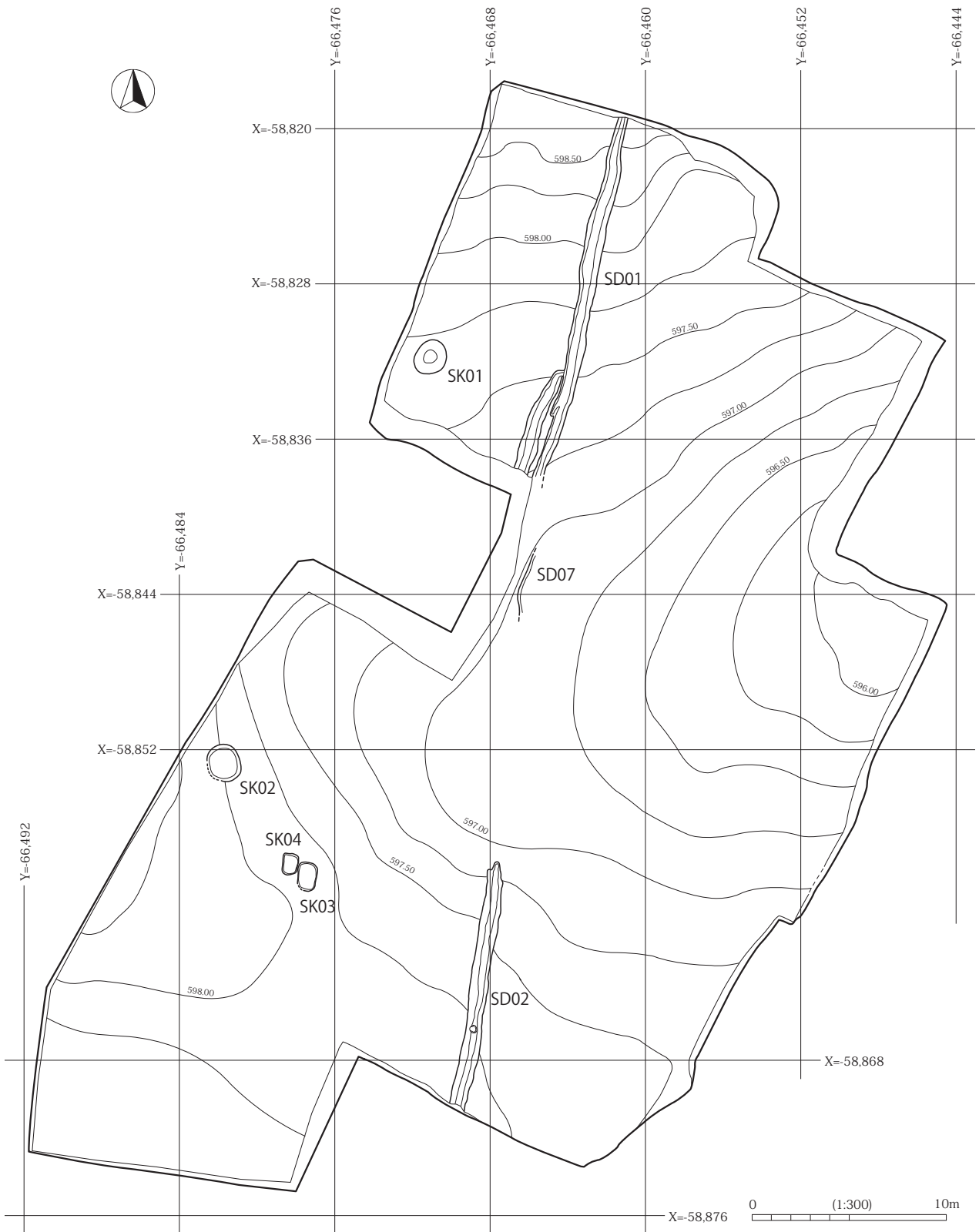
II-7：10YR4/2～4/3 灰黄褐色土 II-6 とⅢの中間的な土質。

Ⅲ層：10YR5/6～6/6 黄褐色～明黄褐色土 しまりあり。3区～4区の高位部では赤味を帯びる。

台地最上部の基盤をなす。

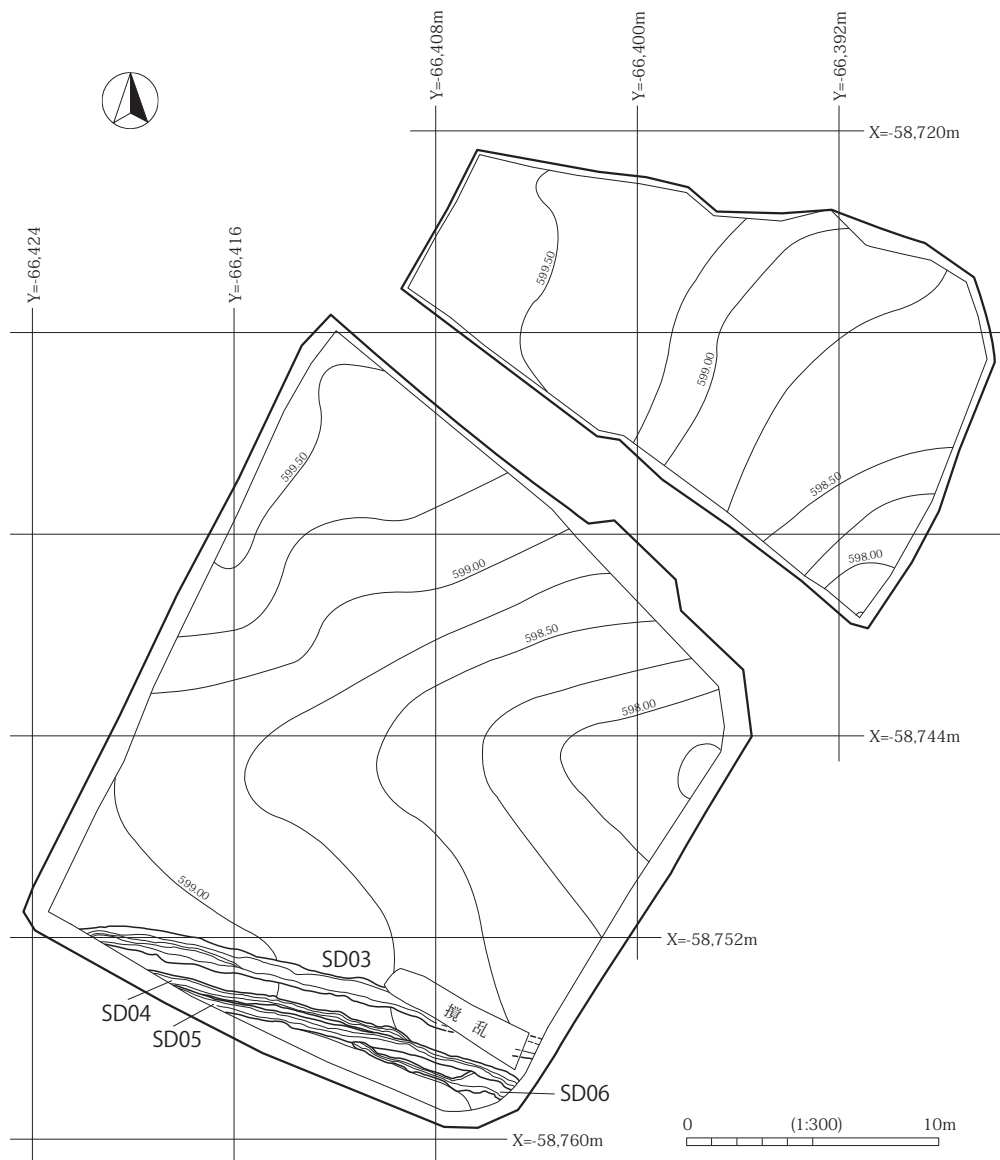


第8図 土層柱状図 (1:60)



第10図 2区南遺構配置図(1:300)

前述した通り、調査部分の地形は、三筋の尾根状微高地が東西に延び、その間に谷状低地が入り込んでいる。Ⅱ層はこの谷状低地部を埋積する黒色～黒褐色主体の土層である。Ⅱ-1～3は南の谷状部、Ⅱ-4～7は北の谷部内の堆積層である。谷の最低部では、Ⅲ層最上部がわずかに暗色を帯びて締まりも劣り、礫が多く混じる。あるいはⅡ-8として識別し得るかもしれないが、層界は不明瞭であり、実際には分離できなかった。Ⅲ層は遺跡の基盤をなす黄褐色土である。微高地頂部



第11図 4区遺構配置図(1:300)

ではI層(表土)直下にIII層が露出する。谷の最低部やSK01など深い土坑の底部近くでは、10～30cmの角礫・亜角礫が多く混じる状況が認められることから、III層上面より1m前後下位から礫を多く含むようになると考えられる。遺構確認はおおむねIII層上面を検出面として行ったが、2区南および4区南の溝状遺構はII層を掘り込んでおり、SD03～06についてはII層上面まで立ち上がることを確認している。

2 検出遺構

検出された遺構は、近世墓2基、土坑5基、溝7条である。近世墓2基は2区南の南半部に位置し、長軸を南北に揃えて相接するように並列している。土坑は、2区南で2基、3区で3基が検出された。3区の2基は、1基は近世以降、2基は時期不明である。2区南の2基は、それぞれ、縄文時代、近現代に属すると思われる。溝は2区南で3条が、4区南で4条が検出された。いずれも開掘時期は不明であるが、幕末～近代に埋没したと考えられる。2区南の4条は調査区南端部に谷の走行方向に沿って一部重複しつつ並走している。4区南の3条は谷状部を横切るような形で伸びている(第9・10・11図)。

(1) 近世墓

S K 03 (第 12・16 図、PL2・3)

位置：2 区南の南半部、尾根状微高地頂部に位置する。

検出：Ⅲ層上面の検出である。覆土は黄褐色土と黒褐色土の不揃いなブロックが乱雑に入り混じった土で、隣接する S K 04 とともに、検出当初はごく新しい攪乱と考えた。しかし、S K 04 で六道銭が出土したため、本遺構についても墓壙として調査を開始した。S K 04 とは、長軸方向を揃え相接して並列し、検出面付近で僅かに重複するが、切り合いの先後を捉えることはできなかった。

構造：墓壙は、長軸方向を N 10° E に取り、長軸 144 cm、短軸 100 cm、深さ 42 cm を測る、楕円形気味の長方形を呈する。底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。人骨や歯が残っていないため、遺体の埋葬姿勢や頭位方向は不明であるが、墓壙形状からみて、その長軸方向に頭位を向けることは間違いないだろう。また、棺材も確認されなかった。

覆土：黄褐色土と黒褐色土の乱雑なブロック土の単層である。木棺の存在を示唆するような土層の変化は認められない。遺体を直に墓壙に納めた可能性も考えられる。

遺物出土状況：6 枚の寛永通宝が検出された (1～6)。いわゆる六道銭である。6 枚はきっちりと重なり、腐食のため一体化していた。覆土とともに掘り上がってしまったため、正確な位置を示すことはできないが、墓壙南壁中央から 25 cm ほど離れた、底面近くの出土である。S K 04 の六道銭と同じく紙に包んであった可能性も考えられよう。

時期：出土した寛永通宝は、4 枚がいわゆる古寛永、2 枚が文銭である。文銭を含むことから、寛文 8 年 (1668) 以降であることは確かである。また、墓壙の構築状況から S K 04 と同時ないしごく近接した時期につくられたと考えられる。以上から、本墓の構築は 1668 年以降で、下っても、18 世紀前半にはおさまると考えておきたい。

S K 04 (第 12・16 図、PL2・3・4)

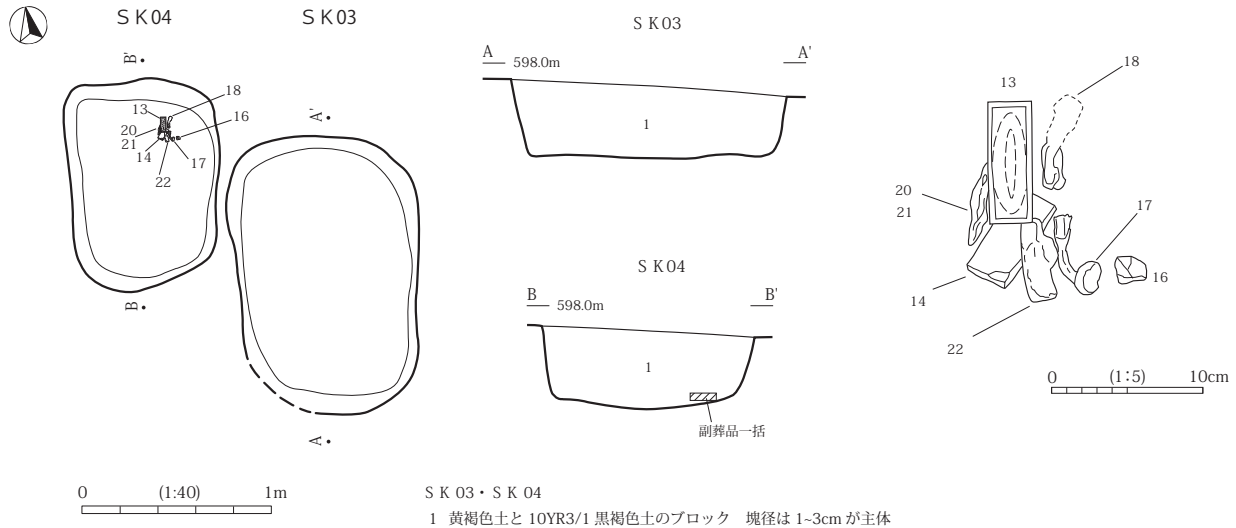
位置：2 区南の南半部、尾根状微高地頂部に位置する。

検出：Ⅲ層上面の検出である。覆土は黄褐色土と黒褐色土の不揃いなブロックが乱雑に入り混じった土で、検出当初はごく新しい攪乱と考えた。そして、本遺構に切られる黒褐色土の広がりがあり、そちらの方に遺構の可能性を考えたため、攪乱を除去すべく掘り下げを始めた。しかし、掘り下げの過程で六道銭が出土したことにより、攪乱ではなく、墓壙である可能性が高まった。S K 03 とは、長軸方向を揃え相接して並列し、検出面では僅かに重複するが、切り合いの先後を捉えることはできなかった。なお、当初、遺構と捉えていた黒褐色土の広がりには木根痕と判断した。

構造：墓壙は長軸 110 cm、短軸 82 cm、深さ 44 cm、長軸方向 N 10° E を測る。S K 03 より一回り小形の墓壙である。平面形は楕円形気味の長方形を呈する。底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。人骨や歯が残っていないため、遺体の埋葬姿勢や頭位方向は不明であるが、墓壙形状からみて、その長軸方向に頭位を取ることは確かだろう。また、棺材も確認されなかった。

覆土：黄褐色土と黒褐色土の乱雑なブロック土の単層である。木棺の存在を示唆するような土層の変化は認められない。遺体を直に墓壙に納めた可能性も考えられる。

遺物出土状況：副葬品は六道銭 (7～12)、キセル (17・18)、釘 (19～21)、火打金 (22)、火打石 (16)、硯 (13)、砥石 (14)、丸石 (15) がある。六道銭はきっちりと重なった寛永通宝 6 枚が腐食により一体化していた。覆土とともに掘り上がってしまったため、正確な出土位置を示すことはできないが、墓壙北壁中央から 20 cm ほど離れ、底面からおよそ 20 cm 上位である。外側の銭表面には和紙が付着しており、紙



第12図 近世墓実測図 (1:40)

に包んだ状態で副葬されたことを示している。その他の副葬品は、墓壇の北東隅に近いあたりの直径 15 cmほどの範囲にまとまっていた。墓壇底面直上に、砥石、ほぼ平行に並んだ釘 3 本、丸石が位置していた。丸石はわずかに交差する西側の釘 2 本と東側の一本に挟まれる位置にあった。丸石と東側の釘 1 本は硯の下に隠れるため、遺物出土状況図 (第 12 図) に表れていない。砥石の上にはキセルと火打金が重なり、さらに重なり最上位に硯が位置する。従って、すべて同一平面に並べ置かれた状況ではない。キセルは羅字がほぼ消失しているが、雁首と吸口の軸線がほぼ揃う。これらの副葬品は、総じて長辺を墓壇の長軸方向に揃えた状態にある。小範囲にまとまっていたことを併せて考えると、袋や木箱などの入れ物に品々をきっちり揃えて入れ、遺体脇に置いたのではなかろうか。釘は、同一レベルでおよそ平行する状態でまとまっていることからすれば、副葬品の入れ物および木棺材の接合に用いられたものではないと考えられる。なお、六道銭が他の副葬品と離れ、高い位置で出土したことは、両者は異なったかたちで副葬されたことを示唆する。「出土状況としては、死者の手を組ませ、その掌に紙や布で包んだ六道銭を持たせる例を見ることができる」(小川 2001) ことから、本墓の六道銭もこうした副葬の仕方を取っていた可能性がある。時期: 出土した寛永通宝はすべて古寛永であり、キセルの形態は 17 世紀後半頃の特徴を示している。また、墓壇の構築状況から S K 03 と同時ないしごく近接した時期につくられたと考えられる。以上から、本墓の構築は 1668 年頃以降で、下っても、18 世紀前半にはおさまると考えておきたい。

(2) 土坑

S K 01 (第 13 図、PL2)

位置: 2 区南の北半部、谷状低地部からその北側微高地への斜面に位置する。

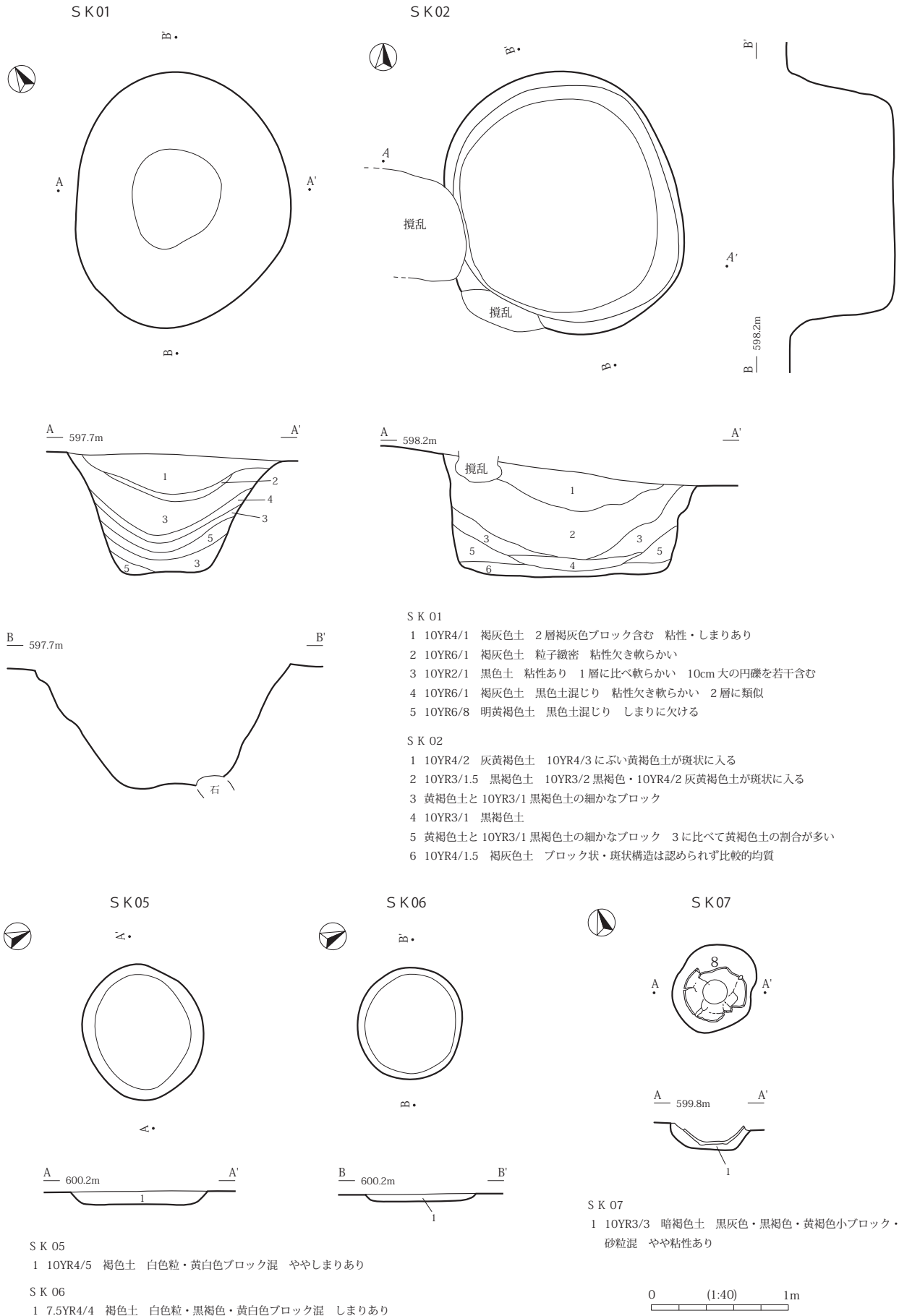
検出: III 層上面で検出した。

規模・形状: 長軸 188 cm、短軸 158 cm、深さ 90 cm、長軸方向 N 31° E を測る。平面形は楕円形気味の形状を呈する。断面形は逆台形を呈し、平坦な底面から斜めに壁が立ち上がる。

覆土: 最上層である 1 層と 2 層以下とで性状が大きく異なる。1 層は締まりのある褐灰色土で、現耕作層に似る。2 層以下は、1 層に比べ軟らかく、粘性のある黒色土と褐灰色土ないし黄褐色土の互層をなす。

遺物出土状況: 覆土から黒曜石・緑色岩の剥片各 1 点が出土した。

時期: 剥片はおそらく縄文時代と思われるが、現耕作土に似た土が土坑上部を埋積していることから、近現代ないしそれに近い時期と考える。



第13図 土坑実測図 (1:40)

S K 02 (第13図、PL2)

位置：2区南の南半部、尾根状微高地頂部から低地部への変換点に位置する。

検出：Ⅲ層上面で検出した。

規模・形状：長径195 cm、短径168 cm、深さ88 cmを測る。長軸はN 34° Wを向き、等高線に平行する。平面形は楕円形気味である。断面形はタライ状を呈し、平坦な底面から壁が垂直に近く立ち上がる。

覆土：最下に地山黄褐色粒子を多く含む層が堆積し、その上位は、壁際の黄褐色細ブロックを多く含む断面三角形の堆積、中央部の黒褐色土のレンズ状堆積となる。最上部には黄褐色粒子を多く含む層がレンズ状に堆積している。

遺物出土状況：覆土から、無文ながら縄文土器と思われる小片1点が出土した。

時期：帰属時期を特定し難いが、出土した土器片から、縄文時代と考えておきたい。

S K 05 (第13図、PL2)

位置：3区中央西寄り、尾根状微高地頂部に位置する。S K 06に近接する。

検出：Ⅲ層上面で検出した。

規模・形状：平面形は円形を呈し、長径100 cm、短径88 cm、深さ10 cmを測る。底面は平坦である。

覆土：褐色土の単層。

遺物出土状況：出土遺物なし。

時期：不明

S K 06 (第13図、PL2)

位置：3区中央西寄り、尾根状微高地頂部に位置する。S K 05に近接する。

検出：Ⅲ層上面で検出した。

規模・形状：平面形は円形を呈し、長径82 cm、短径76 cm、深さ6 cmを測る。底面は平坦である。

覆土：褐色土の単層。

遺物出土状況：出土遺物なし。

時期：不明

S K 07 (第13・17図、PL2・3)

位置：3区南東部、尾根状微高地頂部に位置する。

検出：Ⅲ層上面で検出した。

構造：平面形はやや不整な楕円形を呈し、長径68 cm、短径58 cm、深さ18 cmを測る。断面形は逆台形に近く、平坦な底面から斜めに壁が立ち上がる。土坑内から土器1個体が出土した(8)。上部が殆ど失われて完形ではないが、下部は土坑中心に合わせて正位で納まっている。土器と土坑底・壁との間には暗褐色土が詰まっている。土器内部の土については、記録を取り忘れてしまったが、土器外側の暗褐色土とは異なって、空隙の多いグサグサした黒褐色土だったと記憶する。こうした状況から、本遺構は埋設した土器内の空間を利用した施設と考える。ただし、その用途は判然としない。発掘時には可能性のひとつとして便槽を想定したが、土器が推定器高30 cm程度の比較的浅い器形であること、付着物が観察されないことから、その可能性は低いとみताほうがよいだろう。土器は近世以降の火鉢と思われるものである。

時期：出土土器からみて、近世以降と考えられる。

(3) 溝

SD 01 (第14図)

位置：2区南の北半に位置する。谷状部を横切るような形で延びている。

検出：Ⅲ層上面（高位部）～Ⅱ層中（低位部）の検出となる。

規模・形状：溝の走行方向はN 12° Eを測る。高位の北北東から低位の南南西へ直線的に延びているが、途中で西側に1条が分岐して、東西2条が併走する形となる。発掘調査前の畑地境とは位置はずれるが方向は一致する。検出した長さは20.5 mを測る。検出面での幅は50 cm～1 m、深さ15 cm～30 cmで、分岐後の東西両溝ともほぼ同じ規模である。断面形は概ねU字状を呈するが、逆台形となる箇所もある。壁・底面には動植物の攪乱と思われる小穴が数多く認められるが、総体的には平坦といえる。覆土は概ね似通った土質の黒褐色～褐色土である。ただし、中央あたりでは（B B' 断面）、上下二層に分層され、その上層が分岐後の西溝の覆土と同質であり、下層が東溝の覆土に類似することから、東溝の埋没が古く、西溝の埋没が新しいとみる発掘所見がある。

遺物出土状況：図化しないが、覆土から幕末～近代の陶磁器片4点が出土している。

時期：開掘時期は明らかでないが、出土遺物から、幕末から近代に埋没したと考える。

SD 02 (第14・17図)

位置：2区南の南半に位置する。谷状部を横切るような形で延びている。

検出：Ⅲ層上面（高位部）～Ⅱ層中（低位部）の検出となる。

規模・形状：走行方向はN 8° Eを測り、SD 01とは僅かに異なるが、概ね同じ軸線上にある。谷の最低部で途切れているが、本来、SD 01と同一溝であった可能性があろう。高位の南南西から低位の北北東へ直線的に延びており、発掘調査前の畑地境とは位置はずれるが方向は一致する。検出した長さは13 mを測る。検出面での幅は90 cm前後、深さ40 cm～30 cmである。断面形は概ねU字状を呈するが、V字形に近くなる箇所もある。覆土は高位部と低位部で色調が若干異なるものの、概ね似通った土質である。

遺物出土状況：覆土から、古墳時代中期の土師器坏1点(4)、13～14世紀の中津川焼甕の破片2点(6・7)、黒曜石剥片1点が出土した。

時期：上記の遺物が出土したが、SD 01と同時期と考える。

SD 03 (第15図、PL2)

位置：4区南の南端部に位置する。谷の走行方向に沿ってSD 04～06と平行して走っている。

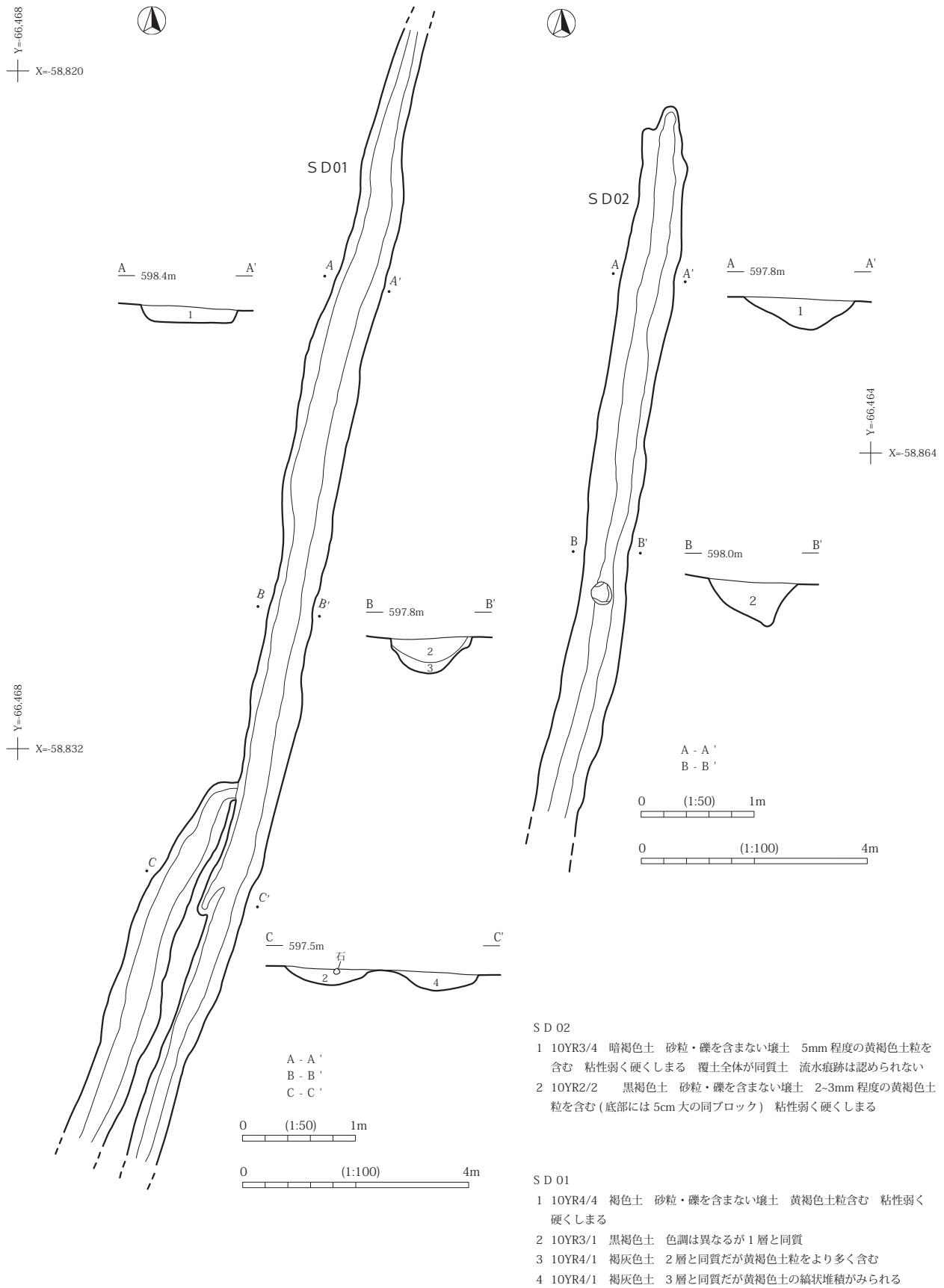
検出：平面的に検出したのはⅢ層上面となるが、調査区壁面での土層観察により、Ⅱ層上面まで立ち上がることを確認した。

規模・形状：走行方向はN 75° Wで、低位の東南東から高位の西北西へ直線的に延びるが、西端部はわずかに南へ屈曲して西を向く形勢をみせている。検出した長さ18.8 m、検出面での幅120～80 cmを測る。検出面からの深さは15 cm～10 cmであるが、本来、あと20～30 cm以上深かったであろう。断面形は概ねU字状を呈する。壁・底面には動植物の攪乱と思われる小穴が数多く認められるが、総体的には平坦といえる。東端部底面レベルは、西端より70 cm低くなっている。覆土は宅地造成土直下の旧耕作層(第8図では分層していないがⅠ層最下部にあたる)に類似した土質の単層である。

遺物出土状況：図化はしないが、覆土から中世陶器(15世紀)1点・近世陶器(18世紀後半)1点・近世末～近代陶磁器(19世紀)2点が出土した。

時期：開掘時期は明らかでないが、出土遺物から、近世末から近代に埋没したと考える。

第3章 アクセス道路部分の調査



第14図 SD 01・02 実測図 (1:100・1:50)

S D 04・05・06 (第15・18図、PL2)

位置：4区南の南端部に位置する。S D 03の南側に、これと平行して、北からS D 04・S D 05・S D 06の3条が相接して並走する。S D 04とS D 03の間隔は70 cm前後である。

検出：平面的に検出したのはⅢ層上面となるが、発掘区壁面での土層観察により、Ⅱ層上面まで立ち上がることを確認した。

規模・形状：3条の中軸に位置するのがS D 05である。走向はN 75° Wで直線的に延びているが、東端部はわずかに南へ屈曲する形勢をみせている。検出した長さ14.4 m、検出面での幅60～40 cm、深さは5 cm～10 cmを測り、断面形はU字状を呈する。東端部底面レベルは西端より70 cm低くなっている。S D 04は東端部で屈曲してS D 05に合流するような形となる。検出した長さ10.8 m、幅50～30 cm、深さ6 cm前後を測り、断面形はU字状を呈する。東端部の底面レベルは西端より40 cm弱低くなっている。S D 06は、S D 05から分岐するように現れ、再び合流するような形となる。検出した長さは6.6 mを測る。分岐から4 mまでは幅25 cm前後、深さ10～5 cmであるが、それより東では幅80 cm程度まで広がるとともに、深さも20 cm近くになる。東端部底面レベルは、西端より20 cm低くなっている。断面形はU字状を呈する。3条とも、壁・底面には動植物の攪乱と思われる小穴や凹部が数多く認められるが、総体的には平坦といえる。また、Ⅱ層上面まで壁が立ち上がることを考えれば、本来の深さは上記よりも深かったはずである。3条の覆土は、S D 03に類似した同じ土質・性状であり、区別できなかった。従って、異なる時期の溝が切り合っているのか、それとも同時存在か確定できない。

遺物出土状況：S D 04から打製石斧1点(5)、S D 05から打製石斧1点(3)・下呂石剥片1点・無文ながら縄文時代と思われる土器片1点が出土している。また、極小片のため図化できないが、S D 05からは近世末～近代(19世紀)の磁器片1点が出土した。

時期：開掘時期は明らかでないが、覆土の状況からみて、3条は異なるとしてもごく近接した時期、近世末から近代に埋没したと考えられる。

S D 07 (第15図)

位置：2区南の中央、谷の最低部に位置する。

検出：Ⅱ層中(低位部)の検出となる。

規模・形状：検出した長さは3.3 mと短い上、深さも10 cm程度と浅い。トレンチと重複するためもあってか、東側の立ち上がりを捉えることができなかった。断面形は逆台形に近いU字状のようである。覆土はS D 01・02よりやや黒色が強いが、谷埋積層のⅡ層土が多く流れ込んだためと思われる。本溝はごく部分的な検出であるが、S D 01およびS D 02と概ね同じ軸線上にある。それらと同一溝ではないとしても、同様な機能を果たしていた可能性がある。

遺物出土状況：出土していない。

時期：S D 01・02と同じ、ないし近接する時期と考える。

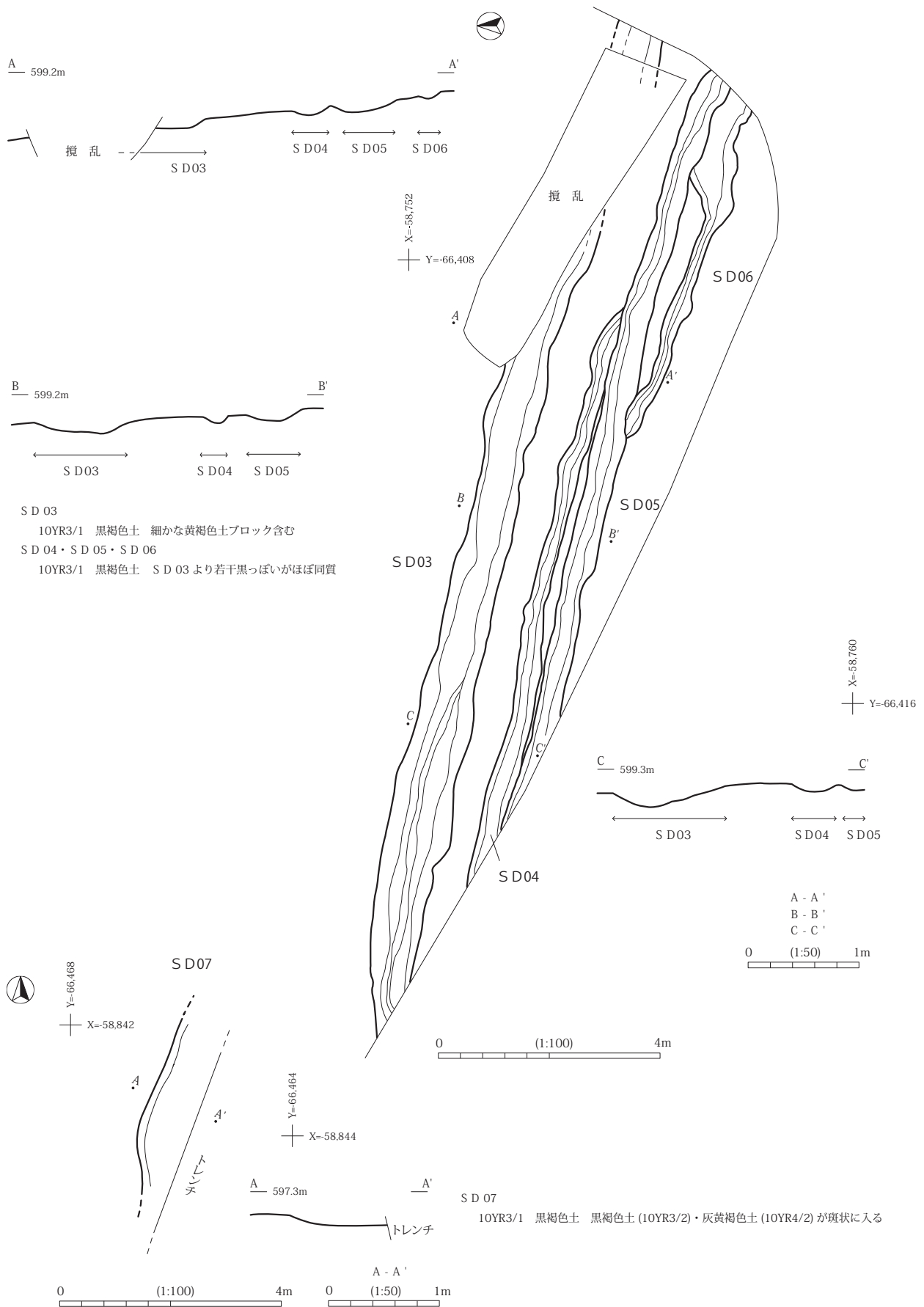
3 出土遺物

(1) 近世墓出土の遺物

S K 03 (第16図、第5表、PL3)

銭貨 1～6は寛永通宝である。出土時には重なった6枚が腐食により一体化していた。これを、溶剤(エチレンジアミン四酢酸三ナトリウム中性型の0.1%溶液)を用いて分離させた。6枚は、1裏|表・2裏|表・3表|裏・4裏|表・5表|裏・6表|裏、の配列で重なっていた。1～3・6は「寛」字の12画と13

第3章 アクセス道路部分の調査



第15図 SD 03~07 実測図 (1:100・1:50)

画の上端が接し、「寶」字の貝画末尾がス（ス貝寶）となっている古寛永である。4・5は背面に「文」字をもつ新寛永、いわゆる文銭である。

SK 04 (第16図、第5表、PL3・4)

銭貨 7～12は寛永通宝である。出土時には重なった6枚が腐食により一体化していた。これを上記の方法で分離させた。6枚は、7裏|表・8裏|表・9裏|表・10表|裏・11裏|表・12裏|表、の配列で重なっていた。一体化した塊の外表面にあたる7裏面の一部と12表面の全面に和紙(PL3)が付着している。7～12すべて古寛永である。

硯 13は小形の長方硯である。石材はオリーブ灰色の凝灰岩を用いている。硯面中央に深い凹みとなって墨道が表出しており、墨道凹みには縦方向の擦痕がみられる。製作時の硯面からかなり変形しているが、縁際の状態をみると、陸の前端からなだらかに傾斜して海へと続き、陸と海との境界は明瞭ではない。硯面から縁上面に墨汁の付着が観察される。陸の落ち際から海にかけて厚く付着しており（実測図網掛け部分）、その他の部分は薄く痕跡的である。硯背は平坦に仕上げられている。海側の背面・側面にも痕跡的な墨汁付着がみられる。硯面が上になった状態で出土した。

砥石 14は短冊状を呈する砥石で、石材は灰白色の緻密な凝灰岩を用いている。実測図の表面および左右側面の3面が砥面となっており、さらに、表面・左右側面の上側縁と表面の下側縁は面取り状をなす。表面の上半には長軸に対して横やや斜め方向の線状痕がみられる。左右側面には左下がりの線状痕がみられる。下小口面は平滑であるが、線状痕は認められない。上小口面は素材となった石の節理面である。裏面は割れ面である。製作当初の形態とは思われないが、破損か意図的な打ち割りかは判断できない。割れ面およびその周縁に加工痕や使用痕は認められないが、稜が鈍くなっているように感じられる。これを手ずれと考えれば、割れた（割った）後も使い続けたということになろう。裏面が上になった状態で出土した。

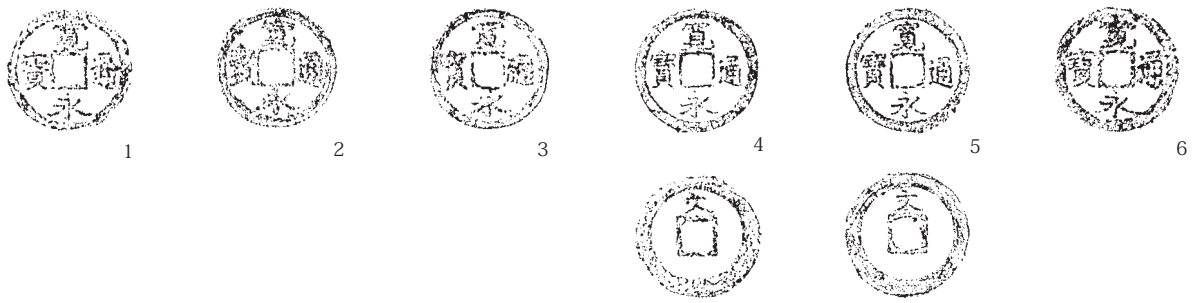
丸石 15は用途不明の丸い小石である。端整な楕円形を呈し、やや扁平な形状である。研磨されているのか、表面は滑らかである。石材は細粒砂岩である。

火打石 16はガラス質の剥片を素材とした火打石である。実測図の右面が主要剥離面（裏面）である。全体的に扁平な剥片であるが、打点側にあたる部分（裏面図でいえば上・左側）が厚く、先端側（裏面図でいえば右・下側）に向かって薄くなる形状である。打点側の一辺を除く側縁の大部分に細かな剥離が認められ（実測図の側縁外側に示した範囲）、特に薄くなる先端側に顕著である。火打金を打ち合わせることで生じた使用痕と考えられる。鋭利でない表裏面の稜には使用痕はみられない。素材剥片の打点は失われており、先端には折れ（裏面図の下縁）がみられるが、折れ面の縁辺にも使用痕は認められる。

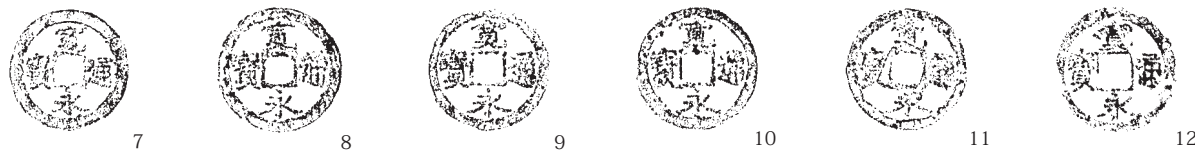
この火打石の素材については、検出当初から黒曜石と認識していた。しかし、沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に産地推定分析を依頼したところ、主成分のAl・Si、またCa・Tiの組成比率が通常とは大きく異なることから、非黒曜石との判断が下された(付録CD参照)。肉眼的には明らかな黒曜石に見えるが、こうした分析結果が出たことは事実として受け止めておきたい。素材はガラス質のものであることは確かだが、これ以上の特定は今後の課題としたい。

キセル 17の雁首は、羅宇を挿入する部分が一段太くなった肩付きの形態である。小口から肩の右半分が腐食のため欠損している。浅めの椀形を呈する火皿と首部との接合部には補強帯が付き、脂返しは彎曲する。脂返しと肩は別作りで、接合部は鑲付けされている。首部は左側で銅版を巻き合わせ、その継目は鑲付けされている。18の吸口も肩が付く形態である。肩と口元部分（狭義の吸口）は別作りで、接合部は鑲付けされている。縦半分が腐食により大きく欠失しているが、銅版を合わせた鑲付けの継目は残っている。羅宇は竹製で、雁首および吸口に包まれた両端部分のみ残る。小口は周縁をはつって仕上げている。

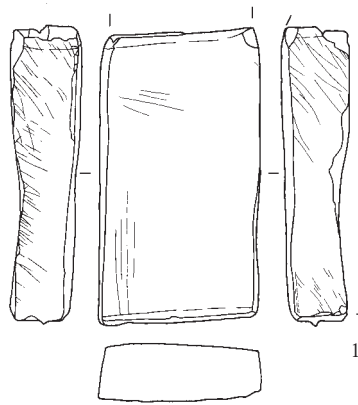
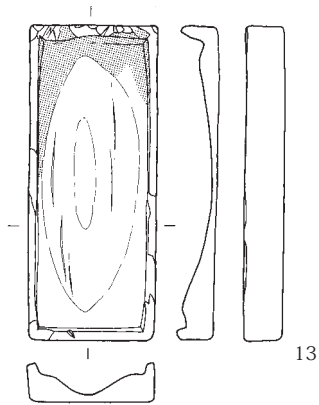
SK 03



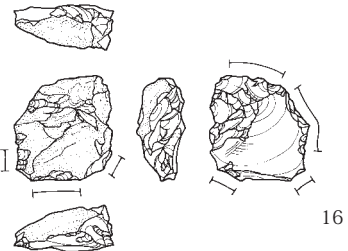
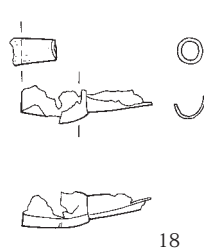
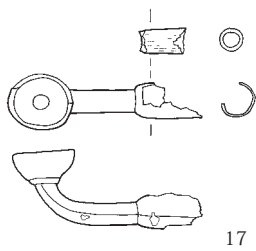
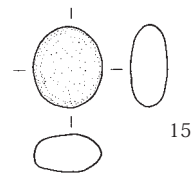
SK 04



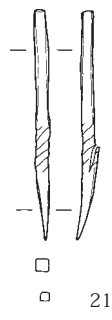
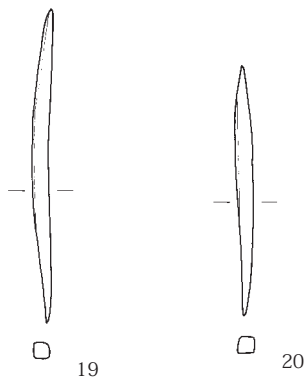
0 (2:3) 5cm



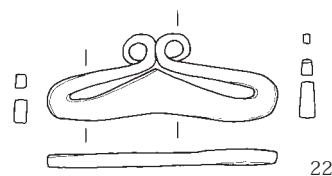
0 (1:2) 5cm



0 (2:3) 5cm



0 (1:2) 5cm



1 ~ 6 : SK03
7 ~ 22 : SK04

第16図 近世墓出土遺物実測図 (2:3・1:2)

第5表 近世墓副葬品一覧

銭貨

図版 No.	図版 遺物No.	写真 PL No.	出土位置	名称	外径 cm	内径 cm	厚さ cm	孔径 cm	重さ g	備考
16	1	3	SK03	寛永通寶	2.46	2.01	0.100	0.60	1.89	古寛永
16	2	3	SK03	寛永通寶	2.45	1.95	0.140	0.65	3.66	古寛永
16	3	3	SK03	寛永通寶	2.40	2.05	0.135	0.60	3.12	古寛永
16	4	3	SK03	寛永通寶	2.50	2.10	0.130	0.60	2.81	新寛永文銭
16	5	3	SK03	寛永通寶	2.51	2.05	0.160	0.60	4.11	新寛永文銭
16	6	3	SK03	寛永通寶	2.51	2.00	0.110	0.60	2.97	古寛永
16	7	3	SK04	寛永通寶	2.41	1.85	0.180	0.60	4.26	古寛永 裏面一部に紙付着
16	8	3	SK04	寛永通寶	2.47	2.00	0.130	0.60	2.89	古寛永
16	9	3	SK04	寛永通寶	2.41	2.00	0.130	0.60	3.30	古寛永
16	10	3	SK04	寛永通寶	2.46	2.00	0.130	0.60	3.99	古寛永
16	11	3	SK04	寛永通寶	2.41	2.00	0.140	0.60	3.49	古寛永
16	12	3	SK04	寛永通寶	2.52	2.00	0.130	0.65	2.43	古寛永 表面全面に紙付着

石製品

図版 No.	図版 遺物No.	写真 PL No.	出土位置	材質	名称	最大長 cm	最大幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
16	13	3	SK04	凝灰岩	硯	8.45	3.30	1.050	41.69	
16	14	3	SK04	凝灰岩	砥石	7.90	4.20	1.800	106.72	
16	15	3	SK04	細粒砂岩	丸石	2.10	1.80	1.030	5.58	硯の下で検出 用途不明
16	16	3	SK04	ガラス質	火打石	1.90	2.05	0.900	3.35	

銅製品

図版 No.	図版 遺物No.	写真 PL No.	出土位置	名称	部位別長さ cm	部位別径 cm	部位別高さ cm	羅宇外径 cm	重さ g	備考
16	17	3	SK04	キセル雁首	火血長径 1.65 脂返し長 2.70 肩残存長 1.70	火血短径 1.50 脂返し径 0.60 肩径 0.90	火血高 0.75 脂返し高 1.20	0.65	3.18	火血口縁一部欠損 肩部欠失
16	18	3	SK04	キセル吸口	肩長 1.75 口元残存長1.70	接合部径 0.65		0.65	0.85	縦半分欠失

鉄製品

図版 No.	図版 遺物No.	写真 PL No.	出土位置	名称	最大長 cm	最大幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
16	19	3	SK04	合釘	8.30	0.40		3.77	腐食により20と一体化していた
16	20	3	SK04	合釘	6.60	0.40		3.73	腐食により19と一体化していた
16	21	3	SK04	切釘?	6.10	0.35		1.97	二つに分離していたが接合
16	22	3	SK04	火打金	5.94	全幅 2.30 体部幅 1.15	底面厚 0.40	8.46	

このキセルは、上記の形態的特徴からみて、17世紀後半頃の年代（古泉2001）が考えられる。

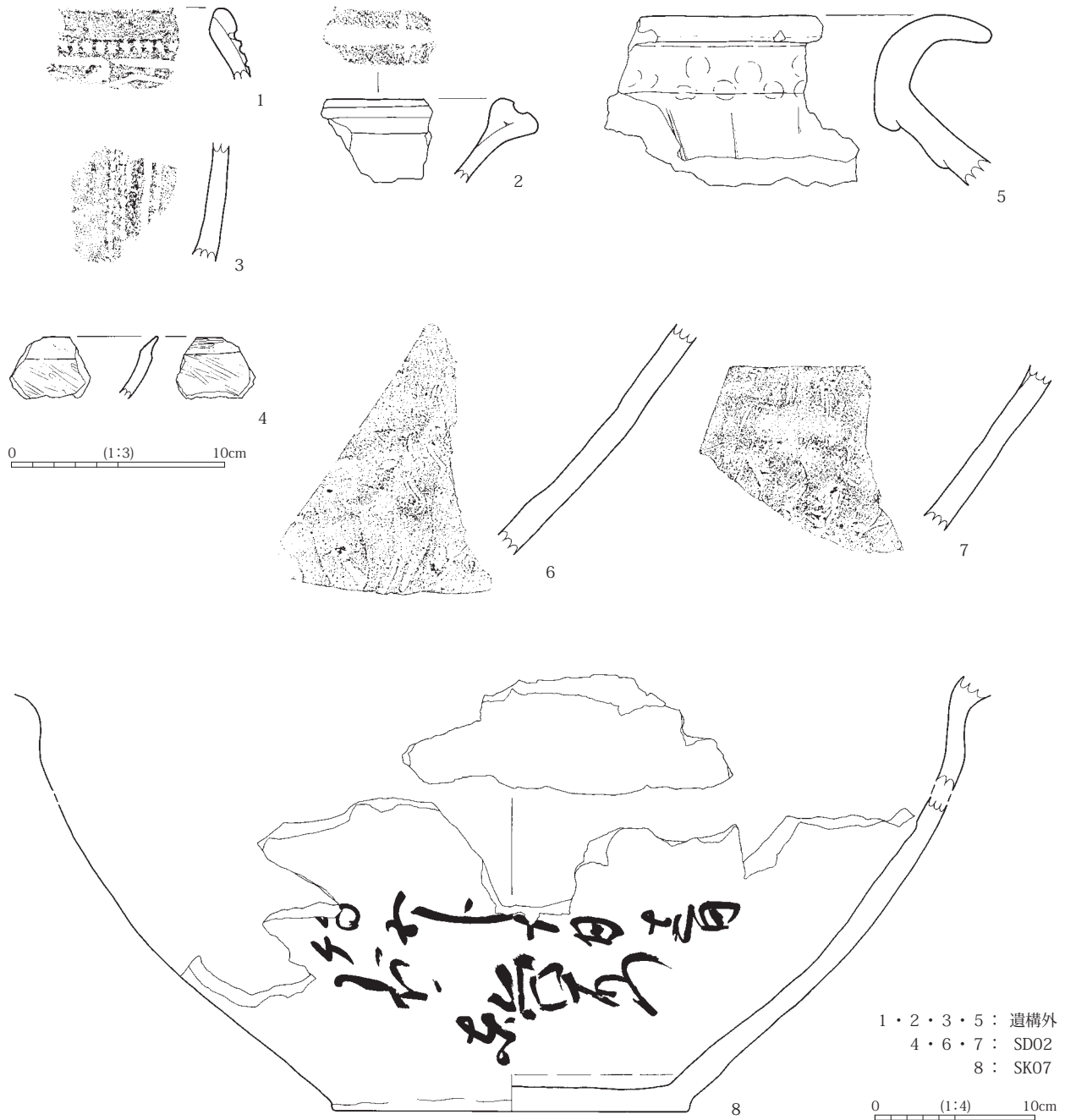
火打金 22は火打金である。側面形が緩やかな山形を呈する体部の両端を細く延ばして上部中央に曲げ合わせ、さらに、その端部を外巻きに巻くことで二つの孔を表出した突起部をつくる。体部は上端から底面（打撃面）に向かってやや厚くなっている。底面中央はやや内彎しており、打撃による抉れ（摩滅）と思われる。上部の突起部はつまみ部としての機能、その孔は紐を結び付ける機能をもっていたと推測される。

釘 19～21は断面方形の細い棒状鉄製品で、先端が尖った形状から釘と考えられる。19は両端が尖った合釘である。ほぼ完形と考えられる。20も合釘と思われるが、プロポーションからみて一方の先端が欠失した可能性がある。その場合、本来の長さは19とほぼ同様であったろう。21は切釘か片端欠失の合釘か判断できない。先端から1.8～3.0cmの間にねじが切つてある状態が観察され、その部分のみ断面円形となっている。従って、ねじ切りが施されたのはその部分に限られる。他の2本とは異なった機能が想定されるものである。これらは前述したように、出土状況から、副葬品の容器や木棺材の接合に用いられたのではないと考えられる。

(2) 土器・陶器（第17図、PL3）

縄文時代の土器

縄文土器は全体で15点が検出された。時期が推定できるものは、すべて中期に属する。1はキャリパー

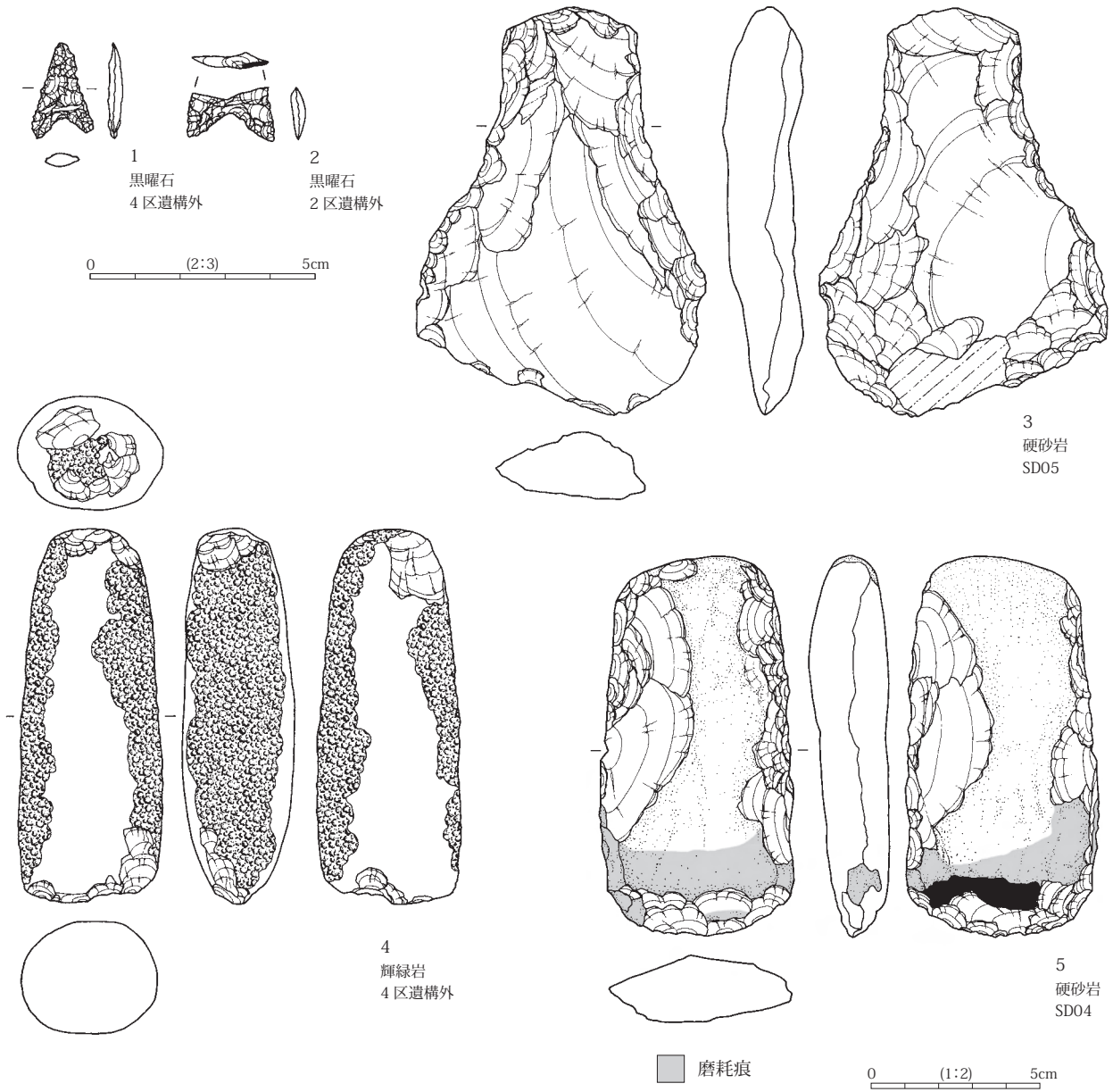


第17図 土器実測図 (1:3・1:4)

形の口縁部に沈線文と連続刺突文を施した中期後葉の深鉢。口縁端部直下に横方向の沈線を引いてその内部に連続刺突を施し、その下に、右端を巻いた横方向の沈線と波状沈線を組み合わせる。2区南(1T)表土出土である。2は浅鉢の口縁部で、上下に肥厚させた口縁の端面に沈線一条を廻らせ、沈線下の一部に細い3条の縦沈線を施す。沈線上には縄文が観察される。中期初頭と思われる。2区南の風倒木痕から出土した。3は深鉢底部付近で、縦の隆帯の両側に沈線文・押引文を施す。2区南(2T)表土出土である。中期前半と考える。

古墳時代の土器

4は半球形体部をもつ古墳時代中期の土師器坏である。口縁部は、端部が僅かに外反し、内面は内傾する面をなして下端に稜が廻る。口縁ヨコナデの後、内外面ともヘラミガキを施す。SD02覆土から出



第18図 石器実測図 (2:3・1:2)

土した。古墳時代の遺物はこれ1点のみである。

中世～近世の焼物

中世の焼物は10点が確認された。図示した5～7の外に、山茶碗系捏ね鉢(13～14世紀)、古瀬戸平碗・瓶子・鉢(14～15世紀)などがある。5は2区南の遺構検出面で出土した12世紀後半の常滑焼甕である。外傾して立ち上がる頸部から口縁部が下方に倒れこむように強く外反する。内面には粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る。肩部外面および口縁内面には焼き切れた状態の自然釉が付着しており、そのため不明瞭になっているが、肩部には縦方向の沈線ないし平行沈線が観察される。6・7は同一個体で、13～14世紀の中津川焼甕の胴下部である。SD 02 覆土から出土した。

近世の焼物は、図示した8の外に、天目茶碗(近世前半)、拳骨茶碗(18世紀以降)、鬚盥(18世紀)、御深井焼碗(18世紀後半)などがある。8はSK 07 埋設土器である。火鉢と思われる土器で、近世以降の在地の焼物であろう。口縁部は外反し、体部外面下半部には横方向に墨書がなされている。内容は判読し難いが、右列は「□六年十月十二日」か。左下は「□□衛門」か。

(3) 石器 (第18図、PL2)

9点の石器が出土した。内訳は石鏃2点、二次加工がある剥片1点、打製石斧6点、磨製石斧1点である。剥片が黒曜石5点、チャート1点、硬砂岩1点、緑色の凝灰岩1点、下呂石1点の9点出土した。この他に、S K 04から硯、砥石、火打石が出土しているが、詳細はS K 04出土遺物の項に記述した。

1・2は石鏃、3・5は打製石斧、4は磨製石斧である。4は刃先が欠損し、側縁の敲打痕が顕著であり、表裏面は刃部のみに研磨による線状痕がみとめられるが、胴部は自然面のように見える。5は刃部の磨耗痕を切って、刃部の調整剥離が見られる。

4 小結

今回の発掘調査の結果が加わったことにより、山本大塚遺跡は縄文時代中期、古墳時代中・後期、中世および近世の内容を含む遺跡であることが明らかになった。しかし、明確な居住域は確認されていない。集落の主体は調査区の西方に展開すると推定され、今回の調査部分は集落の縁辺エリアにあたると思われる。その縁辺エリアがいかなる性格をもった区域であったのか、いかなる土地利用がなされていたか、残念ながら、得られた資料は少なく断片的で、それについては明確にし得ない。ただし、2区南で確認された近世墓は注目される遺構である。周辺には墓地が点在し、その中の墓石には江戸時代の年号が刻まれたものも多い。近隣に建つ観音寺や、かつて中津川線の建設に伴って調査された中世火葬墓群とともに、このエリアの特質を考えるための材料となろう。

近世墓S K 04は比較的豊富な副葬品をもつ。そのなかで、火打金と火打石が供伴して検出されたことには注意しておきたい。硬い石(火打石)と鋼鉄など(火打金)を打ち合わせる火花式発火法は、日本では古墳時代後期までは遡る(高嶋1985)。長野県内でも、小諸市大塚原遺跡の古墳時代後期後葉の第5号住居址から火打金が出土しており(小諸市教育委員会1994)、以降、古代から明治期まで各時代にわたって火打金が検出されている。管見では、長野県内の遺跡出土の火打金は69遺跡、168点の報告例がある。形態は様々である。古代・中世は山形を呈する体部のものが主体であり、近世は鏃形の割合が増加するといった大まかな傾向は窺えるようであるが、欠損品や帰属時期の特定が困難な場合も多く、時期ごとのバリエーションやその変遷を明確にすることはいまだ難しい。本遺跡S K 04の火打金は、緩やかな山形を呈する体部の両端を細く延ばして上部中央に曲げ合わせ、さらにその端部を外巻に巻いた形態である。こうした形態の発掘例は少ないものの、飯田市松尾北の原遺跡の茶柄山地籍SK174・上の城地籍SK128およびSK174から出土しており、特に上の城地籍SK174例は本遺跡のものに酷似する。これらのSK三基はいずれも近世の墓である(飯田市教育委員会1996)。また、時期を限定できないが、阿智村杉の木平遺跡でも類似した形態の火打金が見つまっている(長野県教育委員会1972)。なお、松尾北の原遺跡では、近世墓群のうち6基で火打金と火打石が共伴している。

長野県内の遺跡出土の火打石は、管見の限り、推測的な記述のものを含めて7遺跡、80点ほど報告されている。火打石が確認された遺跡は諏訪湖周辺から天竜川流域にかけての地域に集中しており、本遺跡のほか、飯田市松尾北の原遺跡[11点](飯田市教育委員会1996)、駒ヶ根市青木城遺跡[3点](駒ヶ根市教育委員会1985)、伊那市中原遺跡[1点](伊那市教育委員会2003)、茅野市山寺遺跡[21点](茅野市教育委員会1989)、下諏訪町殿村・東照寺址遺跡[40点ほど](下諏訪町教育委員会1990)の6遺跡を数える。残る1遺跡は千曲川沿いに位置する中野市栗林遺跡[1点](池田1981)である。時期的には、本遺跡・松尾北の原遺跡が近世であり、山寺遺跡は中世～近世前期、その他が中世とされる。古代以前とする例は見あたらない。石材は、松尾北の原遺跡および中原遺跡例は長石、その他は石英とされ、数量的には石英が圧倒的に多い。

近世都市遺跡である江戸遺跡では相当数の火打石が検出されている。石材は、石英あるいは石英質とする例が大多数であり、他に玉髓・瑪瑙・チャート・長石等の報告がみられる。江戸近郊にあたる東京都渋谷区恵比寿遺跡では黒曜石製火打石が1点確認されている（小林 1993 a）。近年の調査・研究により、近世には、日本各地で様々な石材が火打石として使用されていること、地域により使用石材に特色があることがわかってきた。江戸では、茨城県山方町諸沢村近辺で産出した白色で透明感のある石英質の石材が、商品として広く流通していたことが明らかになった（小林 1993 b）。また、名古屋では養老産の灰青色チャート（水野 1992）、奈良盆地においては二上山のサヌカイト（北野 1992）、和歌山平野では徳島県阿南市大田井産のチャート（北野 1999）が安定して消費されていた状況が明らかになっている。

前項に述べたように、S K 04 出土の火打石は黒曜石であると認識していたが、分析により否定された。しかし、近世さらにそれ以前において、黒曜石が火打石の素材として用いられることがなかったのかどうかは、今後、検討してゆくべき課題であろう。特に信濃は黒曜石の産地をかかえる地域でもある。火打石として、いかなる石材が、どのように調達され、そして消費されていたのかという問題に考古学から迫るためには、遺跡に残された火打石を検討してゆく必要がある。しかしながら、長野県内では、その前提となる資料の蓄積はあまり進んでいないように思われる。火打金に比べ、火打石が確認された遺跡は少なく、また、火打金が古墳時代後期以降、各時代に認められるのに対し、古代以前に遡る火打石は現在のところ発掘例がない。

火打石の形状は塊状・柱状・薄片状など多様で、重量 50 g を超えるものから 2 g 以下のものまでであるが、硬い石片の鋭利な稜に、火打金との打擦によって生じた、細かな剥離痕や潰れが観察できる。使用部分に鉄が酸化したと思われる付着物が認められる例もある（水野 1992）。今後、近世遺跡をはじめとして、出土した石英・チャート・黒曜石などの硬い石に注意を向け、こうした石片に火打石の可能性を検討する試みが積極的に行われることを期待したい。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1996 『北の原遺跡』
 飯田市教育委員会 1998a 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
 飯田市教育委員会 1998b 『山本西平遺跡』
 池田実男 1981 「栗林遺跡第四次発掘調査」『高井』第 56 号
 伊那市教育委員会 2003 『中原・原遺跡』
 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
 江戸東京博物館 1995 『あかりの今昔 - 光と人の江戸東京史 -』
 小川 望 2001 「VII. 6 銭貨」『図説 江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会 柏書房
 北青山遺跡調査会 1997 『北青山遺跡（山城国淀藩稲葉家下屋敷跡）発掘調査報告書〈第一分冊〉』
 北野隆亮 1992 「奈良盆地における火花式発火具 - サヌカイト製火打石の認識とその評価 -」『関西近世考古学研究』III 関西近世考古学研究會
 北野隆亮 1999 「和歌山平野における火打石の流通」『紀伊考古学研究』第 2 号 紀伊考古学研究會
 北野隆亮 2000 「畿内とその周辺における火打石の流通」『和歌山地方史研究』38 号 和歌山地方史研究会
 小泉 弘 1987 『江戸の考古学 考古学ライブラリー 48』 ニュー・サイエンス社
 小泉 弘 2001 「VI. 2 喫煙 2 煙管」『図説 江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会 柏書房
 小林 克 1987 「第 VI 章 第 1 節 (二) Q. その他の石製品」『真砂遺跡』 真砂遺跡調査會
 小林 克 1989 「III. 東遺跡・上ノ台遺跡の火打石」『東・上ノ台・道合久保前』 埼玉県川口市教育委員会
 小林 克 1990 「IV. 2. 火打石」『染井 I』 東京都豊島区教育委員会
 小林 克 1993a 「I. 2. (3) 火打石、火打石研究の視点とその方法」『恵比寿 旧サッポロビール恵比寿工場地区発掘調査報告書』 恵比寿・三田埋蔵文化財調査會
 小林 克 1993b 「江戸の火打石」『史叢』第 50 号 日本大学史学会

第3章 アクセス道路部分の調査

- 小林 克・松崎亜砂子 2001 「火打石研究の現状と今後」『日本考古学協会第67回総会 研究発表要旨』 日本考古学協会
駒ヶ根市教育委員会 1985 『青木城遺跡』
小諸市教育委員会 1994 『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』
下伊那誌編纂会 1955 『下伊那史 第2巻』
下伊那誌編纂会 1991 『下伊那史 第1巻』
下諏訪町教育委員会 1990 『殿村・東照寺址遺跡』
高嶋幸男 1985 『火の道具』 柏書房
茅野市教育委員会 1989 『山寺遺跡』
東京都港区教育委員会 1988 『増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』
永井久美男 編 1998 『近世の出土銭Ⅱ 分類図版編』 兵庫埋蔵銭調査会
長野県教育委員会 1972 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 下伊那郡阿智村斜坑広場その1-』
長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)』
長野県史刊行会 1989 『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』
日本のあかり博物館 2004 『あかり』
水野裕之 1992 「火打石 - 名古屋市の遺跡出土品から -」『関西近世考古学研究』Ⅲ 関西近世考古学研究会

第3節 ^{てらさわ}寺沢遺跡

1 遺跡の概観（第5図）

寺沢遺跡は飯田市西部、山本地区竹佐地籍に所在する。山本大塚遺跡が広がる台地面の南側の一段低い段丘面に立地し、標高 590～610 mを測る。段丘面は東西に長く延びているが、東端部では、坊主川の上流部にあたる浅い谷により北側の台地から切り離され、馬の背状の地形を成している。

『飯田の遺跡』（飯田市教育委員会 1998）によれば、段丘上～南側の低地にかけての東西約 330m、南北約 160m が遺跡範囲となっている。発掘調査が行われた経歴はなく、縄文時代中期の遺物が確認されているものの、遺跡内容は明らかではない。また、遺跡範囲の中に、かつて、塚のこし古墳（円墳）が存在した。『下伊那史第3巻』（下伊那誌編纂会 1955）によれば、横穴式石室をもち、土師器片が出土したとのことであるが、墳丘規模や石室構造、副葬品内容などが詳しく把握されないまま消滅してしまった。

北側の台地には山本大塚遺跡・白山遺跡（本書）がある。谷を隔てて南側に隣接する杵原台地には、並松遺跡（本書）、縄文時代中期の杵原遺跡が立地する。なお、並松遺跡の西隣には旧石器・縄文・弥生・古墳・江戸時代を含む複合遺跡である石子原遺跡（長野県埋蔵文化財センター 2007）が位置している。

2 調査の概要（第19・20図、PL1）

今回の発掘調査地は飯田市竹佐 563 ほかに所在し、遺跡範囲の東端部に位置する標高 591 m～596 m の地点である。遺跡内容や遺構・遺物の分布状況が不明確であるため、まずトレンチ調査を行い、その状況により面的調査を実施するか否かを判断する方針を立てた。

調査対象範囲の地形は、段丘東端部にあたる高位部分と、その北側と南側の谷状低位部分から成り、4～5 mの高低差がある。また、東側には中津川線路盤盛土部分が南北に横たわっている。中津川線跡地の東側で南北の谷状低位部は合流して深さを増してゆく。調査前には、高位部は宅地、北低位部は宅地および畑地、南低位部は水田であった。高位部については、現地表面は西側の用地外に隣接する宅地面より 2 mほど垂直に落ち込んで低くなっており、削平を受けていることが予測された。しかし、前述した塚のこし古墳の位置が今回の調査対象地に重なっているため、周溝など古墳構造の一部が残存する僅かな可能性を考慮して調査を行うこととした。

調査は平成 15（2003）年 7 月 1 日～4 日に実施した。未取得地と中津川線盛土部分を除き、この時点で調査可能な部分に計 7 本のトレンチを設定し、重機を用いて掘り下げた。土層は、高位部と北低位部とを統一的に把握し、層番号を付した。

北低位部のトレンチは谷を横断する方向に 3 本を設定し（1T～3T）、以下の四層を確認した。

I c 層：礫・コンクリート塊が混じる黄褐色～青灰色砂 宅地造成の盛土。

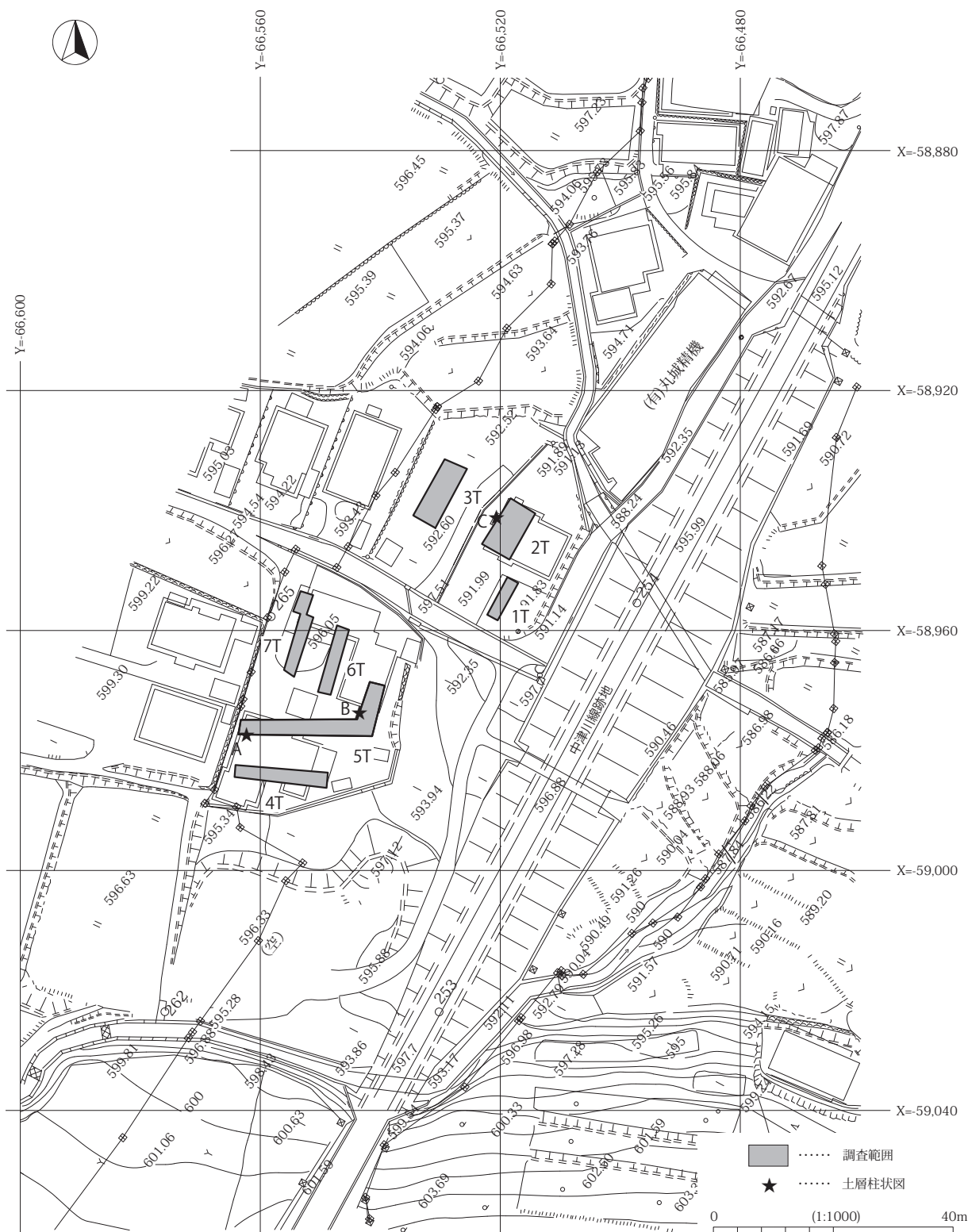
II a 層：黒色粘土質シルト 生々しい木片を含み、下部には砂粒が増える。

II b 層：黒褐色粗砂・礫・シルト 礫は垂円礫主体 空隙多い 酸化鉄顕著。

II c 層：にぶい黄色～緑灰色シルト・砂・礫 小単位の乱雑な互層を成す 生々しい木片を含む。

I 層は宅地盛土である。なお、3T では盛土と II a 層の間に層厚 25 cmの水田土壌が確認された。II a～II c 層はその性状から、谷部を埋積する自然堆積層であることは明らかである。最深で現地表下 2.2 m まで掘削したが、遺構・遺物はまったく検出されなかった。

高位部には、尾根筋に平行に 2 本（4T・5T）、直交する方向に 2 本（6T・7T）のトレンチを設定した。5T については、東端部から北へ、尾根筋に直交する方向の拡張部を設け、L 字形のトレンチとなった。



第19図 調査範囲図 (1:1000)

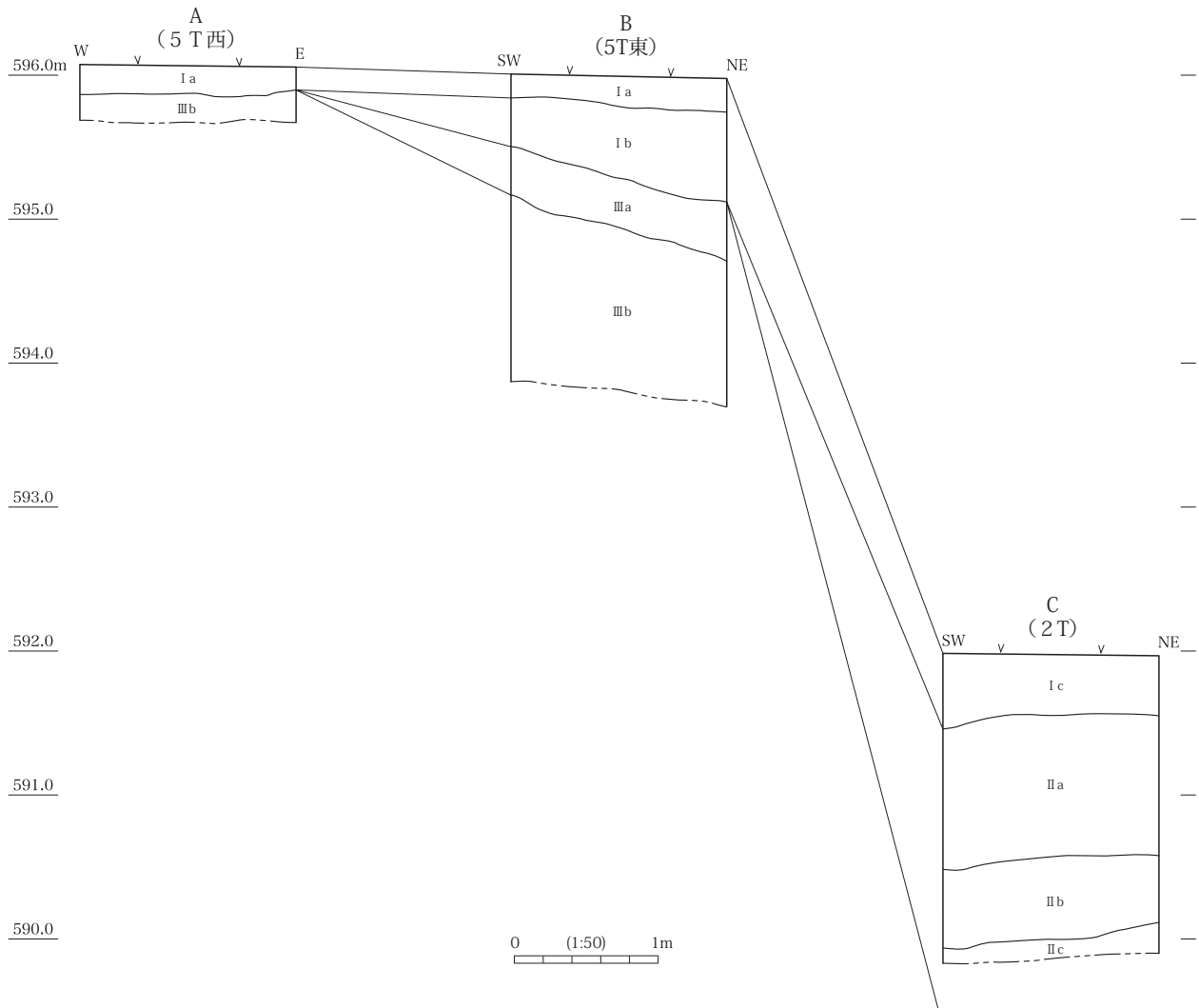
土層は以下の四層を確認した。

I a: 礫混じり黒褐色土 高位部現表土。

I b: にぶい黄褐色砂礫主体 高位部造成土。

Ⅲ a: 明褐色～黄褐色土 (7.5YR5/6～10YR5/5) 礫混じり。Ⅲ b層との層界は漸移的で不明瞭。

Ⅲ b: 灰白色～にぶい黄橙色砂礫 砂は粗砂～細砂。礫は腐れ花崗岩・片麻岩等の角～亜角礫。



第20図 土層柱状図 (1:50)

I a層は現表土である。これを除去するとIII b層が広範囲に露呈し、その外側にIII a層が帯状に現れ、さらに外側にI b層が現れた。III b層は層厚 1.5m 以上あり、その性状から地山となる扇状地堆積層であることは明らかである。III a層はIII b層が土壌化した部分と考えられる。I b層はIII bおよびIII a層由来の土質で、宅地造成の際に、台地頂部を削った土を周囲に押し出して斜面を埋めた造成土層であると思われる。遺構はもちろん 1 点の遺物も確認されなかった。

以上の状況から、高位部は広く削平を受けており、遺構・遺物包含層は消滅していると考えざるを得ない。北低位部では、谷状地形を埋積する土層を確認したものの、面的調査を必要とする状況は認められなかった。調査地の東部および南部には、未確認部分が存在するが、上記の調査結果と現地地形の状況を考え併せ、さらなるトレンチ調査および面的調査は不要であると判断した。

引用・参考文献

飯田市教育委員会 1998 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』

下伊那誌編纂会 1955 『下伊那史 第3巻』

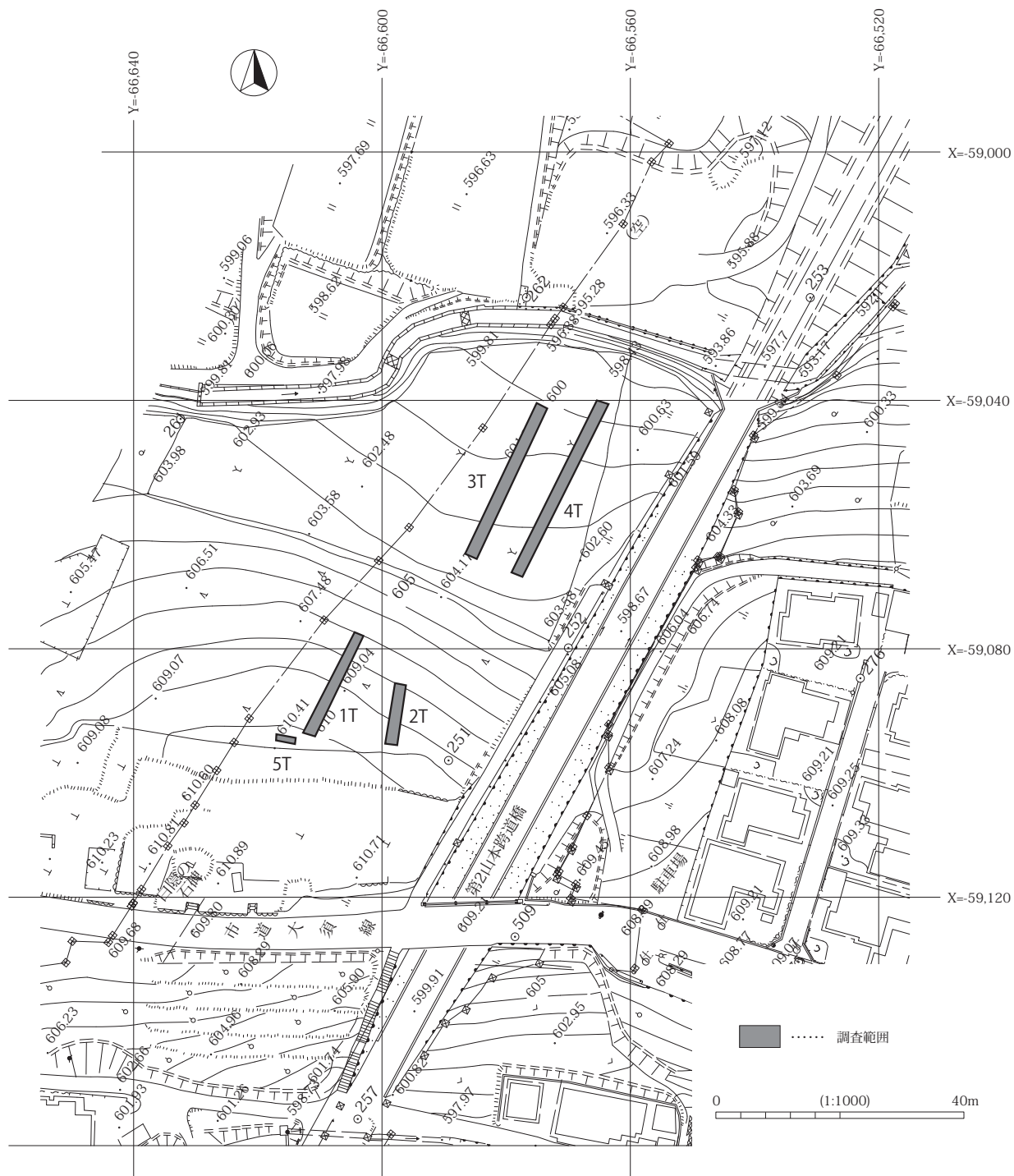
長野県埋蔵文化財センター 2007 『中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション埋蔵文化財発掘調査報告書 石子原遺跡・山本西平遺跡・辻原遺跡・赤羽原遺跡』

第4節 なんまつ 並松遺跡

1 遺跡の概観 (第5図)

並松遺跡は飯田市西部、山本地区竹佐地籍に所在し、高鳥屋山の東南麓に広がる扇状地が、小河川の浸食により分断されてできた、東西に長い残丘状台地に立地する。遺跡のある杵原台地は、北側の久米川水系と南側の阿知川水系の分水嶺をなしている。

『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会 1998)によれば、遺跡の範囲は東西約 360m、南北 130m を測る。遺



第21図 調査範囲図 (1:1000)

跡範囲の大部分は台地頂部に含まれるが、南側の一部で谷沿いの低地部に範囲が及んでいる。標高 600～610 mを測る。縄文時代中期および古墳時代後期の遺物が確認されているものの、発掘調査歴はない。

同じ台地上には、西隣に旧石器～江戸時代にわたる複合遺跡である石子原遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2007)、東隣に縄文中期の杵原遺跡が位置している。北側の台地には寺沢遺跡(本書)があり、箱川の谷を隔てて南側に隣接する箱川原台地には竹佐中原遺跡(本書)が立地している。

2 調査の概要(第21・22・24図、PL4)

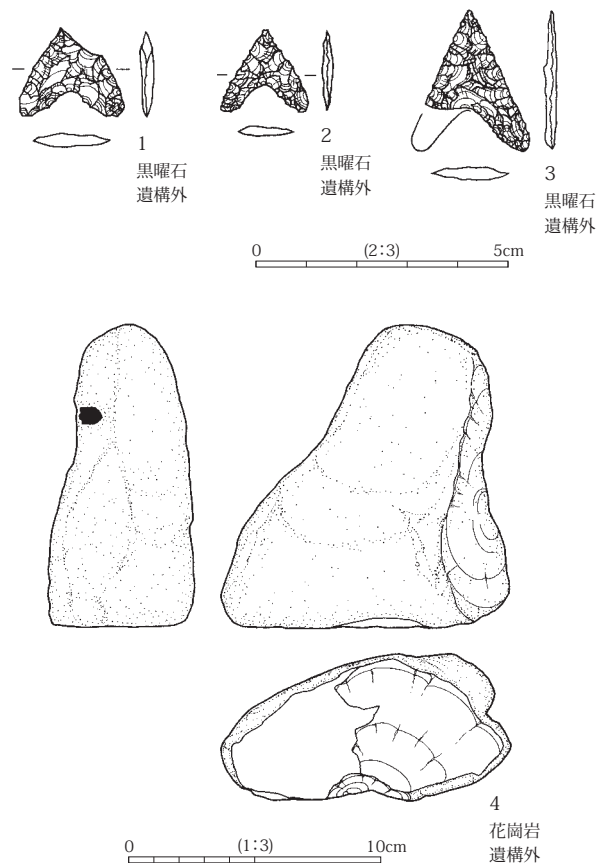
調査対象地は遺跡範囲の中央部にあたる。台地頂部の南辺に市道大須線が東西に通り、その北側は墓地となっていた。北斜面の上部は比較的傾斜が急であるが、下部は緩やかになり、かつて桑畑が営まれていた。一方、南斜面は急角度で一気に低地へ落ちており、低地部には水田が造られている。

平成13年度は、6月1日～13日に台地頂部の北端から北側斜面を調査した。地番は飯田市竹佐340-1ほかである。重機の進入路が確保できなかったため、人力により5本のトレンチを掘り下げた。斜面上部の1・2・5Tでは表土直下が地山である赤味を帯びた明褐色土となる。遺物は、表土から石鏃2点(1・3)・打製石斧1点・縄文土器と思われる破片が2点出土した。斜面下部に設定した3・4Tでは表土と地山黄褐色土の間に黒色土層が介在する。遺物は、石鏃1点(2)・スタンプ形石器と思われる石器1点(4)・打製石斧3点が表土から、縄文土器と思われる小片が表土および黒色土層から各1点出土した。いずれのトレンチでも遺構は検出されなかった。

平成14年度は、7月24日に台地南側の谷状低地部にトレンチ3本を設定し、重機を用いて掘り下げた。地番は飯田市竹佐307-15ほかである。これは竹佐中原遺跡の低地部調査と一連の工程で行った。水田

耕土直下に低湿地性の粘土質層・ピート質層がみられ、さらに、グライ化した砂礫層が1m以上堆積していた。遺構が検出されるような土層は認められず、遺物も出土しなかった。

台地頂部については、墓地移転に伴って工事立会を行ったが、攪乱が著しく壊滅状態であった。縄文時代等の遺構がかつて存在したとしても、墓地の造営により消失したと判断される。以上の状況から、これ以上の調査は不要であると判断した。



第22図 石器実測図(2:3・1:3)

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1998 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007 『中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション埋蔵文化財発掘調査報告書 石子原遺跡・山本西平遺跡・辻原遺跡・赤羽原遺跡』

第4章 インターチェンジ部分の調査

第1節 ^{たけさなかはら}竹佐中原遺跡

1 遺跡と調査の概観

(1) 遺跡の概観 (第23図)

竹佐中原遺跡は飯田市西部、山本地区竹佐地籍に所在し、高鳥屋山の東南麓に広がる扇状地が、小河川の浸食により分断されてできた、東西に長い残丘状台地に立地する。台地上は戦後まで桑畑として利用されたが、現在は畑地ないし荒地であり、一部宅地となっている。台地北側を流れる箱川とその支流となる台地南側の谷に沿う沖積低地には水田が営まれている。

『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会 1998)によれば、遺跡の範囲は、およそ東西 520m、南北 350m を測り、台地頂部から南北の斜面部、さらに北側低地部にかけての広い範囲に及んでいる。標高は台地頂部の遺跡西端部で 614 m、東端部で 604 m を測り、北側低地部との比高はそれぞれおよそ 6 m、20 m である。縄文時代中期の遺跡として登録・記載されているものの、発掘調査が行われた経歴はなく、遺跡内容は明確ではなかった。飯橋道路の建設に伴う今回の発掘調査により、旧石器時代～古代にわたる複合遺跡であることが明らかになった。

同じ台地上の西隣に縄文時代中期～後期の辻原遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2007)、東隣には森林遺跡(本書)が立地している。辻原遺跡から南へ分岐した台地上には、縄文時代中期後半の集落跡が発掘された箱川原遺跡(下伊那誌編集会 1991)がある。箱川の谷を隔てて北側に隣接する台地には、西から、旧石器～江戸時代にわたる石子原遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2007)、並松遺跡(本書)、縄文時代中期の杵原遺跡、下り松遺跡(本書)が位置している。

(2) 調査の経過 (第24図)

調査対象地はインターチェンジ建設用地にあたり、遺跡指定範囲の大部分が用地内に含まれる。平成 9 (1997) 年度から平成 11 (1999) 年度に、長野県教育委員会が事業地の用地取得状況と調整しながら、トレンチによる試掘調査を行った。その結果、竪穴住居跡等が確認され、面的調査が必要な範囲もある程度把握されたが、未取得地もかなりあり、本調査と併行してさらなる試掘調査が必要と判断された(長野県教育委員会 2000)。

平成 12 年度以降、長野県埋蔵文化財センターによる調査が実施され、平成 18 (2006) 年度までの 7 年間にわたる長期の調査となった。調査区の表土除去は重機を用いたが、トレンチでは人力による部分もある。

平成 12 (2000) 年度は、遺跡中央部において、台地頂部から北側斜面部のトレンチ調査を行い、台地頂部では一部分的に表土を剥いだ。その結果、土坑 8 基 (S K 01 ~ 08) と若干の遺物が検出された。調査期間は平成 12 年 11 月 30 日～12 月 8 日、調査地は飯田市竹佐 170-2 地番ほか、調査面積は 4,860 m² である。

平成 13 (2001) 年度は、まず遺跡西部と東部の台地頂部においてトレンチ調査を行った。遺跡西部のトレンチで、ローム層(4層)中から後期旧石器時代を遡る可能性をもつ石器群が検出された。調査区を拡げて精査した結果、二つのブロックから成る石器集中部が明らかになり(A地点)、調査は石器集中部とその周辺部に集中して行った。周辺部では、新たな石器集中部は確認されなかったものの、古代の住居跡



第 23 図 インターチェンジ部分・本線部分の調査遺跡 (1 : 6000)



第 24 図 竹佐中原遺跡・森林遺跡調査範囲図 (1 : 3000)

1軒（S B 01）を調査した。調査期間は平成13年7月4日～12月21日、調査地は飯田市竹佐180-1地番ほか、調査面積は6,500㎡である。A地点の発見により、次年度以降の発掘は旧石器時代の調査を基軸として展開してゆくこととなる。

平成14（2002）年度は台地頂部の平坦部を広く面的に調査した。旧石器時代については、A地点から南東に70mほど離れた位置で同じ層準から新たな石器集中部を検出した（B地点）ほか、局部磨製石斧などが単独で出土した。B地点の石器群は、小形の剥片石器を中心とするもので、使用された石材の相違を含め、A地点とは異なる内容を示していた。その他の時代については、弥生時代の住居跡1軒（S B 02）を調査した。また、台地北側の斜面から箱川沿いの低地部分のトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物とも確認されなかった。調査期間は平成14年4月11日～12月20日、調査地は飯田市竹佐169-1地番ほか、調査面積は13,250㎡である。平成13・14年の調査を通して、遺跡の地形区分に応じた、以下の調査方法をかためた。台地頂平坦部は面的に表土を剥いで、縄文時代以降の遺構確認および精査の後、旧石器面の調査へ移行する。斜面部から低地部はトレンチ調査により遺構・遺物の確認を行い、状況に応じて面的に拡張する。次年度以降、この方法に従って調査を進めていった。

平成15（2003）年度は遺跡東部で面的調査、北側斜面部でトレンチ調査を行った。面的調査区では縄文時代中期の住居跡1軒（S B 03）、土坑1基（S K 09）を調査した。旧石器集中部は確認されなかったが、A地点と同石材の石器が4層から出土した。A地点とは200mほど離れており、台地上の広範囲にA地点類似の石器群が分布していたことが想定された。北側斜面部トレンチでは遺構・遺物とも確認されなかった。また、前年度の調査範囲について5層以下のトレンチ調査を行ったが、石器は検出されなかった。調査期間は平成15年5月12日～10月23日、調査地は飯田市竹佐151-2地番ほか、調査面積は12,500㎡である。

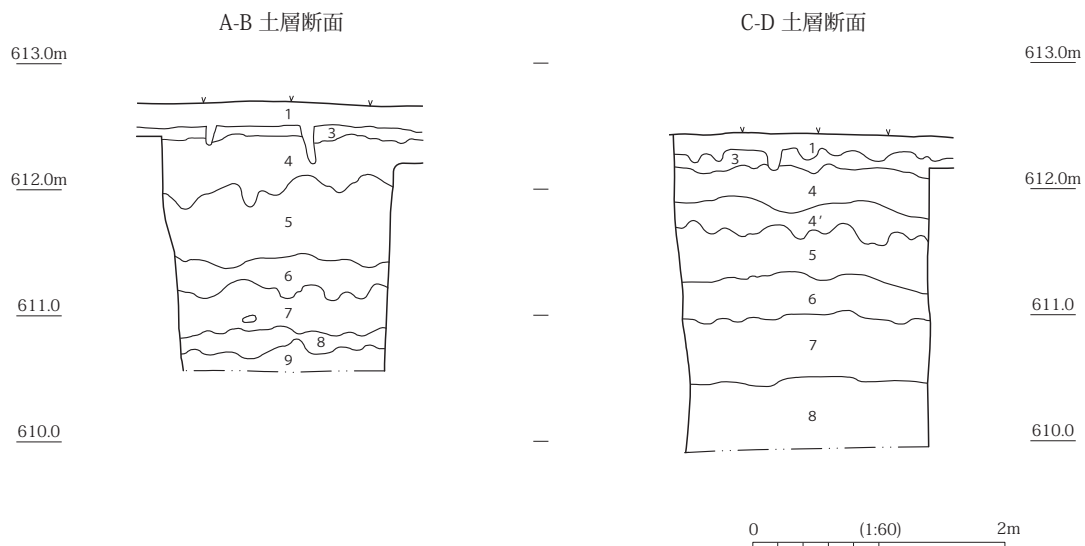
平成16（2004）年度は遺跡中央部南寄りで面的調査、遺跡西端部でトレンチ調査を行った。面的調査区では、A地点から南東に80mほど離れた位置で、同じ層準からA地点類似の石器群から成る石器集中部（C地点）を検出した。発見が晩秋であり、以後の調査期間を考慮すると冬季に入ってしまうため、本格的な調査は次年度に行うこととした。その他、縄文時代中期の土坑2基（S K 10・11）を調査した。西端部トレンチでは遺構・遺物は検出されなかった。調査期間は平成16年10月13日～11月29日、調査地は飯田市竹佐122-2地番ほか、調査面積は2,100㎡である。

平成17（2005）年度は昨年度に検出されたC地点を中心に面的調査を行った。C地点の石器群はA地点と共通する特徴と異なる様相の両面をもつことが明らかになるとともに、B地点との関連を考えさせる石器も確認された。また、C地点から南東に20mほど離れて、斧形石器・砥石等が同層準の一定の範囲にまとまって出土した（D地点）。その他の時代では攪乱から縄文時代の遺物若干が出土したにとどまった。調査期間は平成17年4月18日～9月3日、調査地は飯田市竹佐122-2地番ほか、調査面積は1,600㎡である。

平成18（2006）年度は、遺跡中央部および東部に残った2箇所の残件部分を面的に調査した。どちらの調査区でもローム層中に石器は確認されず、攪乱から縄文時代の遺物等若干が出土したにとどまり、明確に旧石器時代の所産とみなしうる遺物はなかった。調査期間は平成18年9月4日～11月14日、調査地は飯田市竹佐168-1地番ほか、調査面積は2,740㎡である。なお、遺跡の重要性を考慮して、国土交通省との協議により、遺跡中央部の約340㎡が現状保存されることとなった（長野県埋蔵文化財センター2009a）。

(3) 層序（第25・26図）

本遺跡の層序を以下に示す。層序の設定にあたっては、平成12（2000）年に発掘調査を行った石子原



第25図 土層断面図 (1:60)

遺跡の土層（長野県埋蔵文化財センター 2007）に対比して層名を付した。

- 1層：現表土（耕作層）である黒褐色土。
- 2層：旧地表と考えられる黒色土。石子原古墳の墳丘下にもみ存在し、本遺跡では確認されない。
- 3層：7.5YR5/6明褐色軟質ローム層 4層に比べて赤味を帯びている。15cmほどの層厚をもつところもあるが、分布のみられないところもあり安定しない。
- 4層：10YR5/6黄褐色軟質ローム層 5層ブロックが散見される。なお、本層以下および上層の3層で用いる「ローム層」は、扇状地性堆積物と御岳の降下火山灰が混ざり合って形成されている。したがって扇状地性堆積物由来の砂礫を含んでおり、全体的に砂質である。
- 4'層：4層と5層の中間層。基調は4層であるが、5層ブロックが多くなる。遺跡のなかでも東寄りで見られる。
- 5層：10YR5/6黄褐色硬質ローム層 直径1～5mmの白色岩片（花崗岩）が散見される。4層との境は波状帯をなす。
- 6層：10YR5/6黄褐色硬質ローム層 基本的に5層と同じ土質であるが、7層に顕著に見られる明褐色土がブロック状に入る。5層よりやや赤味を増す。5層と7層の間に挟まる中間的・漸移的な層と考えられる。
- 7層：5YR5/8明赤褐色土と10YR5/6黄褐色土の混ざり合った土。明赤褐色土が圧倒的に多い。5・6層に比べ白色岩片が増加する。垂角礫を含む。人頭大の風化した片麻岩・花崗岩礫を若干含む。粘性あり、かたくしまっている。
- 8層：10YR5/6黄褐色砂質壤土 7層と9層の混ざり合った土。上層との境はあまり明瞭ではない。垂角礫を多く含むが、ほとんどみられないところもある。
- 9層：10YR6/6明黄褐色砂質壤土 片麻岩・花崗岩礫を含む。赤変した礫を含む。5cm程度の垂角礫、花崗岩の風化破砕片が目立つ。

1層の現表土は、現代までの各時期の遺物を包含するが、その量は少ない。2層は石子原古墳の墳丘下に存在する旧表土層と考えられる層である（長野県教育委員会 1973 a・b）。本遺跡には分布せず、石子原遺跡でも古墳を除く部分では確認されていない。その理由として、2層形成後に浸食作用を上回る堆積がなかったため、畑地耕作等により攪拌されてしまったことが考えられる。さらに、本遺跡においては、昭



第26図 遺構全体図 (1:1200)

和40年代に行われた土地改良事業による改変がある。この土地改良事業は、桑園造成改良事業と称され、遺跡の中央を東西に横切る道路の改修と広範囲にわたる転換造成が行われた。事業の図面が入手できないため転換造成を行った正確な場所は特定できないものの、地元の方の話では、台地上の凸部を周辺集落住民総出で人力により削平し、南北の斜面を埋めて、台地上の平坦地の面積を広げたという（長野県埋蔵文化財センター2005）。この削平のため、当時の地表付近の層がかなり失われたのは確かと思われる。

3層は本来4層と同一層であったものが土壌化作用により変化した可能性、すなわち4層から2層への漸移部分にあたる可能性がある。分布が安定しないのは、2層と同様に、耕作の攪拌に加え、上記事業による削平が考えられる。3層からは斧形石器やナイフ形石器が出土しており、また、本遺跡では押型文土器は出土していないが、石子原遺跡では3層は押型文土器の包含層であることからすれば、後期旧石器時代～縄文時代早期押型文期の包含層に相当する可能性がある。

4層および4'層は、A～D地点の石器集中部が含まれることにより、本来的な旧石器時代の遺物包含層であることが明らかである。

縄文時代以降の遺構は、本来3層上面で検出されるはずであるが、前述したように3層の分布は不安定で、確実に3層を掘り込む遺構を確認した例はない。

2 検出遺構

遺構は、台地頂の平坦部で竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、土坑10基が検出され、北側斜面部で土坑1基が検出された。時期がわかる遺構は、竪穴住居跡が縄文時代中期、弥生時代、古代の各1軒であり、土坑のうち2基は縄文時代中期に位置付けられる。遺跡中央部の尾根筋付近に土坑がやや集中する箇所があるほかは、遺構分布は散在的である（第26図）。

(1) 竪穴住居跡

S B 03（第27・33・35図、PL5・6・7）

位置：遺跡東部、Ⅶ A8・13グリッドに位置する。台地頂平坦部から北斜面への落ち際にあたる。

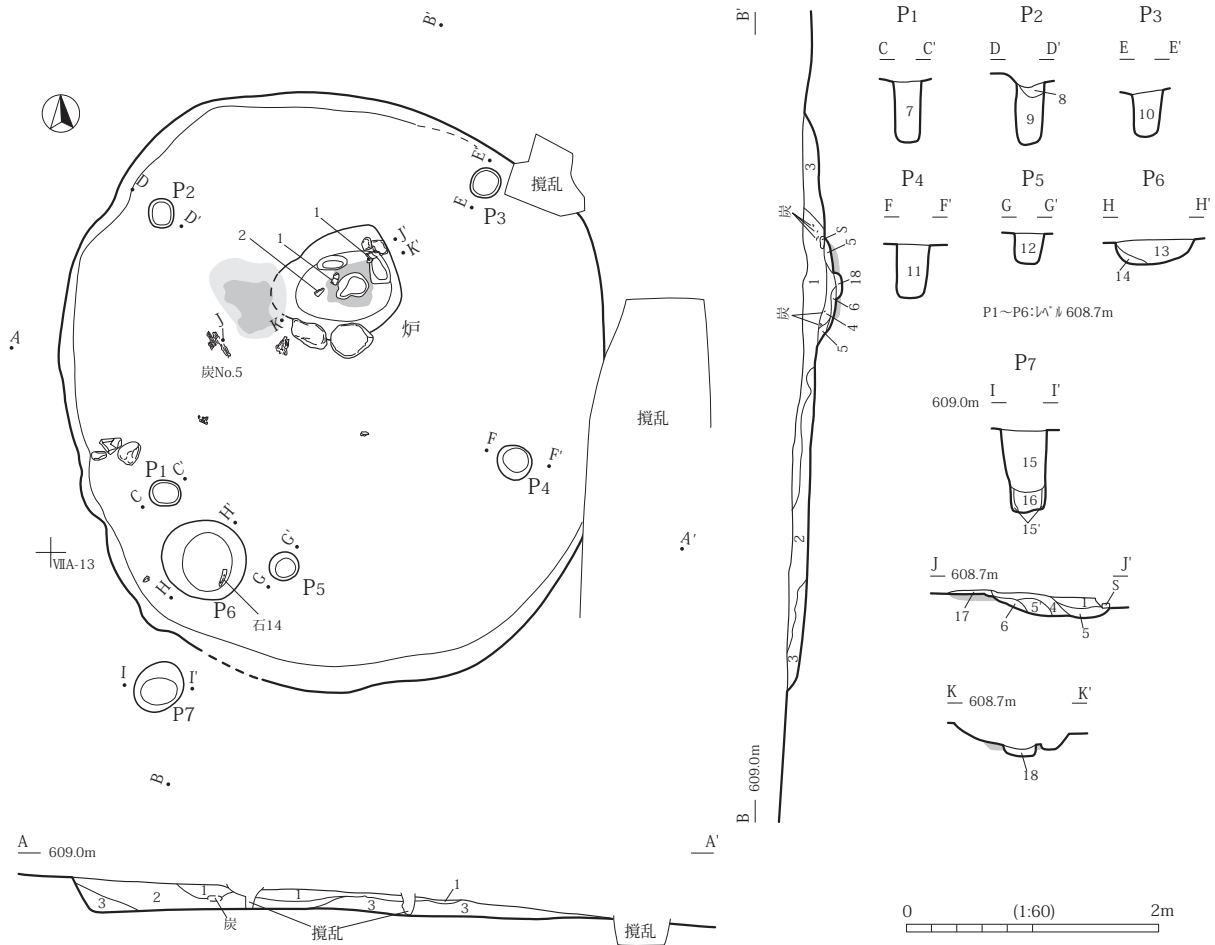
検出：4層上面の検出である。平坦部側にあたる住居西半のプランは明瞭に捉えられたが、斜面側にあたる東半ではプランはやや不明瞭であった。掘り下げの結果、東端部は壁が失われていることがわかった。

規模・形状：楕円形気味の円形を呈し、長径540cm、残存短径430cm、長軸方向N31°Eを測る。残存床面積は15.2㎡である。竪穴の平面形や住居内施設のバランスからすると、東端部の消失は小さなもので、本来の規模・形状をほとんど損ねていないと考えられる。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床、硬化面は認められない。西壁は残存高27cmを測るが、前述のように東側では遺存状況が悪くなる。

柱穴：柱穴は5基検出された。平面形は円形で直径25～30cmである。このうち、深さ50cm前後のP1～P4が支柱穴と考えられる。P5は深さ20cmと浅く、不規則な位置にあり、支柱ではない機能が推測される。

炉：住居中央北寄りに位置する。直径90cm前後、深さ20cmを測り、底面中央に被熱赤変面が認められる。南側の外縁に2個の平石がある。また、炉底にやや不整形な窪みが3箇所あり、そのうち炉壁際の2箇所は炉石据え付け痕跡である可能性が考えられる。このことから、炉の掘り込み壁に石を立て並べ住居中央側の外縁のみ2個の石を平置きした構造が推測されよう。また、炉の西側にも被熱面が存在する。窪みはなく、床面と同レベルで平坦である。東側の炉との切り合いは確認されなかったため、炉と一連のものと考えられる。



S B 03

- | | |
|---|---|
| <p>1 7.5YR3/4 暗褐色土 炭化物を多く含む 焼土粒子含む 粘性・しまりあり</p> <p>2 10YR5/6 黄褐色土 炭化物粒子を若干含む 粘性・しまりあり</p> <p>3 10YR6/6 明黄褐色土 1cm程度のハードロームブロックを含む 2層ブロックも斑文状に含む 粘性・しまりあり</p> <p>4 10YR3/3 黄褐色土(炉埋土) 黄褐色ロームブロックを多く含む 炭化物殆どなし しまりなく軟らか</p> <p>5 10YR3/2 黒褐色土(炉埋土) 炭化物を非常に多く含む 焼土粒子も含む しまりなく軟らか</p> <p>5' (炉埋土) 5によく似るが、若干色調が明るく黄色味を帯びる 含有物は同じ</p> <p>6 7.5YR4/3 褐色土(炉埋土) 炭粒若干含む 焼土粒子・焼土ブロック含む 粘性あり 硬くしまる</p> <p>7 10YR4/4 褐色土(P1埋土) 上部に炭粒若干 やや粘性あり</p> <p>8 10YR3/3 暗褐色土(P2埋土) 粘性なくサラサラした印象を受ける 木根か?</p> | <p>9 10YR3/4 暗褐色土(P2埋土) やや粘性あり</p> <p>10 10YR4/3 にぶい黄褐色土(P3埋土) 上部に炭粒若干 やや粘性あり</p> <p>11 10YR3/4 暗褐色土(P4埋土) 炭粒若干 やや粘性あり</p> <p>12 10YR3/3 暗褐色土(P5埋土) P1-P4に比べて粘性が劣る</p> <p>13 10YR4/6 褐色土(P6埋土) 5-8mmの炭化物粒子を含む ロームブロック含む 粘性・しまりはあまりなく軟らかい</p> <p>14 10YR5/6 黄褐色土(P6埋土) 粘性に富む</p> <p>15 7.5YR4/6 褐色土(P7埋土) 炭化物粒子を多く含む</p> <p>15' (P7埋土) 16層中のビット壁際にまわりこむ土層 土質等は15層と同じ</p> <p>16 10YR6/8 明黄褐色ローム塊を含む(P7埋土) ローム塊は砂質でシャリシャリする</p> <p>17 5YR4/6 赤褐色土(炉埋土) 焼土粒子を多量に含む しまりなく軟らかい 炉内の焼土等を掻き出した土か</p> <p>18 7.5YR4/6 褐色土(炉埋土) 炭化物粒子・焼土粒子・焼土塊を含む しまりはあまりなく軟らかい</p> |
|---|---|

第27図 S B 03実測図 (1:60)

その他の施設：P1とP5の間に位置するP6は、長径70cm、短径60cm、深さ20cmと、P1～P5とは規模・形状が大きく違い、貯蔵穴等、柱穴とは異なった性格が想定される。また、P6の南1mの竪穴外にP7を検出した。形状から柱穴の可能性が考えられるものの、本住居に伴うかどうか、その根拠を得ることはできなかった。

覆土：三層に分層された。最下に壁際～中央付近にかけて断面三角形状に堆積する明黄褐色土(3層)、その上に黄褐色土(2層)が西部～南部に堆積し、さらに炭化物を多く含む暗褐色土(1層)が中央北寄りを中心に堆積する。

遺物出土状況：遺物は縄文土器・石器が若干出土した。土器は炉内および覆土中から出土し(1～3)、石器はP6から打製石斧が検出された(14)ほか、覆土から黒曜石・硬砂岩の剥片各2点が出土している。

床面で検出された遺物はない。

¹⁴C年代測定：（株）加速器分析研究所に委託して、床面付近出土の炭化物（炭No.5）の放射性炭素年代測定（AMS）を行った。測定結果は4200 ± 50yrBP（半減期5568年）である。付録CDに測定結果報告書を収録したので参照されたい。暦年較正年代（使用プログラムOxCal v3.9）では2900BC（95.4%）2620BC〔95.4%probability〕となり、小林謙一氏による縄文中期の実年代推定（小林2008）に対比すれば、縄文中期後葉曾利Ⅱ式古から曾利Ⅳ式併行期に相当する。

時期：炉内から出土した土器（1）から、縄文時代中期後葉と考える。この土器は長野県史での編年（三上ほか1988）の縄文時代中期後葉Ⅱ期（曾利Ⅱ式併行期）に相当する資料と考えられ、上記の放射性炭素年代測定結果とも合致する。

S B 02（第28・35図、PL5・6）

位置：遺跡中央部、Ⅱ X21・22グリッドに位置する。台地頂平坦部にあたる。

検出：平成9年度の県教委による試掘調査で確認されていたものである。4層上面で検出した。プランは明瞭に捉えられた。

規模・形状：平行四辺形気味の長方形を呈し、長軸500cm、短軸390cm、長軸方向N5°Eを測る。床面積は17.4㎡である。

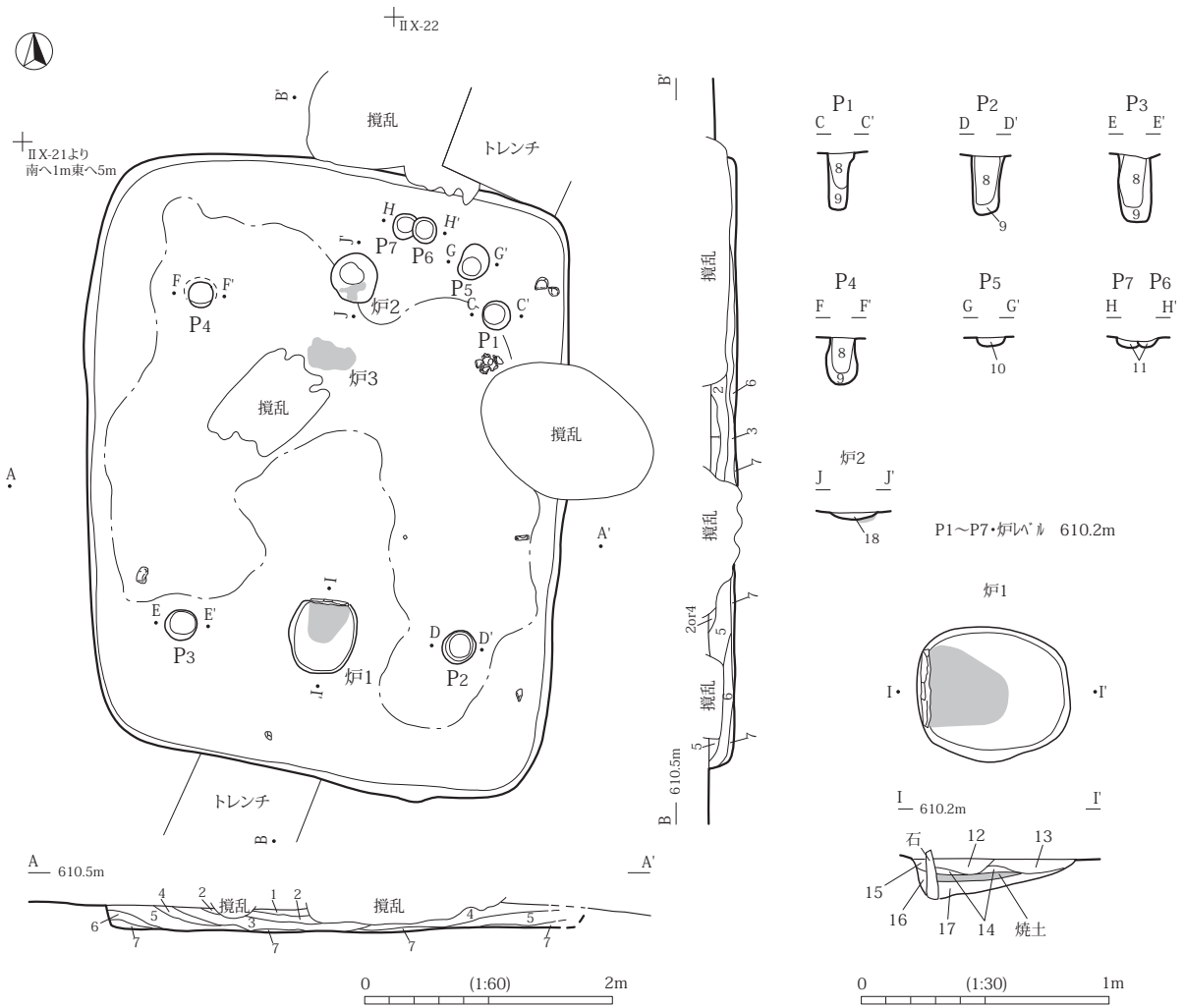
床・壁：貼床は認められず、竪穴掘り方底を平坦に整形した床面である。ほぼ全面が硬化しており、特に炉1を囲む馬蹄形状を呈する部分の硬化が著しい（第28図の1点鎖線で囲った範囲）。壁は高さ約20cmが残存する。床面との境は明瞭で、立ち上がりは概ね急角度である。

柱穴：床面で7基のピットが検出されたが、方形配列をなすP1～P4が支柱穴と考えられる。平面形は円形で直径26～20cmで、深さは56～38cmを測る。各柱穴の覆土は、中心部の黒褐色土、その周囲の黄褐色土の二層に分かれる。黒褐色土は柱痕跡ないし柱抜き痕とも考えられる。その他のピットは深さ数センチメートルと浅く、支柱穴とは考え難い。

炉：住居中軸線上に並ぶ3箇所の被熱赤変面が検出され、炉1～炉3とした。炉縁石を伴う炉1は南側の柱穴を結ぶ線の中点に位置する。床を長軸63cm、短軸52cm、深さ10数cmの楕円形に掘り窪めた北壁（住居中央側）に板状石を立て、さらに10cm程の厚さに敷土を施して、石を固定するとともに炉床をつくっている。炉床中央から炉石にかけて赤く被熱酸化した部分が認められる。炉2は北側の柱穴間、柱穴を結ぶ線よりわずかに壁寄りにある。直径約40cm、深さ5cmほどの浅い円形の地床炉で、炉床中央から南縁に被熱部がみられる。赤変の度合いは炉1より弱い。炉2の南側に約50cm離れて炉3がある。床が長軸40cm、短軸20cm程度の不整な楕円形に赤変した部分で、窪みはない。赤変の度合いは炉2より強い。

覆土：七層に分層された。床直上に褐色土（7層）～暗褐色土（6層）が薄く堆積している。その上を、暗褐色～黒褐色土が、相対的に黒色の強い層と弱い層が互層を成して（5～1層）、竪穴の窪みを徐々に埋積していった状況を示す。3層および5層は炭化物を多く含み、長さ10～20cmのものも多いが、その方向はまちまちで、レベルも一定していない。床直上の6・7層には炭化物は少なく、覆土は全体的に焼土を含んでいない。焼失ないし焼却住居と断定するのは難しい。

遺物出土状況：遺物量は少ない。土器は、覆土から2点、東壁を切る攪乱中から1点が検出されたのみである。いずれも無文の小片であるが、胎土や焼成から弥生土器とみてよいと思われる。石器は覆土から硬砂岩素材の敲石1点（17）が出土した。また、P1の南30cmの床面上に硬砂岩の剥片5点がまとまっていた。中央にある大形片を除く、西側の2点と東側の2点がそれぞれ接合し、3点の剥片となった。2対の接合例は、どちらも節理面で分離しているため、自然営力で割れた可能性もあろう。各剥片に調整加



S B 02

- | | |
|---|---|
| 1 10YR2/2 黒褐色土 | 10 10YR3/2 黒褐色土 (P5 埋土) 2mm 以下のローム粒が均等に混じる 炭化物片若干 8 に似るがややしまりあり 5 に近い |
| 2 10YR3/2 黒褐色土 | 11 10YR3/4 暗褐色土 (P6・P7 埋土) ローム粒あまりなし 炭化物小片混入 ややしまりあり 6・7 に近い |
| 3 10YR2/2 黒褐色土 1 によく似た基調 ローム粒含む (殆ど 2mm 以下) 炭化物多い | 12 7.5YR3/2 黒褐色土 (炉 1 埋土) 炭粒若干あり 焼土粒子が全体に混じり込んでいる |
| 4 10YR3/3 暗褐色土 2 に似るがローム粒の混入がより多い 東部は黄色味が増す | 13 7.5YR3/3 暗褐色土 (炉 1 埋土) 12 とほぼ同じだが黒色が弱い |
| 5 10YR2/2 黒褐色土 3 によく似るがローム粒がより多い 炭化物も多い | 14 7.5YR4/3 褐色土 (炉 1 埋土) 焼土粒子が全体に多く混じり込んでいる |
| 6 10YR3/4 暗褐色土 地山ローム粒 (殆ど 2mm 以下) が均等に混じる 西部では黄色がやや強い 7 に似たところもあるが空隙が相対的に多い | 15 7.5YR3/2 黒褐色土 (炉 1 埋土) 炭・焼土粒若干 しまりなく軟らか |
| 7 10YR4/4 褐色土 比較的粒子が細かく空隙は少ない ローム粒を含む やや粘性あり | 16 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (炉 1 炉石掘り方埋土) |
| 8 10YR3/2 黒褐色土 (P1-P4 埋土) 2mm 以下のローム粒が均等に混じる 炭細粒若干 しまりなく軟らか | 17 10YR4/2 灰黄褐色土 (炉 1 敷土) |
| 9 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (P1-P4 埋土) ローム粒子が均一に混じり込んでいる しまりなく軟らか | 18 10YR3/3 暗褐色土 (炉 2 埋土) 炭粒・焼土粒若干 |

第 28 図 S B 02 実測図 (1:60・1:30)

工は認められないが、長辺に使用痕と思われる細かな剥離・磨耗が観察されるものがある。

¹⁴C 年代測定： (株) 加速器分析研究所に委託して、覆土 7 層出土炭化物の放射性炭素年代測定 (AMS) を行った。測定結果は 2010 ± 50yrBP (半減期 5568 年) である。付属 CD に測定結果報告書を収録したので参照されたい。暦年較正年代 (使用プログラム OxCal v3.9) では 170BC (93.8%) 90AD、100AD (1.6%) 120AD [95.4%probability] となり、国立歴史民俗博物館がまとめた年代観 (国立歴史民俗博物館 2007) に従えば、およそ弥生中期後半から後期前半に相当しよう。

時期： 住居構造からみて弥生時代後期と考えられるものの、さらに限定できる資料がない。上記の放射性炭素年代測定結果からすれば後期前半の可能性もあろう。

SB 01 (第29・34図、PL6・7)

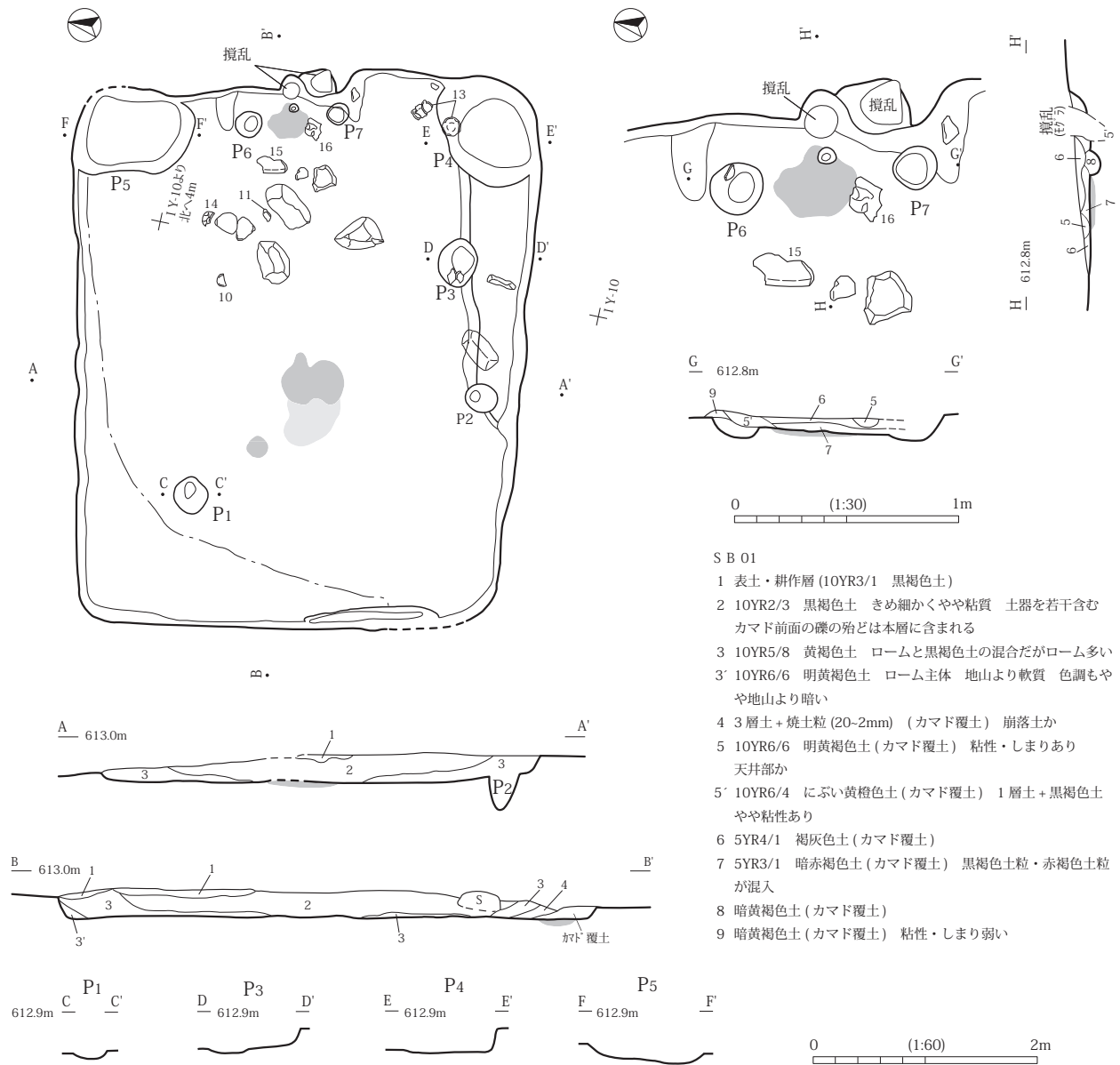
位置：遺跡西部、I Y4・5グリッドに位置する。台地頂平坦部の北斜面寄りにあたる。

検出：4層上面で検出した。プランは明瞭に捉えられた。

規模・形状：平面形は概ね長方形を呈するが、カマドを付設した東辺が西辺に比べてやや長く、また、カマド南側は若干外側に張り出す。南辺500cm、北辺480cm、東辺410cm、西辺370cm、長軸方向N78°Eを測る。床面積は16.7㎡である。

床・壁：貼床は認められず、竪穴掘り方底を平坦に整形した床面である。北～西壁沿いを除き、床面の大部分が硬化している(第29図の1点鎖線で囲んだ範囲)。西～南壁は高さ約20cmが残存し、床面との境は明瞭で、立ち上がりは急角度である。北～東壁は遺存状態が悪い。

柱穴：柱穴の可能性を持つピットは3基検出された。しかし、P3は浅すぎて柱穴と認定し難いし、P2は深さ25cmあるが不規則な位置にある。P1は深さ8cmと浅いが5基のなかでは最も支柱穴にふさわしい位置にあるものの、組み合う柱穴が見つからない。このように、それぞれに難点があり、明確な支柱穴を指摘することが難しい。



第29図 SB 01 実測図 (1:60・1:30)

カマド：東壁中央に付設されている。燃烧部は、竪穴壁を若干掘り込んだ奥壁と、その前面に赤く酸化した火床が検出され、火床赤変面の奥側には支脚拔取り痕と思われる小ピットが認められる。袖は残存しておらず、カマド部分の覆土には明確にカマド構築材と考えられる土・石などは含まれていないため、構造は不明であるが、火床両脇の P6・P7 は袖石拔取り痕の可能性があり、また P6・P7 の外側に袖基部の痕跡かとも思われる僅かな床の高まりが認識された。ただし、P6・P7 外側の床の高まりを袖とすると、想定される燃烧部幅は 110 cm ほどにもなり、通常のカマドに比べてかなり広い。なお、カマド前面 1.2 × 1.6 m ほどの範囲に 20 ～ 50 cm 大の角礫が散乱しているが、いずれも床面より 10 ～ 20 cm 浮いて 2 層中に含まれているため、本住居のカマド構築材として積極的に評価することには躊躇を覚える。

被熱面：床面の中央およびやや西寄りに 2 箇所の被熱面が検出された（第 29 図の濃い網掛け部分）。東側の被熱面の西側には黒く煤けたような部分が広がっている（薄い網掛け部分）。

柵状施設：南壁際には長さ 2 m、幅 30 ～ 50 cm の帯状に 5 ～ 3 cm ほど床が高まった部分があり、地山を掘り残して構築した柵状の施設と捉えられよう。

その他の施設：住居西壁下には延長 110 cm ほどの周溝状の溝がみられる。また、床南東隅の P4 および北東隅の P5 は、深さ最大 5 cm 程度の浅いものではあるが、径 100 cm 近い大形の掘り込みである。P4 は上記の柵状施設の東端を掘り込んでいる。

覆土：三層に分層された。床直上に壁際～中央付近にかけてローム主体の黄褐色土（3・3層）が断面三角形に堆積し、それにより生じた浅い播鉢状の窪みを黒褐色土（2層）が埋積する。

遺物出土状況：遺物は、ほとんど覆土 3 層～床直上（カマド覆土、P4・P5 覆土を含む）から、土師器・須恵器が出土した（9～16）。黒色土器・灰釉陶器は確認されない。出土の分布はカマドのある東壁寄りに偏っている。ほぼ完形に接合された土師器小型甕（13）は、底部が P4 北壁際にあり、口縁部～胴部破片の大部分がそのすぐ北側の床直上にまとまっていた。出土量が多いのは土師器長胴甕で、完形に接合できた例はないが、4 個体は識別できる。いずれの個体も破片となって 1 m ～ 2 m の範囲に散在しているが、カマドおよびその周囲を中心とした分布を示すようにみえる。長胴甕は 4 個体とも 3 層・カマド覆土最下部・床直上出土の破片が接合している。

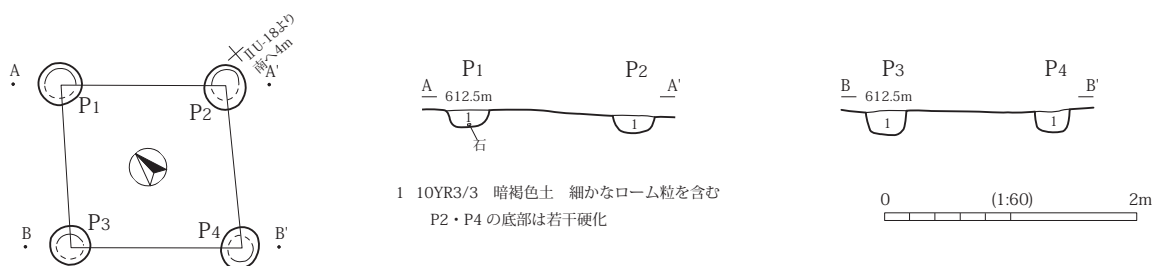
時期：出土遺物から 8 世紀後半～9 世紀初頭と考える。

(2) 建物跡

ST 01（第 30 図、PL6）

位置：遺跡西部、II U17 グリッドに位置する。台地頂平坦部にあたる。

検出：表土を剥いだ面では本遺構を認識することができなかったが、旧石器調査のため、4 層を 10 cm ほど掘り下げた段階で、調査区南端に 4 基の落ち込みが方形に並ぶことに気づいた。建物の柱穴跡と判断して周囲を精査したが、調査区内に新たな柱穴は検出されなかった。P4 は調査区南壁にかかっていたため、表土直下まで立ち上がることを確認できた。なお、この部分では 3 層は認められない。



第 30 図 ST 01 実測図（1：60）

構造:確認した柱穴配列は柱穴間隔(心々)が1.3～1.4 mの方形配列である。軸方向はN 40° Eにとる。柱穴列は南西方向また南東方向にさらに延びる可能性はあるが、調査区外になるため確認できていない。各柱穴は直径30 cm前後の円形を呈する。検出した面からの深さ15～20 cmを測り、平坦な底面から壁が垂直に近い急角度で立ち上がる。覆土は一様で、細かな黄褐色ローム粒を含む暗褐色土の単層である。

遺物出土状況:柱穴覆土から黒曜石剥片2点・硬砂岩剥片1点が出土した。

時期:縄文時代以降と思われる。

(3) 土坑

S K 01 (第31・33図)

位置:遺跡中央南寄り、VI B20・25、VI C16・21 グリッドに位置する。台地頂平坦部にあたる。

検出:表土直下のローム層上面で検出した。プランは明瞭に認識できた。なお、S K 01～07の発掘時点(2000年)では、3層と4層を区別していないため、どちらの上面検出となるか未確認である。

構造:平面形は楕円形を呈し、長軸134 cm、短軸103 cm、深さ32 cm、長軸方向N 89° Eを測る。底面には凹凸が認められる。壁面は緩やかに立ち上がり、明瞭な変換点が捉えられない。

覆土:暗褐色土の単層である。粒子は細かく礫等の混入はない。粘性弱くしまりに欠ける。なお、S K 01～08の覆土は、S K 02の下部を除き、同様な性状を示す。

遺物出土状況:覆土最上部から縄文土器片1点(4)が出土した。

時期:出土遺物から縄文時代後期前葉と思われる。

S K 02 (第31図)

位置:遺跡中央部、II W18 グリッドに位置し、台地頂平坦部にあたる。周辺にS K 04～07が分布する。

検出:表土直下のローム層上面での検出となるが、検出当初は、ぼんやりと落ち込みが確認された程度で、プランは明瞭ではなかった。掘り下げ段階において、底面から壁面を追うかたちでプランを確定した。

遺構の重複:実測図には表現されていないが、S K 03に切られるとの発掘所見がある。

構造:平面形は不整な長円形を呈する。長軸の東西方向では、断面は中央部で深く落ち込む二段掘り状となり、上段部の壁面は緩やかに落ちてゆくが、下段部は急角度で落ちる。上段部は長軸298 cm、短軸140 cm強、深さ102 cm、長軸方向N 79° Wを測る。平面楕円形を呈する下段部は長軸150 cm、短軸110 cmの規模を有し、平坦な底面に2箇所の小ピットをもつ。ピットは直径20 cm、深さ16 cmである。以上の構造から陥し穴と考えられる。

覆土:粒子が細かく礫等の混入のない暗褐色土である。上部は粘性弱く締まりに欠ける。下部では相対的に粘性・締まりとも強くなり、色調も黒味を帯びるが分層はできなかった。

遺物出土状況:遺物は出土していない。

時期:出土遺物はないが、覆土がS K 01に類似すること、陥し穴と想定されることから縄文時代と考える。

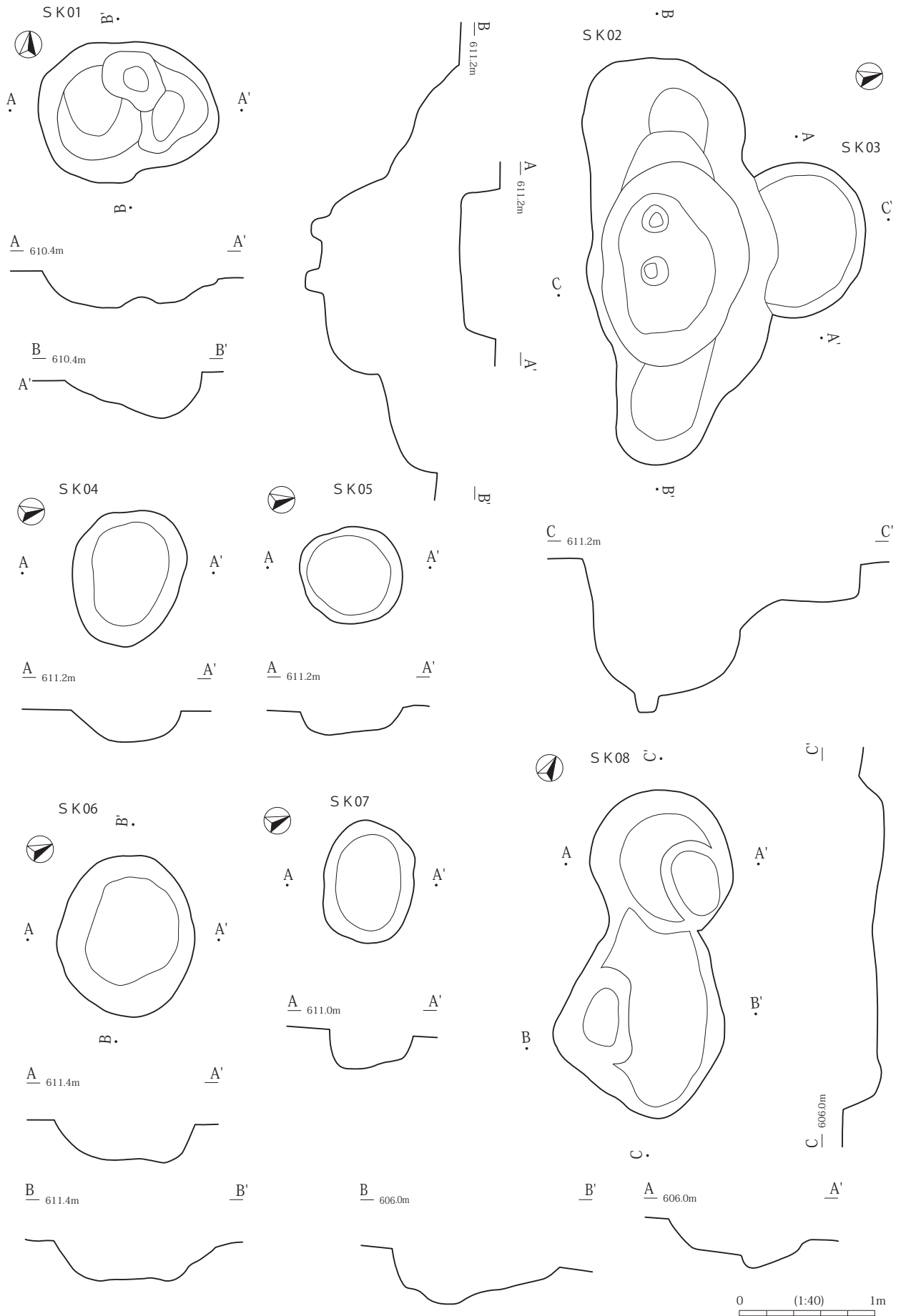
S K 03 (第31図)

位置:遺跡中央部、II W18 グリッドに位置し、台地頂平坦部にあたる。周辺にS K 04～07が分布する。

検出:表土直下のローム層上面で検出した。プランは明瞭に捉えられた。

遺構の重複:実測図には表現されていないが、S K 02を切るとの発掘所見がある。

構造:平面形は円形を呈し、直径115 cm前後、深さ30 cmを測る。平坦な底面から壁が垂直に近く立ち上がる。底から壁への変換は明瞭である。



第31図 土坑実測図(1) (1:40)

覆土：暗褐色土の単層。粒子は細かく礫等の混入はない。粘性弱くしまりに欠ける。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、覆土がS K 01 に類似することから縄文時代の所産と考える。

S K 04 (第31図)

位置：遺跡中央部、II W14・19 グリッドに位置し、台地頂平坦部にあたる。周辺にS K 02～07が分布する。

検出：表土直下のローム層上面で検出した。

構造：平面形は楕円形を呈し、長軸100 cm、短軸80 cm、深さ24 cm、長軸方向N 65° Wを測る。やや丸みを帯びた底面から壁が緩やかに立ち上がる。

覆土：暗褐色土の単層。粘性弱くしまりに欠ける。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、覆土がS K 01 に類似することから縄文時代の所産と考える。

S K 05 (第31図)

位置：遺跡中央部、II W14 グリッドに位置し、台地頂平坦部にあたる。周辺にS K 02～07が分布する。

検出：表土直下のローム層上面で検出した。

構造：平面形は円形を呈し、直径70 cm強、深さ20 cmを測る。平坦な底面から壁が斜めに立ち上がる。底から壁への変換は明瞭である。

覆土：暗褐色土の単層。粘性弱くしまりに欠ける。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、覆土がS K 01 に類似することから縄文時代の所産と考える。

S K 06 (第31図)

位置：遺跡中央部、II W8 グリッドに位置し、台地頂平坦部にあたる。周辺にS K 02～07が分布する。

検出：表土直下のローム層上面で検出した。

構造：平面形は楕円気味の形状を呈し、長軸117 cm、短軸100 cm、深さ30 cm、長軸方向N 62° Wを測る。平坦な底面から壁が緩やかに立ち上がる。

覆土：暗褐色土の単層。粘性弱くしまりに欠ける。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、覆土がS K 01 に類似することから縄文時代の所産と考える。

S K 07 (第31図)

位置：遺跡中央部、II W3 グリッドに位置し、台地頂平坦部にあたる。周辺にS K 02～07が分布する。

検出：表土直下のローム層上面で検出した。

構造：平面形は楕円形を呈し、長軸90 cm、短軸66 cm、深さ28 cm、長軸方向N 65° Wを測る。平坦な底面から壁が垂直に近く立ち上がる。

覆土：暗褐色土の単層。粘性弱くしまりに欠ける。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、覆土がS K 01 に類似することから縄文時代の所産と考える。

S K 08 (第 31 図)

位置：遺跡中央部、Ⅱ R10・15 グリッドに位置する。台地北側斜面部にあたる。

検出：表土直下の、礫を多量に含む暗黄褐色土で検出した。この層は8～9層に対応する可能性があるが、確認していない。

構造：平面形は、北部の円形と南部の楕円形が結合したような形状を呈する。2基の土坑が重複している可能性もあるが、切合いを確認した発掘所見はない。底面は概ね平坦で、レベル差もあまりない。壁は斜めに立ち上がる。全体として、長軸 242 cm、短軸 126 cm、深さ 25 cm、長軸方向 N 30° W を測る。北部と南部の底面に、深さ 10 cm ほどの凹部が各々一箇所認められる。

覆土：暗褐色土の単層。粘性弱くしまりに欠ける。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、覆土が S K 01 に類似することから縄文時代の所産と考える。

S K 09 (第 32 図)

位置：遺跡東部、Ⅶ A7 グリッドに位置する。東 6 m には S B 03 がある。

検出：4層上面で検出した。

構造：平面形は円形を呈し、直径 128 cm～118 cm、深さ 50 cm を測る。断面形は椀状を呈し、丸みを帯びた底面から壁が緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：礫が 1 点出土したのみである。

時期：不明。

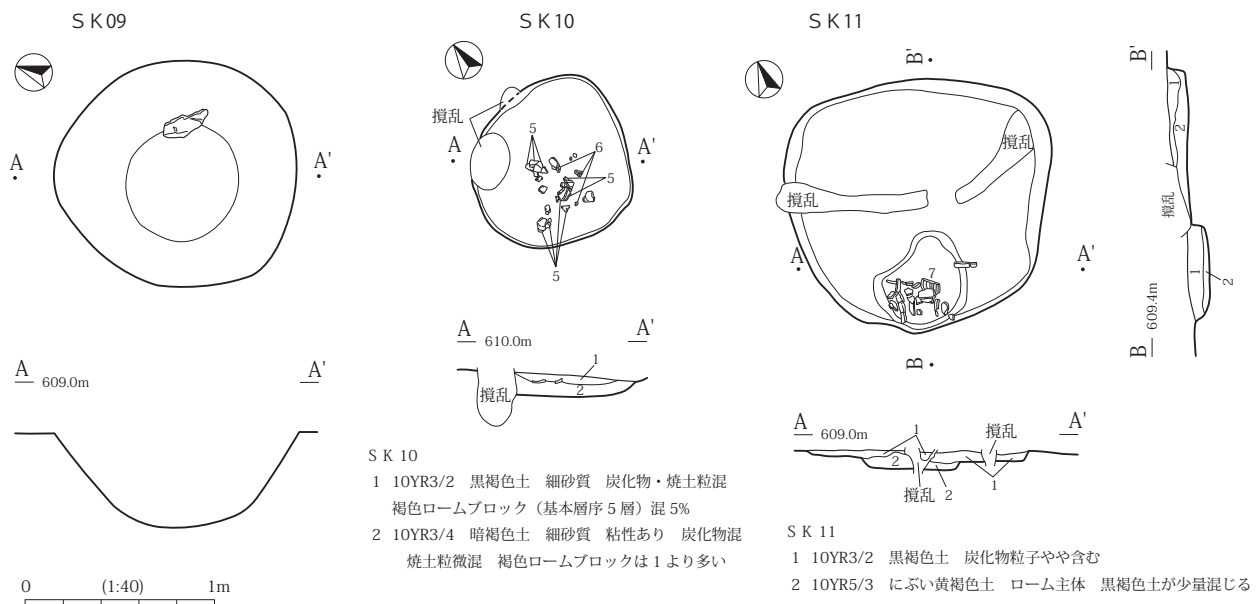
S K 10 (第 32・33 図、PL5・7)

位置：遺跡南部、Ⅵ G8 グリッドに位置する。台地頂平坦部から南斜面への落ち際にあたる。

検出：4層上面で検出した。

構造：平面形はやや歪んだ円形を呈し、直径 84 cm、深さ 16cm を測る。平坦な底面から壁が斜めに立ち上がる。

覆土：覆土は二層に分層された。上層の1層は黒褐色土、下層の2層は暗褐色土で、どちらも細かなロー



第 32 図 土坑実測図 (2) (1 : 40)

ム粒、炭化物粒、焼土粒を含む。

遺物出土状況：覆土から縄文土器片（5・6）が出土した。その大部分が1層と2層の境付近に集中する。

時期：出土遺物から縄文時代中期中葉の所産と考える。

S K 11（第32・33図、PL5・7）

位置：遺跡南部、VI G14 グリッドに位置する。台地頂平坦部から南斜面への落ち際にあたる。

検出：4層上面で検出した。

構造：平面形はやや歪んだ円形を呈し、直径140cm～132cm、深さ10cmを測る。底面は平坦であるが南端へ向かって10cmほど低くなっている。壁の立ち上がりは急角度である。底面南部にひしゃげた円形の凹部がある。直径50cm、深さ7cm程度で底は平坦である。

覆土：覆土は二層に分層された。上層の1層は黒褐色土、下層の2層はローム主体の黄褐色土である。2層は土坑本体と凹部双方に堆積している。

遺物出土状況：覆土から縄文土器片（7）が出土した。その大部分が凹部に集中している。

時期：出土遺物から縄文時代中期中葉の所産と考える。

3 出土遺物

(1) 縄文時代の土器（第33図、PL7）

S B 03 出土の土器

1はキャリパー形を呈する深鉢口縁部である。口唇直下の横位の押引文から垂下させた逆S字状文で縦位に区画し、区画内に軽い弧状を呈する横位の沈線・押引文を幾段にも施文する。中期後葉に位置づけられる。長野県史編年（三上ほか1988）では中期後葉Ⅱ期に相当しよう。2は幅広い隆帯の裾に連続爪形文を施文し、その脇に波状沈線文を施す。中期中葉と考える。3は口唇直下に先端を尖らせた工具で横位の押引文を引く。1・2は炉内から、3は覆土中の出土である。

土坑出土の土器

4はS K 01出土である。平行させた2ないし3本の沈線で斜行直線文（あるいはV字状になるか）・曲線文を描く。後期前葉であろう。

5・6はS K 10から出土した中期中葉の平出第Ⅲ類A土器である。5は胴部で、縦割竹管状工具による平行沈線2組を縦位に引く。沈線は浅く雑な引き方である。器面も平滑に整形しておらず、がさつな印象を受ける。6は口頸部で、縦位の平行沈線を密接施文した後、その上端に横位の平行沈線をめぐらせる。横位平行沈線には緩やかながらV字状のアクセントが付く。

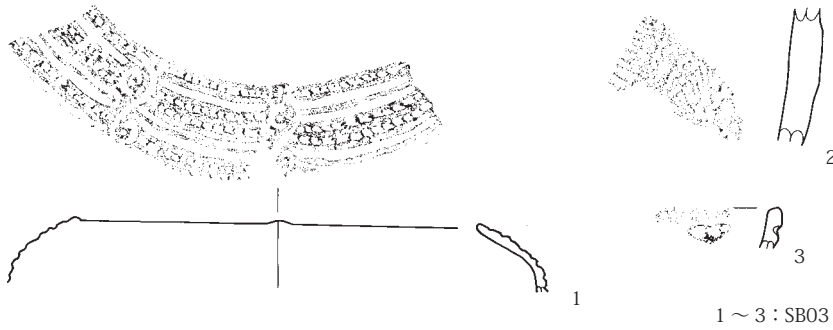
7はS K 11出土の平出第Ⅲ類A土器である。押圧を加えた横位隆帯により頸部と胴部を区切る。頸部文様帯は、縦位平行沈線施文の後、上端におよび下端に横位平行沈線をめぐらせる。上端の横位平行沈線にはV字アクセントが付く。胴部文様帯は、縦位・斜位の平行沈線を施し、上端の横位平行沈線文帯は横に連続する細長い弧線文状をなす。

遺構外出土の土器

8は口唇直下に逆J字状の隆帯を横位に貼付する。隆帯の上には刻みを施している。

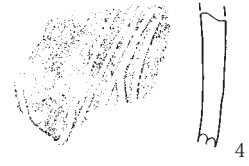
その他、縄文土器あるいは胎土の様相等から縄文土器と思われる破片110点ほどが調査区全域から散的に検出されたものの、小片・細片のため、図化できなかった。胎土に繊維を含むものが1点あり、早期後半～前期前半であろうか。また、中期初頭と考えられる斜格子状沈線文をもつもの1点、中期に属すると思われる沈線文、隆帯文、刺突文をもつもの5点が認められる。

S B 03



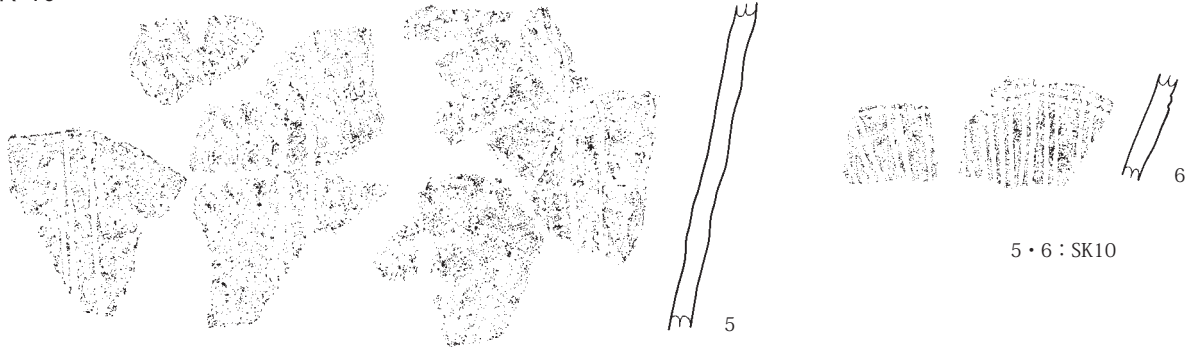
1 ~ 3 : SB03

S K 01



5・6 : SK10

S K 10



S K 11



遺構外

0 (1:3) 10cm

0 (1:4) 10cm

第33図 土器実測図(1) (1:3・1:4)

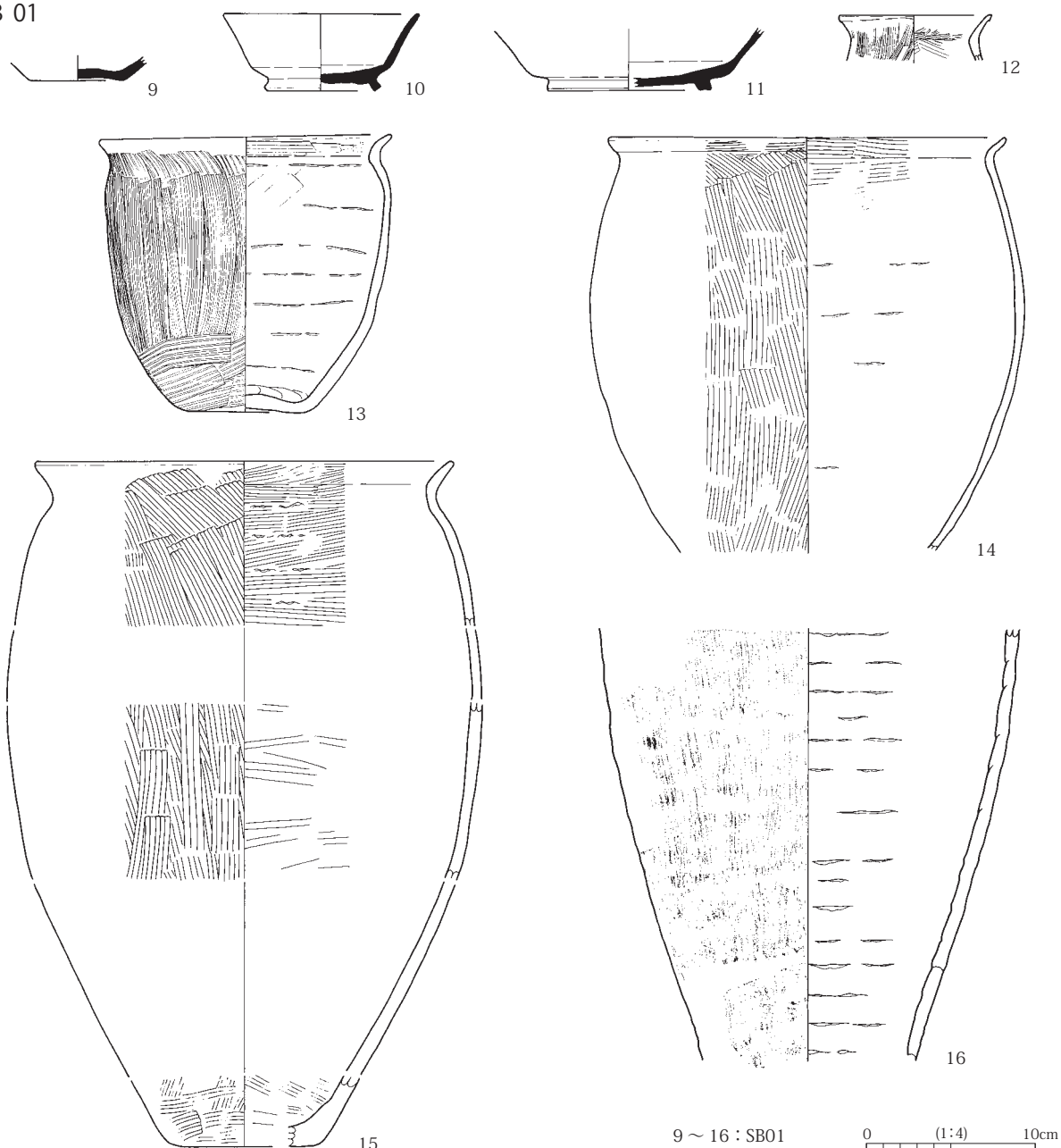
(2) 古代の土器 (第34図、PL7)

S B 01 出土の土器

9は須恵器坏である。焼成不良で他の須恵器に比べ摩滅がひどく、成形・調整痕は判然としない。覆土1・2層から出土した。10・11は須恵器高台付坏で、どちらも底面に回転糸切り痕を残す。12・13は器面をハケ調整する土師器小型甕、14～16は器面ハケ調整の土師器長胴甕である。

小平和夫氏による松本市内の古代土器の分類と編年(小平1990)に従えば、10は坏B V、11は坏B IIに相当する。小片のため図化しなかったが、身の深い坏B IIIも検出されており、坏B(高台付坏)の法量分化が形成された段階にあることが窺える。また、口縁部が水平となり、端部が「く」字状に内側に折れ

SB 01



第34図 土器実測図(2) (1:4)

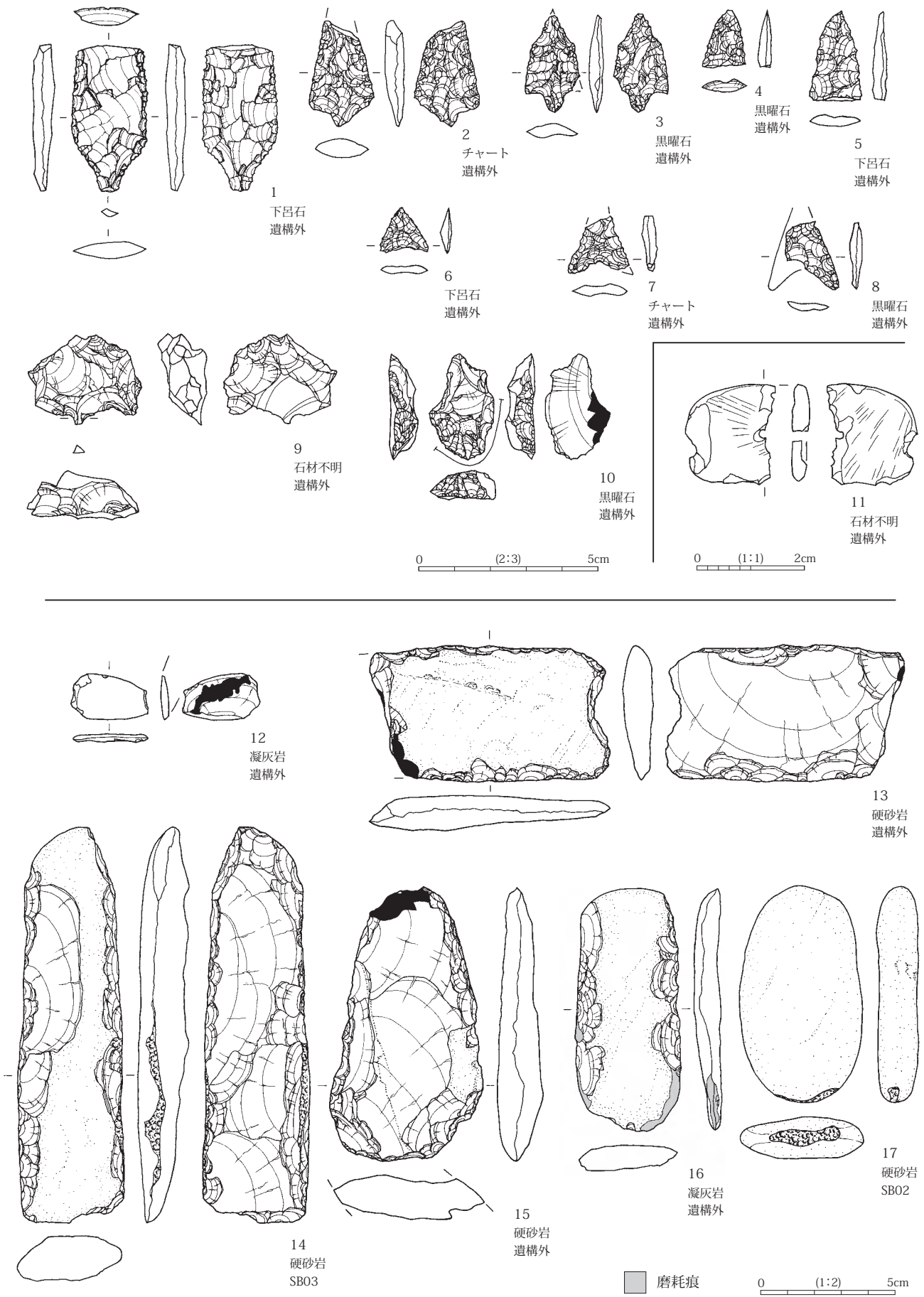
曲がる形態の須恵器坏蓋がある。SB 01 出土の古代土器は、小平編年 4 期～ 5 期、伊藤尚志氏による飯田市恒川遺跡群の編年(伊藤 2005) 4 期～ 5 期にあたり、8 世紀後半～ 9 世紀初頭に位置づけられよう。

遺構外出土の土器・陶器

10 世紀後半～ 11 世紀の灰釉陶器稜皿 1 点のほか、土師器甕、須恵器坏の小片が若干確認された。出土は調査区東端部(ⅡV グリッド以西)に集中している。

(3) 中世以降の焼物

明確に中世に位置づけられるものは、調査区東端部から出土した鎌倉時代の山茶碗片 1 点のみである。近世以降の陶磁器は調査区東部～中央部にかけてテンバコ 1 箱ほどが出土した。17 世紀の志野丸碗・丸皿、伊万里小盃、鉄釉碗、播鉢各 1 点を確認されたものの、ほとんどは 18 世紀後半以降に属し、その大部分は幕末から現代のものである。



第35図 石器実測図 (1:1・2:3・1:2)

(4) 石器・石製品 (第35図、PL6)

石器 31 点、石製品 1 点が出土した。内訳は石鏃 6 点、有茎尖頭器 4 点、搔器 1 点、揉錐器 1 点、打製石斧 13 点、横刃型石器 3 点、磨製石斧 1 点、敲石 2 点、有孔石製品 1 点である。ほとんどは遺構外から出土したもので、出土状況から時期を明確にできるものが少ない。有茎尖頭器、搔器、揉錐器などは旧石器末～草創期、打製石斧と横刃型石器は縄文時代中期と想定できる程度である。

1・2・4・5 は有茎尖頭器、3・6～8 は石鏃である。有茎尖頭器は下呂石 2 点、チャート 1 点、黒曜石 1 点である。石鏃は黒曜石 4 点、チャート 1 点、下呂石 1 点である。9 は揉錐器、10 は搔器で、下端部から右側縁に使用痕が認められる。11 は中央に直径 2 mm 弱の円孔がある石製品の欠損品である。12 は磨製石斧刃部、13 は横刃型石器、14～16 は打製石斧、17 は敲石である。なお、13 の右側縁の抉入状の剥離は欠損であり加工ではないので、弥生時代の抉入打製石包丁ではない。打製石斧は 10 点が硬砂岩、緑色の凝灰岩 2 点、泥岩 1 点、横刃型石器は全て硬砂岩である。

これらの石器の他に、65 点の剥片が出土した。石材の内訳は、黒曜石 26 点、チャート 10 点、硬砂岩 19 点、凝灰岩 3 点、下呂石 2 点、泥岩 4 点、水晶 1 点である。硬砂岩が S B 01 からまとまって出土した他は、遺構外のものが多い。

黒曜石については、旧石器時代の 5 点を含めて 50 点の産地分析を、沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に委託して実施した。結果は、分析可能な 46 点中 37 点が諏訪星ヶ台群、3 点が和田鷹山群、1 点が和田芙蓉ライト群、5 点が蓼科冷山群であった。図示したものでは、4 が和田鷹山群、3・8・10 が諏訪星ヶ台群である。その他、石鏃の小破片で和田芙蓉ライト群が 1 点確認された。遺構外の資料が多く、時期を限定し難いもの、おおむね縄文時代中期の資料であると考えられる。諏訪星ヶ台群の黒曜石が主体を占める傾向は、下り松遺跡(本書)、川路大明神原遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2009 b 未刊)の縄文時代中期の産地組成と一致する。なお、付録 CD に黒曜石産地分析結果報告書を収録したので参照されたい。

4 小結

今回の竹佐中原遺跡の発掘調査は、旧石器時代の石器群の広がりを追求するために、台地上を広範囲にわたって面的に調査した。旧石器時代については、『国道 474 号(飯橋道路)埋蔵文化財発掘調査報告書 2』に譲るが、その結果、縄文時代・弥生時代・古代の遺構を確認することができた。検出した遺構数は多くはなく、分布は散在的、単発的であり、トレンチ調査のみでは取り落とすおそれも考えられないではない。昭和 40 年代の土地改変を考慮すれば、なおさらであろう。こうした遺構を捉えることができたのは、広域的な調査の賜物ともいえる。

縄文時代は、中期後葉の住居跡 1 軒、中期中葉の土坑 2 基、後期前葉の土坑 1 基が確認された。山本地区では、近隣の台地上に立地する白山遺跡(飯田市教育委員会 1981)、湯川(柳田)遺跡(長野県教育委員会 1973 a、飯田市教育委員会 1997)など 6 遺跡で縄文時代の集落跡の調査が行われている。いずれも中期中葉ないし後葉であり、さらに本遺跡の事例を加えることができた。また、今回の調査では、出土遺物がなく時期は判然としないものの、縄文時代と思われる陥し穴 1 基が検出された。同じ台地上に隣接する辻原遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2007)、森林遺跡(本書)で陥し穴がみつかり、この台地上が、居住域だけでなく、狩猟域としても利用されたことが明らかになった。辻原遺跡では出土遺物から早期あるいは中期いずれかの陥し穴である可能性が指摘され、さらに、谷を挟んで北隣する石子原遺跡との関係も想定された。石子原遺跡では早期押型土器期と中期中葉末～後葉初の二時期の集落がみつかり、後者の時期には周辺一帯で居住活動が展開していたことを視野に入れば、石子原遺跡の早期集落を営んだ集団の狩猟活動と関係する蓋然性のほうが高いと考える。

弥生時代は竪穴住居跡 1 軒が検出された。遺物僅少のため時期を決定し難いが、後期と思われる。弥生時代後期は、下伊那全域において、前代に比べ遺跡数が格段に増加する時期であり、天竜川に近い低位地帯から高位の段丘面や扇状地へと集落分布が拡大する時期である。高位地帯に属する当山本地区でも、中期については沖平南遺跡（飯田市教育委員会 2006）で中期末と思われる土器片が検出されたのみであるが、後期の遺物は 10 遺跡で確認されており、この段階で急激な増加がみられる。今回検出した住居跡は、下伊那全域で起こった高位地帯への集落進出という動向のなかで、新たな生活地を求めて当地へ移住した人々によって営まれたものと理解したい。山本地区では、これまで遺物は確認されていたものの、具体的な遺構は検出されていなかった。わずかに住居跡 1 軒ではあるものの、当地における該期の集落動向を考える上で基礎的な資料を提供したといえる。

古代では 8 世紀後半～9 世紀初頭の住居跡 1 軒を確認した。山本地区の古代遺跡の状況は不明な部分が多い。山本・竹佐では今回検出した住居跡が初めての遺構確認例であり、遺物の確認地も少ない。北に隣接する伊賀良地区や南に連なる阿智村地域とは対照的である。しかし、令制東山道が山本地区を通過していた可能性は高いと考えられ、本遺跡の西端をかすめて延びる旧三州（伊那）街道が、令制東山道の阿知駅と育良駅を結ぶ路線を踏襲しているとする指摘（原 2005）は当を得たものであろう。阿知駅の比定地である阿智村駒場と本遺跡は同じ阿智盆地内にあり、直線距離にして 2.5 km しか離れていない。山本・竹佐が阿知駅の維持・運営を支える労働力や物資の供給地としての役割を担っていた可能性があり、集落の空白地帯であったとは考え難い。今後、発掘資料が増加することは十分に予想される。古代の当地がいかなる性格・特質をもつ地域であったか、資料の蓄積を俟って改めて考察すべき課題である。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1981 『白山遺跡 長野県飯田市立山本小学校建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1997 『湯川遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 飯田市教育委員会 2006 『沖平南遺跡』
- 伊藤尚志 2005 「第 II 章 古代の土器」『恒川遺跡群 遺物編その 1（古代・中世）』 飯田市教育委員会
- 鵜飼幸雄 1977 「平出第三類 A 土器の編年の位置付けとその社会的背景」『信濃』 第 29 巻 第 4 号 信濃史学会
- 国立歴史民俗博物館 2007 『弥生はいつから!? 年代研究の最前線』 国立歴史民俗博物館
- 小平和夫 1990 「第 3 章 第 5 節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4 - 松本市内その 1- 総論編』 長野県埋蔵文化財センター
- 小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」『歴史のものさし 縄文時代の考古学 2』 同成社
- 下伊那誌編纂会 1991 『下伊那史 第 1 巻』
- 長野県教育委員会 1973a 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 飯田市地内その 2-』
- 長野県教育委員会 1973b 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 飯田市地内その 3- 石子原遺跡の旧石器』
- 長野県教育委員会 2000 『大規模開発事業地内遺跡 遺跡詳細分布調査報告書 2』
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全 1 巻 (3) 主要遺跡 (中・南信)』
- 長野県史刊行会 1989 『長野県史 考古資料編 全 1 巻 (4) 遺構・遺物』
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 『国道 474 号 (飯喬道路) 埋蔵文化財発掘調査報告書 1 長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007 『中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション埋蔵文化財発掘調査報告書 石子原遺跡・山本西平遺跡・辻原遺跡・赤羽原遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2009a 未刊 『国道 474 号 (飯喬道路) 埋蔵文化財発掘調査報告書 2 長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化 II』
- 長野県埋蔵文化財センター 2009b 未刊 『国道 474 号 (飯喬道路) 埋蔵文化財発掘調査報告書 4 川路大明神原遺跡』
- 原隆夫 2005 「第 2 篇 第 3 章 第 1 節 上手線」『信濃の東山道』 長野県文化財保護協会
- 三上徹也・野村一寿・寺内隆夫 1988 「II. 2. (5) 縄文中期の土器」『長野県史 考古資料編 全 1 巻 (4) 遺構・遺物』 長野県史刊行会

第2節 ^{もりばやし}森林遺跡

1 遺跡と調査の概観

(1) 遺跡の概観 (第23図)

森林遺跡は飯田市西部、山本地区竹佐地籍に所在する。高鳥屋山の東南麓に広がる扇状地が、小河川の浸食により分断されてできた、細長い残丘状台地に立地する。台地は北西から南東へ延び、箱川の浸食谷で切れ落ちて終わる。遺跡は台地の最も先端側に位置し、北西に竹佐中原遺跡(本章第1節)が隣接する。台地上はかつて桑畑として利用されたが、現在は畑地ないし荒地であり、一部宅地となっている。箱川およびその支流の沖積低地には水田が営まれている。

『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会 1998)によれば、台地頂部平坦地のおよそ南北 480 m、東西 150 m が遺跡範囲として括られ、南北から入り込む小開析谷により竹佐中原遺跡と区別されている。標高は 608 m～596 mを測る。箱川の低地部との比高およそ 24 m～30 mである。縄文時代中期の遺物が確認されているものの、発掘調査が行われた経歴はなく、遺跡内容は明確ではなかった。飯橋道路の建設に伴う今回の発掘調査により、旧石器～弥生時代にわたる複合遺跡であることが明らかになった。

一連の台地上には、竹佐中原遺跡の西に縄文時代中期～後期の辻原遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2007)が並び、辻原遺跡から分岐して南へ延びる台地上には、縄文時代中期後半の集落跡が発掘された箱川原遺跡(下伊那誌編纂会 1991)がある。また、箱川を挟んだ対岸の低位段丘にある竹佐長田遺跡では古墳時代前期の遺物が確認されている。

(2) 調査の経過 (第24図)

発掘調査対象地は遺跡の北西部にあたる。南北から入り込む小開析谷により、地形は東西二つの平坦部に大きく区分される。東側平坦部の北東部が遺跡最高所となり、標高 608 mを測る。調査は竹佐中原遺跡と一連の工程・方法により進めた。

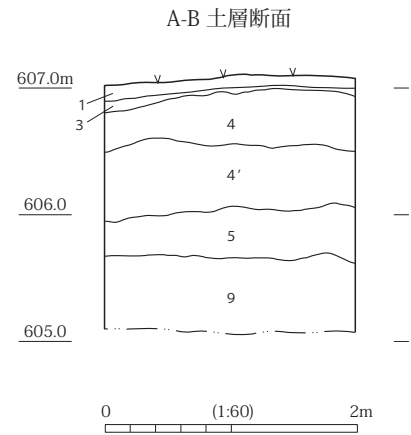
平成 9 (1997) 年度から平成 11 (1999) 年度に、長野県教育委員会が、竹佐中原遺跡を含めた台地頂部の広い範囲でトレンチによる試掘調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった(長野県教育委員会 2000)。なお、この時点ではローム層中の遺物包含状況は確認されていない。平成 13 年度以降、長野県埋蔵文化財センターにより調査が実施され、平成 15 年度まで 3 年にわたる調査となった。

平成 13 (2001) 年度は西側平坦部の北半部でトレンチ調査を行った。この部分は竹佐中原遺跡を分ける小開析谷により舌状に張り出す形となっている。土地取得の関係で県教委の試掘が及ばなかった範囲を主体に、トレンチを設定し重機を用いて掘り下げた。表土直下すぐに混礫土層が現れ、遺物包含層はすでに消失していることが判明した。遺構も検出されなかった。調査期間は平成 13 年 7 月 13 日～7 月 18 日、調査地は飯田市竹佐 135-1 地番ほか、調査面積は 1,300 m²である。

平成 14 (2002) 年度は、西側平坦部南半および東側平坦部を広く面的に調査した。前年、竹佐中原遺跡においてローム層中において旧石器集中部が検出され、同一台地上に隣接する本遺跡にも旧石器が分布する可能性が高まったためである。竹佐中原遺跡の旧石器包含層に対応するローム層が本遺跡の台地頂部にも良好に残存していることが前年度までの調査でわかっていた。ただし、遺物包含層が失われたことが明らかな西側平坦地の北半部は面的調査の対象から外した。調査はローム層の精査を主眼として進めた。その結果、単発的な出土ではあったが、ナイフ形石器をはじめ、旧石器時代の所産と考えられる剥片が確認された。また、長野県教育委員会の試掘では捉えられていなかった縄文時代中期の住居跡 2 軒(S B

01・03)、土坑1基(S K 01)、弥生時代後期の住居跡2軒(S B 02・04)を検出した。旧石器を確認したのが晩秋であり、以後の調査期間を考慮すると冬季に入ってしまうため、本格的な旧石器面の調査は次年度に行うこととした。調査期間は平成14年9月3日～12月20日、調査地は飯田市竹佐241-30地番ほか、調査面積は9,350㎡である。

平成15(2003)年度は前年度の残件である旧石器時代面の調査を行った。遺物の集中部は確認されなかった。調査期間は平成15年4月8日～5月23日、調査地は飯田市竹佐241-30地番ほか、調査面積は4,300㎡である。



第36図 土層柱状図(1:60)

(3) 層序(第36・37図)

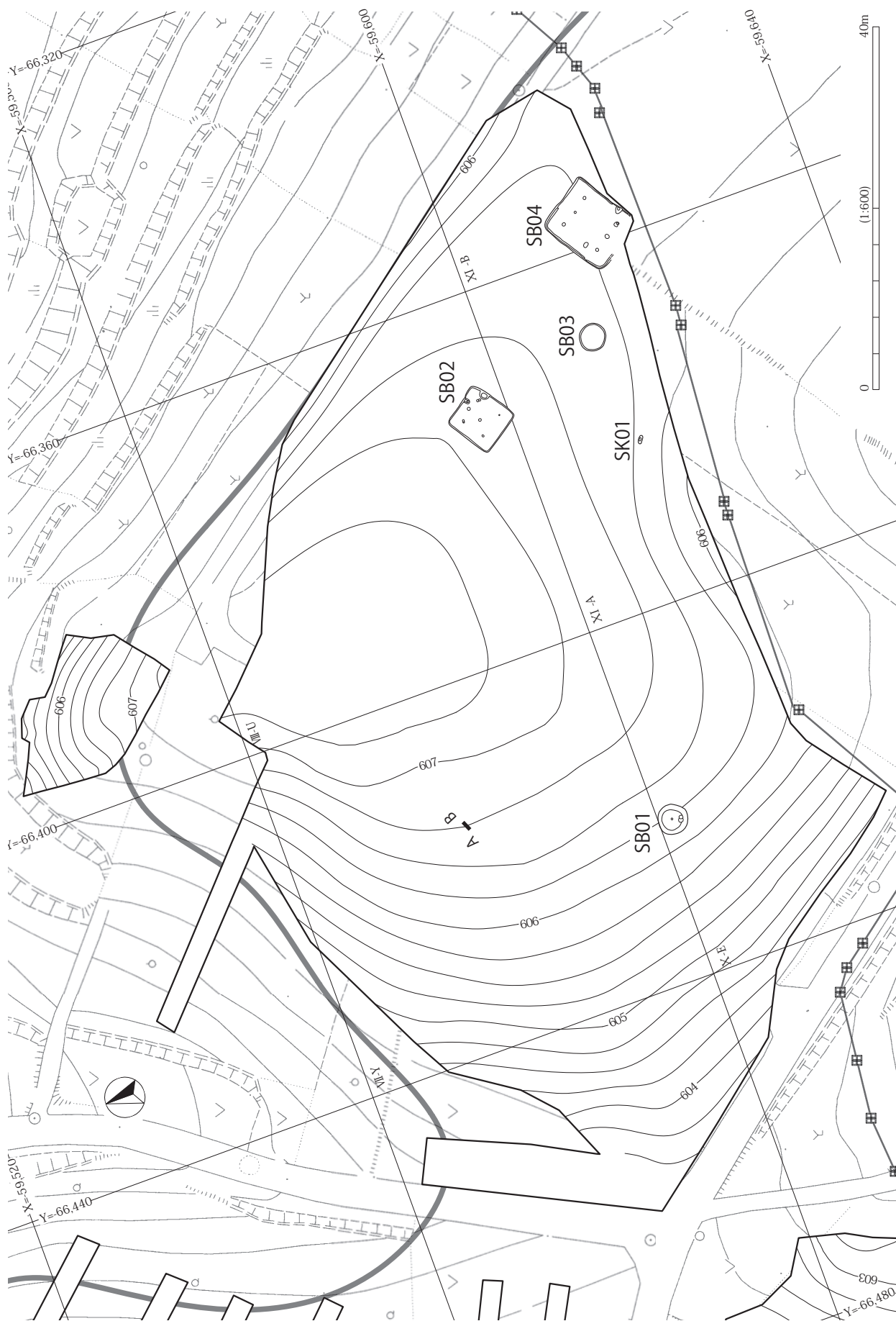
本遺跡の層序は以下の通りである。層序の設定にあたっては、石子原遺跡(長野県埋蔵文化財センター2007)・竹佐中原遺跡の土層に対比しつつ層序区分を行い、層名を付した。本遺跡の土層は、色調がやや赤っぽい傾向があるものの、竹佐中原遺跡の土層にほぼ対応する。

- 1層: 現表土(耕作層)である黒褐色土。
- 2層: 旧表土と考えられる黒褐色土である。本遺跡では竹佐中原遺跡同様に確認されない。
- 3層: 5YR4/4 にぶい赤褐色軟質ローム層 竹佐中原遺跡同様、分布のみられないところもある。
- 4層: 7.5YR5/6 明褐色軟質ローム層
- 4'層: 10YR5/4 にぶい黄褐色軟質ローム層
- 5層: 10YR5/6 黄褐色硬質ローム層
- 6層: 5YR6/6 橙色土
- 7層: 5YR5/6 明赤褐色土
- 8層: 5YR6/6 橙色土
- 9層: 砂礫・粗砂・細砂の不規則な堆積。

6・7・8層は第36図に示した柱状図の作成位置にはみられないが、他の箇所でも5層下に層序を確認しており、竹佐中原遺跡と同様な土層形成環境にあったことを示している。

1層は現表土で、縄文・弥生・近世以降の遺物を若干包含する。2層は石子原古墳の墳丘下に認められた旧表土層と考えられる層である。古墳を除く石子原遺跡、竹佐中原遺跡、本遺跡いずれにおいても確認されていない。その理由として、2層形成後に浸食作用を上回る堆積がなかったため、畑地耕作等により攪拌されてしまったことが考えられる。3層は本来4層と同一層であったものが土壌化作用により変化した部分の可能性がある。層厚20cm近くあるところもあるが、存在しないところもある。分布が安定しないのは、2層と同様に、耕作の攪拌のため、上部または全部が失われたことが考えられる。3層の出土遺物は、その最下部からナイフ形石器が検出されている。本遺跡では3層から縄文時代以降の遺物は出土していないが、石子原遺跡では3層は押型文土器の包含層である(長野県埋蔵文化財センター2007)ことからすれば、3層は後期旧石器時代～縄文時代早期押型文期の包含層に相当する可能性がある。4層・4'層は竹佐中原遺跡の遺物集中部により、本来的な旧石器時代の遺物包含層であることが明らかである。

遺構は、3層上面で検出されるはずであるが、上述したように3層の分布は不安定で、確実に3層を掘り込む遺構を確認した例はない。



第 37 図 遺構全体図 (1 : 600)

2 検出遺構

遺構は、台地頂部の平坦部で竪穴住居跡4軒、土坑1基が検出された。竪穴住居跡のうち2軒は縄文時代中期に位置づけられ、土坑も縄文時代と思われる。縄文時代の遺構分布は散在的である。弥生時代後期の竪穴住居跡2軒は、建物主軸方向を揃え、近接して尾根筋上に並んでいる(第37図)。

(1) 竪穴住居跡

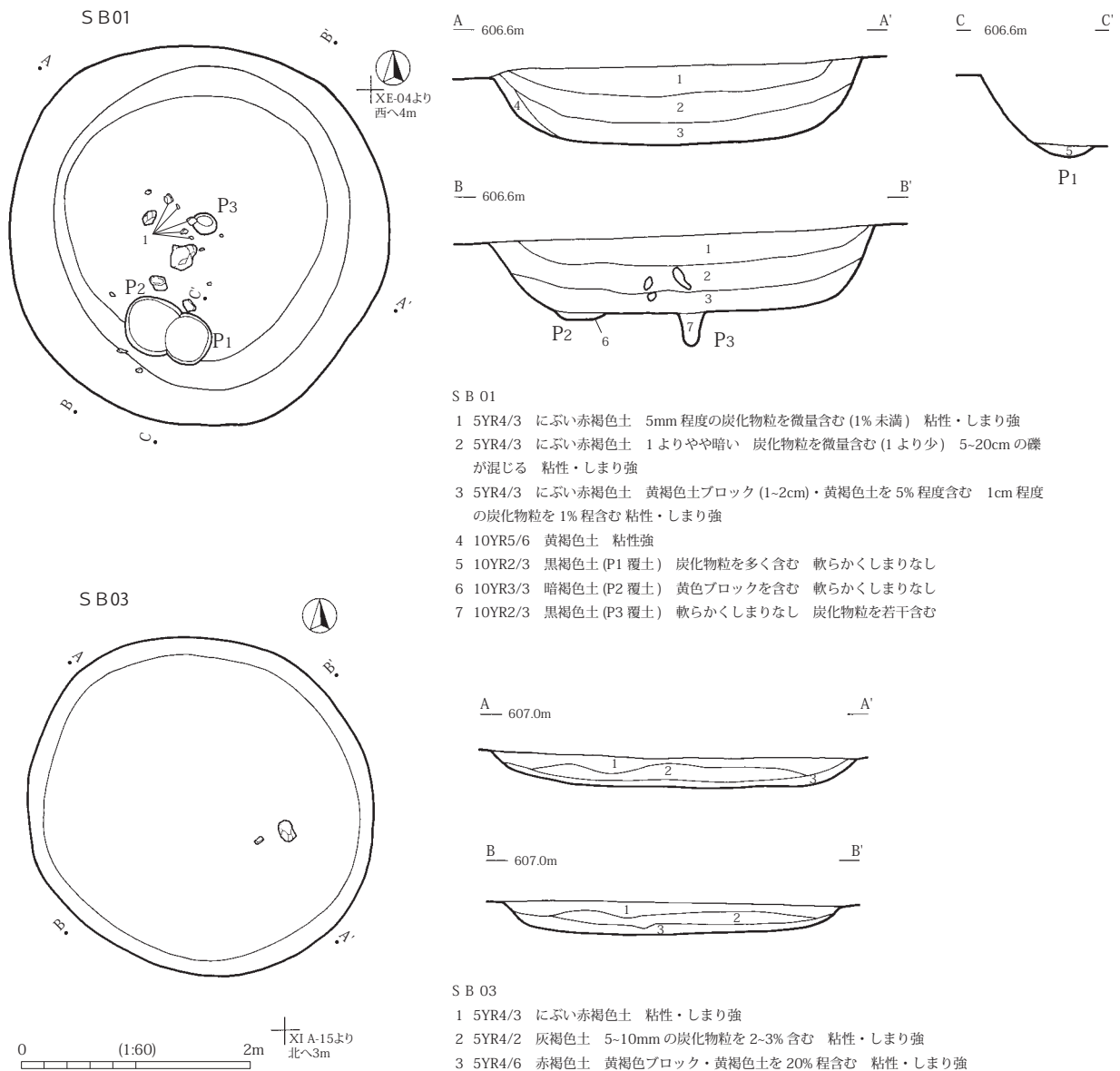
S B 01 (第38・42・43図、PL8・9・10)

位置：調査区東部のⅦ Y23・X E3 グリッド、台地頂平坦部から南斜面への落ち際に位置する。遺跡全体では北西部にあたる。

検出：4層上面の検出である。にぶい赤褐色土の広がりとして認識されたが、東側のプランがやや不明瞭であったため、トレンチを入れ、その断面で捉えた東壁の立ち上がりを手がかりにプランを決定した。

規模・形状：平面形状は直径330cmの円形を呈する。床面積は約3.5㎡である。

床・壁：竪穴掘り方底を整形して床面とする。貼床や硬化面は認められない。床面は中央から壁に向かっ



第38図 S B 01・S B 03 実測図 (1:60)

てややせり上がっている。壁は高さ最大 65 cmを測る。床面からの変換点は不明瞭で、立ち上がりは急角度ではない。

柱穴：床面中央の直径 20 cm、深さ 30cm の円形ピット P3 が柱穴と思われる。中央に柱を 1 本立て、それに材を斜めに立てかけた上屋構造が想定されようか。

その他の施設：南壁際に 2 基の浅いピット P1・P2 が検出された。P1 は直径 40 cm、深さ 8 cm、覆土は炭化物粒を多く含む黒褐色土である。P2 は直径 46 cm、深さ 5 cm、覆土は黄褐色土ブロックを含む黒褐色土である。P1 が P2 を切る。2 基とも被熱赤変部分は認められないが、使用頻度の少ない炉であった可能性を考えておきたい。

覆土：四層に分層された。壁際の一部に黄褐色土（4 層）が堆積し、それと床面をにぶい黄褐色土（3 層）が覆い、さらに 5～20 cmの礫が混じる赤褐色土、にぶい赤褐色土（2・1 層）が順に堆積している。各層の層界は概して不明瞭である。1～3 層には細かい炭化物が不規則に混じり込んでいる。

遺物出土状況：縄文土器、石器が出土した。縄文土器の出土量は少ないが、覆土 1・2 層から出土し、竪穴中央の 1 層中に 6 cmのレベル差で土器片がまとまる箇所があった。第 42 図 1 はこのまとまりに含まれていたものである。石器は、3 層から水晶製石鏃（3）・石皿破片、床面から黒曜石製石鏃（2）が出土した。3 層からはチャート碎片 4 点、頁岩碎片 1 点も検出されている。また、黒曜石の剥片 12 点・碎片 185 点が出土したが、これらのほとんどは床面および 3 層最下部で検出された。黒曜石の碎片は接合資料も確認されており、竪穴内で黒曜石を用いた石鏃の製作が行われていたことを想定し得る。

時期ほか：時期は、出土土器から縄文時代中期と考える。本遺構は、上記のように、小形で簡素な構造の竪穴建物跡であるが、一定期間・頻度で居住施設として利用されていたと推測されるため、住居跡として捉えておく。

S B 03（第 38・42 図、PL8・9）

位置：調査区東端部の XI A9・10 グリッド、台地頂の尾根筋に位置する。遺跡全体では北西部にあたる。

検出：4 層上面の検出である。プランは明瞭に認識できた。

規模・形状：平面形状は直径 310～290 cmの円形を呈する。床面積は約 5.7 m²である。

床・壁：竪穴掘り方底を整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。床面は中央から壁に向かってややせり上がっている。壁は高さ最大 17 cmを測る。床面からの変換点は不明瞭で、立ち上がりも急角度ではない。

柱穴・炉：確認されなかった。

覆土：三層に分層された。床面と壁下部を覆って赤褐色土（3 層）が最下に堆積し、その上に灰褐色土、にぶい赤褐色土（2・1 層）が順に堆積している。各層の層界は概して不明瞭である。

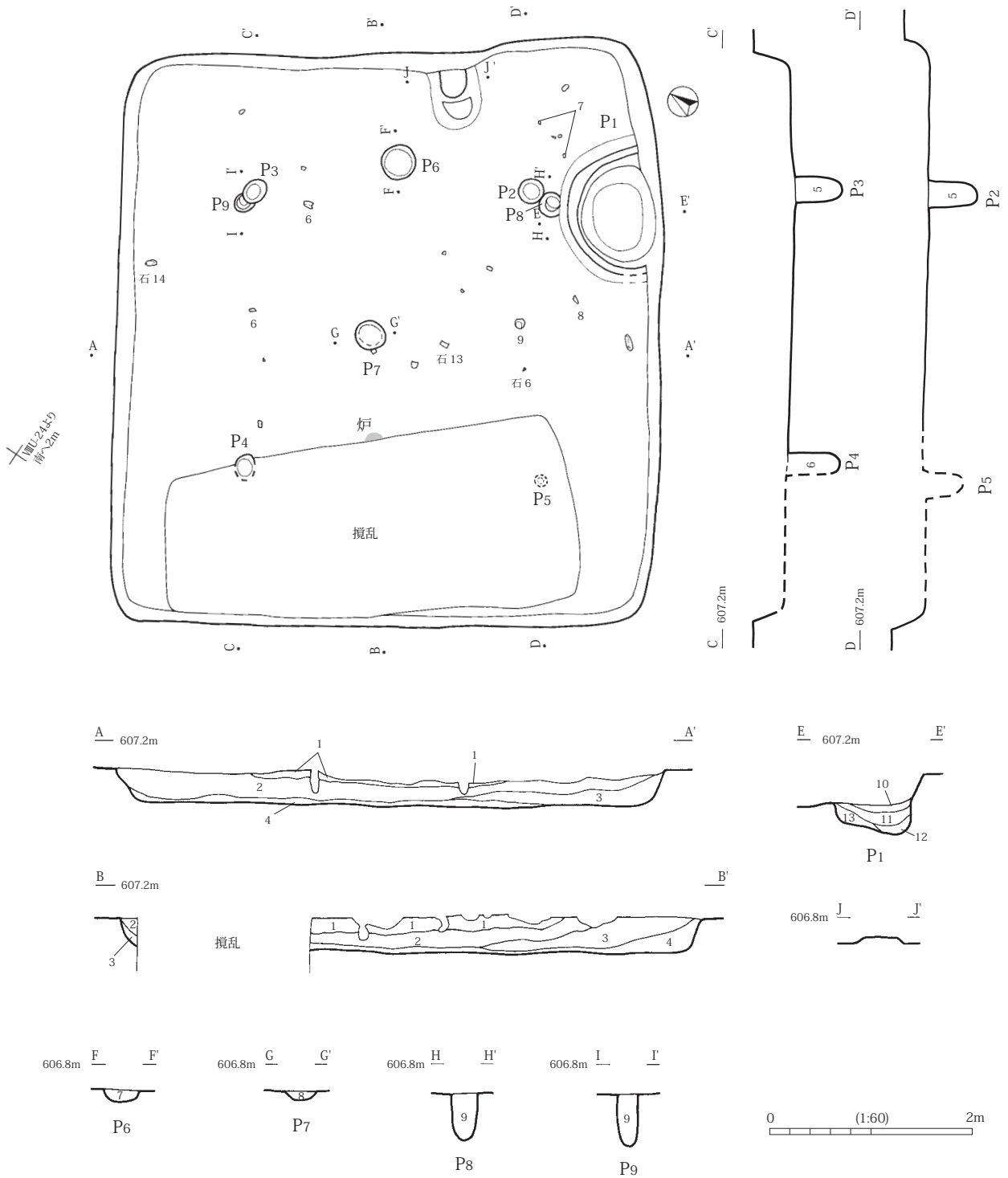
遺物出土状況：覆土から縄文土器（2～4）・石器が散漫に出土した。量は少ない。石器は、横刃型石器、石皿破片のほか、黒曜石・チャートの剥片・碎片がある。チャートの剥片・碎片は 3 層から検出された。

時期ほか：出土土器から縄文時代中期前半の所産と考える。S B 01 と同様に、住居跡として捉えておく。

S B 02（第 39・42・43・44 図、PL8・9・10）

位置：調査区東端部の VIII U24・XI A4 グリッドに位置する。遺跡全体では北西部にあたる。台地頂の尾根筋に、それと建物軸を平行にして築かれている。20 mほど南東には S B 04 が本遺構と軸を同一方向に揃えて近接する。

検出：4 層上面の検出である。プランは明瞭であった。南西部の床面～壁下部が大きく攪乱されている。



S B 02

- | | |
|---|---|
| <p>1 7.5YR2/2 黒褐色土 しまり弱い</p> <p>2 7.5YR3/2 黒褐色土 3層から1層への漸移の様相 1との層界はやや不明瞭</p> <p>3 7.5YR4/4 褐色土 2層との層界は不明瞭 南東部では赤味がやや弱い</p> <p>4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物粒が目立つ(高位置には少ない) 3との層界は不明瞭</p> <p>5 10YR3/4 暗褐色土(P2・P3覆土) 軟らかくしまりなし 炭化物を含む 上部3cm程が黒色やや強く炭も多い</p> <p>6 10YR3/3 暗褐色土(P4覆土)</p> | <p>7 10YR3/1 黒褐色土(炭粒含む)と7.5YR5/6明褐色土が斑状に混じる(P6覆土) 軟らかくしまりなし 焼土粒若干</p> <p>8 10YR3/3 暗褐色土(P7覆土) 軟らかくしまりなし 炭粒や多い</p> <p>9 10YR3/4 暗褐色土(P8・P9覆土) 5の下部に似るがやや黒色がうすい</p> <p>10 10YR4/2 灰黄褐色土(P1覆土)</p> <p>11 10YR4/3 にぶい黄褐色土(P1覆土)</p> <p>12 10YR4/2 灰黄褐色土(P1覆土) 10に似るが相対的に軟らかい 床硬化ブロック含む</p> <p>13 10YR4/3 にぶい黄褐色土(P1覆土) 12に比べややしまり強 床硬化ブロックも多い</p> |
|---|---|

第39図 S B 02実測図(1:60)

規模・形状：平面形は方形を呈する。長軸 560 cm、短軸 530 cm、長軸方向 N 56° E を測る。床面積は 27 m² である。東隅部において、南東辺が内側にやや彎曲し、北東壁が外側に僅かに張り出す。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床は認められないが、ほぼ全面が硬化している。壁は高さ約 30 cm が残存する。床面からの変換点は明瞭で、立ち上がりは急角度である。

柱穴：方形配列を取る P2～P5 および P8・P9 が支柱穴と考えられる。北東側の柱は P8・P9 から P2・P3 へと立て替えられたことが切合いから推測される。ただし、P8・P9 の上に貼り床はない。また、P5 は床面から 30 cm 下の攪乱坑壁面で検出した深さ数 cm の円形の凹みである。平面的位置および中に溜っていた土が P2～4 覆土とほぼ同質であることから柱穴下端部の残存と認識した。P5 を除く各柱穴は円形で直径 25 cm 程度、深さ 52～47 cm の規模である。覆土は暗褐色の締まりのない軟らかな土で、柱痕跡は認められない。

炉：南西側柱穴の中間にある被熱赤変部が炉跡を示すと考えられる。攪乱に切られて構造は不明であるが、攪乱埋め土中から被熱した長さ 20 cm の略長方形の垂角礫が出土しており、炉縁石を伴う可能性があろう。北西側の柱穴のほぼ中間にある P6 は、赤変部は認められないが、覆土に若干の焼土粒・炭化物粒を含んでいる。使用頻度の少ない炉であった可能性は考えられる。

その他の施設：南東壁に取り付く形で、周囲に土手を廻らせたピット P1 がある。長径 100 cm 短径 70 cm の楕円形に掘り込まれ、深さ約 30 cm を測る。土手は地山掘り残しにより下端幅約 25 cm、上端幅約 7 cm、高さ 5 cm に作られており、土手上面からピット壁上部にかけて硬化している。貯蔵穴であろうか。また、北東壁に取り付く柵状の高まりがある。地山を掘り残して作られ、幅 50 cm、奥行 60 cm、高さ 6 cm を測る。現状では、前半部が一段低くなっていて、前端部は丸い形状を呈する。この柵状高まりの南東側では竪穴壁が 10 数 cm 外側に張り出している。

覆土：四層に分層された。床面直上に炭化物をやや多く含むにぶい黄褐色土（4 層）、その上に褐色土、黒褐色土、黒色土（3～1 層）が順に堆積している。各層の層界は概して不明瞭で、下層から上層へと漸移的に変化する様相が窺える。4 層の炭化物は細かく、不規則に包含されている。

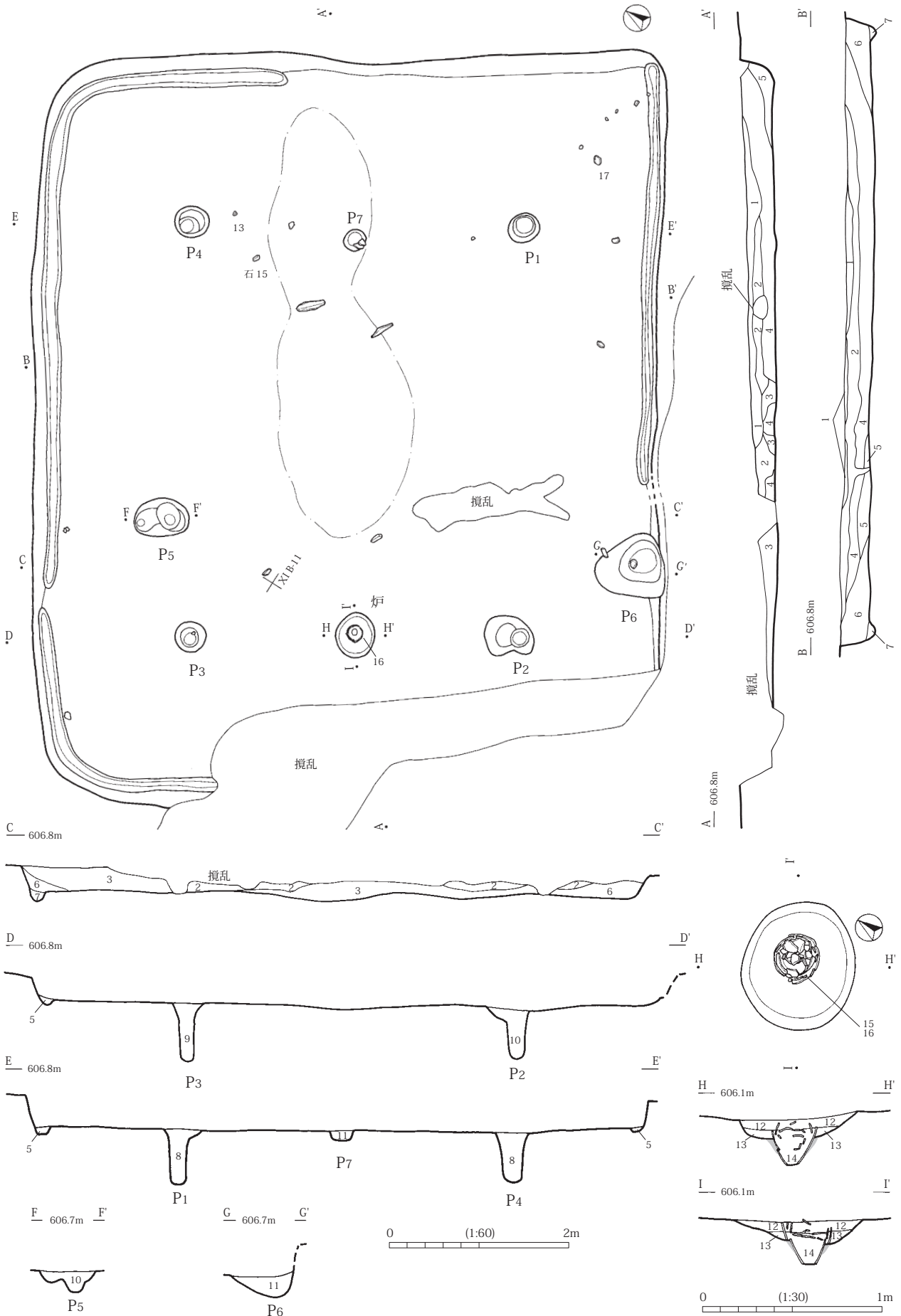
遺物出土状況：遺物は覆土中から散漫に出土した。出土量はタバコ 1/2 ほどである。ほとんど 3・2 層からの出土で、床面検出の遺物はない。土器は、壺（12）、甕（6～10）、台付甕（11）、高坏が認められる。量的には甕が多く、その他は僅かである。全体の器形が判明するものはない。石器は、敲石（14）、抉入打製石庖丁（13）、石鎌（4・5・6）、刃器（18）、石核や、黒曜石・チャート・緑色岩・ホルンフェルスの剥片が出土している。また、本遺構南部を切る攪乱坑から石製紡錘車が出土し（16）、北西壁の外方 45 cm で有孔磨製石庖丁が検出されている（12）。これらは、遺構外の弥生土器出土状況を考え合わせると、本遺構に帰属する可能性が高いと思われる。

¹⁴C 年代測定：（株）加速器分析研究所に委託して、P1 出土炭化物の放射性炭素年代測定（AMS）を行った。測定結果は 2080 ± 80yrBP（半減期 5568 年）である。付録 CD に測定結果報告書を収録したので参照されたい。暦年較正年代（使用プログラム OxCal v3.9）では 360BC（10.4%）270BC、260BC（85.0%）80AD〔95.4%probability〕となり、国立歴史民俗博物館がまとめた年代観（国立歴史民俗博物館 2007）に従えば、およそ弥生中期最初頭から後期前葉に相当しよう。

時期：上記の放射性炭素年代測定結果からすれば、やや新しい時期となるが、出土土器から弥生時代後期後半、中島式後半期と考える。

SB 04（第 40・42・43 図、PL8・9・10）

位置：調査区東端部の XI A10・15、B6・11 グリッドに位置する。遺跡全体では北西部にあたる。台地頂



第40図 SB 04実測図 (1:60・1:30)

第4章 インターチェンジ部分の調査

S B 04

- | | |
|---|---|
| 1 5YR4/1 褐灰色土 にぶい赤褐色土を5%程度含む 粘性中 しまり強 | 9 5YR2/1 黒褐色土(P3覆土) にぶい赤褐色土を10%程度含む 粘性強 しまり中 |
| 2 5YR3/1 黒褐色土 細砂質 粘性中 しまり中 | 10 5YR4/1 褐灰色土(P2・P5覆土) 5cm程度のにぶい赤褐色土ブロックを20%程含む 粘性強 しまり中 |
| 3 5YR4/2 灰褐色土 赤褐色土を20%含む 粘性・しまり強 | 11 5YR4/1 褐灰色土(P6・P7覆土) にぶい赤褐色土が薄く混じる 粘性強 しまり中 |
| 4 5YR4/4 にぶい赤褐色土 暗褐色土を10%程度含む 粘性・しまり強 | 12 5YR2/1 黒褐色土(炉覆土) 5mm程度の炭化物粒を少量含む 粘性中 しまり弱 |
| 5 5YR3/4 暗赤褐色土 にぶい赤褐色土が20%程度斑状に混じる 粘性・しまり強 | 13 5YR4/2 灰褐色土(炉覆土) 赤褐色土ブロックを10%程含む 5mm程度の炭化物粒を5%程含む 粘性中 しまり弱 |
| 6 5YR4/2 灰褐色土 5mm程度の黄褐色土粒・2~3mmの炭化物粒を2~3%含む 粘性・しまり強 | 14 5YR3/2 暗赤褐色土(炉覆土) 粘性・しまり弱 赤褐色土を若干含む |
| 7 5YR3/2 暗赤褐色土(周溝覆土) にぶい赤褐色土粒を10%程度含む 粘性・しまり強 | |
| 8 5YR3/1 黒褐色土(P1・P4覆土) にぶい赤褐色土を10%程度含む 粘性強 しまり中 | |

の尾根筋に、それと建物軸を平行にして築かれている。20 mほど北西にはS B 02が本遺構と軸を同一方向に揃えて近接する。

検出:4層上面の検出である。プランは明瞭であった。南西壁中央～南東壁南部が大きく攪乱されている。
規模・形状:平面形は長方形を呈し、長軸830 cm、短軸700 cm、長軸方向N 54° Eを測る。残存床面積は45.5 m²で、復元すると約52 m²となる。

床・壁:貼床は認められず、竪穴掘り方底を平坦に整形した床面である。炉の北東側で住居中軸に沿った長さ5 m、幅1.3 mほどの帯状の範囲が硬化している(第40図の1点鎖線で囲った範囲)。壁は高さ30 cmほどが残存する。床面からの変換点は明瞭で、立ち上がりは急角度である。

柱穴:方形配列をなすP1～P4が主柱穴と考えられる。各柱穴は平面円形で、深さ54～62 cmを測り、下部は直径20 cm強であるが、上部がラッパ状に広がり、床面では直径35 cm前後となる。P2は上部の広がりさらに大きく、不整な平面形を呈する。P1～P4の底面は硬化している。P5は主柱穴に比べて極端に浅く、平面的な位置からすれば、間仕切りに関係する柱穴であろうか。

炉:南西側の柱穴を結ぶ線の中点に位置する土器埋設炉である。床を長軸47 cm、短軸42 cm、深さ8 cmの楕円形に掘り窪め、さらにその中央を掘り込んで、底を抜いた甕(16)の下半部を据え付ける。甕の内側には、一回り小振りのやはり底部を欠いた甕(15)が納まっていた。二個体の甕を入れ子状に用いた炉体構造を想定できよう。炉体土器据え付け坑の上部は被熱赤化している。炉体内体の甕は、割れて内側に倒れこんでいた上部の破片を接合すると完周状態に復元されたが、口縁部は確認されないため、これも底部同様に意図的に切り取られた可能性がある。

周溝:壁際には深さ8 cm前後の周溝が廻る。完周はせず、北東壁の中央～東隅、南東壁の南西部にはつくられていない。北西壁にも途切れる箇所がある。南西壁については攪乱のため状況は不明であるが、西隅には周溝が存在する。

その他の施設:南東壁に取り付け形でP6が掘り込まれている。直径70 cmの三角形気味の平面形状を呈し、深さ約25 cmを測る。貯蔵施設であろうか。

覆土:六層に分層された。壁際に灰褐色土・暗赤褐色土(6・5層)が断面三角形状を成して堆積した後、残りの空間を、にぶい赤褐色土、灰褐色土、黒褐色土、褐灰色土(4～1層)が順に埋積している。

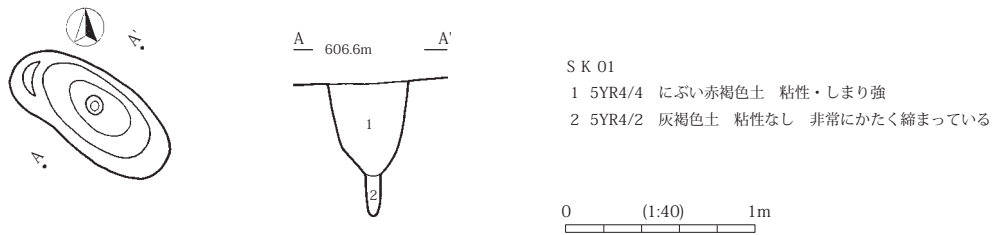
遺物出土状況:炉体に使われた甕を除き、遺物は総量テンバコ1/4ほどが主に覆土から出土した。分布は散在的である。床面検出遺物は小形壺(14)など土器片数点に過ぎない。土器は壺(13)、小形壺、甕、台付甕(17)が認められる。量的には甕が大部分を占め、その他は僅かである。器形全体が判明するものはない。石器は覆土から敲石、黒曜石の剥片が出土したほか、攪乱中から石鏃が検出された(1)。

時期:出土土器から弥生時代後期後半、中島式後半期と考える。

(2) 土坑

S K 01 (第41図、PL9)

位置:調査区東端部のXI A8グリッド、台地頂の平坦部に位置する。遺跡全体では北西部にあたる。



第41図 SK 01 実測図 (1:40)

検出：4層上面の検出である。プランは明瞭に認識できた。

構造：平面形は長楕円形を呈し、長軸 94 cm、短軸 42 cm、深さ 50 cm、長軸方向 N 54° W を測る。丸みを帯びた底面から壁面が急角度に立ち上がる。底面中央に深さ 20 cm の小ピット状の落ち込みが検出された。こうした構造から、小形の陥し穴である可能性が考えられる。

覆土：にぶい赤褐色土の単層である。ピット内は灰褐色土である。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないが、縄文時代と捉えておきたい。

3 出土遺物

(1) 縄文時代の土器 (第42図、PL9)

S B 01 出土の土器

1 は深鉢で、縦位の隆帯を底部付近まで垂下させている。器面には縄文が観察される。中期に属すると考えられる。覆土 1 層中にまとまって検出された。

S B 03 出土の土器

2 は口縁部に隆帯で横に長い楕円文を施し、その上下および内部に押引文を施す。頸部には縦位の平行沈線を密接施文する。中期前半と思われる。3 は平行沈線による弧状文と直線文を組み合わせる。4 は縄文が観察される。2～4 とも覆土から出土した。

遺構外出土の土器

5 は波状を呈する細い隆帯の上に、貝殻背によると思われる圧痕を施している。早期末の木島式と考えられる。VIII V グリッドの攪乱から出土した。

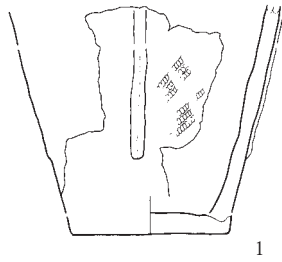
この他に、縄文土器と思われる破片が 30 数点検出された。出土位置は VIII U・VIII V・X I グリッドの尾根筋上に集中しており、弥生時代後期の S B 02・S B 04 の覆土からも出土している。すべて小片・細片で、摩滅して文様・調整が判然としないものが多い。中期に属すると思われる沈線文・隆帯文を施すものが 6 点ある。また、文様は認められないが胎土に繊維を含むものが 8 点あり、これらは早期後半～前期前半に属するものであろうか。

(2) 弥生時代の土器 (第42図、PL9)

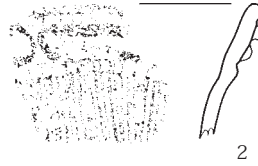
S B 02 出土の土器

弥生後期後半、中島式後半期に属すると思われる資料である。6～11 は甕および台付甕である。器形全体が明らかなものはないが、残存部の形勢からみて、口縁部径と胴部最大径がほぼ等しい器形であろう。6・7 は口頸部で、口縁は強く折れ曲がって外反し、頸部に櫛描波状沈線文を廻らせる。6 の波状文は工具接地不十分のため条線が抜ける箇所がある。7 の波状文は、左右の振幅が短く波頂は鋭角的である。8・9 は頸部～胴上部で、櫛描波状沈線文の下に櫛描斜走短線文を描く。8 の波状文は振幅が一定せず、条線

S B 01



S B 03

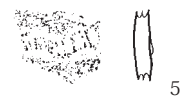


2~4: SB03



3

遺構外

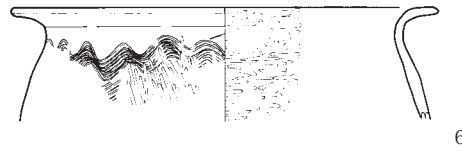


5

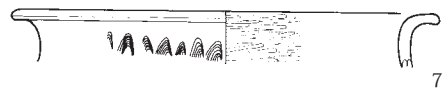


4

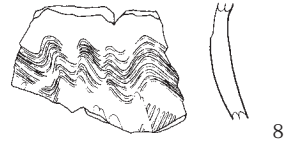
S B 02



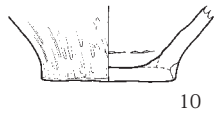
6



7



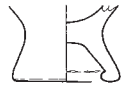
8



10



9



11

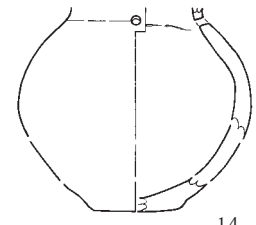


12

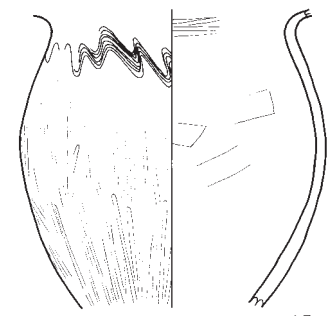
S B 04



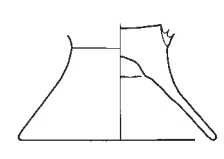
13



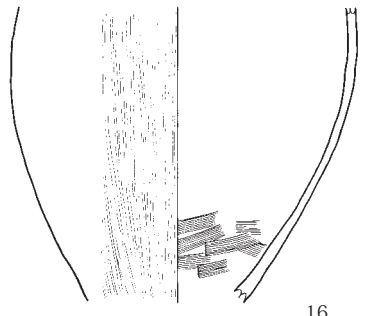
14



15



17



16

6~12: SB02
13~17: SB04

0 (1:3) 10cm

0 (1:4) 10cm

第42図 土器実測図 (1:3・1:4)

もところどころ抜ける。9の波状文は細かく緻密に振幅させており、短線文も丁寧である。11の脚台部は端部を内側に折り込んで平坦に押しつぶしている。調整はナデである。12は肩に刻目突帯を廻らせた壺と思われる破片である。6~12すべて覆土2・3層から出土した。

S B 04 出土の土器

弥生後期後半、中島式後半期に属すると思われる資料である。13は覆土から出土した壺の口縁部で、剥落しているが端部を立ち上げて受け口状となる形態である。立ち上り部外面には刻目を施す。14は頸部に小さな円形孔を穿った小形壺で、床面で検出された。15~17は甕および台付甕である。15は炉体内体に用いられたもので、口縁端部を欠くが、残存部の形勢からみて、口縁部径と胴部最大径がほぼ等しい器形であろう。頸部の櫛描波状文は上下左右の振幅が一定せず、条線もところどころ抜ける。肩部以

上の器面が白くささくれたような状態となっており、火熱の影響によるものと思われる。16は炉体外体に用いられたものである。肩部以上を欠く。17の脚台部は端部を丸くおさめている。調整はナデである。17は床面で検出された。

遺構外出土の土器

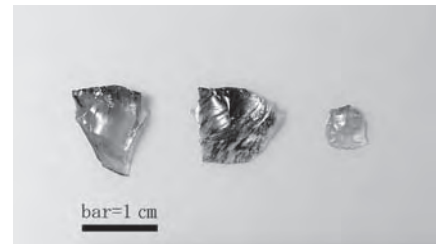
弥生土器あるいは胎土・調整の様相から弥生土器と思われる破片が100点ほど検出された。出土位置はⅧU・ⅧV・ⅪA・ⅪBグリッドの尾根筋上、特にS B 02周辺からS B 04にかけての範囲に集中している。甕が大部分で、壺が若干あり、高坏と思われる破片が僅かにある。文様は、甕は櫛描波状沈線文および櫛描斜走短線文ないしその組み合わせ、壺は櫛描横走文・波状文がみられる。器形を推測し得るものとして、櫛描波状沈線文・斜走短線文を施した甕の口頸部片が1点あり、口縁部径と胴部最大径がほぼ等しいと思われるものである。総じて、S B 02・S B 04出土土器と同様な様相を示しており、同時期と考えられる。もともとS B 02・S B 04の覆土に含まれていたものが、耕作によって拡散した可能性がある。

なお、ここで古墳時代以降の土器・陶磁器について触れておく。今回の発掘調査では、古墳時代～中世に位置付く資料は確認されなかった。また、近世以降の陶磁器は若干量が検出され、そのほとんどは18世紀後半以降に属する。

(3) 石器・石製品 (第43・44図、PL10)

石器33点、石製品1点が出土した。内訳は石鏃8点、石匙1点、楔形石器1点、微細な剥離がある剥片1点、打製石斧6点、横刃型石器5点、刃器2点、磨製石包丁1点、打製石包丁1点、敲石2点、磨石3点、石皿破片2点、紡錘車1点である。この他に、剥片と碎片253点と、近世以降の所産と思われるサイコロ1点が出土した。

1～6は石鏃である。石鏃は黒曜石4点、チャート、珪質凝灰岩、下呂石、水晶が各1点出土した。1・4～6は弥生時代後期の竪穴住居から出土したもので、所属時期は保留しておく。2・3が出土したS B 01では石鏃の製作に関わる剥片・碎片が出土している。その内訳は黒曜石の剥片12点・碎片185点、チャートの碎片5点である。黒曜石の碎片については接合資料も確認されており、その出土状況からS B 01内で石鏃の製作が行われていたことが想定される。剥片・碎片は調査区全域で黒曜石214点、チャート27点、下呂石1点、珪質凝灰岩2点、頁岩1点、硬砂岩3点、緑色岩2点、ホルンフェルス3点を検出したが、黒曜石以外の剥片類が極端に少ないことから、黒曜石以外の石鏃は完成品の形で遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。



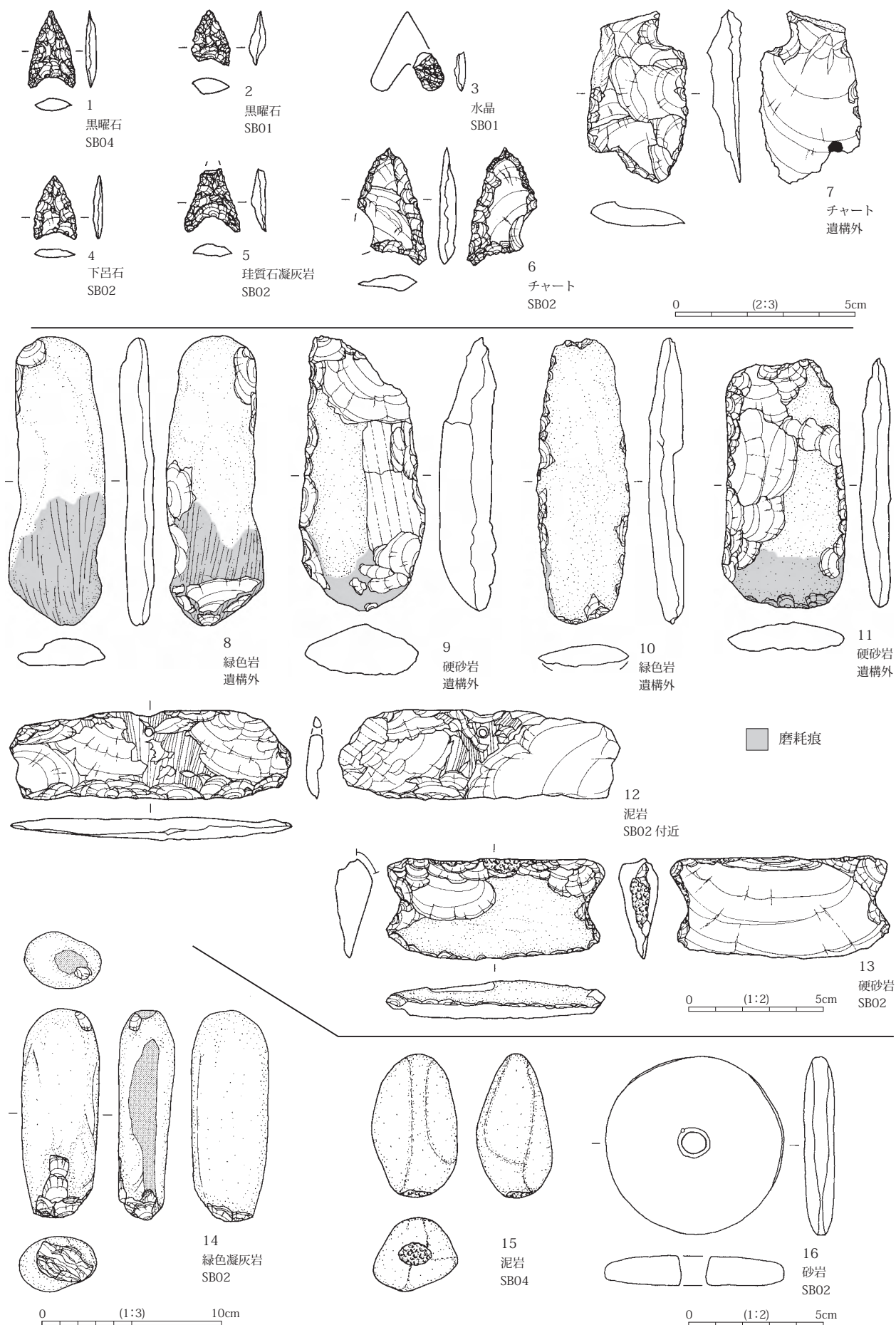
S B 03 出土 黒曜石碎片の接合資料

7は石匙である。つまみ部が未発達であり、前期初頭以前の形態である。

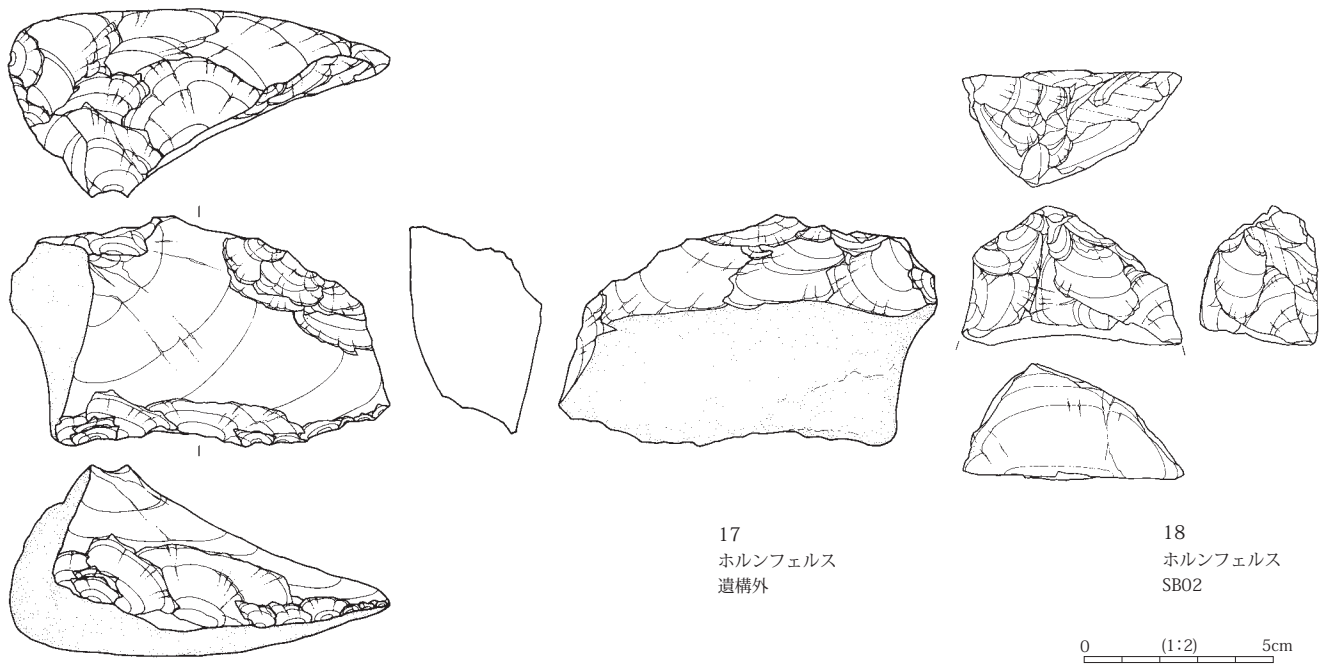
8～11は打製石斧である。大半は縄文時代中期の所産であると考えられる。打製石斧は硬砂岩と緑色の凝灰岩で作られている。全ての刃部に磨耗痕が認められる。図示したものを含めて欠損品が3点あるが全て基部欠損である。8は刃部の磨耗痕部分に線状痕が認められる。扁平な自然礫を素材としており、他の打製石斧と様相が異なる。

12・13は石包丁である。12は直径3.5mmの両面穿孔の円孔が1箇所穿たれており、その周囲と上辺部に研磨が見られる。研磨と周辺の剥離との前後関係は観察できないが、刃部は剥片剥離により直線的に整えられている。S B 02脇の検出面で出土した。13はS B 02覆土から出土した抉入打製石包丁で、伊那谷に特徴的な石器である。飯田市内では恒川遺跡群で多数出土している(飯田市教育委員会1986)。抉入

第4章 インターチェンジ部分の調査



第43図 石器実測図 (1) (2:3・1:2・1:3)



第44図 石器実測図(2) (1:2)

部と上縁部は縁辺がつぶれており、刃部には光沢がある磨耗痕が認められる。

14・15は敲石である。14は側縁と上端部に研磨による平坦面が生成されており、下端部は敲打による剥片剥離が生じている。研磨面と自然面の区別が困難であるが、研磨はほぼ全面に亘っているとみることができる。15は下端面のみ敲打痕が認められる。

16は石製の紡錘車である。一部赤色化しており、熱を受けた可能性がある。弥生時代後期のS B 02を切る攪乱から出土した。

17・18は刃器である。分厚い剥片の縁辺部に連続した剥片剥離が認められる石器である。18は欠損品である。小形の剥片をとるための石核と考えることもできるが、同種の石材の小形剥片石器が認められないことから、石器と評価した。

図示した石器のほかに、長径11 cmほどの花崗岩と砂岩の扁平な楕円礫が3点出土した。使用痕跡は確認できないが、持ち込まれた石であり磨石の可能性がある。また、滑らかな擦り面がある石皿の破片が2点出土した。

4 小結

今回の発掘調査では、竹佐中原遺跡と同様に旧石器時代の石器群の検出を主眼として、広範囲にわたる面的調査を行った。旧石器時代に関しては『国道474号(飯喬道路)埋蔵文化財発掘調査報告書2』に譲るが、その結果、縄文時代および弥生時代における人間活動の痕跡を捉えることができた。そのなかで、弥生時代後期の竪穴住居跡の発見は、資料が少なく、これまで不明瞭であった山本地区における弥生時代の集落様相を知るための貴重な事例をもたらした。

縄文時代では、早期末の土器が確認されたほか、中期の竪穴住居跡2軒が確認された。また、縄文時代の陥し穴と考えられる土坑も1基検出された。竪穴住居跡2軒は、ともに小形で簡素な構造であり、家族数人が常に住み暮らす家屋とは考えにくい。簡素ではあっても竪穴建物であるから、一度きりの使用で廃絶するようなものではなく、繰り返し使用する建物であったことは確かであろうが、顕著な炉が確認されないのは、一度の使用が短期間であったことを示唆すると思われる。これらの建物は小人数が非常時的

に短期間使用する施設であったことが推測される。その性格について、S B 03 において建物内での石鏃製作が推測されることは暗示的である。集落から離れた地域において狩猟活動を行う際の仮小屋的な居住施設として利用されていたことを可能性の一つとして挙げておきたい。

弥生時代では、後期後半の竪穴住居跡 2 軒が確認された。下伊那地域では、弥生時代後期になると、それまで天竜川の氾濫原に近い低位の段丘面に集落を営んでいた人々が、高位の段丘面や山麓扇状地に進出・拡散して集落を形成する動きが顕著になることが知られている。進出した当初は小規模な集落が点々と広がるが、やがて集落数の増加、集落規模の拡大がみられ、高松原遺跡・黒田垣外遺跡・殿原遺跡のような拠点集落が各地に出現する（山下 2000）。高位地帯に属する山本地区でも、中期については沖平南遺跡（飯田市教育委員会 2006）で中期末と思われる土器片が検出されたのみであるが、後期の遺物が確認された遺跡は 10 遺跡を数え、この段階で急激に増加する。本遺跡の集落の成立は、こうした後期における低位地帯から高位地帯への集落展開という下伊那全体の動向に連動するものと理解する。集落を支える食糧生産は、収穫具である石庖丁の出土が示すように、農耕が行われていたことは間違いない。今回の調査では生産遺構や収穫物は検出されなかったが、台地直下の箱川沿いの低地を利用した水田耕作と台地上での畑作を含めた複合的な農耕を想定しておきたい。

検出された 2 軒の住居跡は、台地の尾根筋上に棟軸を揃えて近接して並び、出土遺物からみても、併存していたと考えられる。調査区の東南方へさらに遺構群が展開することが推測されるため、集落の構成や規模について踏み込んで論及することはできないものの、大形住居を含む点には注意したい。西側の S B 02 の床面積は 27 m²だが、東側の S B 04 は約 2 倍の 52 m²を測る大形の住居である。九州から関東にかけての弥生時代の集落構成は、中核となる大形住居 1 軒と中・小形住居 3～5 軒で構成される単位が基本となることが指摘されており（甲元 1986）、こうした傾向は下伊那でも認められる（市沢 1991、山下 2000）。本遺跡の集落においても、大形住居を中核とする数軒から成るまとまりが基本的な構成単位となっていたこと、そして、それが体現する、相対的に自立し農業経営の基礎単位となる集団＝単位集団の存在が推測される。また、S B 04 は下伊那地域の該期では最大の部類に属する。床面積 52 m²は丹保遺跡（上郷町教育委員会 1993）や座光寺原遺跡（今村 1967）、高松原遺跡（長野県史刊行会 1983）といった拠点集落の最大住居と比べても、規模の点では遜色がない。下伊那の弥生後期の集落遺跡を概観すると、こうした大形住居は拠点集落に特徴的に存在し、小規模な周辺集落には現在のところ認められないようである。本集落が単一の単位集団が営んだ小規模集落なのか、あるいは複数の単位集団により構成される拠点集落と想定し得るのかは、今回の調査区が集落の北西隅を切り取ったに過ぎない可能性が高いため、現状では判断が難しい。もし、前者であるとするなら、本集落の特殊性が問題となろうが、S B 04 には特異な建物構造も遺物も認め難いし、S B 02 を含め調査全体としても同様である。今後、当地域の資料の実態に即して、大形住居自体の性格とともに、それをもつ集落の構造を考えてゆくことが課題であろう。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群 - 一般国道 153 号座光寺バイパス用地内発掘調査報告書 -』
 飯田市教育委員会 1998 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
 飯田市教育委員会 2006 『沖平南遺跡』
 市沢英利 1991 「第 2 篇 第 4 章 農耕社会の始まり」『下伊那史 第 1 巻』 下伊那誌編纂会
 今村善興 1967 「飯田市座光寺原遺跡」『長野県考古学会誌』4 長野県考古学会
 上郷町教育委員会 1993 『丹保遺跡 - 農村基盤総合整備事業（集落型）丹保地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
 甲元眞之 1986 「農耕集落」『岩波講座 日本考古学 4』 岩波書店
 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」『考古学研究』 第 6 巻 第 1 号
 国立歴史民俗博物館 2007 『弥生はいつから!? 年代研究の最前線』 国立歴史民俗博物館

- 下伊那誌編纂会 1991 『下伊那史 第1巻』
- 長野県教育委員会 2000 『大規模開発事業地内遺跡 遺跡詳細分布調査報告書 2』
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)』
- 長野県史刊行会 1989 『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 『国道474号(飯橋道路)埋蔵文化財発掘調査報告書 1 長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007 『中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション埋蔵文化財発掘調査報告書 石子原遺跡・山本西平遺跡・辻原遺跡・赤羽原遺跡』
- 宮沢恒之 1978 「伊那谷における弥生集落の展開 - 座光寺原式期を中心として -」『中部高地の考古学』 長野県考古学会
- 山下誠一 1992 「飯田・下伊那の後期弥生土器」『長野県考古学会誌』 65・66 長野県考古学会
- 山下誠一 1999 「飯田・下伊那の弥生土器」『シンポジウム長野県の弥生土器編年 発表要旨』 長野県考古学会弥生部会
- 山下誠一 2000 「飯田盆地における弥生集落の動向 - 発掘調査された竪穴住居址を基にして -」『飯田市美術博物館研究紀要』 第10号 飯田市美術博物館

第5章 本線部分および工事用道路部分の調査

第1節 ^{さがりまつ} 下り松遺跡

1 遺跡の概観 (第23図)

下り松遺跡は、飯田市の西部、山本地区竹佐地籍に所在する。高鳥屋山の東南麓に広がる扇状地が、小河川の浸食により分断されてできた細長い残丘状台地に立地する。遺跡のある台地は、北西から南東へ延びて城山山塊に連なり、北側の水系と南側の阿知川水系との分水嶺をなしている。現在、台地頂部は畑地および宅地として利用され、斜面部は樹林域となっている。北側の久米川および南側の箱川沿いの低地部には水田が営まれている。

『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会 1998 a)によれば、台地頂部平坦地のおよそ南北 420 m、東西 130 mが遺跡範囲である。台地は北西の端から南東へ向かって下っているが、遺跡西端付近で上昇に転じて城山に達する。このため遺跡の標高は東側がより高く、稜線上の西端部で約 608 m、東端部で約 617 mを測る。縄文時代中期の遺跡として登録・記載されているものの、発掘調査が行われた経歴はなく、遺跡内容は明確ではなかった。飯橋道路の建設に伴う今回の発掘調査により、縄文時代中期中葉～後葉の集落遺跡の姿が明らかになった。

一連の台地上には、東隣に縄文中期の杵原遺跡が位置しており、さらに西へ、並松遺跡(本書)、旧石器～江戸時代にわたる複合遺跡の石子原遺跡が並ぶ。また南側の一段低い段丘上には古墳前期・奈良時代の竹佐長田遺跡がある。箱川の谷を隔てて南西側に隣接する台地には森林遺跡(本書)が位置している。

2 調査の経過 (第45図)

(1) 平成12年度

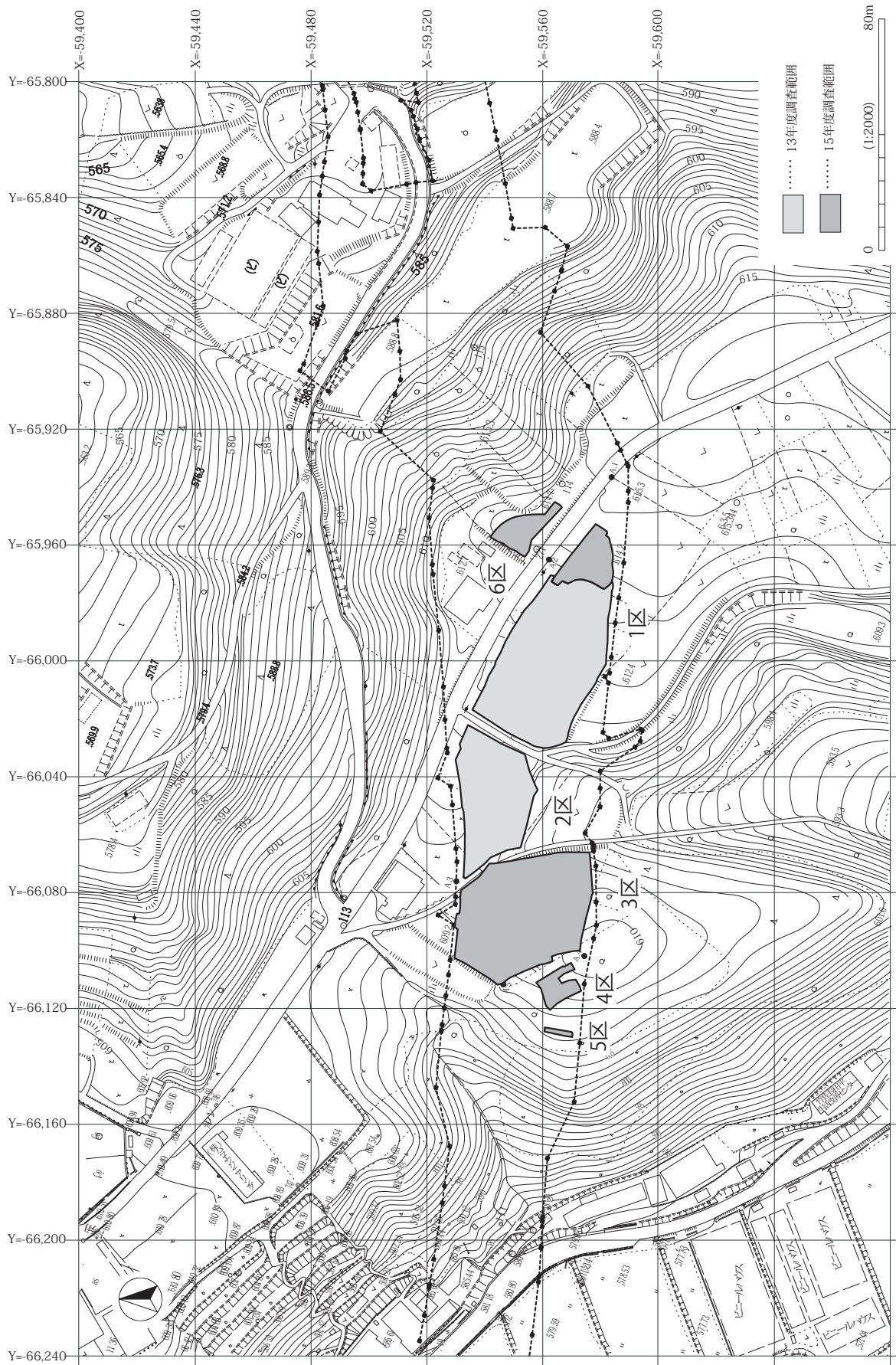
調査対象地は遺跡の北西部に位置し、北側と南側を谷に刻まれた狭い尾根上の平坦地にあたる。中ほどに南から入り込んだ小規模な開析谷により、平坦地は東西二つに分かれた形となっている。平成13(2001)年1月11日・12日に、遺跡内容や範囲を確認することを目的として、長野県教育委員会が試掘調査を実施した。中央部の谷状部分から東の平坦地にかけて(下記1区西半～2区東半)、7本のトレンチを掘削した結果、住居床面と思われる硬化面が3箇所において確認され、工事に先立って本調査が必要と判断された(長野県教育委員会 2003)。

(2) 平成13年度

本調査は長野県埋蔵文化財センターが行い、用地取得の関係等から、平成13年と平成15年の二年度に分けて実施した。調査総面積は10,200 m²である。飯橋道路用地を斜めに横切る市道杵原線とそこから派生する農道により対象範囲を四分割し、それぞれに面的調査区を設定した。東から6区、1区、2区、3～5区である。地区番号は表土除去を行った順に付した。

平成13(2001)年度は、試掘調査結果にもとづき、1区および2区の面的調査を行った。調査地の地番は飯田市竹佐426ほか、調査面積は5,700 m²である。

8月2日、東側の平坦地から表土除去を始めた。引き続き掘削面を精査して、遺構・遺物の検出を進めたが、この間、同時に調査を進めていた竹佐中原遺跡において、後期旧石器時代を遡る可能性をもつ石器の出土が相次ぎ、日本列島における石器文化の初源を探るうえで、きわめて重要な遺跡であることが明らかになっ



第45図 調査範囲図 (1:2000)

てきた。そこで、竹佐中原遺跡の調査に集中するため、8月10日を以って下り松遺跡の調査を中断した。

11月12日に調査を再開し、12月19日に終了した。再開された1区では、時期不明の竪穴状遺構1基(SX01)、近世末以降に埋没した自然流路跡2条(SD01・02)を調査した。試掘調査で見つかった硬化面は、Ⅲ層上面に形成された褐鉄鉱固化による自然の硬化部分であることが明らかになった。また、12月4日に1区北壁寄りに重機によるだめ押しトレンチを掘削したが、遺構・遺物は検出されなかった。

2区は中央の谷状部分にあたる。12月4日に調査を開始し、土坑・ピット様の落ち込みが幾つか見つかったものの、調査の結果、すべて遺構ではなかった。試掘調査で確認された2箇所の硬化面は、1区と同様な自然の硬化部分であった。また、12月17日から12月19日にかけて、2区北壁沿いでローム層中の旧石器の有無を確認する調査を行った。長さ18m、幅2mのトレンチを設定、手掘りによりローム層(Ⅱa層)を掘り下げたが、ローム層中から石器は出土しなかった。

(3) 平成15年度

平成15(2003)年度は、4月3日～6月12日に3区～6区および1区東拡張部の調査を行った。調査地の地番は飯田市竹佐413ほか、調査面積は4,500㎡である。

4月3日に西側の平坦地に3区を設定し、調査を開始した。聞き取り調査により、西側平坦地の畑地から縄文時代の遺物が多数採集されたという情報を得ていたため、当初から面的調査を行う計画をたてた。予想通り、縄文時代中期の竪穴住居跡3軒(SB01～03)・建物跡1棟(ST01)・土坑75基が明らかになり、最も遺構が密集する調査区となった。3区の面的範囲は、遺構分布の広がりや外側で西を限ったが、台地斜面の落ち際にあたる緩傾斜面が西へ若干続いており、その部分に5区・6区を設定した。5区では何も検出されなかったが、4区では土坑2基(SK78・79)を確認した。また、1区では、平成13年度調査区の東側に調査区を設けたが、遺構は検出されなかった。

市道杵原線の北東側については、1m近く削平されていることが明白な宅地部分を調査対象から除いて、宅地東側の桑畑部分について調査を実施することとし、6区を設定した。この箇所は市道と台地北斜面に挟まれた狭い範囲ではあるが、現地表面に大きく削平された状況が認められないため、遺構が存在する可能性が考えられた。4月21日に調査を始め、縄文時代中期の住居跡2軒(SB04・05)が明らかになった。

5月28日～6月12日には、3区南西部と6区でローム層中の旧石器の有無を確認する調査を行った。平坦部の遺構がない箇所を主体に、8×8mの範囲(中地区)に2×2mのテストピットを基本的に4箇所入れ、ローム層(Ⅱa・b層)を掘り下げたが、ローム層中から石器は出土しなかった。

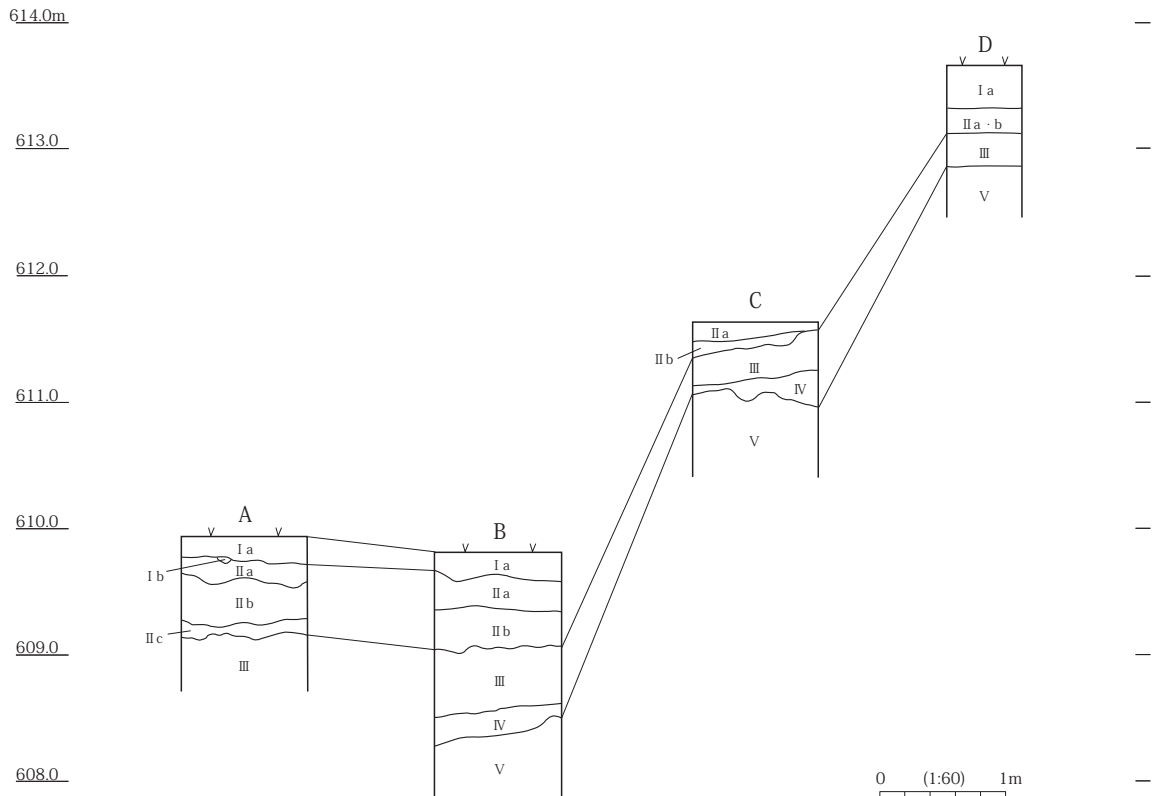
3 層序(第46・47図、PL13)

1区東部(D)、1区西端(C)、2区中央(B)、3区南端(A)の4箇所です掘部を設定し、土層を観察・確認した。B・C・Dは2001年度、Aは2003年度の設定である。地点による相違はあるものの、層序は以下のように整理される。

I a層：現表土(耕作層)である黒褐色土。

I b層：7.5YR4/5 褐色土 粘性としまりがあって、乾くと相当に硬くなる。第46図ではA断面のごく一部にのみ現れているにすぎないが、3区の平坦部の畑地範囲に広く分布する。他の地区にはみられない。形成要因は明らかでないが、直下のⅡ層との境界が明瞭で掘削時に肌分れすること、これを剥がないと遺構が検出されないことからみて、自然形成とは考え難い。畑のトレンチャー痕の埋土にもなっている。耕作に伴う客土であろうか。

Ⅱ層：黄褐色ローム 遺構は本層上面で検出された。以下のように細分される。



第46図 土層柱状図 (1:60)

II a層：7.5YR～10YR5/6 明褐色～黄褐色ローム 軟質で、相対的にA・B断面では赤っぽく、C・D断面では黄色っぽい。AではII b層ブロックが若干混じる。DではII aとII bどちらも判別できない。

II b層：10YR5/6～6/6 黄褐色～明黄褐色ローム 相対的にII a層より粒子が細かくしまりがあって硬質。Aでは色調がやや暗く、硬質の基調のなかに軟質のII a土が網状に入り込む様相を示す。

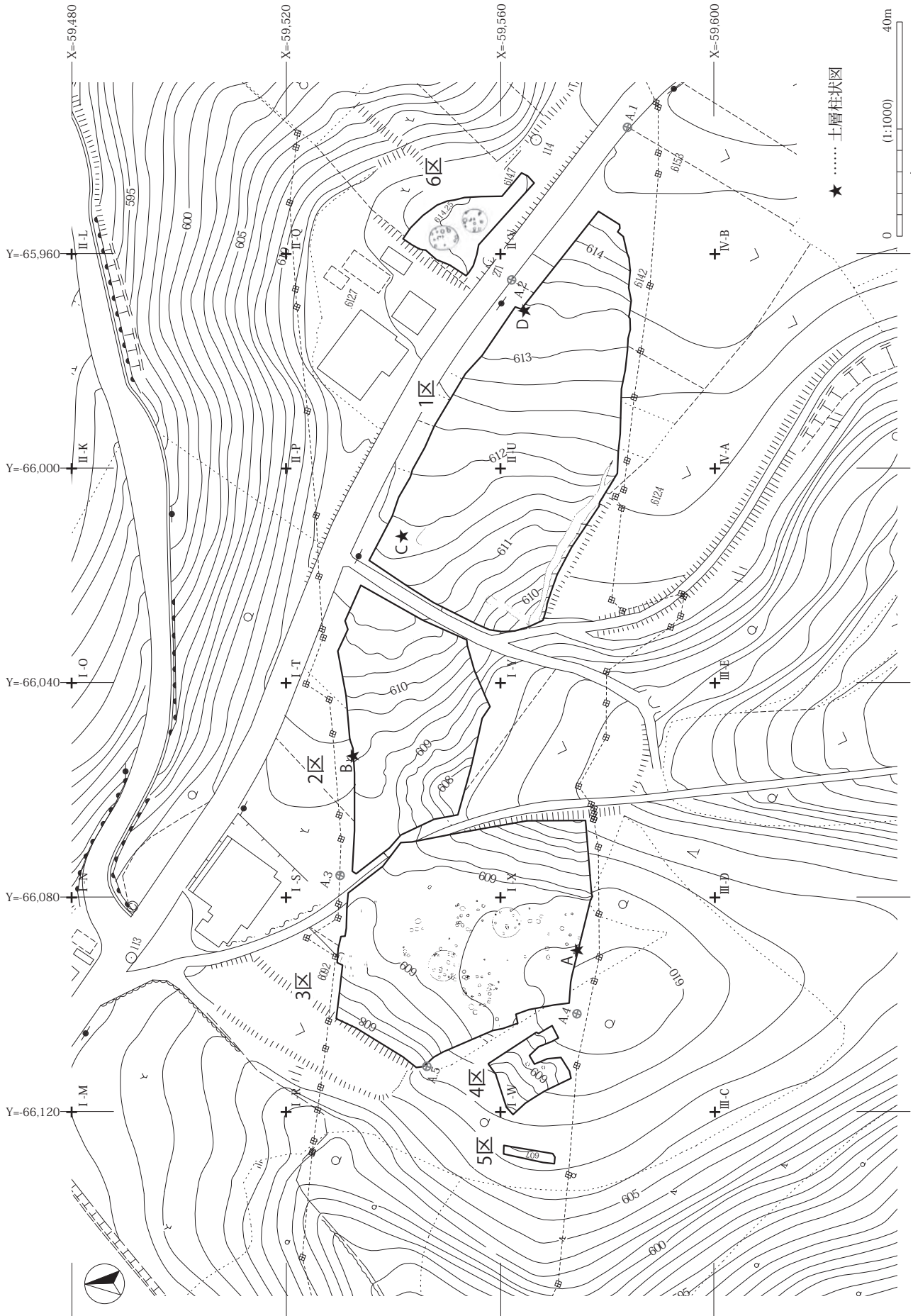
II c層：基調はII b層に類似するが、III層ブロックが混じり込む。B・C・Dでは確認されない。

III層：7.5YR5/6～10YR5/5 明褐色～にぶい黄褐色土 小礫・白色粒を若干含み、しまりがあって硬い。程度の強弱はあるが、赤色風化している。Aでは10YR5/5にぶい黄褐色土と5YR4/6赤褐色土が混じり合ったような様相を示し、Cでは風化赤変した片麻岩礫若干を含む。A・Cでは上面に褐鉄鉱固化層が形成されている。

IV層：10YR6/6～5/6 黄褐色砂質土 III層土とV層土がブロック状に混じり合う。Dでは確認されない。Aでは未掘。

V層：10YR6/7 明黄褐色砂質土 花崗岩片を多く含み、風化赤変した片麻岩礫・花崗岩礫が多量に混じる。礫の風化は著しく鎌で切れるほどである。礫はラミナ状に堆積しており、ほとんどない部分もある。Aでは未掘。

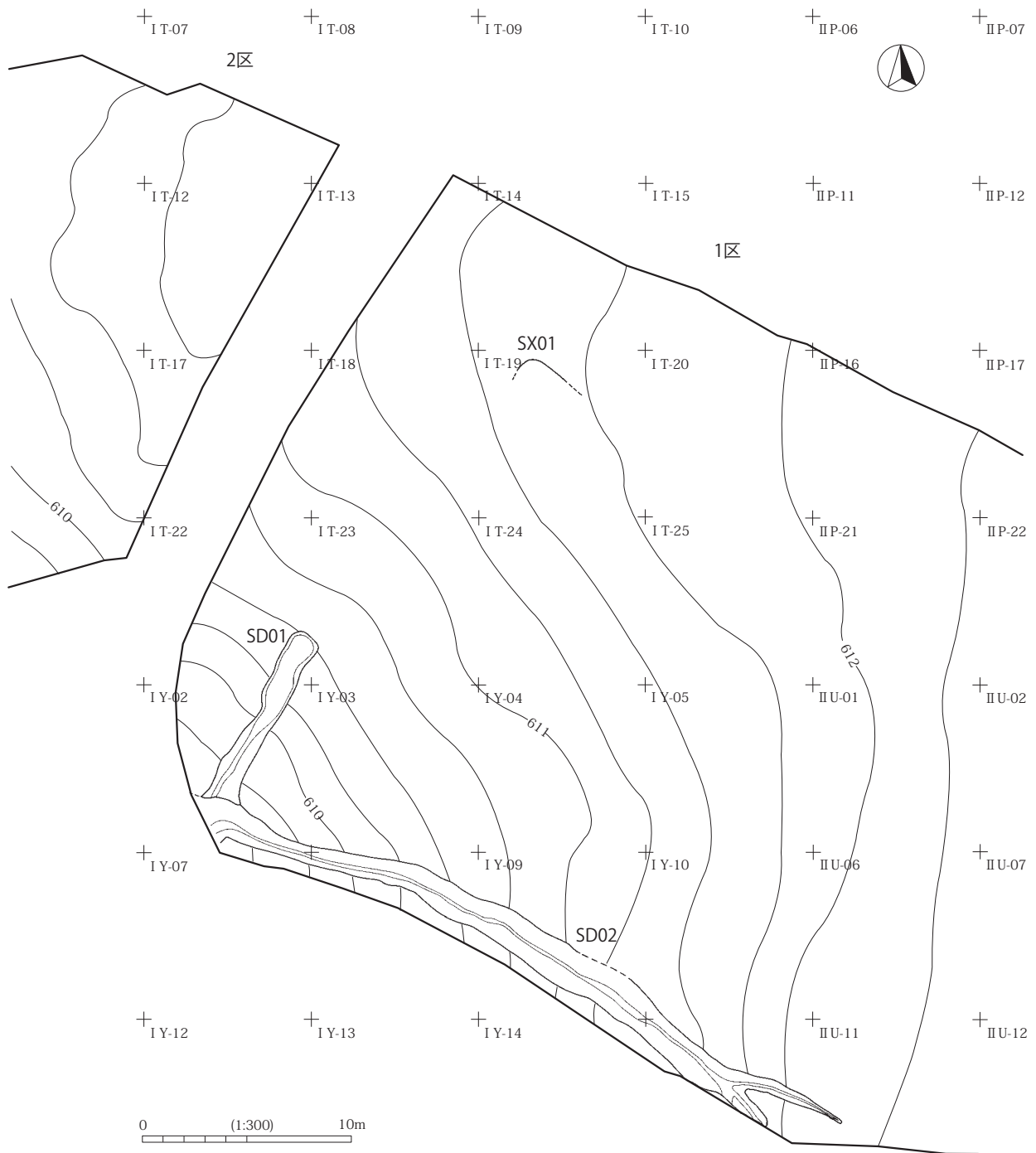
I a層は調査範囲全域の表土・耕作層を一括した。I b層は層厚数cm～10cmで、分布は3区平坦部に限られる。II層は調査区の平坦部全域に認められる黄褐色ローム層である。ただし、細分層では地点により相違が見られる。相対的に低位にあるA・BではII b層は層厚30cmほどあるが、高位にあるCでは10数cm以下と薄くなり、さらに高位のDではII aとの区別ができない。高位部分では、II a層堆積以前にII b層が失われた可能性とともに、逆にII a層が消失したことにより地表に接近したII b層が変化・軟質



第47図 遺構全体図 (1 : 1000)

化したことも考えられる。また、Ⅱc層はAのみで確認された。Ⅲ層は調査区全域に堆積する赤色風化層である。3区東斜面ではⅠ層を剥ぐとⅢ層が平面的に露出する状況が観察された。Ⅲ層も、低位部では厚く、高位部では薄くなる傾向が看取される。Ⅳ層はⅢ層土とⅤ層土が混じり合った層で、Dでは認識できない。Ⅴ層は強く風化した礫を多量に含む砂質土層である。60 cm以上の層厚がある。Ⅴ層は調査範囲全域に分布すると考えてよいであろう。

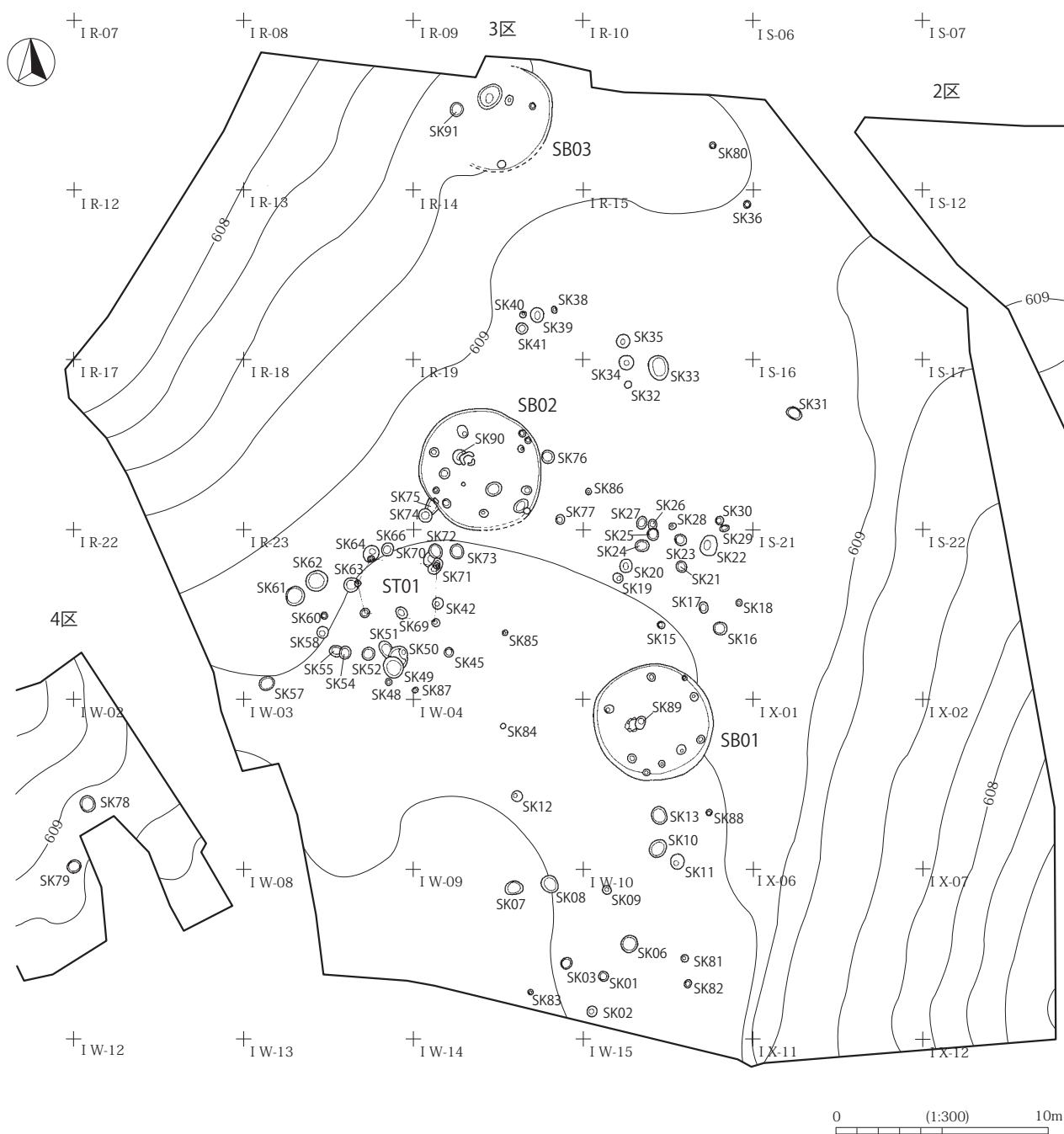
竹佐中原遺跡（ITN）の層序との対応は、Ⅱa層：ITN 4層ないし4'層、Ⅱb層：ITN 5層、Ⅱc層：ITN 6層、Ⅲ層：ITN 7層、Ⅳ層：ITN 8層、Ⅴ層：ITN 9層、と考えている。特にA断面の様相が竹佐中原遺跡と共通する要素が多い。



第48図 1区遺構配置図 (1:300)

4 検出遺構

遺構は、竪穴住居跡 5 軒、建物跡 1 棟、竪穴状遺構 1 基、土坑 77 基が検出された。いずれも台地頂部の平坦地に位置する。その他、遺構ではないが、頂部平坦部から斜面部へ下る自然流路跡 2 条を検出した。竪穴住居跡・建物跡は縄文時代中期中葉～後葉に属し、土坑もほぼ該期の所産と考えられる。竪穴状遺構は時期不明である。縄文時代の遺構群は、調査範囲の西端部にあたる 3・4 区に竪穴住居跡 3 軒と土坑群が、東端部の 6 区に竪穴住居跡 2 軒が位置する。両者は約 120 m 離れており、その間、遺構の分布はみられない。3 区には遺構が集中しており、北端および南端まで遺構が及んでいる。3 区の北方、南方には狭いながら平坦地が続き、遺構群がその方向にさらに広がることは確実にみられる。竪穴状遺構と自然流路跡は 1 区に位置する (第 47～50 図)。



第 49 図 3・4 区遺構配置図 (1:300)

以下、検出された各遺構について記述するが、遺構の時期比定の鍵となる出土土器の時期的な位置付けは、長野県史編年（三上ほか 1988）に対比しつつおこなう。

(1) 竪穴住居跡

SB 01（第 49・51・52・63～65 図、PL12・14～16）

位置：3区中央やや南寄り、I R-25・W-05 グリッドに位置する。

検出：II a層上面の検出である。I b層に覆われ、当初プランが明確ではなかった。I b層土を除去してプランを確定した。S K 89 に切られる。

規模・形状：平面形は円形を呈する。長径 552 cm、短径 442 cm、床面積 20.4 m²、深さ最大 22 cmを測る。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床、硬化面は認められない。壁の立ち上がりはさほど急角度ではなく、床面への変換も緩やかである。

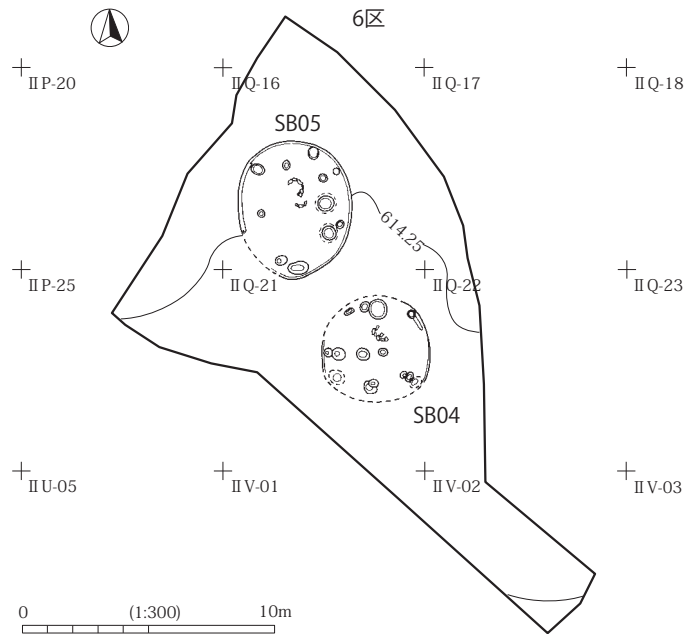
柱穴：P1・2・3・8・11 が主柱穴であることは疑いないだろう。正五角形に近い配置を取り、直径 40 cm程度、深さ 40～50 cmと形状・規模も類似する。覆土は概ね 2層に似た暗褐色土である。他にピットは壁沿いに 4基検出された。主柱穴より小形で浅いが、覆土は似ている。

炉：炉 1 は中央西寄りに位置する。S K 89 に東部を切られて完存していないが、円形の石囲炉である。床を直径 70 cm、深さ 10 cmほど掘り窪めて炉床をつくり、掘り方内壁に炉石を据え廻らす。残存する石は 6個で、西側の 2石は塊状の礫を用いているが、その他は板状の礫を立てている。炉石の内面はよく焼けており、炉床中央部も被熱赤変している。炉 1 の東側（住居中央側）にもう 1つの被熱赤変面があり、これを炉 2 とした。赤変面の外縁に石が 1個検出され、炉石の可能性のあるものの、明確な掘り方は確認されなかった。周囲には焼土粒が不整な楕円形に広がっている。炉 1 と炉 2 の中間に S K 89 が掘り込まれており、両者が構造的に繋がるのか、そうでないのか、明らかにならなかった。

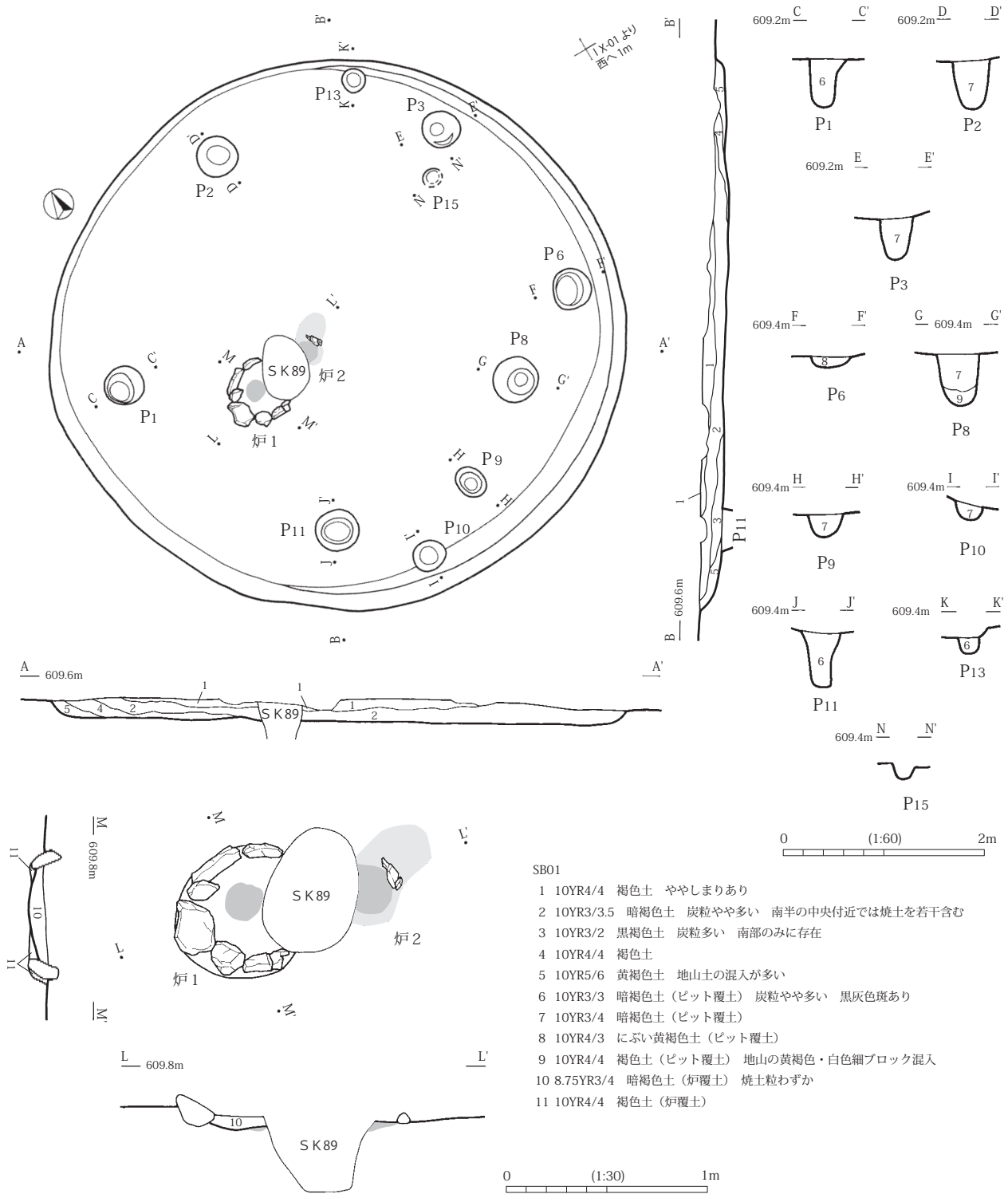
覆土：五層に分層された。5層黄褐色土・4層褐色土は断面三角形状を呈する壁際の初期堆積土である。5層は地山によく似ており、特に南側において壁面立ち上がりの判別が難しく、最終的に断ち割りを入れて確定した。その上を、炭化物粒を含む黒褐色～暗褐色土 3・2層が覆い、さらに、ややしまりのある褐色土 1層が堆積する。遺物・礫の大部分は 2層に含まれる。

遺物出土状況：覆土 2層から遺物・礫の大部分が出土した。次いで 3層・1層の順に多いが、2層との量差は大きい。4層以下および床面検出の遺物はほとんどない。また、いくつかの集中部と希薄部がみられるようにも思えるが、入り組んでおり、明確な偏在性を読み取ることは難しい。土器はすべて破片で、縄文中期中葉末～後葉 I 期に相当するものがほとんどを占める。

¹⁴C 年代測定：（株）加速器分析研究所に委託して、二件の放射性炭素年代測定（AMS）を行った。一件は P15 出土の炭化物で、測定結果は 4530 ± 60yrBP（半減期 5568 年）である。もう一件は覆土 2・3層出土の土器（第 63 図 1）の胴部内面に付着していた炭化物で、測定結果は 4440 ± 40yrBP（半減期 5568

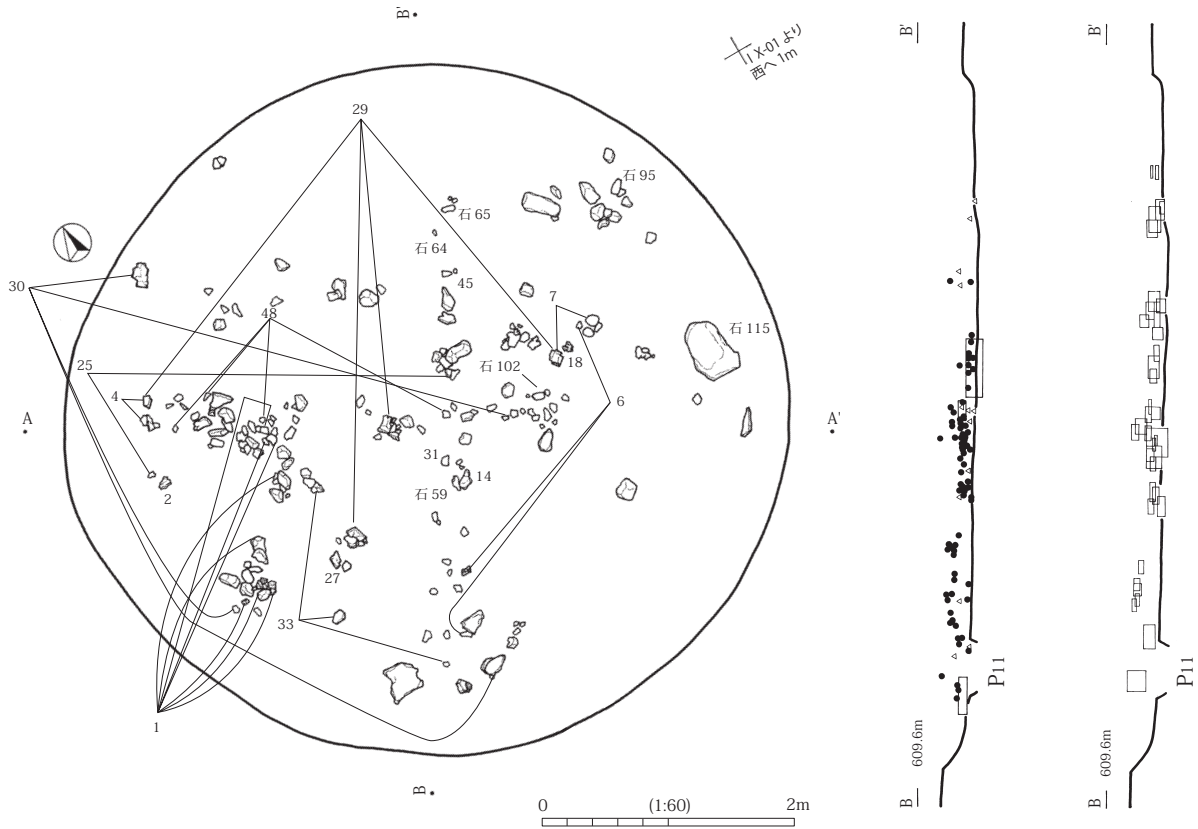


第 50 図 6区遺構配置図（1：300）



第51図 SB01実測図(1) (1:60・1:30)

年)である。付属CDに測定結果報告書を収録したので参照されたい。暦年較正年代では、前者(使用プログラム OxCal v3.9)が 3500BC (2.6%) 3460BC、3380 (92.8%) 3020BC [95.4%probability]、後者(使用プログラム OxCal v3.10)は 3340BC (31.2%) 3210BC、3190BC (5.9%) 3150BC、3140BC (58.3%) 2910BC [95.4%probability] である。小林謙一氏による縄文中期の実年代推定(小林2008)に対比すれば、後者は縄文中期中葉藤内1式から後葉曾利I式併行期に相当しよう。



第52図 SB 01 実測図 (2) (1:60)

時期：出土した土器の様相から、縄文中期中葉末～後葉I期と考える。上記の放射性炭素年代測定結果とも矛盾しないと考えられる。

SB 02 (第49・53・54・65・66図、PL12・16・17)

位置：3区ほぼ中央、I R-19・24グリッドに位置する。

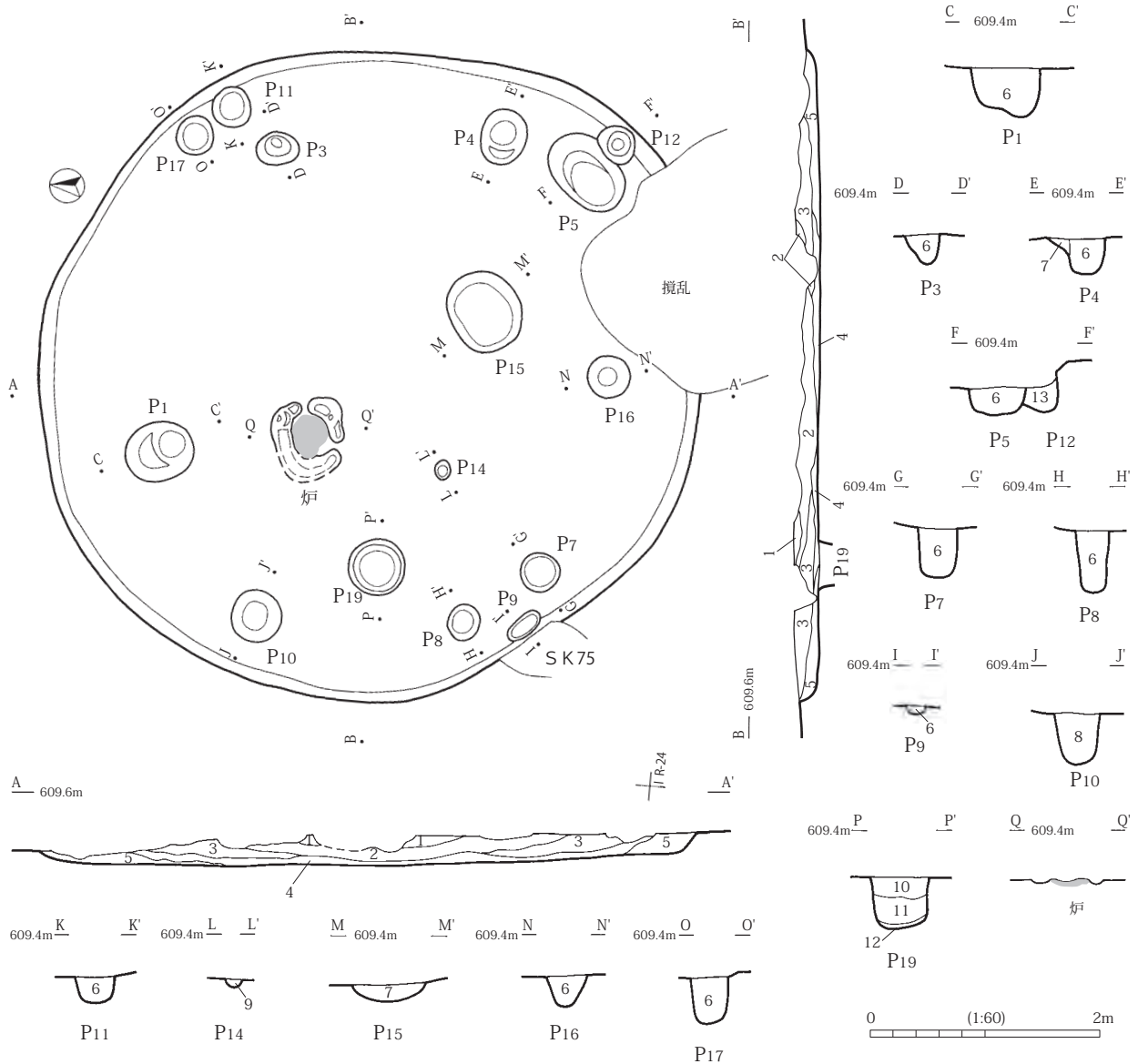
検出：II a層上面の検出。SB 01と同様に、竪穴上面を覆うI b層土の不規則な広がりを除去してプランを確定した。SK 75と切り合うが、先後は不明である。なお、南部に、地山ロームが内側に突出するように見える部分があったが、後に本住居跡を切る倒木痕(攪乱)と判明した。

規模・形状：平面形は楕円気味の円形を呈する。長径600cm、短径552cm、床面積23.8㎡、深さ最大25cmを測る。長軸方向はN 48° W。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床、硬化面は認められない。壁の立ち上がりはそれほど急角度ではない。床面への変換点はSB 01に比べれば明瞭であるが、稜を成すほどではない。

柱穴：ピットは15基検出されたが、規模や配置からみて支柱穴にふさわしいものはP1・4・7・8・10・11・16・17と考えられる。P7・8が南西壁際に、P11・17がその対面の北東壁際に近接して並ぶ配置が特徴的である。各柱穴は楕円形ないし円形を呈し、長径60～30cm、深さ50～25cmで、形態にばらつきがみられる。覆土は概ねよく似た暗褐色土である。

炉：中央北西寄りに位置する。炉石は残存しないが、長径40cm、短径30cmを測る楕円形の被熱赤変面を取り巻いて、炉石抜き取り痕と思われる溝状の窪みが廻ることで、石囲い炉であることが推測される。炉床は中心部が僅かに窪むが、概ね周囲の床面と同じ高さである。



S B 02

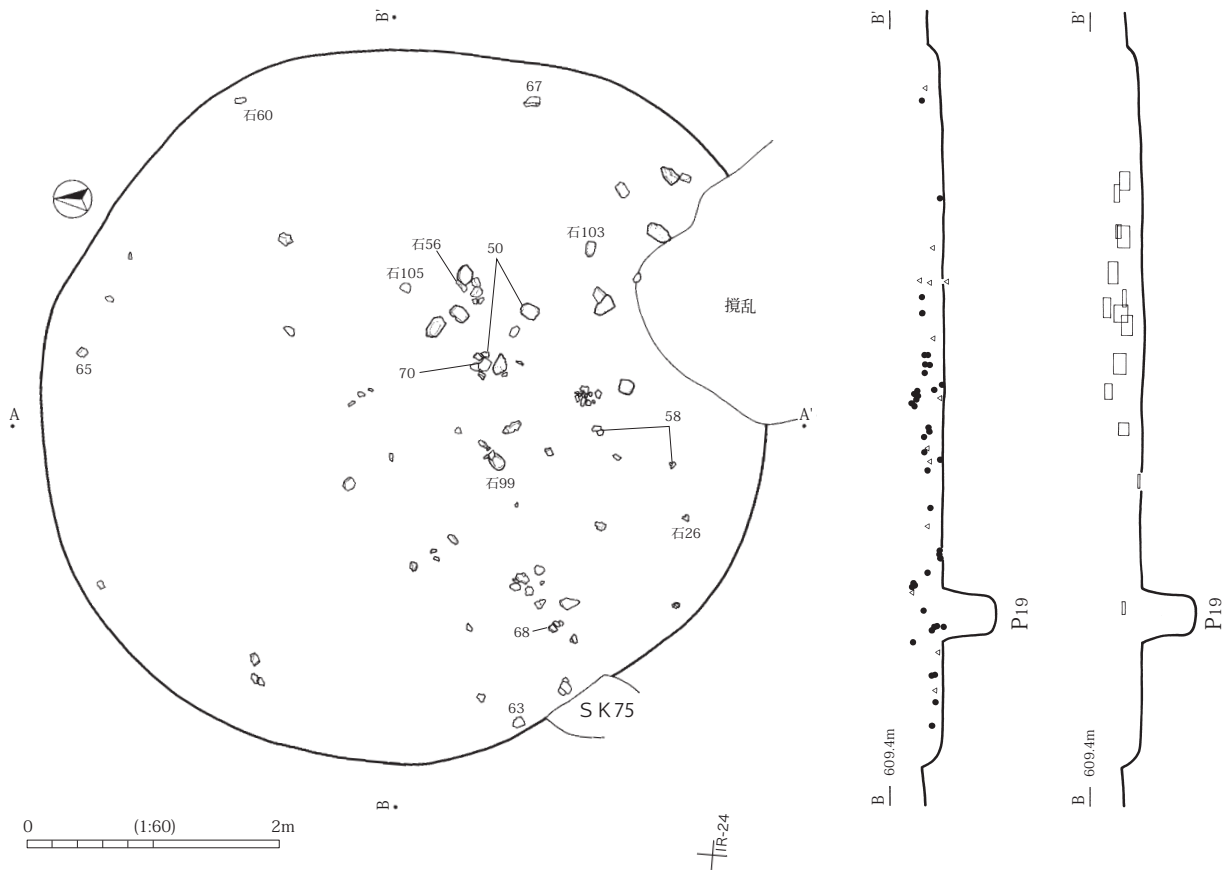
- 1 8.75YR3.5/4 暗褐色土 ややしまりあり
- 2 8.75YR3/3 暗褐色土 炭粒やや多い
- 3 8.75YR3/3.5 暗褐色土 炭粒やや少ない
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 北半部では本層上面に被熱面が散在
- 5 10YR4/6 褐色土 地山土の混入が多い
- 6 10YR3/4 暗褐色土 (ピット覆土) 黒灰色部分が小斑状に入る

- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (ピット覆土)
- 8 10YR3/3 暗褐色土 (ピット覆土)
- 9 10YR3/2 黒褐色土 (ピット覆土) 炭粒多い
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ピット覆土) やや粘性ある暗灰褐色土細ブロック混入 ややしまりあり
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (ピット覆土) 10より暗灰褐色土細ブロック多い しまりも劣る
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (ピット覆土) 暗灰褐色土細ブロック混入 11よりしまりあり
- 13 10YR3/4 暗褐色土 (ピット覆土) 6に似るが黒灰色小斑が少ない

第53図 S B 02実測図 (1) (1:60)

その他の施設：P19は平面真円形で、断面形はやや袋状を呈して深い。貯蔵穴と考えておきたい。柱穴P7・P8の中間に位置するP9は、小形で長楕円形を呈して浅く、長軸を壁と平行に向けて壁に接する。P7とP8の間隔は、相対する位置にあるP11・17間に比べて広く、そこに何らかの空間を必要としたことが推測される。さらに、P9のすぐ外側に位置するS K 75 (第62図)は、本遺構との切り合いが確認されなかったため、単独の土坑ではなく、本住居に伴って竪穴壁外を階段状に掘り込んだ施設であることも考えられる。このことから、P9は、S K 75とともに、出入口施設に関する可能性を想定しておきたい。

覆土：覆土は五層に分層された。初期に壁際に褐色土5層が堆積し、次いで、にぶい黄褐色土4層が床面を覆う。4層上面の中央部の北および東寄りに3箇所の被熱面が検出され、その周囲には焼土の広がり



第54図 SB 02実測図(2) (1:60)

がみられた。構造物は確認されない。その上に、炭化物を含む暗褐色土3・2層、ややしまりのある暗褐色土1層が堆積している。

遺物出土状況：覆土2層から遺物・礫の大部分が出土した。特に南東部に多い。3層は2層に次いで出土量が多いが、それでも2層との差は大きい。4・5層には少なく、床面出土はほとんどない。2層の遺物はいくつかの集中部と希薄部がみられるようにも思えるが、入り組んでおり、明確な偏在性は感じられない。土器はすべて破片で、縄文中期中葉IV～V期・後葉I期・後葉II期に相当する土器が混在して出土した。

時期：本住居跡には土器埋設炉や埋甕などがなく、覆土中の土器も上記の状況にあるため、帰属時期を決め難い。ここでは縄文中期中葉IV期～後葉II期の時間幅の中で捉えておくにとどめたい。

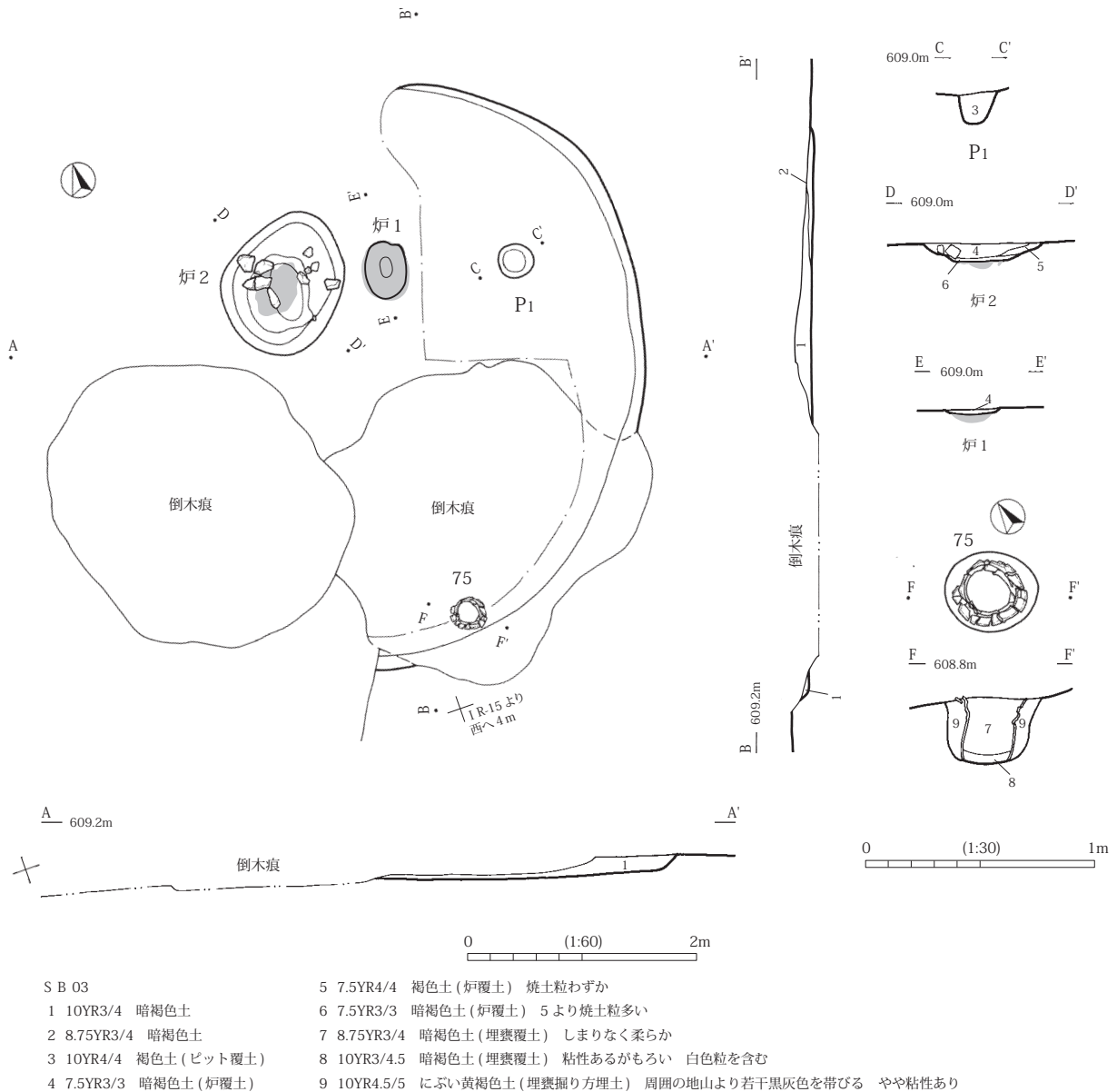
SB 03 (第49・55・66図、PL12・17)

位置：3区北端、I R-09 グリッドに位置する。

検出：II a層上面の検出。西部は畑造成の段切りにより床面が失われている。東部では、倒木の攪乱により南東側のプランは判然としなかったが、北東側で弧状を呈する壁ラインが明瞭に検出され、円形プランの竪穴であることが推測された。北東部の弧状ラインを南に延長して仮ラインを引き、それによって南東部を掘り下げると、壁際に若干の床面が残存しており、埋甕も検出された。なお、南西部においても本住居跡を切る倒木痕が検出された。

規模・形状：東側の残存部から推定すると、平面形は円形ないし楕円形を呈し、長径510cm程度と思われる。深さは最大15cmを測る。

床・壁：床が面的に残存するのは北東部に限られ、他は南東部の壁際に幅20cmほど帯状に残るだけである。床残存部は平坦で、貼床・硬化面は認められない。壁は南東側の下部と北東部が残存する。立ち上がりは



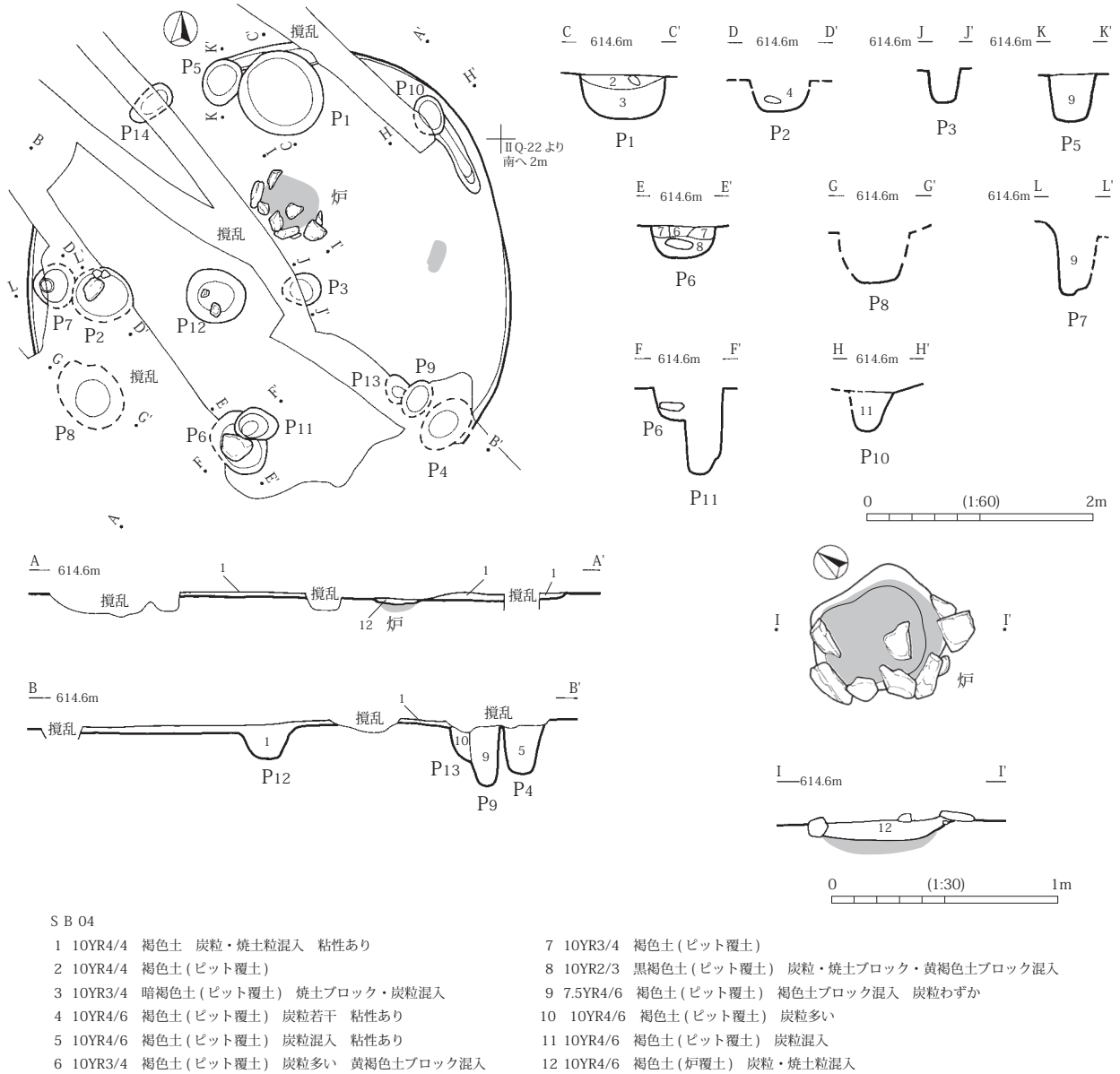
第55図 S B 03 実測図 (1:60 · 1:30)

比較的緩やかであるが、床面への変換点は明瞭である。

柱穴：確認できたのはP1の1基だけである。直径30cm、深さ25cmを測る円形のピットで、覆土は1層に似た褐色土である。

炉：東壁から想定される床範囲の北寄りに位置する。炉1は削平により、被熱赤変した炉床のみ残存する。検出状況では長径50cm、短径35cm、深さ6cm程の楕円形の浅い皿状を呈する。炉2は炉1の西隣にあり、やはり上部を削平されている。炉穴は二段掘り状になっていて、上段部分は長径130cm、短径100cmほどの不整な楕円形、下段部分は長径65cm、短径55cmほどの方形気味の楕円形を呈する。下段部分の底面が炉床となり、被熱赤変している。深さは、検出面から炉床最低部まで18cmを測る。段上から段下斜面に礫が残されており、本来、段上に炉石を置き並べた石囲炉の可能性があろう。

埋葬：南端部の壁際に1基検出された。胴下部を切り去った深鉢形土器を正位の状態で埋置している。土器は倒木の攪乱により口縁部の北側1/3を欠く。直径40cm、深さ30cmほどの掘り方底面に直に土器を設置し、壁との間にはにぶい黄褐色土を充填している。土器内覆土は暗褐色土で、二層に分層された。粘性ある厚さ4cmの下層は、しまりなく軟らかな上層とは明確に区別され、置き土の可能性も考えられる。



第56図 S B 04 実測図 (1:60・1:30)

覆土：残存する覆土はわずかであるが、二層に分層された。2層は北側の壁際にみられる暗褐色土で、1層よりやや赤みを帯びる。次いで、1層の暗褐色土が床面を覆う。

遺物出土状況：出土遺物は少ない。炉2から土器片数点が検出されたが、竪穴覆土にはほとんど含まれておらず、大部分は本住居を切る攪乱(倒木痕)から出土した。埋甕を除き、土器はすべて破片である。

時期：埋甕に用いられた土器から、中期後葉Ⅱ期と考えられる。

S B 04 (第50・56・67図、PL12・17)

位置：6区、Ⅱ Q-21・22 グリッドに位置する。

検出：Ⅱ層上面の検出である。床面近くまで失われ、表土(I a層)を除去した時点で炉石が露出した。西側の一部と北側～東側で竪穴の外形ラインを確認できたが、南端～西側にかけて倒木による攪乱で壁・床を失い、さらに数条の耕作トレンチャーに刻まれて、遺存状況は不良である。

規模・形状：平面形はやや東西に長い円形と考えられる。長径は425cmを測る。推定で、短径400cm、長軸方向N 84° E、床面積13㎡程度であろう。深さは最大8cmを測る。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床、硬化面は認められない。壁の立ち上がりは西側の一部と北側～東側で高さ数cmが残るのみである。

柱穴：P5・7・9・10・11が支柱穴と考えられる。ホームベース形に近い五角形状の配置となる。各柱穴は長径37cm程度の楕円形を呈する。深さは36～75cmとばらつきがある。P7・9・11の脇に一回り大形のピットP2・4・6が掘り込まれており、柱の立替えが行われた可能性があるものの、切合いは明らかにならなかった。

炉：中央北寄りに位置する石囲炉である。床を長径60cm、短径50cm、深さ10cmほど掘り窪めて炉床をつくり、掘り方外縁に石を配置する。現状では北半部に炉石はみられず、炉石掘り方も検出されなかった。これが本来的な形態であるのか明らかではない。炉床は全面的に被熱赤変している。また、床面東寄り、P9とP10の間にもう一箇所被熱面がある。

周溝：P5の東側およびP10の南側の壁際に溝状の掘り込みが認められる。後者は長さ60cm、前者は攪乱に切られて残存部は70cmほどだが、攪乱の東側には及ばない。

その他の施設：壁際に位置するP1は形態からみて柱穴とは考え難い。貯蔵穴であろうか。

覆土：褐色土の単層である。

遺物出土状況：出土遺物は少ない。覆土や攪乱から土器片、石器が散在的に出土した。土器は縄文中期中葉末～後葉I期に相当するものである。

時期：出土した土器の様相から、縄文中期中葉末～後葉I期と考える。

S B 05 (第50・57・67図、PL13・18)

位置：6区、II Q-16・21グリッドに位置する。

検出：II層上面の検出である。南西端の一部で耕作トレンチャーに攪乱され、壁・床が失われている。

規模・形状：平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径540cm、短径448cm、長軸方向N 3° W、床面積17.8㎡(一部復元)を測る。深さは最大28cmである。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床、硬化面は認められない。壁は急角度で立ち上がり、床面への変換点も明瞭である。

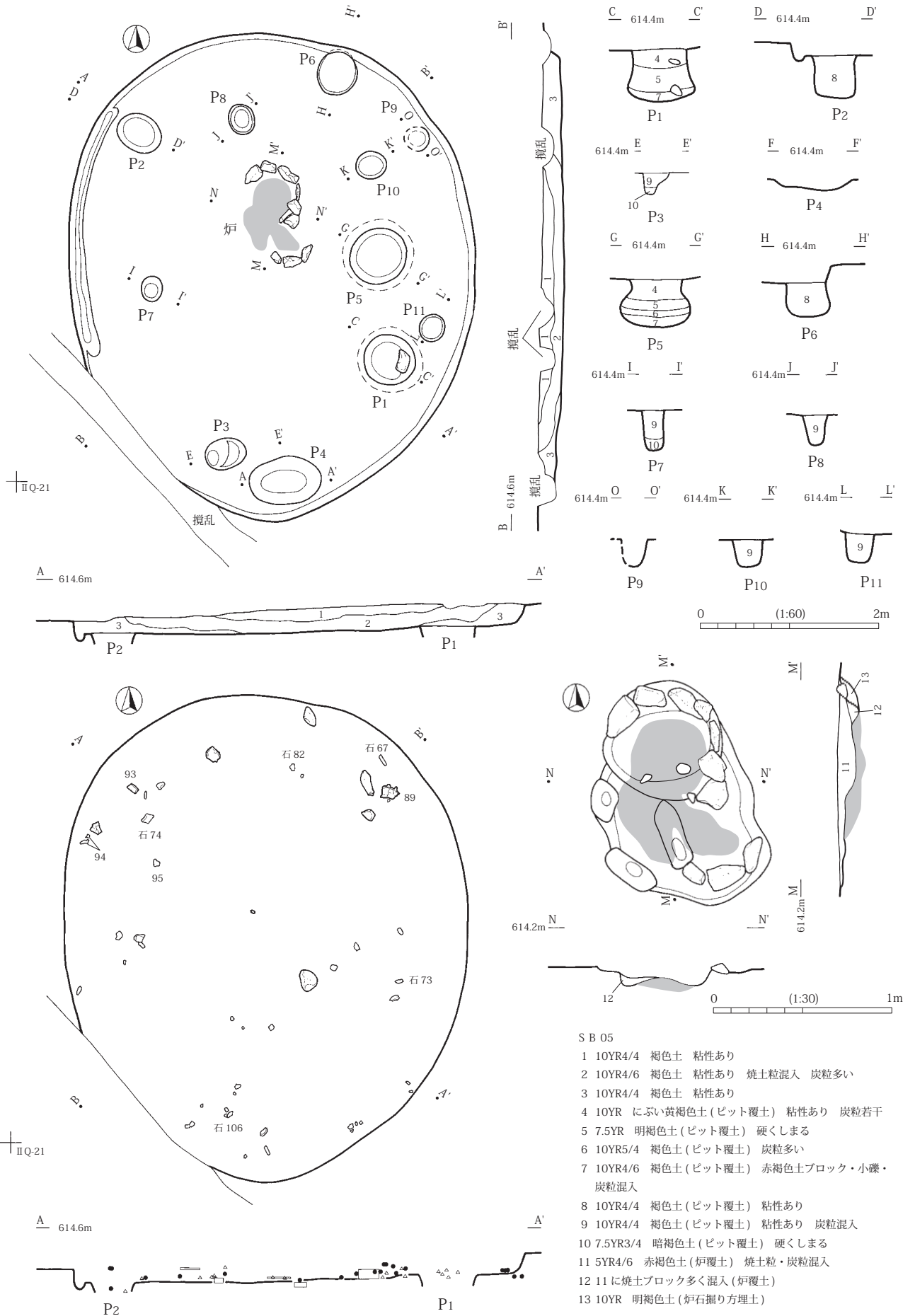
柱穴：P3・7・8・10・11の5基が支柱穴と考えられる。長径30～50cmの楕円形気味の形状を呈する。P3のみやや大形だが、二段掘り状の下段部は他の4基とほぼ同規模である。深さは35～42cmを測る。5基の柱穴配置は歪んだホームベースのような形状を呈する。また、一回り大形のP2・P6を加えて考えることも可能であろう。この場合は長方形に近い柱穴配置となる。

炉：中央北寄りに位置する石囲炉である。炉の範囲は南北130cm、東西90cmの楕円形を呈する。炉床はよく焼けて赤変している。北側の部分は直径70cm前後、深さ20cmほどに一段深くなっていて、掘り方外縁に炉石を据え付けるが、現状では石は北縁～東縁に残存する。南側の部分はごく浅く、炉床は床面とさほどレベル差がなく、西縁に炉石抜き取り痕と思われる凹部が認められる。こうした状況から、炉の作り替えが行われ、南部は旧炉、北部は新炉にあたるのが推測される。また、南部の南端にも石が弧状に並び、さらに石列の延長上に、南部の炉床被熱面中央を切るように細長い窪みが認められる。これが炉石抜き取り痕であるとすれば、新炉が複炉構造をもつ可能性も考えられる。

周溝：西壁際には周溝が認められる。深さは10cmほどである。

その他の施設：東寄りに掘り込まれたP1・5は大形で深い袋状の断面形態をもつことから貯蔵穴と考える。

覆土：覆土は三層に分層された。初期に壁際に褐色土3層が堆積し、次いで、焼土粒・炭粒を含む褐色土2層が床面を覆う。その上に褐色土1層が堆積する。



遺物出土状況：出土遺物は多くない。覆土・床面・ピットから土器片、石器が散在的に検出された。土器は縄文中期中葉末～後葉I期に相当するものである。

¹⁴C年代測定：（株）加速器分析研究所に委託して、P5出土の炭化物の放射性炭素年代測定（AMS）を行った。測定結果は4440 ± 60yrBP（半減期5568年）である。付属CDに測定結果報告書を収録したので参照されたい。暦年較正年代（使用プログラムOxCal v3.9）では3340BC（95.4%）2910BC〔95.4%probability〕となり、小林謙一氏による縄文中期の実年代推定（小林2008）に対比すれば、縄文中期中葉藤内1式から後葉曾利I式併行期に相当しよう。

時期：出土した土器の様相から、縄文中期中葉末～後葉I期と考える。上記の放射性炭素年代測定結果とも矛盾しないと考えられる。

(2) 建物跡

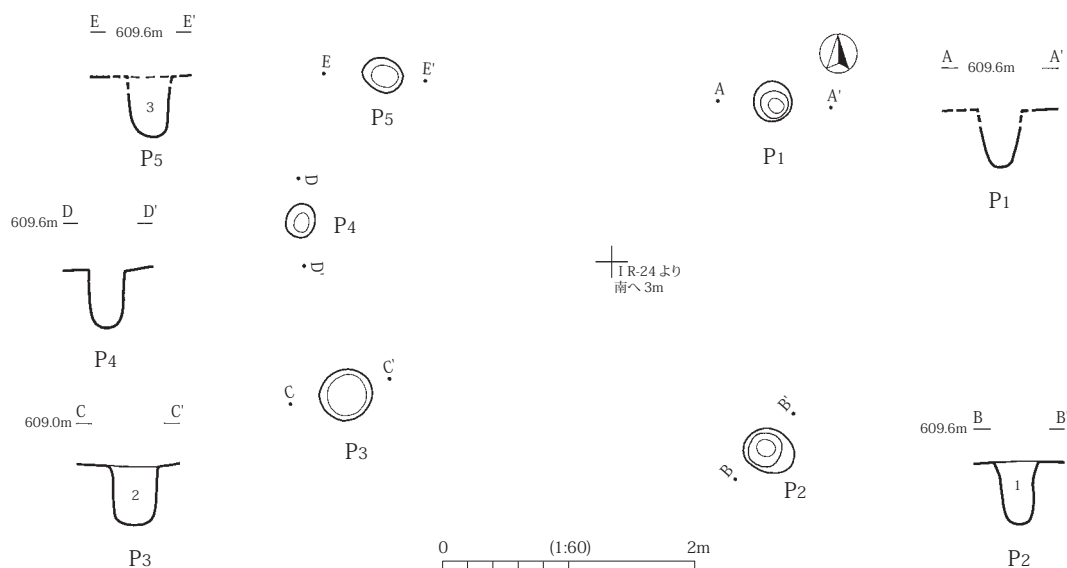
ST 01（第49・58・68図、PL13・18）

位置：3区中央やや西、IR-23・24グリッドに位置する。

検出：II a層上面の検出となる。IR-23・24には土坑が集中しているが、そのなかに、直径30cm前後の柱穴様の小形土坑が幾つか検出されていた。また相対的に大形の土坑には、上記の小形土坑とほぼ同形同大の、一段深い落ち込みがみられるものがあり、それらは別遺構の可能性が考えられた。規則的な配列がみられるか検討してみたところ、以下の5基が把握された。SK 71中央の落ち込み、SK 43、SK 68、SK 63東側の落ち込み、SK 64南側の落ち込み、である。これらを建物跡と捉えた。ST 01と呼称することとし、遺構番号を各々ST 01のP1～P5に振り替えた。P1・4・5は、それぞれSK 71・63・64の底面まで掘り下げた段階で検出されたため、SKとの切り合い関係は確認していない。

構造：ホームベース形の柱穴配置を取る。長軸長3.7m、短軸長2.6mを測り、長軸方向はN 85° W。各柱穴は円形を呈し、直径は40cm～25cmで、P4のみ一回り小形である。深さは49～46cmとほぼ一定する。覆土は概ね類似している。

遺物：P2の覆土中位から、比較的多くの土器片が出土した。



ST 01

- 1 10YR3/2 黒褐色土 炭粒多い
- 2 10YR2/3.5 暗褐色土 炭粒やや多い 黒褐色土が斑状に入る
- 3 10YR3/3 暗褐色土 炭粒やや多い しまりなし

第58図 ST 01 実測図 (1:60)

時期：P2 出土の土器から、縄文中期後葉Ⅲ期と考える。

(3) 竪穴状遺構

S X 01 (第 48 図)

位置：1 区北西部の I T-19 グリッドに位置する。

検出：Ⅱ層上面で検出された。覆土は周囲の地山とは明瞭に識別できた。

形態：南側を試掘トレンチに大きく切られ、東側では壁立ち上がりが失われている。残存する部分の規模は 2 m × 1 m ほど、深さ最大 4 cm で、隅丸長方形ないし隅丸方形のプランをもつことが想像されるが、明確ではない。底面はおおむね平坦ながら小さな凹凸が随所にみられる。硬化部分は認められない。残存部およびその周辺を繰り返し精査したが、柱穴・炉などの施設は確認されなかった。

覆土：やや赤みを帯びた暗褐色土の単層である。

時期：遺物が全く出土せず、構造も明らかでないため、帰属時期は不明である。

(4) 土坑 (第 49・59～62・68～70 図、第 6 表、PL13・18・19)

確認された土坑は 77 基を数える。検出時に遺構 (S K) 番号を付したが、調査の結果、遺構でない判断したもの、S T 01 の柱穴に再認定したものがあつ、そのため欠番が生じている。3 区および 4 区に認められ、検出は竪穴住居跡と同様にⅡ a 層上面である。第 6 表に各土坑の属性を示した。

① 時期

出土土器から個々の土坑の時期を決定するのは困難な状況である。総体的にみると、土坑から出土した土器のうち、時期を絞り込めるものは、わずかに早期末葉～前期初頭および中期初頭があるものの、ほとんど中期中葉～後葉に属する。石器についても、打製石斧・横刃型石器・磨製石斧・石錘・石鏃といった当地域の縄文中期に通有な器種である。また、遺構外出土土器に中期中葉～後葉以外のものがほとんど認められない。さらに、土坑の分布は住居跡に隣接した範囲にまとまり、住居との関連が看取される。以上の点からみて、土坑はほぼ縄文中期中葉～後葉の所産と推測される。

② 形状と規模

平面形状は円形を基調とする。方形と呼べるものはない。長径/短径 = 1.2 未満のものを円形、1.2 以上のものを楕円形に分類した。楕円形の長短比は、最大でも S K 71 の 1.38 にとどまり、長楕円形と呼べるような細長い形状は確認されない。

断面形状は以下のように分類した。平底状：広く平坦な底面をもつもの。丸底状：広く丸い底面から壁が斜めに立ち上がるもの。すり鉢状：狭く丸い底面から壁が斜めに立ち上がるもの。円筒状：径長に比べて深さがあり (深さ/短径が 0.8 以上)、壁が垂直に近い角度で立ち上がるもの。以上の四分類である。袋状を呈する形状や、陥し穴を想定させるような形態の土坑は認められない。なお、S K 12・19・50・64・89 は底面に凹部をもち、二段掘り状をなす。

規模については、短径長を基準に小形・中形・大形に三分類する。小形：40 cm 未満、中形：40 cm 以上 80 cm 未満、大形：80 cm 以上。最大の S K 33 でも長径 113 cm、短径 93 cm であり、極端に規模の大きな土坑はない。

上記の基準を組み合わせると各土坑は以下のように分類される。

小形円形 18 基：S K 09、15、36、45、60、77、80、84 (以上平底状)、18、28、38、40、48、81、83、85、88 (以上円筒状)、86 (すり鉢状)

小形楕円形 4 基：S K 29、30 (以上平底状)、82、87 (以上円筒状)

中形円形 32 基：S K 01、02、06、10、12、16、21、23、24、25、41、42、52、54、57、64、70、73、76、78、79、91（以上平底状）、20、34、35、39、58、63、66、74、90（以上丸底状）、19（円筒状）

中形楕円形 17 基：S K 03、07、08、13、17、22、26、27、31、51、55、71、72、75、89（以上平底状）、11、69（以上丸底状）

大形円形 4 基：S K 49、50、61、62（以上平底状）

大形楕円形 1 基：S K 33（平底状）

上記の形態分類が土坑の機能や性格をどのように反映しているのかを読み取ることは難しいが、平面規模が小さく円筒状の断面形状をもつものについては、竪穴住居跡や建物跡の柱穴形態に類似していることから、何らかの施設の柱穴である可能性を想定しておきたい。ただし、前記S T 01に認定したものを除き、建物跡と把握できるような規則的な配置を示す例は認められなかった。なお、小形土坑のうちS K 29・30を除く断面平底状・すり鉢状の9基は、いずれも浅いため円筒状に分類されないが、耕作等による削平を想定するならば、本来、円筒状の形状をもっていたと考えることも可能であろう。

③ 遺物の出土状況

土坑からは、土器、様々な種類の石器、礫が出土した。しかし、遺物は覆土中の、多くは中位～上位から無秩序に出土しており、土器は小破片の状態を呈する 경우가ほとんどである。大形石皿1点が底面ほぼ直上から出土したS K 72、完形に復元できないが同一個体の土器大形破片が多数出土したS K 02等の例はあるものの、いずれも確実に意図的に納置したと看做し得る状況ではない。土坑出土の遺物は、土坑が埋没する過程で廃棄された、あるいは流入したと考えられるもので、その土坑本来の機能には結び付かない可能性が高い。なお、いずれの土坑でも人間を含めた動物遺体や植物遺体は確認されなかった。

④ 分布（第49図）

土坑は、調査区全体に散漫に分布するのではなく、幾つかのまとまりをもって分布する傾向を示している。まとまりの範囲は以下の4箇所を認めうる。

A群（S K 33・39ほか）は、I R-14・15・20グリッドに位置し、S B 02から北東側に約5m離れた地点を中心とした8m×2mほどの範囲に分布する。A群は東西二つの小群に分けることができる。

B群（S K 49ほか）は、I R-19・23・24グリッドで、S B 02から南西に約5m離れた地点を中心とした12m×8mほどの範囲に広がっている。中央にはS T 01が土坑群と切り合って位置する。

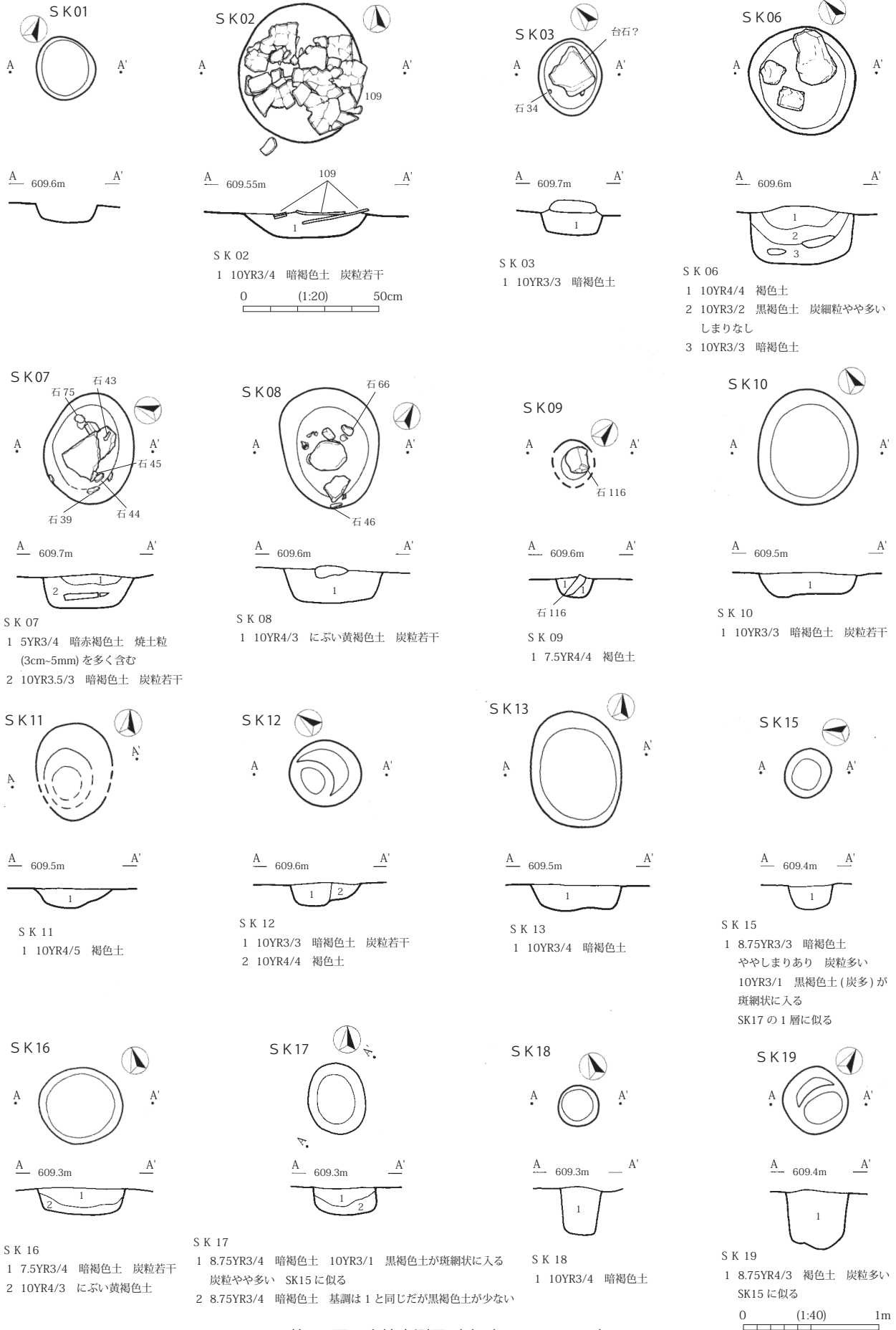
C群（S K 22ほか）は、I R-19・20・25グリッドで、S B 02から東南東に約7m、S B 01から北に約6m離れた地点を中心とした10m×6mほどの範囲に広がっている。

D群（S K 06ほか）は、I W-04・05・09・10グリッドで、S B 01から南南西に約7m離れた地点を中心とした12m×12mほどの範囲に広がっている。

土坑の規模をみると、大形土坑がA・B群だけにみられることを除けば、構成比率は異なるが、各群に先の分類すべてが含まれている。大形土坑がC・D群にみられないことについても、C群のS K 22は大形に含めてもおかしくないほどの規模をもち（中形最大）、D群には中形の中でも最大の部類に属する土坑がまとまっている。そうすると、各群における土坑規模の構成に顕著な偏りは看取されないように思われる。また、小形土坑が各群に存在することは興味深い。

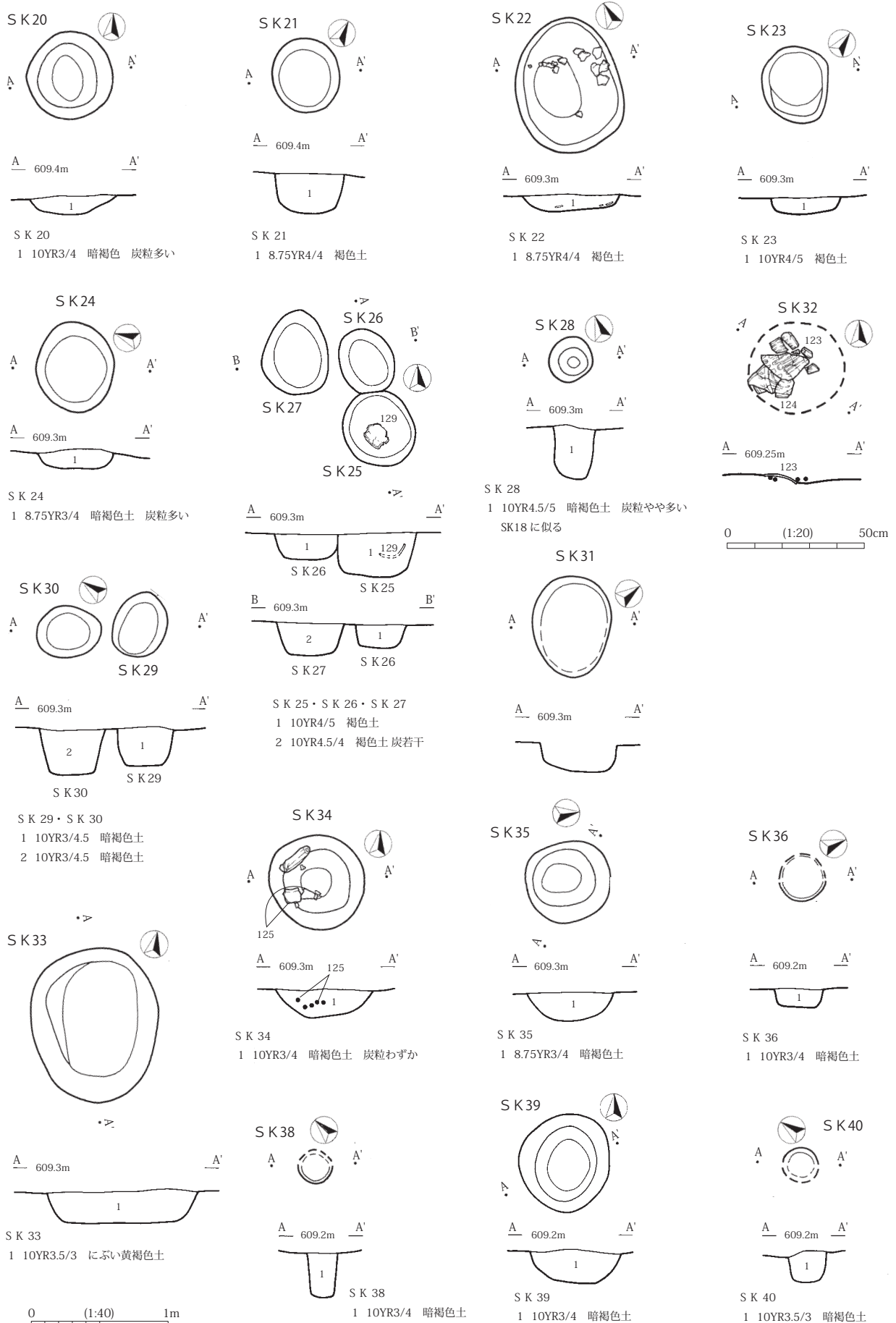
A群は東西二つの小群に分けることができる。B～D群さらに群外においても、単独あるいは隣接する2・3基が小単位を成すように見受けられる。1～3基がひとつの契機に構築される単位で、それが集落内の一定の範囲内に繰り返された結果、4箇所の大きなまとまりが形成されたことが推測される。4箇所のまとまりは住居跡に隣接しており、関連を窺わせる。ただし、特定住居との相関を捉えるには至らなかった。

第1節 下り松遺跡

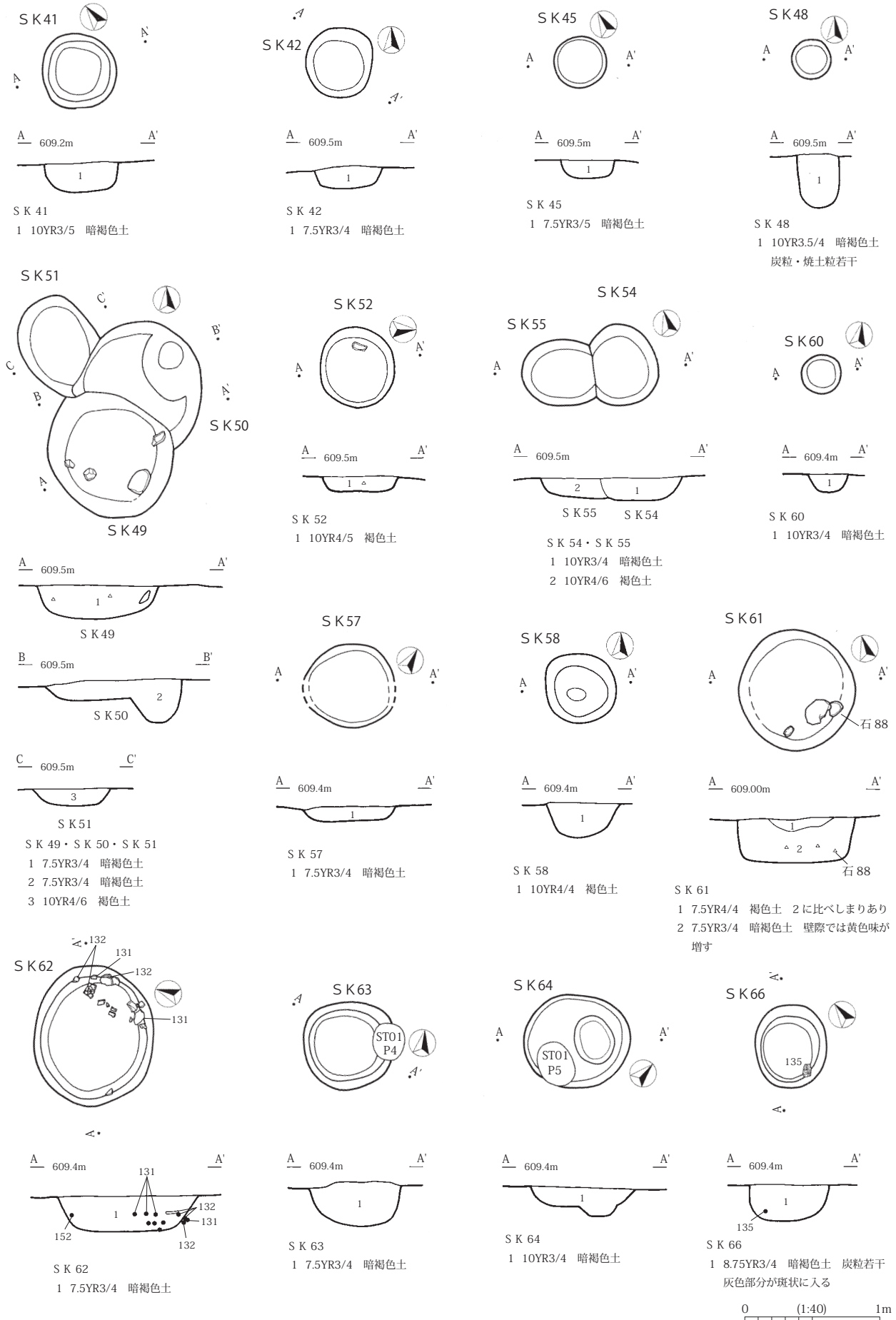


第59図 土坑実測図(1) (1:20・1:40)

第5章 本線部分および工事用道路部分の調査

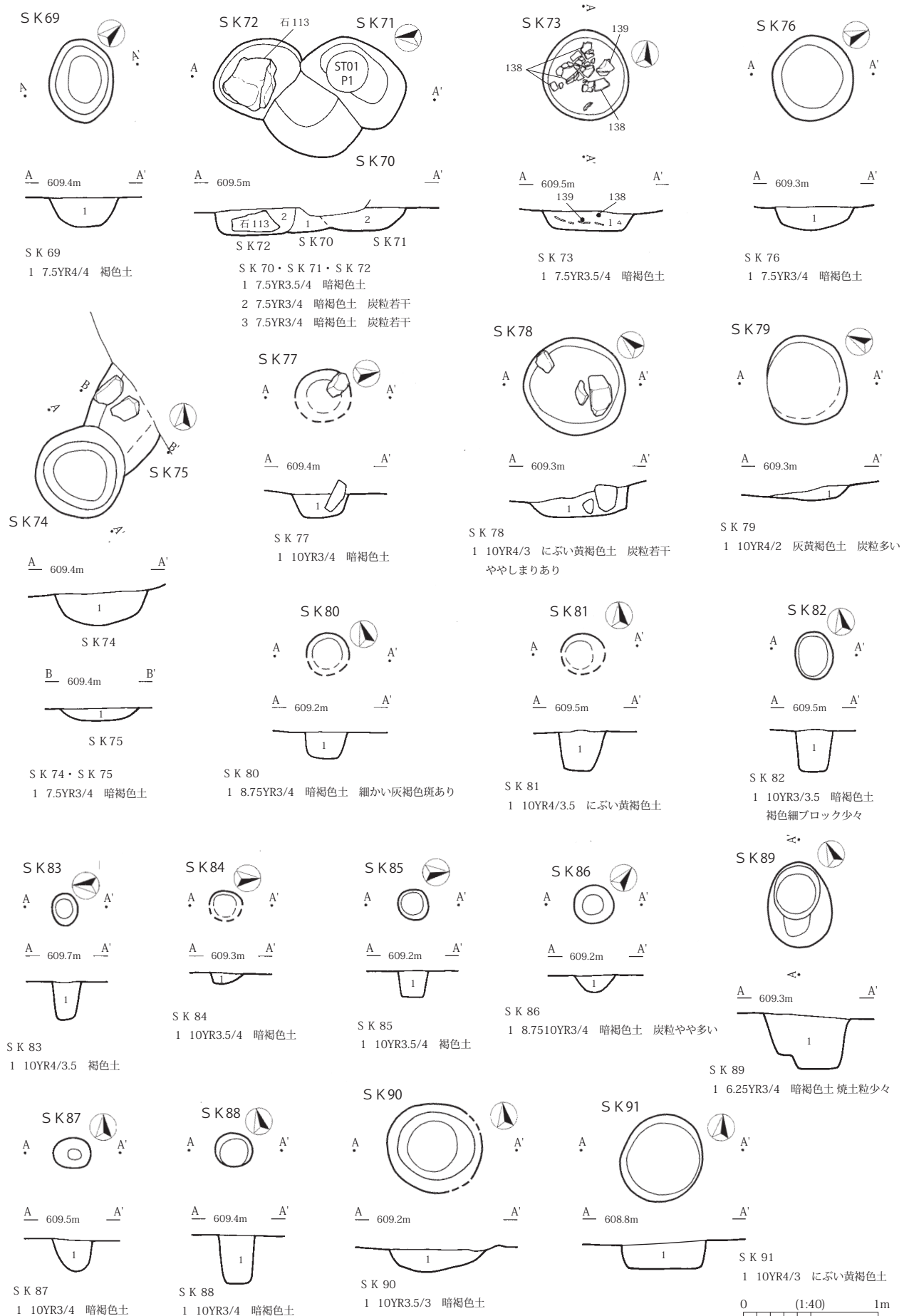


第60図 土坑実測図(2) (1:20・1:40)



第 61 図 土坑実測図 (3) (1 : 40)

第5章 本線部分および工事用道路部分の調査



第 62 図 土坑実測図 (4) (1 : 40)

第6表 土坑一覧1

SK 番号	位置	時期	形状		規模 (cm)			遺物		備考	掲載図版No	
			平面形	断面形	長径	短径	深さ	土器	石器		図 No	写真 PLNo
01	I W 10	中期	円形	平底状	47	43	14	早期末葉～ 前期初頭 中期	剥片 A1		59	
02	I W 10	中期	円形	平底状	50	46	9	中期	石鏃1、剥片2	土器片多(ほと んど同一個体)	59	
03	I W 09	中期	楕円形	平底状	56	46	25	—	楔形石器1、横刃型 石器2、磨製石斧1、 台石?1		59	13
06	I W 10	中期	円形	平底状	80	74	43	中期中葉 中期中葉 中期	打製石斧1、台石? 1、剥片2		59	
07	I W 09	中期	楕円形	平底状	82	66	24	中期	打製石斧5、横刃型 石器3、剥片 B3 2、 剥片2	大形板状礫1	59	
08	I W 09	中期	楕円形	平底状	88	72	27	中期後葉II期 中期	石鏃1、打製石斧5、 磨石1、台石?1、 石核1、剥片1	大形礫1	59	
09	I W 10	中期	円形	平底状	35	32	17	—	石皿1		59	
10	I W 05	中期	円形	平底状	85	73	18	中期	石鏃1、石錘2、剥 片2		59	
11	I W 05	中期	楕円形	丸底状	70	56	14	中期	磨製石斧1		59	
12	I W 04	中期	円形	平底状 (二段)	52	50	上12 下5	繊維土器 中期	打製石斧1、横刃型 石器1、石錘1、剥 片1		59	
13	I W 05	中期	楕円形	平底状	86	67	15	中期	磨製石斧2、石錘1、 剥片 A1、剥片3		59	
15	I R 25	中期	円形	平底状	36	32	17	中期	微細な剥離がある剥 片1、剥片1		59	
16	I R 25	中期	円形	平底状	62	56	24	中期中葉～後葉	横刃型石器1、磨石 1、剥片1		59	
17	I R 25	中期	楕円形	平底状	51	42	18	中期中葉～後葉	—		59	
18	I R 25	中期	円形	円筒状	30	28	35	中期中葉 中期	石皿1		59	
19	I R 25	中期	円形	円筒状 (二段)	49	46	41	中期中葉～後葉	打製石斧2、剥片1	底部南西半部に 深さ3cmの凹部	59	
20	I R 25	中期	円形	丸底状	64	62	11	中期中葉～後葉	打製石斧1		60	
21	I R 25	中期	円形	平底状	56	50	28	中期中葉 中期	剥片1		60	
22	I R 25	中期	楕円形	平底状	98	77	12	中期	剥片1		60	
23	I R 25	中期	円形	平底状	56	49	13	中期	—		60	
24	I R 25	中期	円形	平底状	66	56	13	中期後葉 中期	打製石斧1、剥片2		60	
25	I R 25	中期	円形	平底状	58	51	32	中期中葉 中期	横刃型石器1、剥片 1		60	13
26	I R 20・25	中期	楕円形	平底状	50	40	17	中期	二次加工がある剥片 1、剥片1		60	13
27	I R 20・25	中期	楕円形	平底状	60	48	23	中期中葉～後葉	剥片3		60	13
28	I R 20・25	中期	円形	円筒状	34	32	38	中期	—		60	
29	I R 20・25	中期	楕円形	平底状	48	37	27	中期	打製石斧1、剥片2		60	
30	I R 20	中期	楕円形	平底状	48	38	35	中期中葉～後葉	—		60	
31	I S 16	—	楕円形	平底状	72	56	20	—	—		60	
32	I R 20	中期	—	—	—	—	—	中期中葉末～ 後葉I期 中期	—	壁立上り欠失。 覆土(黒褐色土) 僅かに残存	60	
33	I R 20	中期	楕円形	平底状	113	93	25	中期中葉～後葉	横刃型石器1		60	
34	I R 20	中期	円形	丸底状	72	68	21	中期中葉～後葉	剥片2		60	
35	I R 15	中期	円形	丸底状	62	60	20	中期中葉～後葉	—		60	
36	I R 15	中期	円形	平底状	34	33	14	—	磨製石斧1		60	
38	I R 14	—	円形	円筒状	24	24	34	—	—		60	
39	I R 14	中期	円形	丸底状	72	65	24	中期	横刃型石器1		60	
40	I R 14	—	円形	円筒状	26	25	22	—	—		60	
41	I R 14	中期	円形	平底状	55	54	22	中期中葉 中期	—		61	
42	I R 24	中期	円形	平底状	53	49	16	中期	—		61	
45	I R 25	中期	円形	平底状	38	37	13	中期	—		61	
48	I R 23	中期	円形	円筒状	30	30	39	中期中葉～後葉	—		61	
49	I R 23	中期	円形	平底状	98	復元(86)	24	中期	打製石斧1、横刃型 石器1、剥片 B3 1	SK50を切る	61	

第6表 土坑一覧2

SK 番号	位置	時期	形状		規模 (cm)			遺物		備考	掲載図版No.	
			平面形	断面形	長径	短径	高さ	土器	石器		図 No	写真 PLNo
50	I R 23	中期	円形	平底状 (二段)	復元<99>	復元<91>	上14 下17	中期	—	SK49に切られる	61	
51	I R 23	—	楕円形	平底状	復元<76>	57	13	—	—		61	
52	I R 23	中期	円形	平底状	59	54	11	中期中葉 中期	石鏃未成品1		61	
54	I R 23	中期	円形	平底状	60	56	16	中期中葉～後葉	—	SK55を切る	61	
55	I R 23	中期	楕円形	平底状	復元<63>	48	14	中期	—	SK54に切られる	61	
57	I R 23	中期	円形	平底状	69	60	11	中期中葉	剥片 B3 2、剥片 1		61	
58	I R 23	中期	円形	丸底状	56	52	26	中期	剥片 3		61	
60	I R 23	—	円形	平底状	30	30	13	—	—		61	
61	I R 23	中期	円形	平底状	89	86	32	中期	石鏃1、打製石斧1、 横刃型石器1、剥片6		61	
62	I R 23	中期	円形	平底状	104	88	27	中期中葉 中期	石錘1、剥片6		61	
63	I R 23	中期	円形	丸底状	68	64	32	中期	剥片 2	ST01P4と切合う	61	
64	I R 23	中期	円形	平底状 (二段)	77	68	13	中期	—	北東部にビット 状の凹部 S T 01 P 5と 切り合う	61	
66	I R 23	中期	円形	丸底状	61	53	27	中期中葉 中期	打製石斧2、石錘1		61	
69	I R 23	—	楕円形	丸底状	61	46	21	—	—		62	
70	I R 24	中期	円形	平底状	復元<80>	復元<70>	17	中期	—	SK71・72に切ら れる	62	
71	I R 24	中期	楕円形	平底状	76	復元<55>	17	中期	石錘1	SK70を切る。 ST01P1と切合う	62	
72	I R 24	中期	楕円形	平底状	69	56	19	中期	石皿1、剥片 B3 1	SK70を切る	62	
73	I R 24	中期	円形	平底状	65	62	15	中期中葉 中期	剥片 C 1	土器片多	62	13
74	I R 19	中期	円形	丸底状	66	64	23	中期中葉～後葉	—	SK75を切る	62	
75	I R 19	中期	楕円形	平底状	残存 64	60	10	中期	台石? 2	大形礫 2 SK74に切られる	62	
76	I R 19	中期	円形	平底状	63	59	18	中期中葉～後葉	石鏃未成品1、 剥片 B1 1		62	
77	I R 19	—	円形	平底状	42	39	27	—	—		62	
78	I W 02	中期	円形	平底状	75	72	24	中期	二次加工がある剥片 1	大形礫 3	62	
79	I W 02・07	中期	円形	平底状	65	58	12	中期	横刃型石器1、 剥片 B2 1、剥片 2		62	
80	I R 10	中期	円形	平底状	32	31	19	中期中葉末～後 葉 I 期 中期	—		62	
81	I W 10	中期	円形	円筒状	32	28	29	中期	—		62	
82	I W 10	—	楕円形	円筒状	35	27	31	—	—		62	
83	I W 09	—	円形	円筒状	22	20	28	—	—		62	
84	I W 04	—	円形	平底状	24	22	8	—	—		62	
85	I R 24	中期	円形	円筒状	23	22	18	中期	—		62	
86	I R 20	中期	円形	すり鉢 状	29	28	13	中期中葉～後葉	打製石斧1		62	
87	I R 24	—	楕円形	円筒状	30	24	23	—	—		62	
88	I W 05	—	円形	円筒状	28	26	34	—	—		62	
89	I W 05	中期	楕円形	平底状 (二段)	62	46	上29 下9	中期中葉～後葉	—	SB01 焔を切る 旧 SB01P4	62	
90	I R 19	—	円形	丸底状	70	67	17以上	—	—	SB02 焔に切られ る 旧 SB02P8	62	
91	I R 09	中期	円形	平底状	65	58	21	中期中葉～後葉	—	SB03を切る 旧 SB03P1	62	

SK04・05・14・37・43・44・46・47・53・56・59・65・67・68は欠番

(5) 流路跡

SD 01 (第48図)

表土 (I a) 層直下で検出した。1 区の南西部に位置する。地形面の走向にほぼ直交して、北北東から南南西に向かって流下し、調査区西隅で SD 02 と合する。切り合いは明らかにならなかった。北端から SD 02 との合一点までの長さ 8.5 m を測る。兩岸の形状はやや不整形で、幅は 90 cm ~ 1.4 m となる。北半部は深さ 10 cm と浅く、底は平坦で立ち上がりも緩やかだが、北端より 5 m を過ぎた辺りから断面 U 字形ないし V 字形となって深さも増し、南端では深さ 50 cm 程になる。覆土はしまりのない黒褐色土 (10YR3/2) の単層である。遺物は、縄文時代の打製石斧、近世後期の陶器片、19 世紀以降と思われるキセル吸口が出土している。近世末以降に埋没した自然流路跡と考える。なお、玦状耳飾 (第 72 図) は表土出土であるが、平面的な位置は SD 01 の北端部にあたる。

SD 02 (第48図、PL13)

表土 (I a) 層直下で検出した。1 区南壁に沿うように、東南東から西北西に向かって延びている。最上流部は 3 本に分かれており、それらが一つに合流した後、緩やかな弧状を描いておよそ 27 m を流下し、SD 01 と合する。そこで南に屈曲して調査区外に延びてゆくが、想定される延長方向は SD 01 の走向に一致する形勢を示している。最上流部の 3 本のうち全体を検出したのは北側の 1 本で、幅と深さを次第に増大させつつ 2.7 m 西走し、合流直前では幅 80 cm、深さ 30 cm となる。合流以後はところにより異なるが、幅 1 ~ 2 m、深さ 30 ~ 50 cm の規模をもつ。断面形は緩い U 字形を呈するが、底面中心部は溝状に抉れている。この抉れは最上流部から西端まで連続して認められる。おそらく水流の中心にあたる部分であろう。覆土は SD 01 と同様なしまりのない黒褐色土 (10YR3/2) であるが、地山の黄褐色 ~ 明褐色細ブロックを多く含む部分がラミナ状に介入するところもある。遺物は縄文時代の打製石斧、近世陶器片、近代磁器・瓦が出土している。近代以降に埋没した自然流路跡と考える。

5 出土遺物

(1) 土器 (第 63 ~ 71 図、PL14 ~ 20)

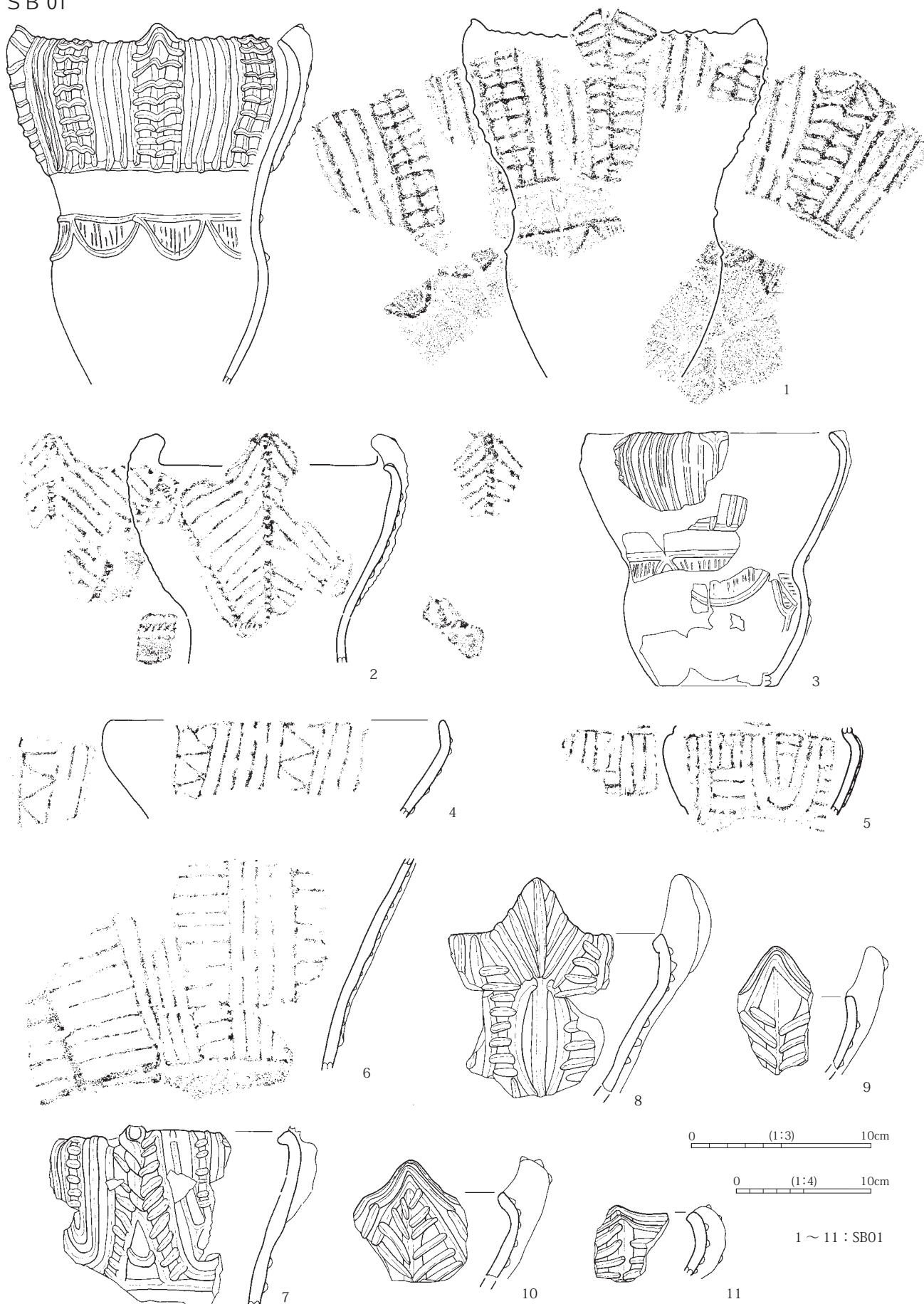
今回の調査では、縄文時代早期末葉 ~ 前期初頭、中期初頭、中期中葉、中期後葉の土器が出土した。主体を占めるのは中期中葉 ~ 後葉である。以下、縄文土器について記述するが、中期については、時期的な位置付けは長野県史編年 (三上ほか 1988) に対比しつつ行うこととする。

SB 01 出土の土器 (第 63 ~ 65 図、PL14 ~ 16)

1 ~ 49 はいずれも覆土から出土した。細隆線文土器 (米田 1980) を主体として、それとともに少量の東海系北屋敷式土器が出土している。古い時期の可能性のある 41・47 や、文様や器形が判然としないため位置付けが不明確な 32・49 もあるが、おおむね中期中葉末 ~ 後葉 I 期に相当すると考えられる。

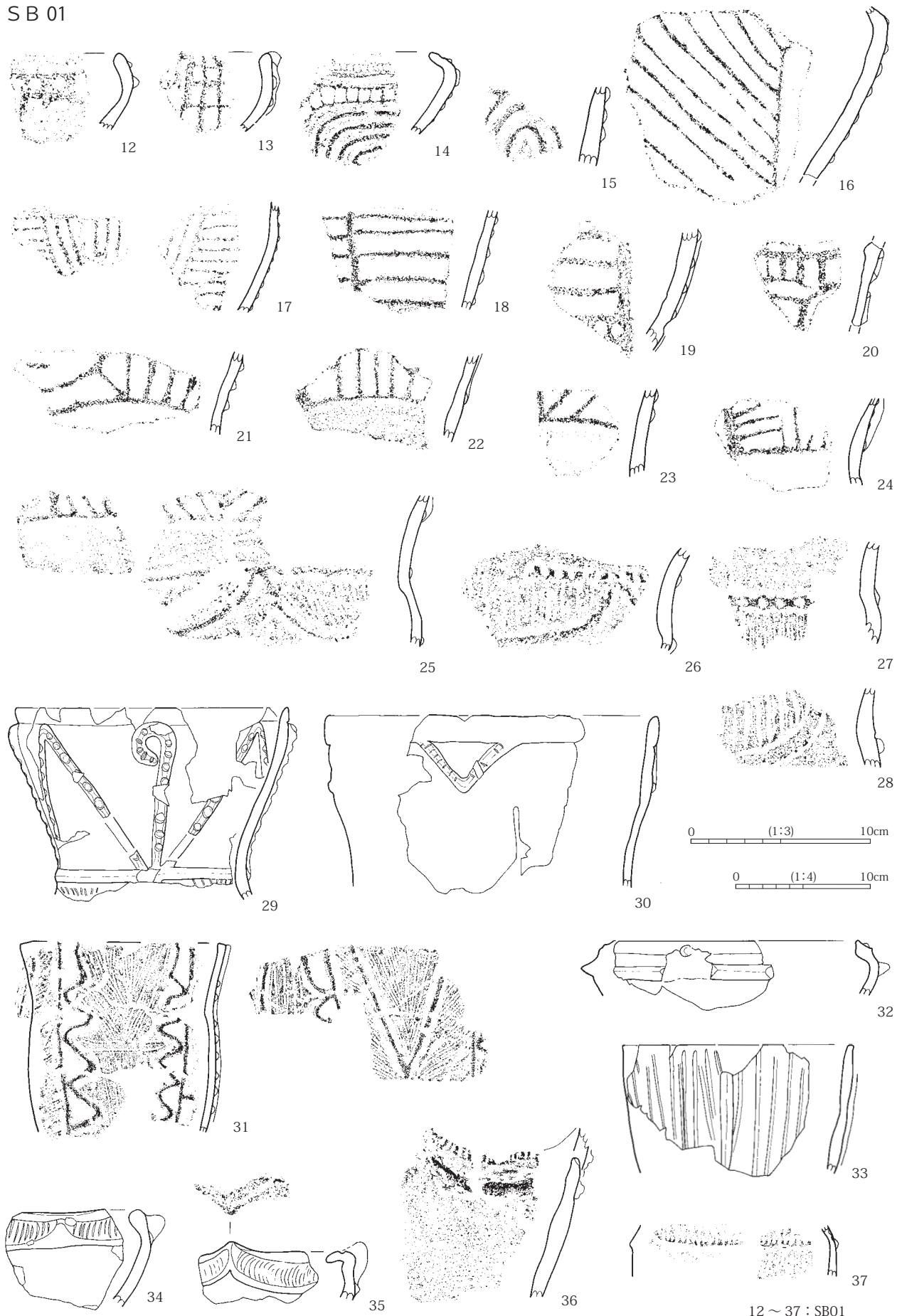
1 ~ 25 は口縁部に細い隆帯を密接貼付して文様を構成することを特徴とする一群で、本遺構出土土器の主体をなす。いわゆる細隆線文土器、また、飯田市大門原遺跡の第 3 群 a 類 (下平 1999) に相当するもので、下伊那の中期中葉末 ~ 後葉初頭に特徴的な土器群である。器形全体が判明するものは多くないが、1 ~ 3 の例からすると、口縁部が内彎して頸部がくびれ、くびれ部から外に張ってから底部にかけてすばむ深鉢形の土器である。頸部に無文帯を設定して口縁部文様帯と胴部文様帯を分割する。口縁上端に角状・山形状の突起が付く 1・2・8・9・10 があり、また、縦位の細隆帯や区画文様帯の上端部に小突起が付く 3・7 がある。1・2 は 4 単位の突起となる。口縁部文様帯は、突起から垂下する相対的に太く高めの隆帯、

SB 01



第63図 土器実測図 (1) (1:3・1:4)

SB 01



第64図 土器実測図(2) (1:3・1:4)

あるいは細隆帯を組み合わせた縦位の文様帯で区画された内部に、細隆帯を密接貼付して装飾文様を構成する。区画隆帯には、刻みが施される2、撚紐状隆帯が用いられる7もある。装飾文様は、細隆帯を縦位、横位、斜位に貼付したり、また梯子状、U字状、逆U字状に用いたり、さらにそれらを組み合わせるなど多様である。1・3・25の胴部には頸部無文帯直下に櫛形文が付く。26～28は櫛形文を施した胴上部で、細隆帯で文様を構成する口縁部が続く可能性が高い。

29・30・48は刻目隆帯で主要な文様を構成するものである。29は、キャリパー形を呈する口頸部で、無文の口縁端部が短く直立気味に立ち上がる。口縁部文様は縦位の蕨手状の隆帯と逆V字状の隆帯を貼付する。器面は摩滅しているが隆帯間は無文と考えられる。頸部の横位隆帯の直下に櫛形文と思われる文様が確認される。30は外反する口縁の端部を内側にわずかに屈曲させて立ち上げ、口縁端部に帯状の肥厚帯をめぐらせ、その直下にV字形の刻目隆帯文を付す。摩滅が進行しており、全体は不明確である。48は口縁無文帯の直下に引かれた1条の横位沈線で文様帯を画す。文様帯には逆V字状の刻目隆帯を貼付し、隆帯間に横位の平行沈線を密接に施文する。

31は口縁から胴部を貫く隆帯文で縦位に区画するものである。区画隆帯文は縦位の隆帯とそれに沿う波状隆帯で構成され、V字状の隆帯を配置する区画もみられる。隆帯間には縦位・斜位・横位の細い沈線が密接して充填される。

34・35は口縁部を内折させ、屈折部を押圧してレンズ状の凹面をつくり、そこに連続刺突文を施すものである。凹面の接点部は小突起をなす。東海系の北屋敷式に該当する。

上記の分類に当てはまらないもの、小破片で文様構成が明確でないものについて、以下に記す。32は内彎する口縁部の端部直下に断面三角形の隆帯がめぐる。貼り付け文様があるものの剥落していて判然としない。33は縦位の隆帯と縦位の沈線で文様を構成する。36は波状口縁の口唇部に刻みを施し、口縁端部直下に連続刺突を伴う弧状隆帯を貼付する。37・38は刺突文列と沈線で文様を構成する。37は口縁部に2段の刺突文列をめぐらせる。38は口唇直下の押圧隆帯の上下に刺突列を施し、口唇には押圧がなされる。39～40・42～45は隆帯区画と縦位・横位・斜位の沈線で文様を構成するものである。41は平行沈線（半隆起帯）による楕円形区画に縄文を充填する。46は弧状の隆帯の上下に押引文を施す。47は縦位区画内に横位の沈線を密接して施文する。49は無文部の下位に隆帯文を施す。

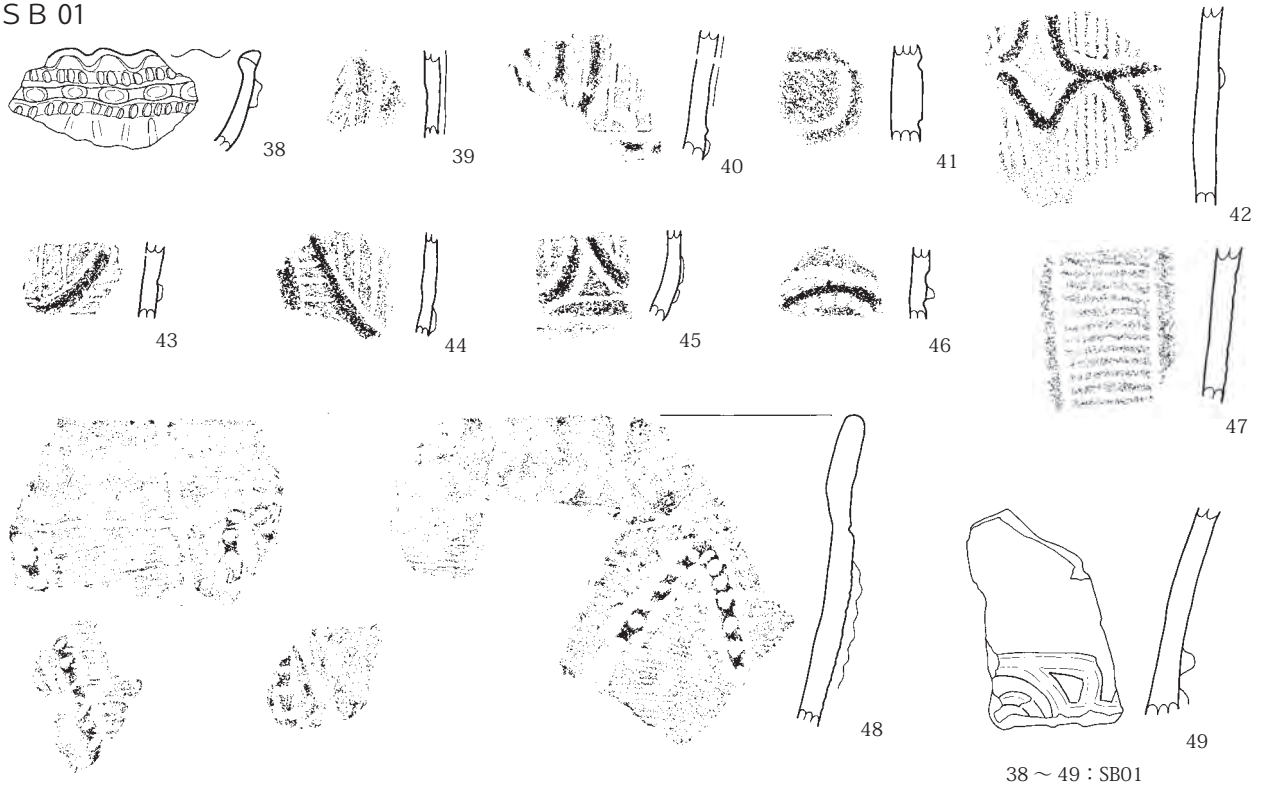
S B 02 出土の土器（第65・66図、PL16・17）

50～74はいずれも覆土から出土した。中期中葉IV期から後葉II期にかけての土器がみられ、それらは覆土中に混在する状況である。S B 01で主体的に出土する細隆線文土器はほとんどみられない。

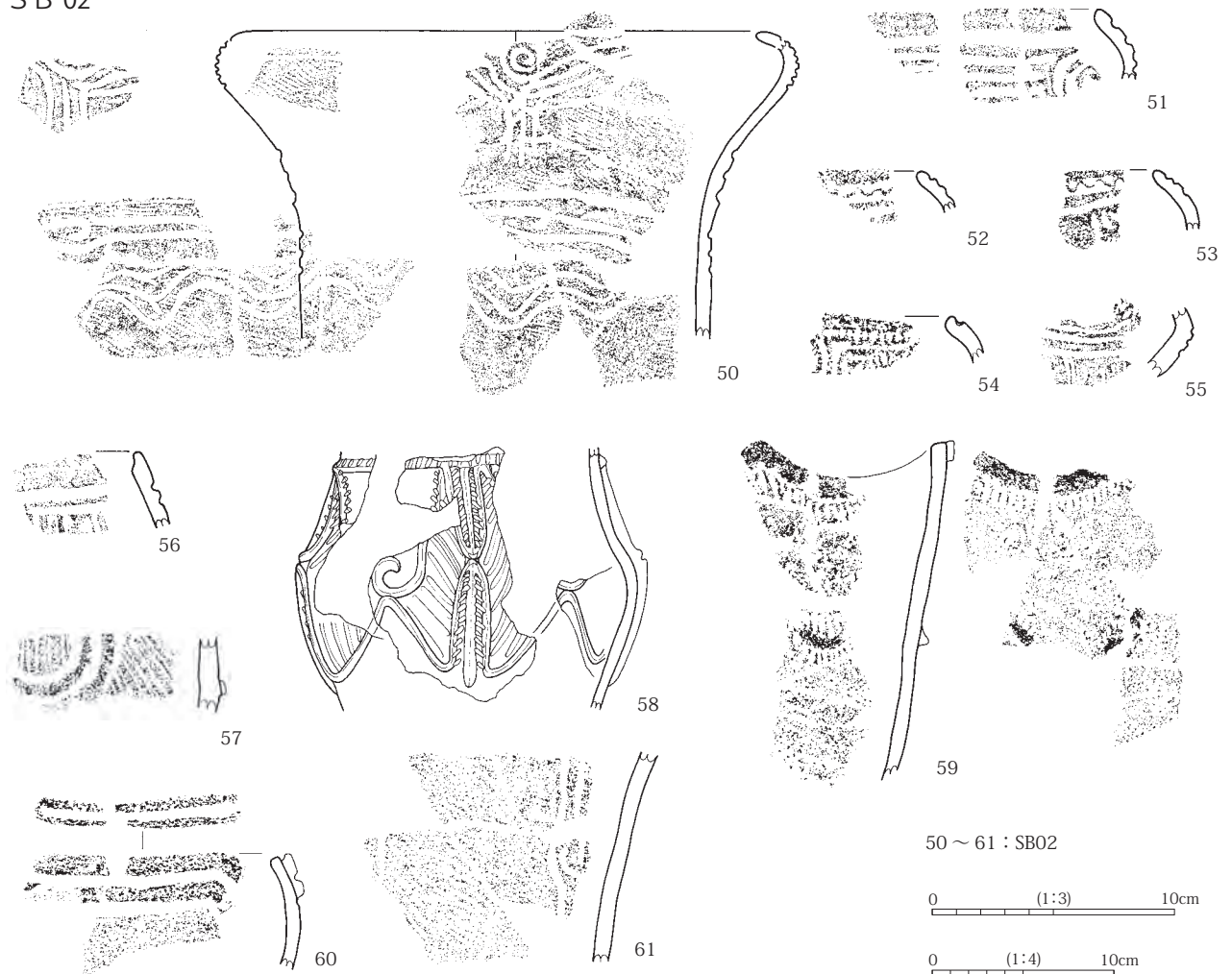
66～73は中期中葉IV～V期に属すると考えられる。66・67は膨らんだ胴部に櫛形文を付す。器壁が薄く、いわゆる下伊那型櫛形文土器（神村1986）に該当すると考えられる。接合する口頸部はないが、69や70のような口縁部が組み合うことが推測される。68は接合しないが、キャリパー形の器形と考えられる。摩滅しており文様は明確ではないが、口縁部にY字状の隆帯と押引文ないし連続刺突を伴う沈線文を施し、くびれ部に横位の隆帯をめぐらせる。69・70は口縁の山形突起下に縦位の隆帯ないし隆帯と刺突文を施し、それを起点にして隆帯区画をつくり、内部に縦位の沈線を充填する。71は口縁部に連続爪形文を伴う縦位の隆帯を貼付し、その左右に沈線文を施す。72は隆帯による横位の楕円区画内部に縦位の沈線を充填する。73は刻みを施した横位隆帯の下に平行沈線（半隆起帯）で方形区画をつくり、区画内に斜位の沈線を充填する。

57～59・62～65は中期後葉I期に相当すると考えられる。57・58は隆帯文間に沈線を充填して文様を構成するものである。58の隆帯文は内部に隆帯と刺突を伴う縦長の対向U字状隆帯に、山形・渦巻隆

SB 01



SB 02



第65図 土器実測図(3) (1:3・1:4)

帯文を配する。59は波状を呈する口縁端部外面に隆帯を貼付して肥厚させ、その直下に連続刺突を施す。胴部には脇に連続刺突を伴う弧状隆帯を付す。62は上側面に刺突を施した横位隆帯から波状および直線状の隆帯を垂下させる。63はくびれ部に横位の波状隆帯を二段に貼付する。64は細い粘土紐を斜格子状に貼付する。65は縦位隆帯上に波状隆線2本を貼付し、縦位の隆帯と斜位の沈線を組み合わせる。

50～56・60・61は中期後葉Ⅱ期に相当すると考えられる。50～56は東海系の中富式に類似するものである。破片資料が多いが、キャリパー形の口縁部に沈線を主体として文様を描く。渦巻文をもつ50・51、口唇直下に隆起線による波形文を施す52・53、刺突を施す54、条線地文上に弧状沈線と刺突文を施す55、口縁部に横位・縦位・蕨手状の沈線文を描く56がある。50は口縁～胴部の器形がわかる例で、渦巻文下に3本の短沈線を垂下させ、くびれ部に横入組文に近い沈線文と波状沈線文をめぐらせる。縄文を地文とする。60は内彎する口縁端部に隆帯を貼付し、隆帯・口唇に沈線を施す。61は縄文地文の胴部に沈線で縦位の腕骨文を描く。

74は有孔罅付土器である。円形の小孔が罅の直上に穿たれている。

S B 03 出土の土器 (第66図、PL17)

75は埋甕として埋設されていたものである。76・78は覆土出土である。77・79～81は本遺構を切る攪乱(倒木痕)出土であるが、ここに掲載した。本遺構出土の土器は、攪乱から出土したものを含めても少ないうえ、75を除くと、小破片で、器形・文様構成が明確ではない。

75は外反する口縁部に、頸部が膨らみ、胴部は下膨れとなる器形である。底部を欠く。口唇直下に帯状の肥厚帯をつくり、その下は無文帯となる。頸部文様帯は、上端に、上側面に刻み状の短沈線を密接して施した隆帯をめぐらせ、その下は隆帯渦巻つなぎ弧文で横位に区画し、区画内に沈線による逆S字状渦巻文と縦位弧状沈線を充填する。胴部中位には波状沈線文を二段に施す。胴部地文は条線文である。中期後葉Ⅱ期に位置付けられる。

76は三叉文を有する。77は沈線で楕円文、78は曲線文を描く。79はS字状隆帯の脇に刺突文を施し、80は縦位の隆帯と沈線で文様を描く。76～80はいずれも小破片で時期を限定するのは難しいが、76は中期中葉～中葉、77～80は中期中葉～後葉であろう。

81はキャリパー形を呈する口縁部で、一部隆帯が剥落しているが、縄文地文の上に隆帯を貼付して区画および文様を構成する。中期後葉Ⅱ期と考える。

S B 04 出土の土器 (第67図、PL17)

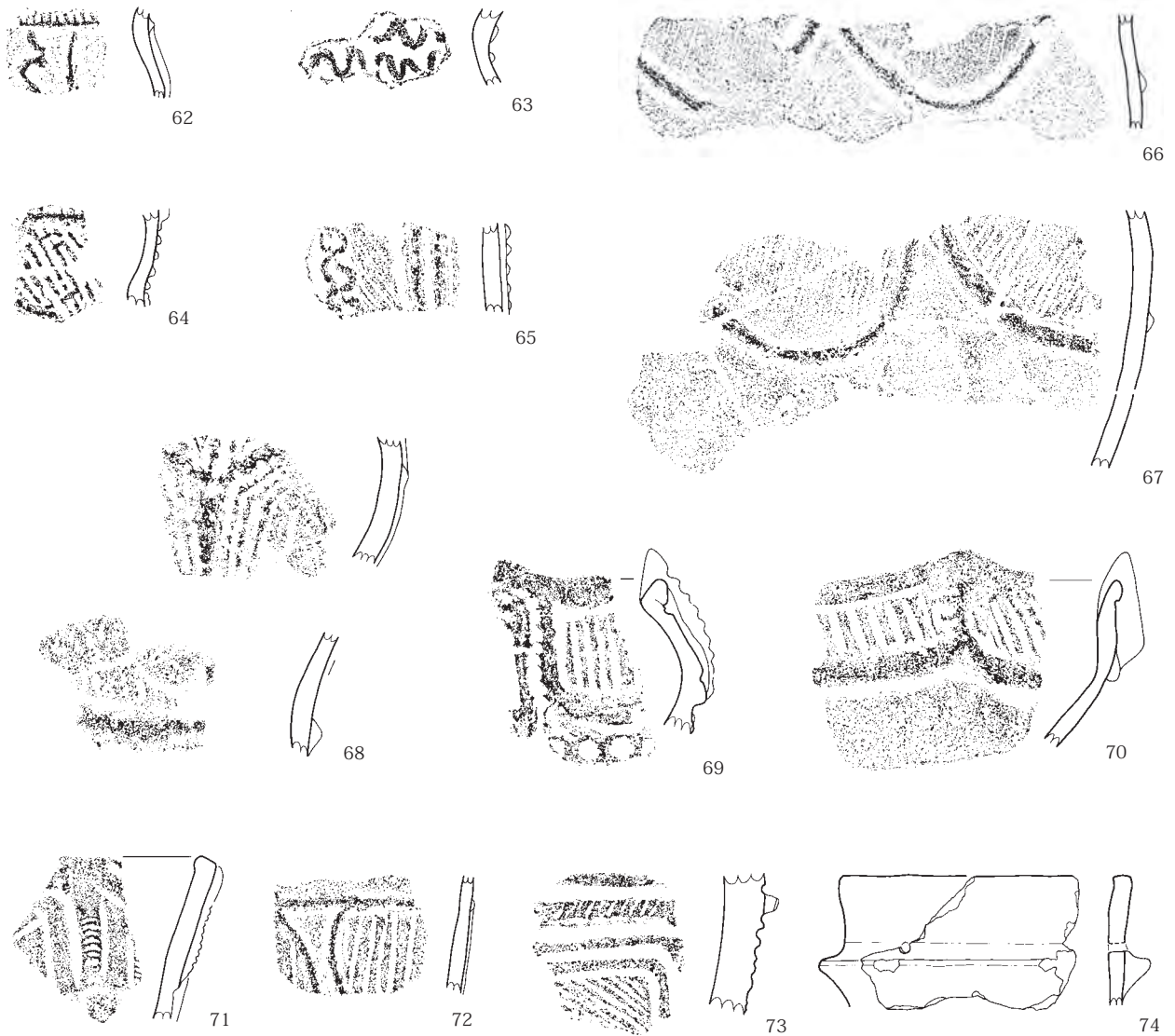
82～87は覆土から出土した。88は本遺構を切る攪乱(倒木痕)出土であるが、ここに掲載した。本遺構出土の土器は、攪乱から出土したものを含めても少ないうえ、小破片で、器形・文様構成が明確でないものが多い。82は時期不明確だが、83・84・88は中期中葉末から後葉Ⅰ期、85～87は中期後葉Ⅰ期に相当すると考えられる。

82は縄文を横位に施す。上部と下部は接合しないので、器形には不明確な点が残る。

83は口縁部に斜位の細隆帯を貼付して区画し、斜位の沈線を密接に施す。84も小破片だが細隆帯と密接施文した沈線で文様を描く。83・84ともに、隆帯文の一部(装飾隆帯)を沈線文化した細隆線文土器と考えられる。

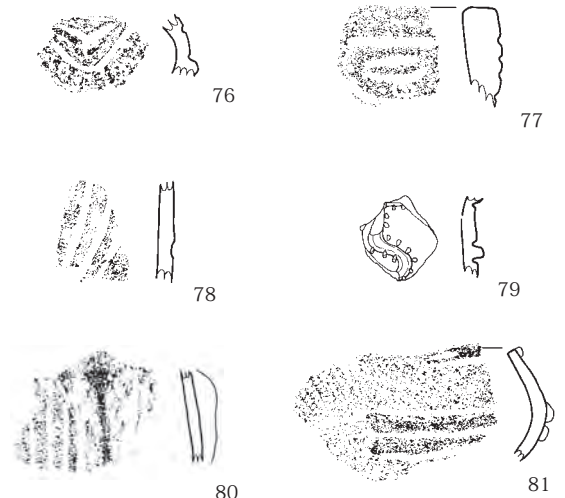
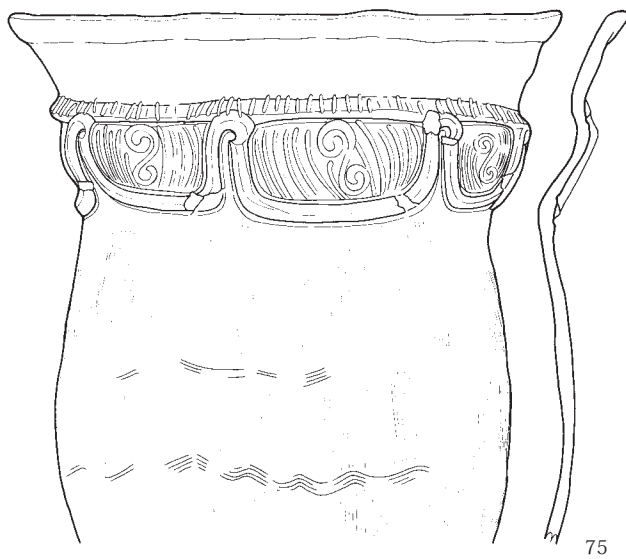
85は上側縁に短沈線を密接施文した断面三角形の隆帯をめぐらせ、半分剥落しているが直下に円形隆帯文を貼付し、その外側には縦位の沈線を密接施文する。86はくびれ部に隆帯楕円文を貼付し、楕円内部には押引文、外側には縦位の沈線を密接して施す。87はくびれ部に楕円形隆帯文と、上面に押引文を

S B 02



62 ~ 74 : SB02

S B 03



75 ~ 81 : SB03

0 (1:3) 10cm

0 (1:4) 10cm

第66図 土器実測図(4) (1:3・1:4)

伴う弧状隆帯を貼付する。

88 はミニチュア土器であるが、細隆線文土器の器形・文様を踏襲している。横位の隆帯をめぐらせて口縁部と胴部を分割する。口縁部は、2本が剥落しているが4単位の縦位隆帯にさらに1本の隆帯を加えて区画し、縦位の沈線を密接施文する。胴部には櫛形文を簡略化した弧状隆帯文を4単位に施す。

S B 05 出土の土器 (第67図、PL18)

89～99 はいずれも覆土からの出土である。99 は時期不明確だが、89～98 は中期中葉末から後葉I期に属すると考えられる。

89～91 は細隆線文土器である。89 は端部が内側に強く屈曲するキャリパー形の口縁部で、端部に付された一対の突起から連続する太目の隆帯が人体文を構成する。人体文の頭部は突起間に逆U字状の隆帯で表現される。これが縦位の区画文となり、その外側には斜位・縦位、さらに格子状の装飾隆帯が密接貼付される。文様帯の下にはわずかながら無文部がみられる。装飾隆帯は砂粒を含まない粘土を用いており、砂粒を含んで褐色を呈する器体および区画隆帯と、明赤褐色の装飾隆帯とは対照をみせている。90 は接合しないものの、89 と同様に一対の突起をもつ。91 は上部に無文部を有する口縁部破片である。

92 は外反する口縁部の端部を外側に折り曲げ、口唇に連続する押圧を加え、押圧部には刺突文を施す。屈曲部から下は無文帯となり、くびれ部から胴上部にかけて横位の直線状・波状隆帯を三段に貼付する。

93～96 は隆帯と沈線で文様を構成するものである。93 は口縁部に逆V字状の隆帯を貼付し、縦位の沈線を密接施文する。胴部には櫛形文が付される。94 は上部と下部が接合しないため器形は不明確などところがあるが、頸部は無文帯となり、口縁部と胴部は平行する2本の隆帯を主体とした文様で区画し、縦位の沈線が施される。95 は平行する2本の曲線的な隆帯を貼付した後に縦位の平行沈線(半隆起帯)が密接して施文される。96 は縦位・横位の隆帯と斜位の沈線で文様を描く。頸部は無文帯となる。小破片だが装飾隆帯を沈線化した細隆線文土器の可能性があろう。

97 は内彎する口縁部に隆帯渦巻文を貼付し、その脇に押し引文を施す。98 は内側に短く屈曲した口縁部に斜位の沈線を密接して施文する。図の左側の沈線はわずかに弧を描く。重弧文モチーフとなるか。99 は広い底部から短い体部が直線的に立ち上がる無文の浅鉢である。口唇内縁を内側につまみ出している。

S T 01 出土の土器 (第68図、PL18)

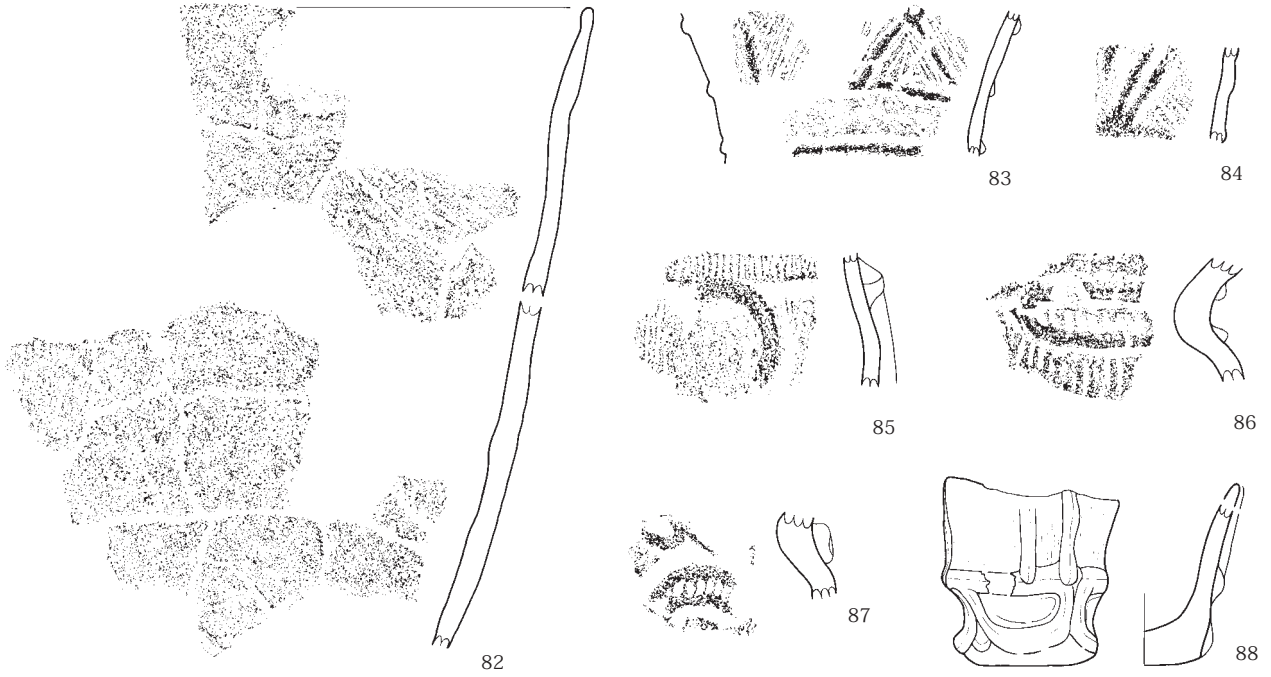
100～107 はS T 01 のP 2の覆土中位からまとまって出土した。中期後葉Ⅲ期に属すると考えられる。

100～103 は隆帯や沈線による縦位区画内に縦位方向の結節縄文を施文する親田式(神村1978)である。100～102 は隆帯と沈線で、103 は沈線で区画する。104・105 は結節縄文施文部を欠くが、親田式の可能性が高い。104 は口縁部に沈線区画を行い、105 は低い隆帯と沈線で対向するU字状・逆U字状に区画し、上段のU字状沈線内に連続刺突を施している。106 は突起部で、胎土や色調が103 とよく似ており、同一個体の可能性がある。107 は台付土器の脚台部で、2箇所の方角ないし楕円形の透かしが観察される。文様は低い隆帯とそれに平行する沈線により構成される。沈線内部には連続刺突がなされる。

土坑出土の土器 (第68～70図、PL18・19)

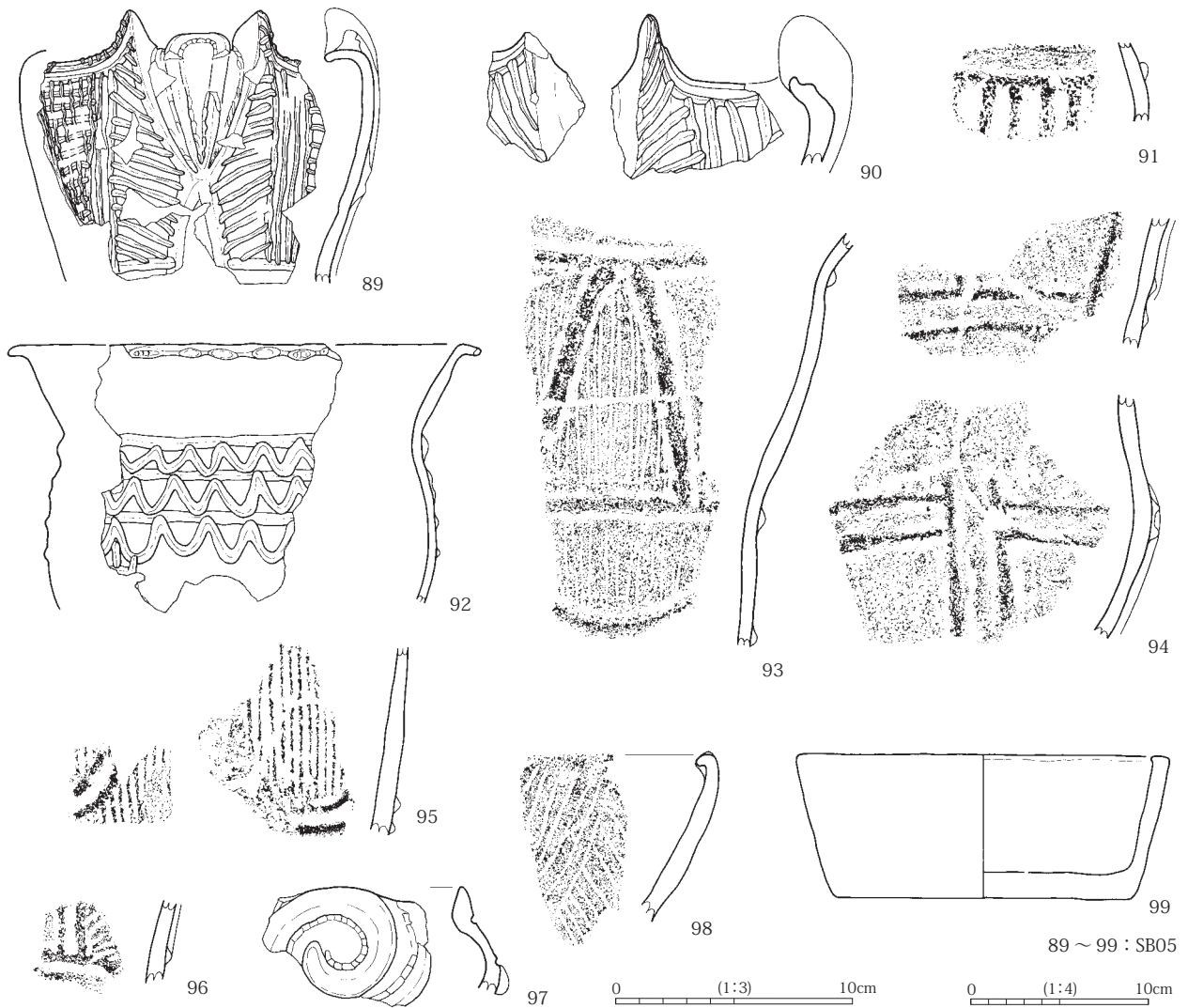
土坑出土の土器は中期中葉から後葉の土器がほとんどを占める。それ以外の時期はごくわずかである。S K 01 で早期末葉～前期初頭の東海系と思われる土器が1点、S K 06 で中期初頭と思われる土器1点が認められる。また、無文小片のため図示できなかったが、S K 12 から胎土に繊維を含む土器が1点出土しており、これも早期末葉～前期初頭に属する可能性がある。

SB 04



82 ~ 88 : SB04

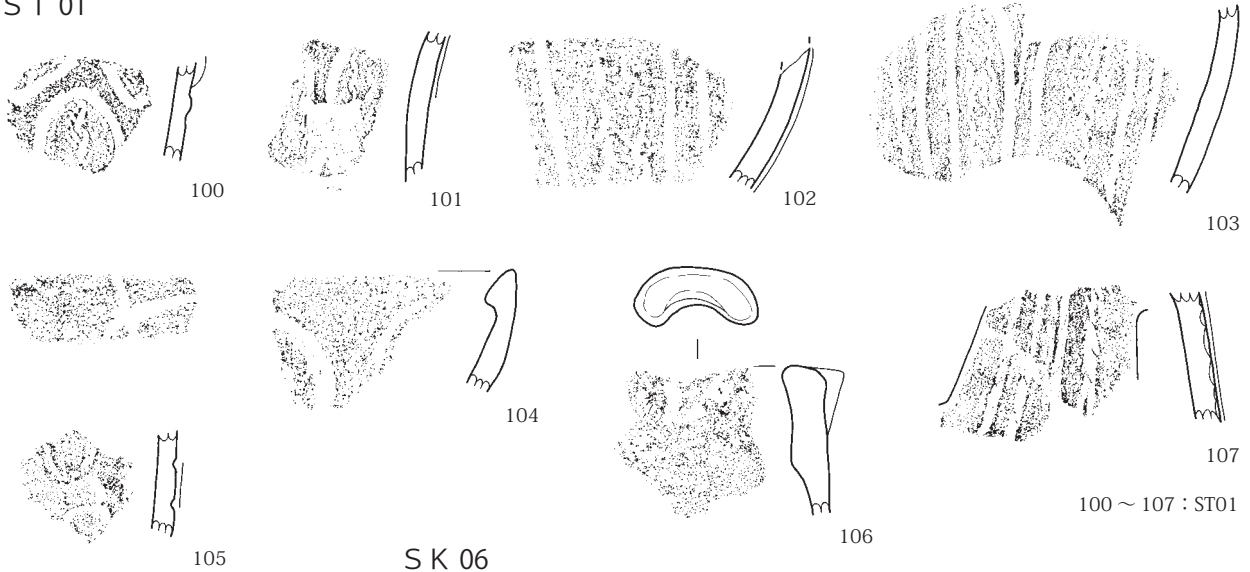
SB 05



89 ~ 99 : SB05

第67図 土器実測図(5) (1:3・1:4)

ST 01

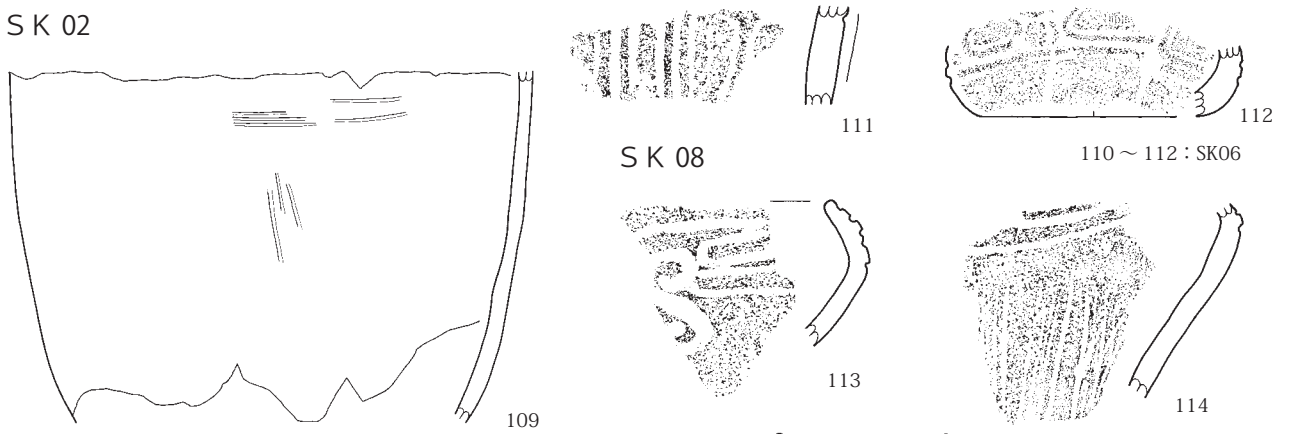


SK 06

SK 01



SK 02

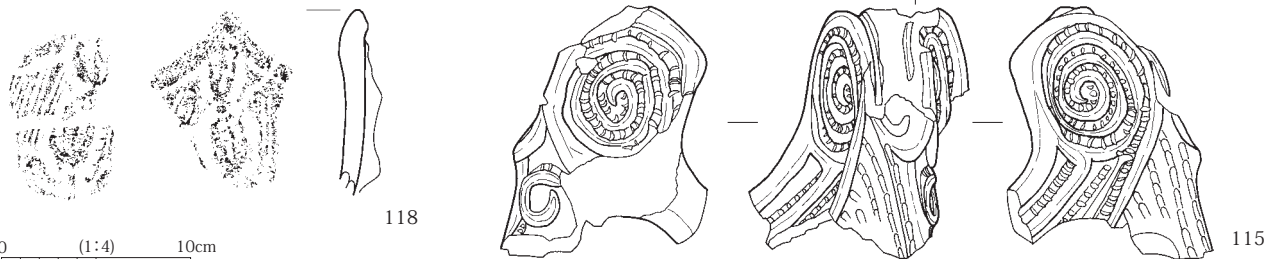


SK 08

SK 16



SK 18



0 (1:4) 10cm

0 (1:3) 10cm

第68図 土器実測図(6) (1:3・1:4)

S K 01

108は無文で、器壁が3mm前後と薄いこと、および器面、特に内面に指頭圧痕が顕著に認められることからすれば、早期末葉～前期初頭の東海系土器群である木島式と考えられよう。

S K 02

109は3/4周ほど回るまで復元されたが、器面の摩滅が著しく、横位の沈線文と縦位の沈線文がわずかに認められるものの、全体は不明確である。

S K 06

110は口縁部に半截竹管状工具による平行沈線（半隆起帯）で渦巻文などの文様を描き、筒状突起が付けられる。中期初頭であろう。111は縦位隆帯と半隆起帯による区画文で文様を構成する。区画内には縦位の連続刺突文を施す。112は半隆起帯による三角形ないし楕円形の区画文を横位方向に連続させる。摩滅が進んでいるが区画内に縦位沈線が観察される部分がある。藤内式と思われる。

S K 08

113・114はキャリパー形の口縁部に沈線で文様を描く。東海系中富式に類似する土器である。中期後葉Ⅱ期と考える。113は波状口縁の波頂部にS字状渦巻文を配置する。114は弧状の平行沈線文を施し、地文は条線文である。115は口縁部に付した突起で、隆帯と刺突を伴う沈線による渦巻文を主な文様モチーフとする。いわゆる唐草文系の土器であろう。

S K 16

116は体部が短い皿状の器形である。粗雑なつくりで器面を平滑に調整していない。口縁部には刺突が認められる。117は口唇直下にヘラ状工具で縦位に施文する。

S K 18

118は、山形突起頂部の直下に、縦位の押圧隆帯を貼付する。押圧部には押引文を施す。縦位隆帯の両側に縦位沈線を密接して施文する。口縁端部はわずかに肥厚して幅狭い帯状の無文部をなす。薄手づくりで、下伊那型櫛形文土器の口縁部の可能性があろう。中期中葉と考えられる。

S K 21

119は山形突起頂部の直下に、押引文を伴う弧状隆帯・円形隆帯を組み合わせた文様を付す。口縁端部はわずかに肥厚して幅狭い帯状の無文部をなす。薄手づくりで、下伊那型櫛形文土器の口縁部の可能性があろう。中期中葉と考えられる。

S K 25

120は、キャリパー形の器形をとり、口縁端部は外反してから内側に屈折させる。口縁部文様帯は上端と下端を隆帯で区画し、さらにY字状隆帯で横位に区画して、渦巻・弧状・縦位沈線文などを充填する。区画隆帯には刻みを施す部分がある。井戸尻式に該当すると考えられる。

S K 27

121は胴上部に櫛形文が付されている。

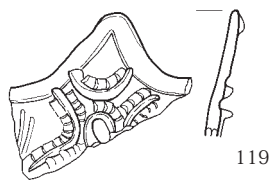
S K 30

122は、横位の隆帯上に半截竹管状工具で刺突を施す。

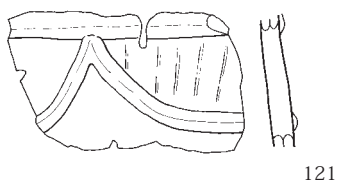
S K 32

123はキャリパー形の器形をとる細隆線文土器。口縁部文様帯は、内彎する口縁端部の屈曲部にめぐらせた横位隆帯で二段に分割され、横位隆帯を挟んで逆向きのU字状文が密接貼付される。口縁部文様帯直下には無文帯がめぐり、胴上部には櫛形文を付す。中期中葉末から後葉Ⅰ期に属すると考えられる。124は縦位・斜位の隆帯で区画し、沈線を充填する。

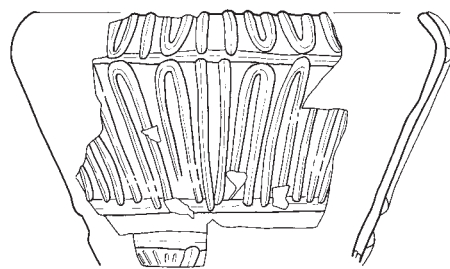
SK 21



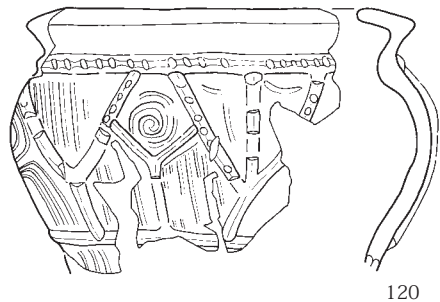
SK 27



SK 32



SK 25

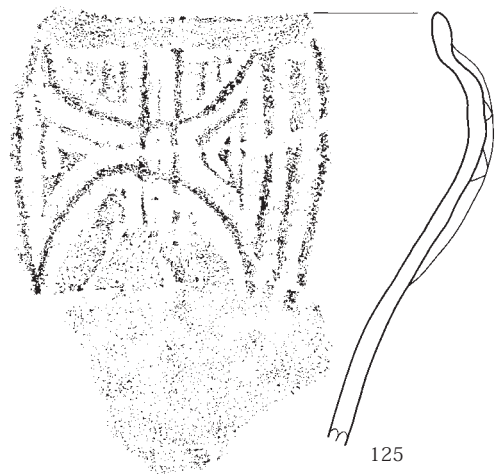


SK 30

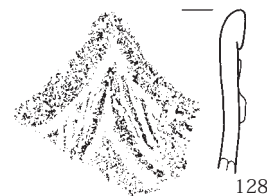
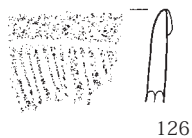


123・124: SK32

SK 34



SK 41

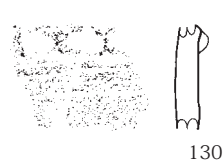


126 ~ 128: SK41

SK 48



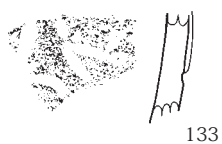
SK 52



SK 62

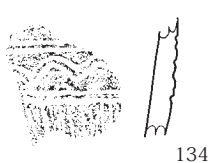


SK 64

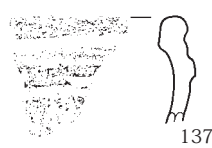


131・132: SK62

SK 66



SK 71



0 (1:3) 10cm

0 (1:4) 10cm

134 ~ 136: SK66

第69図 土器実測図(7) (1:3・1:4)

S K 34

125 は、キャリパー形の器形を呈し、口縁端部が短く直立気味に立ち上がる。口縁部文様帯は隆帯と押引文で文様構成される。縦位隆帯で区画して対向U字文を配し、U字の中心には縦位の平行隆帯が貼付される。頸部は幅広い無文部となる。井戸尻式に該当すると考えられる。

S K 41

127 は押引文で弧状・斜位・縦位の文様を描く。126・128 は口縁端部を肥厚させて幅狭い帯状の無文部とし、半截竹管状工具による平行沈線を縦位に密接施文する。128 は山形突起をもち、その直下に隆帯を山形状に貼付する。126・128 とともに薄手づくりで、下伊那型櫛形文土器の口縁部の可能性があろう。中期中葉と考えられる。

S K 48

129 はかなり摩滅しているが、半截竹管状工具による縦位の平行沈線（半隆起帯）を密接して施文する。

S K 52

130 は押圧を加えた横位隆帯の直下に横位の平行沈線4条を施す。中期中葉の平出第Ⅲ類A土器の胴部であろう。

S K 62

131・132 は中期中葉の平出第Ⅲ類A土器である。131 は摩滅・剥落が著しいが、口頸部を垂下する縦位の隆帯、口縁と頸部を区切る横位の隆帯が貼付される。頸部には縦位の平行沈線を充填し、その上端に横位の平行沈線をめぐらす。132 は、頸部文様帯に縦位の平行沈線を充填し、その上端に、V字状のアクセントが付いた横位の平行沈線をめぐらせる。

S K 64

133 は逆Y字状の隆帯脇を沈線でなぞる。ずらしたU字・逆U字の接点部であろうか。とすれば、中期後葉Ⅲ期の親田式の可能性があろう。

S K 66

134 は中期中葉の平出第Ⅲ類A土器である。口縁部に横位の平行沈線・波状沈線を施し、頸部には縦位の平行沈線を充填し、その上端に横位の平行沈線をめぐらす。135 は押圧を加えた縦位隆帯の両側に縦位の平行沈線を充填した頸部片で、134 と同一個体の可能性がある。136 は胴部に、矢羽状刺突を加えた縦位隆帯と、沈線・刺突を伴う円形隆帯文を貼付し、その間を縦位・横位の沈線を充填した区画文でうめる。藤内式に該当しよう。

S K 71

137 は、口縁端部とその下に横位の隆帯を貼付し、隆帯脇を沈線でなぞる。

S K 73

138 は丸みを帯びた体部の浅鉢で、口縁部におそらく山形を呈する突起が付く。3/5周ほど残存するが突起は1箇所しか確認されない。突起下には隆帯と押引文による縦位の文様が配される。口縁部に押圧を連続して加えた隆帯がめぐり、隆帯直上には押引文が施される。中期中葉に位置づけられよう。139 は底部で、文様は確認されない。

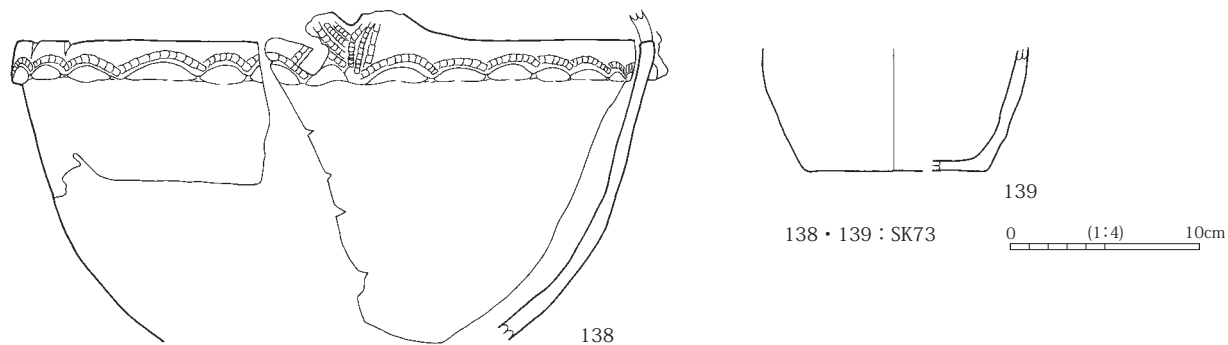
S K 75

140 は有孔罅付土器である。口縁部に低い罅をめぐらせ、その直上に円形の小孔を穿つ。

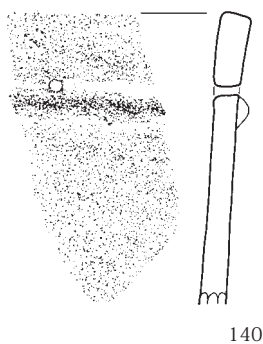
S K 76

141 は外側にかかるく屈曲した口縁端部が幅狭い帯状に肥厚し、その直下に横位の押引文、さらにその下に縦位の押引文を密接施文する。

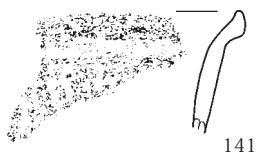
SK 73



SK 75



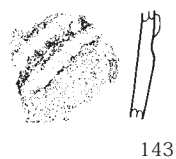
SK 76



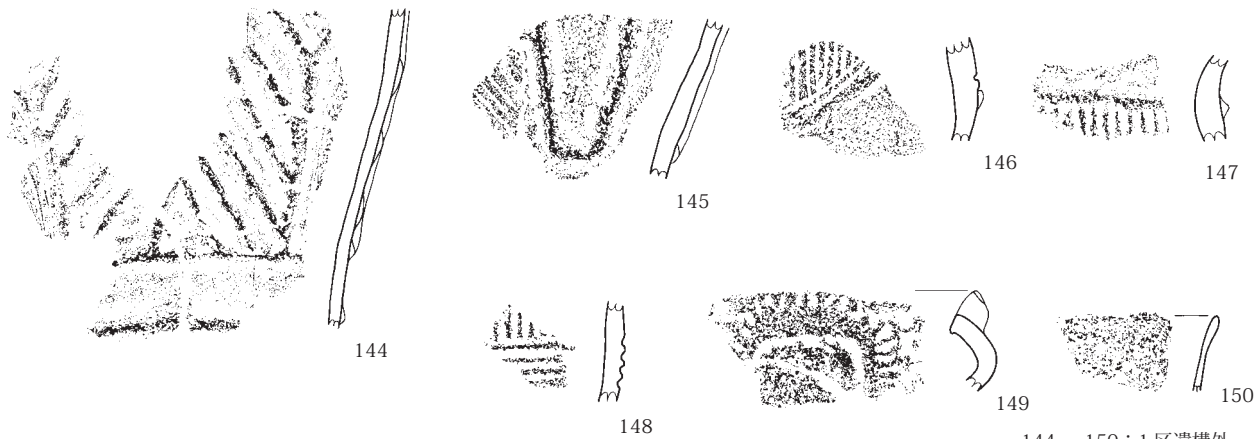
SK 80



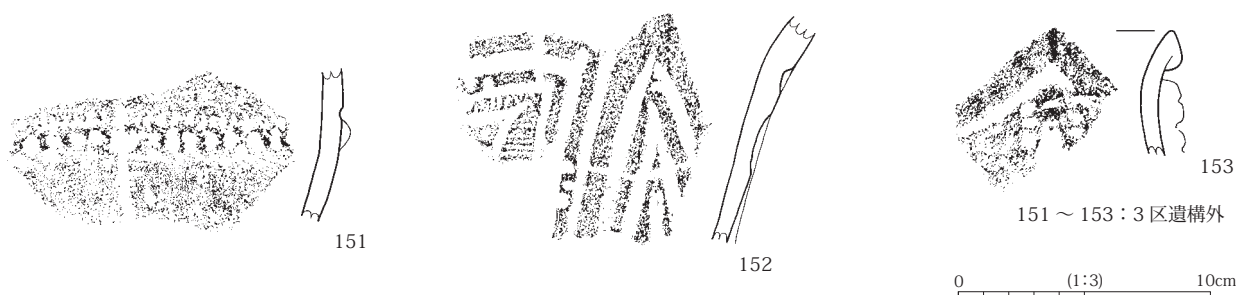
SK 86



1区遺構外



3区遺構外



第70図 土器実測図(8) (1:3・1:4)

S K 80

142 はキャリパー形の器形を呈する細隆線文土器。く字状に屈曲した口縁端部は無文帯となり、その下に縦位の細隆線を密接貼付する。中期中葉末～後葉 I 期に位置付けられる。

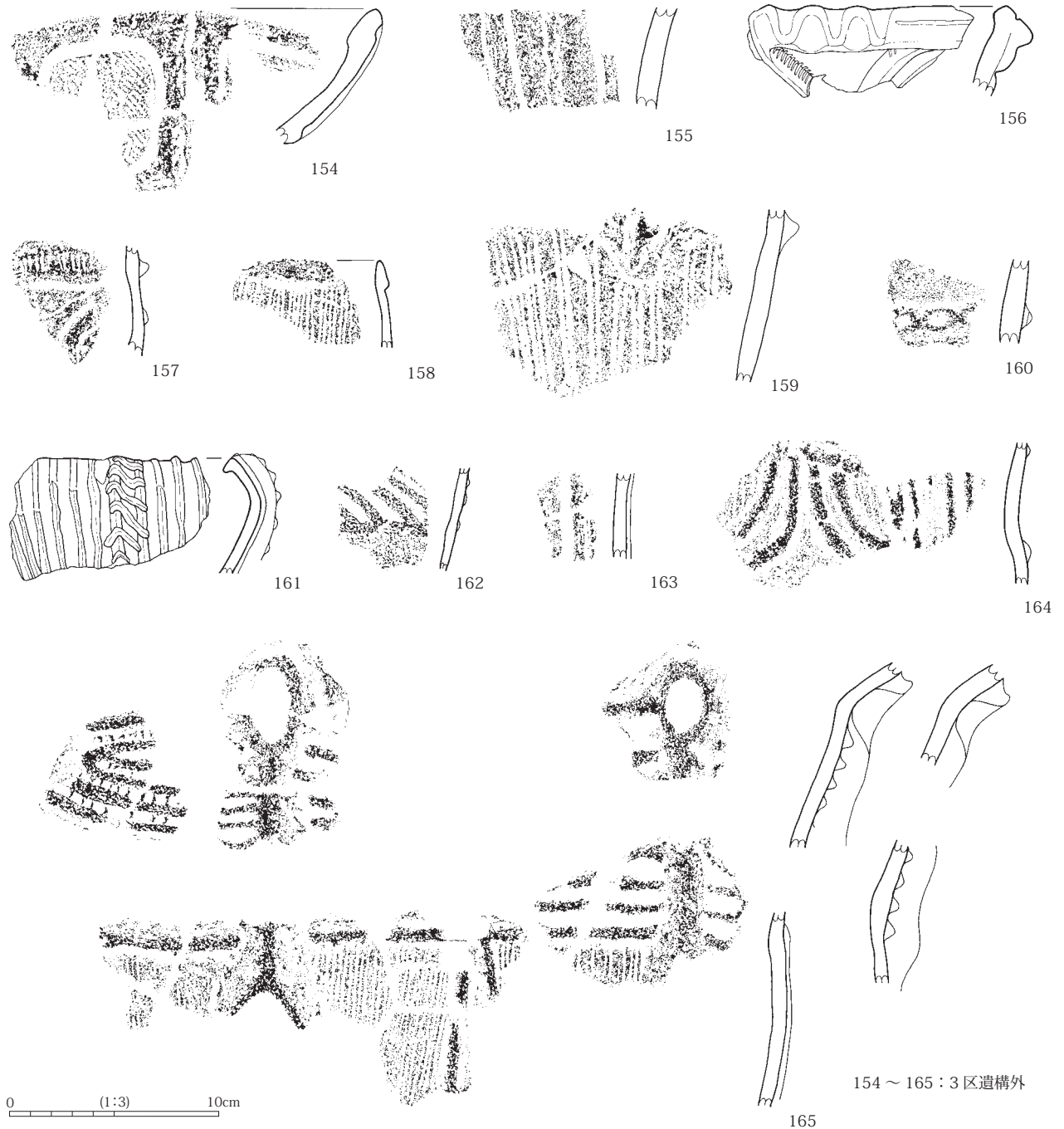
S K 86

143 は隆帯とその脇に施された押引文で文様を描く。

遺構外出土の土器 (第70・71図、PL19・20)

遺構外出土土器は、中期中葉末～後葉 I 期を主体とした中期中葉から後葉の土器がほとんどを占める。

3区遺構外



第71図 土器実測図 (9) (1:3)

それ以外の時期はごくわずかである。1区および3区で早期末～前期初頭の東海系と思われる土器が各1点、1区で中期初頭の土器1点が認められる。また、無文小片のため図示できなかったが、胎土に繊維を含む土器が1区から1点検出されており、早期末葉～前期初頭に属する可能性がある。なお、繊維土器片はS B 04から2点・S B 05から2点・S K 12から1点出土している。

1区

144～147・149は中期中葉～後葉の土器である。144は細隆線文土器で、おそらく逆U字状を呈する縦位区画内に条線が観察される。中期中葉末～後葉I期に属する。145～147は隆帯と沈線で文様を構成する。146・147は櫛形文であろう。149は口縁部に刺突を伴う半円形の隆帯が残る。

150は器壁が3mm以下とごく薄く、口唇には細かな刺突が認められる。縄文時代早期末葉～前期初頭の東海系土器群の木島式である可能性が考えられよう。148は集合沈線を施す中期初頭の土器である。

3区

151～164は中期中葉～後葉の土器である。151は刺突を施した横位隆帯の直上に爪形文が連続して施文される。152は隆帯により主な文様を構成する。隆帯上に刻み・交互刺突が施される部分がある。隆帯間に押引文ないし連続刺突文が観察される部分があるが、摩滅のため不明瞭である。井戸尻式に該当すると考えられる。153は山形突起下に、縦位の隆帯を貼付する。隆帯上には刺突が、隆帯脇には押引文が施される。口縁端部は肥厚させて幅狭い帯状の無文部となる。154・155は結節縄文をもつ親田式で、中期後葉Ⅲ期に位置づけられる。154は口縁部に隆帯と沈線による楕円形区画文を配し、内部に結節縄文を縦位に施す。155は沈線による縦位区画内に結節縄文を縦位に施文する。156は口縁部に交互刺突を施し、その下は隆帯と沈線で文様を描く。隆帯脇に連続刺突が観察される部分がある。157は上側面に連続刺突を施した横位隆帯と、その下の円形ないし弧状隆帯で文様を構成する。158は口縁端を肥厚させて幅狭い帯状の無文部となし、直下に縦位の平行沈線を密接に施文する。159は縦位の隆帯と平行沈線密接施文により文様を構成する。160は横圧を加えた横位の隆帯を貼付する。161は細隆線文土器で、縦位の細隆帯を密接貼付する。区画隆帯上には、横位の短い細隆帯を多段に貼付する。163は縦位隆帯とその脇の沈線により文様を描く。表面に赤色顔料を塗布したと思われる赤色部が観察される。164は平行する2本の隆帯による弧状文内に細隆帯と沈線を充填する。165は接合しないため器形や文様構成が明確ではないものの、ややくびれる頸部から外傾して立ち上がる口縁部の端部を外側に屈曲させる。口縁部文様は隆帯楕円文から垂下する隆帯で区画し、隆帯と押引文による横位の文様を充填する。胴部は口縁部の縦位隆帯から連続するY字状隆帯間に逆V字状隆帯を配置し、密接する縦位の平行沈線を充填する。

162は前期初頭の木島式である。器壁が3mm前後と薄く、内面に指頭圧痕が顕著に認められる。文様は扁平隆帯で波状を構成し、櫛歯状工具による条線文を施す。

(2) 石器・石製品

① 石器群の概要

石器群の概要

出土した石器、および石製品は、瑛状耳飾1点、石鏃32点、石鏃未成品17点、楔形石器8点、石錐5点、石匙3点、ヘラ状石器1点、削器7点、搔器1点、打製石斧113点、横刃型石器61点、刃器1点、磨製石斧13点、石錘12点、二次加工がある剥片20点、微細な剥離がある剥片15点、凹石3点、磨石9点、敲石1点、石皿5点、台石? 12点、剥片624点、碎片72点、原石2点、石核8点である。

縄文時代中期中葉から後葉の竪穴住居跡5軒が検出され、石器の多くはこれらの住居跡から出土している。石器の大半は中期中葉から後葉に属するものと考えられる。

遺構別器種組成

第7表に遺構別器種組成を示した。竪穴住居跡から出土したものが半数以上を占める。土坑などの遺構を含めると遺構内から出土したものが76%となり、遺構外の出土遺物は全体の四分の一以下である。特にS B 01とS B 02から多数の石器が出土した。これらの竪穴住居跡と遺跡全体の器種組成を概観すると、いずれも、打製石斧、横刃型石器、石鏃の点数が多いが、S B 01に石鏃が多く、S B 05に横刃型石器が多いなど、遺構ごとの器種組成にばらつきが認められる。この器種組成のばらつきは、基本的には廃棄の結果であり、遺構の性格を直接反映したものではないと考えられる。

石材組成について

第8表に器種別石材組成を示した(註1)。主体となる石材は、黒曜石、チャート、下呂石、硬砂岩、凝灰岩、花崗岩である。この他、珪質凝灰岩、ホルンフェルス、輝緑岩、石英、水晶、無斑晶質安山岩などの石材が少数ながら含まれ、花崗岩以外は剥片石器に用いられる。なお、凝灰岩としたものは、緑色を呈しており緑色凝灰岩と呼称される場合がある。

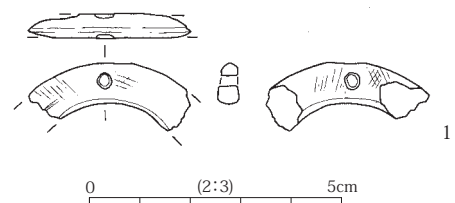
各器種を石材組成の類似でまとめると、以下の6つのグループに分類できる。①石鏃・石錐：黒曜石、チャート、下呂石を主要な石材とし、珪質凝灰岩、水晶、石英が小数見られる。②石匙：下呂石、珪質凝灰岩、硬砂岩を石材とする。③打製石斧・横刃型石器・石錘：硬砂岩、凝灰岩が主体となる。打製石斧と横刃型石器はその他にホルンフェルス、泥岩などが少量含まれる。④磨製石斧：凝灰岩が主体となり、輝緑岩などが含まれる。⑤凹石・石皿：花崗岩を用いる。⑥磨石：硬砂岩と花崗岩が主体となる。この他、石核・原石ではホルンフェルスの1点を除きすべて黒曜石であり、剥片では黒曜石、硬砂岩が主体を占め、凝灰岩、チャート、下呂石、ホルンフェルスが少数認められる。

② 石器の観察(第72・77～87図、PL20～24)

石材と出土場所は実測図の遺物番号の下に示した。各石器の属性は付録CDに石器観察表を収録した。

1) 玦状耳飾(第72図)

滑石製のものが1点出土。両端が欠損しており、残存部の幅は7.4～8.5mm、円孔部分が最も狭くなっている。円孔の直径は2.1mmである。断面形状は平坦な楕円形で、飯島町カゴ田遺跡の玦状耳飾に類似しており、早期末から前期初頭のものと考えられる(川崎1996)。表土から出土しており、出土状況から帰属時期を判断できない。



第72図 石製品実測図(2:3)

2) 石鏃・石鏃未成品(第77図1～18、PL20)

形状の整ったものを石鏃(1～12)、尖頭部の作出が不十分で不整形なものを石鏃未成品(13～18)とした。石鏃32点、石鏃未成品17点が出土。全て無茎石鏃である。

石鏃は黒曜石14点、下呂石8点、チャート5点、水晶1点、珪質凝灰岩1点、その他3点である。欠損状況は73図にしたがって分類し、完形(A類)が7点、欠損B1類が13点、B2類が3点、C類が2点、D1類が2点、D2類が3点、E類・F類が各1点である。1・2・5の尖端部を強調した調整加工は特徴的である。10・11は他の石鏃に比べ分厚く、特に11の表面中央では瘤のように素材剥片の厚い部分が残されている。両者は石材、大きさ、形状が類似している。

石鏃未成品は黒曜石7点、チャート7点、下呂石2点、石英1点である。尖端部を作り出している段

第7表 遺構別器種組成

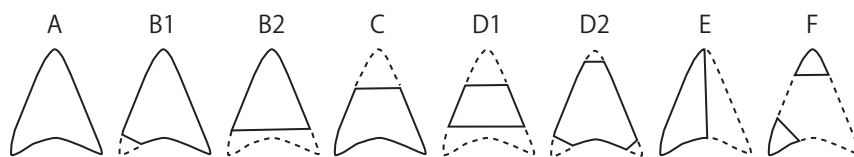
遺構名	球状耳飾	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	ヘア状石器	削器	搔器	楔形石器	打製石斧	横刃型石器	刃器	二次加工がある剥片	微細な剥離がある剥片	磨製石斧	磨石	凹石	敲石	石錘	石皿	台石？	石核	原石	合計
SB01		14	4	3	2		2		1	18	9		4	5	3	1			3	1	1	1		72
SB02		5	3	1	1	1	1		1	28	12		4	2	2	3			1			1	2	68
SB03		2	2							4	3	1			1	1	1				1			16
SB04							1			3			2	1					1			1		9
SB05		2	1				3		1	2	12		4	2		2	1	1	1					32
SK01																								
SK02		1																						1
SK03									1		2				1							1		5
SK06										1												1		2
SK07										5	3													8
SK08		1								5						1						1	1	9
SK09																				1				1
SK10		1																	2					3
SK11															1									1
SK12										1	1								1					3
SK13				1											2									3
SK15														1										1
SK16											1					1								2
SK18																				1				1
SK19										2														2
SK20										1														1
SK24										1														1
SK25											1													1
SK26													1											1
SK27																								
SK29										1														1
SK33											1													1
SK34																								
SK36															1									1
SK39											1													1
SK49										1	1													2
SK52			1																					1
SK58																								
SK61		1								1	1													3
SK62																			1					1
SK63																								
SK66										2									1					3
SK71																			1					1
SK72																				1				1
SK75																					2			2
SK76			1																					1
SK78													1											1
SK79											1													1
SK86										1														1
SD01										1														1
SD02										3												1		4
遺構外	1	5	5					1	4	32	12		4	4	2		1		1	5	3			80
合計	1	32	17	5	3	1	7	1	8	113	61	1	20	15	13	9	3	1	12	5	12	8	2	350

第8表 器種別石材組成

器種	块状耳飾	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	へら状石器	削器	搔器	楔形石器	打製石斧	横刃型石器	刃器	二次加工がある剥片	微細な剥離がある剥片	磨製石斧	磨石	凹石	敲石B	石錘	石皿	台石?	石核	原石	合計
滑石	1																							1
黒曜石		14	7	3			1		6				4	8								7	2	52
チャート		5	7	1			2						4	4										23
下呂石		8	2		1			1	1					1										14
無斑晶質安山岩							2																	2
珪質凝灰岩		1		1	1				1															4
珪質頁岩												1												1
水晶		1																						1
石英			1																					1
ホルンフェルス						1	2			3	3		4	1								1		15
凝灰岩										26	7		2		7				2					44
凝灰質砂岩										1					1									2
硬砂岩					1					78	44	1	4			5		1	8					142
泥岩										1	4								1					6
輝緑岩										2					2									4
鉄石英													1											1
その他		3									1			1	3									8
花崗岩																4	3			5	8			20
片麻岩										2	2								1			4		9
合計	1	32	17	5	3	1	7	1	8	113	61	1	20	15	13	9	3	1	12	5	12	8	2	350

階のもの（13～16・21）、周辺部に加工を施して形状を整え始めた段階のもの（17～20）が認められる。17は両極打法により調整加工を施している。石鏃未成品の認定はあいまいな部分もあるが、茅野市駒形遺跡の分析（長野県埋蔵文化財センター2007 a）を参考とした。

黒曜石産地分析の結果、石鏃は14点中12点が諏訪星ヶ台群、1点が和田鷹山群（第77図7）、1点が蓼科冷山群であり、未成品では7点すべてが諏訪星ヶ台群であった。



第73図 石鏃の欠損分類

3) 石錐（第77図22～24、PL21）

5点出土。黒曜石3点、珪質凝灰岩1点、チャート1点である。錐部に磨耗痕が認められるものは確認できない。黒曜石はすべて諏訪星ヶ台群である。

4) 石匙（第77図25～27、PL21）

3点出土。25は珪質凝灰岩で刃部片面調整、26は下呂石で刃部両面調整、27は硬砂岩でつまみ部のみで刃部は欠損している。いずれも石材、大きさ、刃部形態が異なっているが、中期の竪穴住居跡から出土した。

5) ヘラ状石器 (第78図28、PL22)

1点出土。S B 02を切る攪乱から出土したもので、竪穴住居に伴うものかどうか不明。上端がわずかに欠損しているがほぼ完形である。表面は全面に調整加工が及んでおり、素材剥片の剥離面は残されていない。裏面は全周に調整加工が巡り、中央部に素材剥片の主剥離面が残されている。

6) 削器 (第78図29～31・第84図81～82、PL21・22)

連続した剥片剥離により、鋭い縁辺の刃部を作り出しているものを削器とした。7点出土。無斑晶質安山岩2点、ホルンフェルス2点、チャート2点、黒曜石1点である。29は自然面を打面とした縦長の剥片の左側縁全体に5mm以下の剥離が連続し、刃部は部分的に鋸歯縁となる。30は斜軸の細長い剥片を用い、全周に5mm程度の剥片剥離が見られる。両面から剥離されている部分もあるが、刃部断面形状は片刃である。無斑晶質安山岩製の石器は29・30の2点のみで、他に剥片が4点出土しただけであり、まれな石材である。31は左側縁と下側縁に連続した剥離が認められ、黒曜石産地分析結果は諏訪星ヶ台群である。81は節理面を打面とした貝殻状の剥片の二辺に両面からの調整加工を施し尖端部を作出している。正面図左側縁の調整加工がより顕著で、部分的に鋸歯縁を成す。82は節理での剥離面を打面とした横長剥片を用い、一側縁に連続した剥離が認められるが、81に比べ剥離が均一でない。使用による剥離である可能性がある。ホルンフェルスは竹佐中原遺跡の旧石器に用いられたものと同質であり、発掘当初は旧石器時代の石器である可能性を指摘されていた。しかし、ホルンフェルスが採取できる阿知川周辺の縄文時代遺跡ではホルンフェルスが用いられていること、本遺跡のホルンフェルスの石器群の多くが縄文時代の遺構から出土していることから、これらは縄文時代の石器である可能性が高い。

7) 搔器 (第78図32、PL21)

1点出土。1.8×1.2cmの小形の剥片を用いて、打点側に刃部を作り出している。刃部の厚さは3mmと薄い、刃部には搔器の使用痕と思われる微細な剥離が認められる。

8) 楔形石器 (第78図33・34、PL21)

8点出土。黒曜石6点、下呂石1点、珪質凝灰岩1点である。対峙する2辺に両極打法による階段状剥離が認められるものを楔形石器とした。両極打法のほかに調整加工が見られ、石鏃の形状を意図していると判断したものは石鏃未成品と分類した。図示した2点は、2cm前後の大型の剥片が剥離されており、両極石核と分類すべきものを含む。黒曜石産地分析では諏訪星ヶ台群5点、和田鷹山群1点の結果を得た。

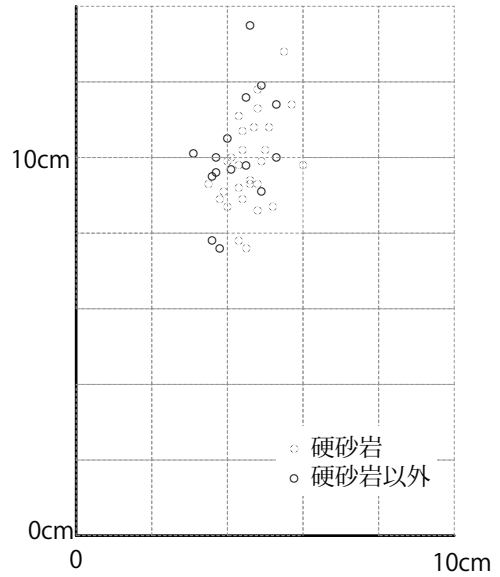
9) 打製石斧 (第79図39～第81図66、PL23)

113点出土。打製石斧には、典型的な撥形または短冊形の形態の他に、打製石斧未成品(失敗品)と思われる不整形な一群や、横刃型石器と区分が不明確な一群を含んでいる。後者については、平行する二側縁に類似した調整加工があるものを打製石斧と分類し、一側縁の調整加工のもの、または二側縁のうち一側縁の加工が鋭利な刃部を形成するものを横刃型石器とした。なお、(緑色)凝灰岩製のものは磨製石斧未成品との区別が困難であるが、刃部に磨耗痕が認められるものは打製石斧とした。

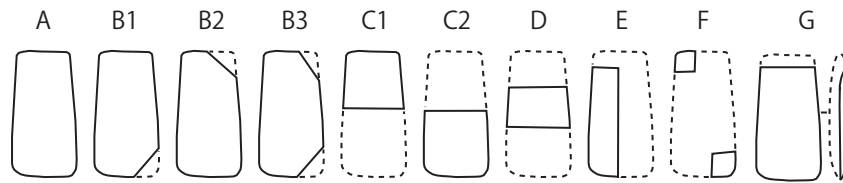
平面形態により二側縁が平行する短冊形(41・47・51・55)、刃部に最大幅がある撥形(39・45・65・66)などに分けられるが、これらの中間的なものも多く含まれ、明確に分類されるものではない。最小のものは7.6×3.8cm(44)、最大のものは12.8×5.5cm(54)と13.5×4.6cm(53)などである。素材剥片は横長の貝殻状の形が想定され、大半が片面に自然面を有している。

完形品 42 点、欠損品が 71 点である。第 75 図に従い欠損状態を分類した。欠損 B3 類が 2 点、C1 類が 22 点、C2 類が 15 点、D 類が 2 点、E 類が 3 点、F 類が 1 点、G 類が 21 点、その他未分類が 5 点である。B 類から F 類の欠損（57・60・61）は使用による欠損が含まれている。G 類には側縁からの打撃で二枚に割れているものが確認でき（47・58・59）、これらは製作時または再加工時に欠損したものと考えられる。47 は接合して完形に復元され、刃部には磨耗痕が認められることから、使用後の再加工を行ったものと考えられる。欠損資料の接合作業を行ったが、接合したものは 47 のみである。

刃部の磨耗は 33 点確認され（欠損品を含む）、完形品の 40% に刃部磨耗痕跡が認められる。63 は磨耗部に線状痕が認められる（PL23 下段）。石材はホルンフェルス 3 点、輝緑岩 2 点、緑色の凝灰岩 26 点、凝灰質砂岩 1 点、硬砂岩 78 点、泥岩 1 点、片麻岩 2 点である。



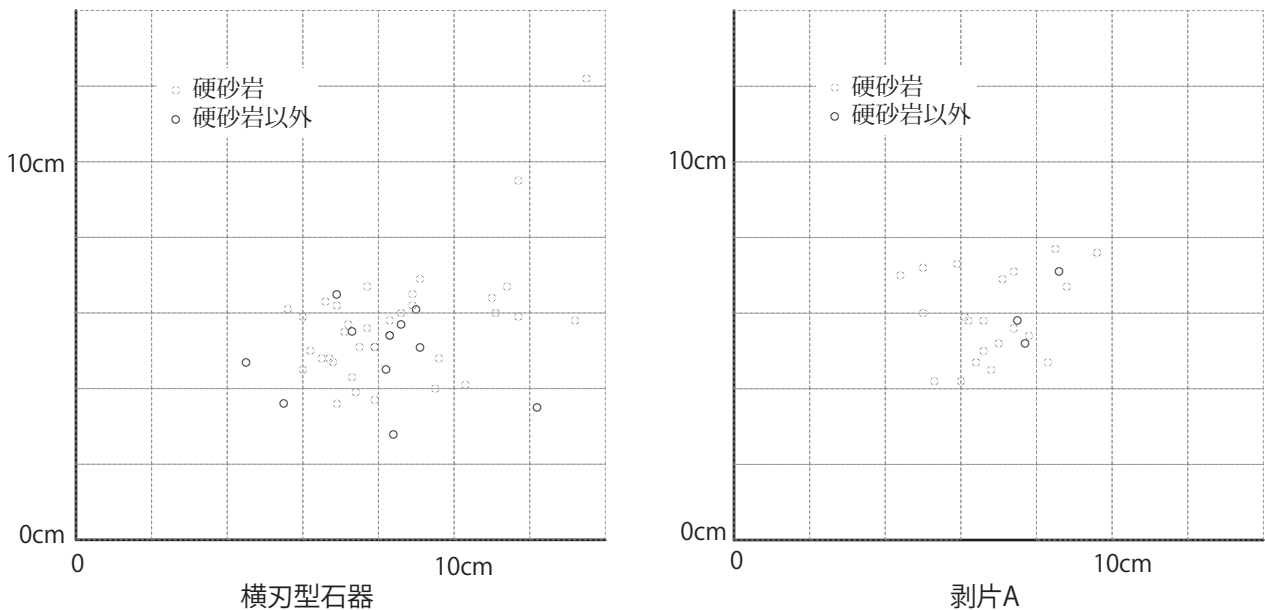
第 74 図 打製石斧長幅比



第 75 図 打製石斧の欠損分類

10) 横刃型石器 (第 82 ~ 第 84 図 67 ~ 80・85・87・88、PL22)

61 点出土。厚さ 1.5 cm 程度の薄い剥片の縁辺に二次加工を施し、刃部を作りだしているもの、および鋭利な側縁に微細な剥離などの使用痕跡が確認できるものを横刃型石器とした。ホルンフェルス 3 点、緑色の凝灰岩 7 点、硬砂岩 44 点、泥岩 4 点、片麻岩 2 点、石材不明 1 点であり、硬砂岩が 72% を占める。



第 76 図 横刃型石器・剥片 A 長幅比

硬砂岩と凝灰岩の剥片の中に、二次加工や使用痕跡の微細な剥離は確認できないが、鋭い刃部が有り、形状が横刃型石器に類する剥片（剥片A類）が多数出土している。剥片A類は最大長5cm以上の鋭利な縁辺を持つ剥片で、長幅比の分布が横刃型石器とほぼ重なることから（第76図）、同種の石器もしくはその素材と考えられる。

11) 刃器

硬砂岩製の欠損品が1点出土した。厚さ2cm以上の厚手の剥片の縁辺に2.5cm大前後の剥片剥離が見られ、横刃型石器とは素材の厚さ、調整加工の大きさの点で区別される。飯田市内の美女遺跡（飯田市教育委員会1998b）、石子原遺跡（長野県埋蔵文化財センター2007b）では縄文時代早期押型文土器に伴って多数出土している。

12) 二次加工がある剥片・微細な剥離がある剥片（第84図83・84・86、PL22）

刃部の作出や、形状を整える調整加工が認められないもので剥離が5mm以上のものを二次加工がある剥片（83・84・86）、1mm程度の微細な剥片が連続して認められるものを微細な剥離がある剥片とした。二次加工がある剥片は20点（チャート3点、ホルンフェルス4点、凝灰岩2点、珪質頁岩1点、硬砂岩4点、黒曜石4点、鉄石英1点）、微細な剥離がある剥片は15点（チャート4点、ホルンフェルス1点、下呂石1点、黒曜石8点、その他1点）が出土した。

83・84は縁辺部に連続する剥離が認められる。86は二側縁に二次加工が見られるが他の二側縁は欠損しているため、横刃型石器と分類すべきかもしれない。

13) 磨製石斧（第85図89～98、PL21）

13点出土。以下のように3類に分類した。1類が4点、2類が8点、3類が1点である。

1類：小形で扁平な磨製石斧。（89～91）

2類：敲打と研磨が認められ、断面が楕円形の磨製石斧。いわゆる乳棒状磨製石斧。（93～98）

2a類：断面楕円形

2b類：両面または片面に平坦面を有するもの。

3類：その他の磨製石斧。（92）

89～91は小形の扁平な1類で、いずれも側面を研磨している。89・90は石材不明であるが、89は凝灰岩の可能性もある。欠損後に赤色化している。90は灰白色と灰色の斑が見られる凝灰岩と思われる。92は扁平な自然礫の側縁に敲打調整を行い、刃部のみ研磨した小型の石斧である。

93は敲打が及ばない平坦な自然面と粗い線状痕が特徴的である。94・95・98は全面が研磨されており、敲打痕はほとんど見えなくなっている。96は側縁の敲打と表裏の自然面が認められ、研磨痕がないことから磨製石斧未成品の可能性もある。97は裏面に平坦な自然面を残し、刃部表裏面に長軸と傾いた線状痕が認められる。線状痕は剥離面の凹面にも顕著に認められることから、使用痕跡と考えられる。完形品は91・92・97の3点で、他は欠損品である。図示していないものは、1類および2類の小破片で、打製石斧の欠損分類に従い、観察表に記載した。

14) 磨石・凹石（第86図99～105、PL24）

磨石は9点、凹石は3点出土した。擦り痕跡（擦り面）と思われる機能面があるものは全て磨石（99～103・105）とし、敲打による凹痕のみのものを凹石（104）とした。

磨石は全て側面に特殊磨石に類似する機能面が認められる。99～101の側面の機能面に接する敲打痕や敲打による剥離痕が認められ、これらの機能面が敲打機能を有していたと考えられる。また、表裏面に凹痕を持つものが3点認められる。完形品は4点、欠損品5点である。硬砂岩5点、花崗岩4点である。

凹石は全て完形品で花崗岩が用いられている。磨石も含め凹痕があるものは全て花崗岩が用いられている。

15) 敲石 (第86図106、PL24)

1点出土。長さ4.5cm、幅3.7cmの小形の扁平な自然礫の側縁部全周に敲打もしくは階段状の剥離が認められる。硬砂岩製である。

類似した敲石が飯田市川路大明神原遺跡(長野県埋蔵文化財センター2009未刊)で多数出土した。これらの敲石は、小形の扁平円礫の周縁部に敲打痕と敲打による剥離をもつもので、川路大明神原遺跡では通常の敲石と区別して敲石B類と分類している。

16) 石錘 (第87図107～112、PL24)

12点出土。いずれも楕円形の扁平礫の両端を打ち欠いたものである。107は9.5×6cmと他に比べ大形で、その他の石錘は長さ4cm～6cmの間に納まり、ほぼ均一な大きさを示す。硬砂岩10点、片麻岩1点、泥岩1点である。

17) 石皿、台石 (第87図113～116、PL24)

大形の板状の礫を用い、擦り痕跡(擦り面)が認められるものを石皿、敲打痕跡が認められるものを台石とした。石皿が5点出土した。明確な機能面が認められる台石は確認できないが、SB01・03、SK03・06・08・75などで大形の平坦面がある扁平楕円礫や板状礫が出土している。このような台石の可能性のある花崗岩と片麻岩の礫が12点出土している。

石皿は以下の2類に分類した。

石皿1類：機能部が皿状に窪んでいるもの。(114・116)

石皿2類：機能部が平坦なもの。(113・115)

113は表面の平坦面に滑らかな擦れた面が部分的に確認できる。116は表裏両面に滑らかな擦り面が認められ、片面が大きく窪む。114・115は破片で片面にのみ擦り面が確認できる。石皿はすべて花崗岩を用いている。

18) 石核・原石 (第78図35～38)

石核は8点出土した(35～37)。黒曜石7点、ホルンフェルス1点である。黒曜石は2～3cm角以下の小形のもので、重量は2.15g～9gほどで、35がもっとも重い。これらの石核は最終的に2cm以下の小形の剥片を剥離し残核となったものである。37はホルンフェルスの分厚い剥片の節理面を打面とし剥片剥離が行われている。ただし、素材剥片の主剥離面と前述の小形の剥片剥離の前後関係が不明である。

原石は2点出土した(38)。2点ともSB02内の攪乱から出土した板状の黒曜石で、38は6.7×4.8×1.8cmで42.3g、もう1点は6.8×4.5×1.7cmで55.2gとほぼ同じ大きさである。黒曜石産地分析はいずれも諏訪星ヶ台群である。

19) 剥片・碎片

剥片624点、碎片72点が出土した。第9表に遺構別の剥片・碎片の出土点数を示した。硬砂岩、黒曜

第9表 遺構別剥片点数

遺構名	硬砂岩 剥片A	硬砂岩 剥片B1	硬砂岩 剥片B2	硬砂岩 剥片B3	硬砂岩 剥片C	凝灰岩 (緑色) 剥片A	凝灰岩 (緑色) 剥片B1	凝灰岩 (緑色) 剥片B2	凝灰岩 (緑色) 剥片B3	凝灰岩 (緑色) 剥片C	チャート 剥片	チャート 碎片	ホルンフェルス 剥片	黒曜石 剥片	黒曜石 碎片	珪質凝灰岩 剥片	珪質凝灰岩 碎片	下呂石 剥片	下呂石 碎片	無斑晶質安山岩 剥片	片麻岩 剥片	石英 剥片	泥岩 剥片	松脂岩 剥片	石材不明 剥片	合計
SB01	14	16	12	33	1	1	1	1	8		13	7	6	17	12	6	1	11	4	3	8		7	1	1	184
SB02	3	10	7	22	1		3	5	7		12	3	8	35	5	6		6	3		2		4			142
SB03		1	1	4					1		3	2		9	1	1		4	1				2		1	31
SB04	1	1				1					1		1	6	1			3			2					17
SB05	9	7	8	3	1						4	1	2	7		1		5	1				3			52
ST01													1	1							1					3
SK01	1																									1
SK02													1	1					1							3
SK06														1				1								2
SK07				1					1					2												4
SK08	1																									1
SK10																			2							2
SK12																1										1
SK13	1													1					2							4
SK15											1															1
SK16																						1				1
SK19																				1						1
SK21														1												1
SK22														1												1
SK24													2													2
SK25																								1		1
SK26														1												1
SK27														2					1							3
SK29											1			1												2
SK34														2												2
SK49				1											1				1							3
SK57									2																	3
SK58														2					1							3
SK61											3			2		1										6
SK62											4			2												6
SK63											1			1												2
SK69															1											1
SK72				1																						1
SK73					1																					1
SK76		1																								1
SK79			1											2												3
SD01											1		1													2
SD02		1						1						3									1			6
遺構外	7	5	4	8	1	1		3	3	1	41	8	6	48	12	9	1	23	5		3	4	2			195
合計	37	42	33	73	5	3	4	10	22	1	85	21	28	148	33	25	2	60	16	4	17	4	19	1	3	696
石材別合計	190					40					106	28	181	27			76			4	17	4	19	1	3	696

石、チャート、下呂石の剥片が多数出土している。黒曜石、チャート、下呂石は石鏃などの小形石器が出土しており、これらの製作に関わる剥片と考えられる。

硬砂岩と凝灰岩は、横刃型石器の素材と考えられる剥片が多数含まれているため、調整加工で生じた剥片と区分するために、以下のように分類した。

剥片A類：一側縁に鋭利な刃部が有り、片面の全面もしくは大半が自然面であり、最大長5cmより大きいもの。横刃型石器もしくはその素材剥片と考えられるもの。

剥片B類：最大長が5 cm以下の剥片で、以下の3類に分類される。

B1類：片面全面が自然面である剥片。小形の横刃型石器の素材の可能性がある。

B2類：表裏両面に剥離面がある剥片。

B3類：表面に複数の細かな剥離痕が認められる剥片。打製石斧などの調整剥片。打製石斧、横刃型石器の刃部小破片を含む。

剥片C類：欠損等でA類、B類に分類できず、打面、主剥離面、バルブ等が明瞭でないもの。はじけ飛んだ剥片を含む。

硬砂岩は打製石斧と横刃型石器に用いられる石材であるが、明らかにこれらの調整剥片と考えられるB3類は73点で、硬砂岩製の打製石斧の点数とほぼ同数である。原石を遺跡内に持ち込んで打製石斧を製作したと考えるには剥片の点数が少なすぎる。刃部再生などの二次的な調整加工を施したときに生じた剥片と考えるのが妥当であり、打製石斧の製作は遺跡外で行ったと考えられる。

20) 礫

硬砂岩、緑色岩、花崗岩の楕円礫を採取している。使用痕跡または剥片剥離が認められないものを礫とした。20 cmを超える大形のもののは台石の可能性がある礫として、前述している。ここでは、小形の礫について触れる。

特に硬砂岩と緑色岩は自然状態では遺跡内に存在しない石材であることから、天竜川で採取し、遺跡に持ち込まれたものである。出土したすべての礫を持ち帰っていないので、遺跡に残された全体量は正確に提示できないが、硬砂岩11点、緑色の凝灰岩1点を採取した。これらの礫は、磨石と石錘の素材に適した大きさである。

③ 黒曜石産地分析について

黒曜石の産地分析は、加工が認められる石器、石核全点とS B 01、S B 02の剥片全点を対象とし、合計103点の分析をおこない、第10表の結果を得た。分析は、沼津工業高等専門学校の望月明彦教授に委託し、非破壊の蛍光X線分析で実施した。縄文時代の黒曜石産地分析は、加工が認められる石器と石核を分析すればその遺跡の概要、すなわち製品で持ち込まれた石器と原石を持ち込んで剥片剥離を行った石器群の区別とその産地は把握できる。

分析結果は、諏訪星ヶ台群が88点、和田鷹山群が3点、和田土屋橋西群が1点、蓼科冷山群が1点、測定不能が9点、非黒曜石1点で、時期または石器形態による有意な違いは確認できなかった。諏訪星ヶ台群が9割程度を占める傾向は、同じ飯田市内の縄文時代早期の石子原遺跡（長野県埋蔵文化財センター2007 b）と中期を主体とする川路大明神原遺跡（長野県埋蔵文化財センター2009 未刊）と同様であることが確認された。

諏訪星ヶ台群以外の資料を写真1に示した。石鏃2点は丁寧なつくりの完成品であり、遺跡外で作成されたものであることは想像に難くない。しかし、楔形石器、剥片は小破片であり、利器として単独で遺跡内に持ち込まれたとは考えられない。これらの剥片が諏訪星ヶ台群の黒曜石と同時期の遺物であるかどうかは解決されなければならない問題であるが、産地の異なる黒曜石が少量混じる背景がどのような黒曜石の流通によるも

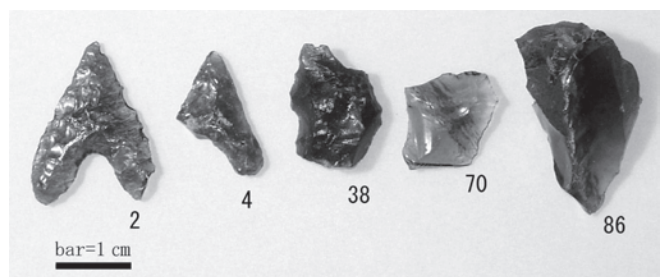


写真1 産地が異なる黒曜石（数字は分析番号）

第10表 黒曜石産地分析結果

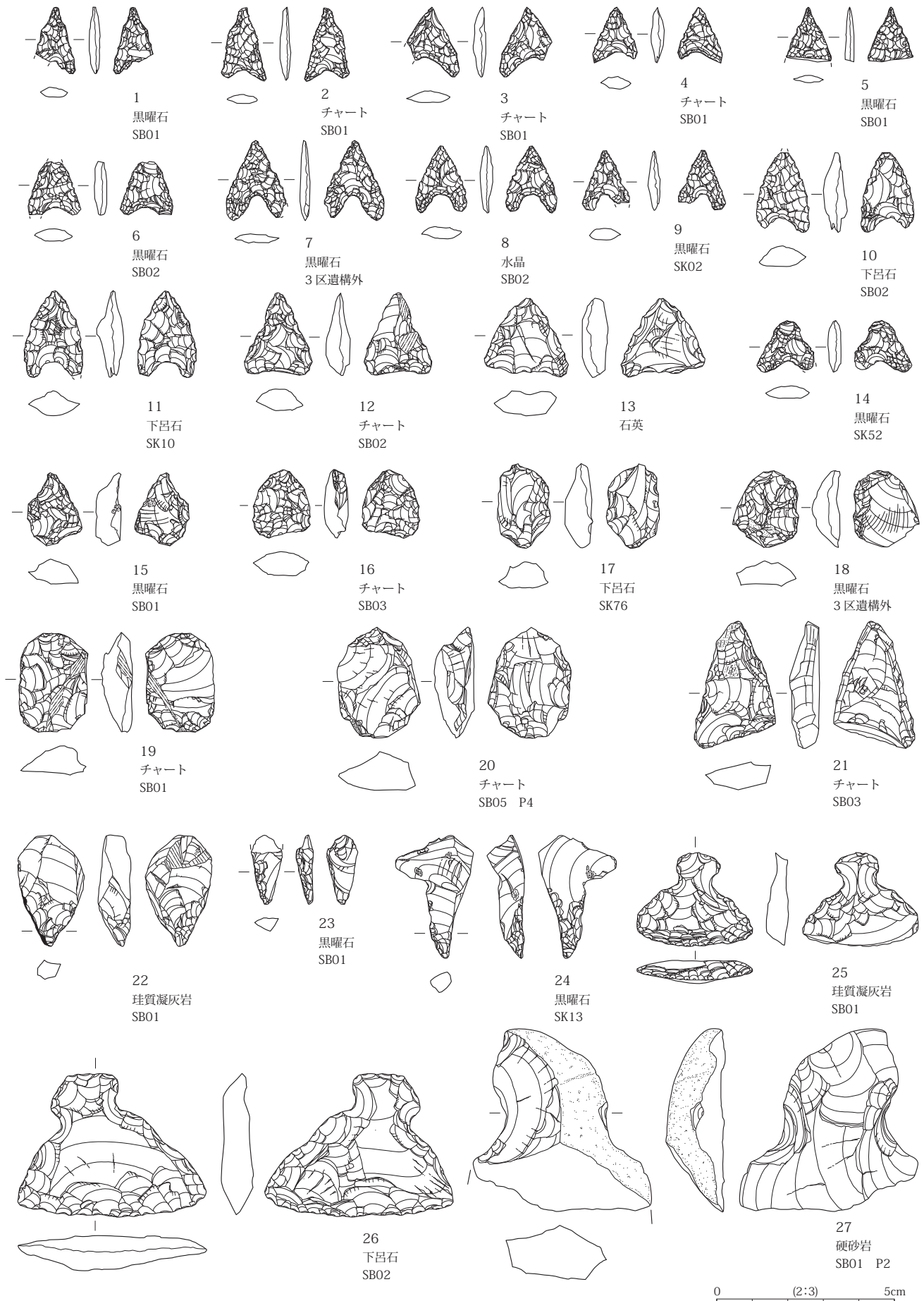
分析番号	図版番号	管理番号	遺構名	器種	重量(g)	産地推定結果
ISM-1		1452	遺構外	石鏃	0.38	諏訪星ヶ台群
ISM-2	7	1456	遺構外	石鏃	0.67	和田鷹山群
ISM-3		1481	遺構外	石鏃	0.54	諏訪星ヶ台群
ISM-4		1482	遺構外	石鏃	0.41	諏訪星ヶ台群
ISM-5	1	1339	SB01	石鏃	0.41	諏訪星ヶ台群
ISM-6		1343	SB01	石鏃	0.59	諏訪星ヶ台群
ISM-7		1345	SB01	石鏃	0.57	諏訪星ヶ台群
ISM-8		1354	SB01	石鏃	0.5	諏訪星ヶ台群
ISM-9	5	1355	SB01	石鏃	0.33	諏訪星ヶ台群
ISM-10	6	1366	SB02	石鏃	0.65	諏訪星ヶ台群
ISM-11		1390	SB03	石鏃	0.39	諏訪星ヶ台群
ISM-12		1392	SB03	石鏃	0.2	諏訪星ヶ台群
ISM-13		1403	SB05	石鏃	0.14	諏訪星ヶ台群
ISM-14	9	1415	SK02	石鏃	0.44	諏訪星ヶ台群
ISM-15		1464	遺構外	石鏃未成品	2.31	諏訪星ヶ台群
ISM-16	15	1335	SB01	石鏃未成品	1.7	諏訪星ヶ台群
ISM-17		1324	SB01	石鏃未成品	2.05	諏訪星ヶ台群
ISM-18		1368	SB02	石鏃未成品	0.66	諏訪星ヶ台群
ISM-19		1374	SB02	石鏃未成品	0.81	諏訪星ヶ台群
ISM-20	21	1388	SB03	石鏃未成品	6.65	非黒曜石
ISM-21	14	1436	SK52	石鏃未成品	0.67	諏訪星ヶ台群
ISM-22	31	1323	SB01	削器	0.98	諏訪星ヶ台群
ISM-23	23	1333	SB01	石錐	0.58	諏訪星ヶ台群
ISM-24		1386	SB02	石錐	1.06	諏訪星ヶ台群
ISM-25	24	1423	SK13	石錐	3.46	諏訪星ヶ台群
ISM-26	18	1462	遺構外	石鏃未成品	2.6	諏訪星ヶ台群
ISM-27		1373	SB02	re.Fl	2.68	諏訪星ヶ台群
ISM-28		1396	SB04	re.Fl	1.1	諏訪星ヶ台群
ISM-29		1409	SB05	re.Fl	1.17	諏訪星ヶ台群
ISM-30		1412	SB05	re.Fl	1.34	諏訪星ヶ台群
ISM-31		1336	SB01	u.Fl	1.64	諏訪星ヶ台群
ISM-32		1342	SB01	u.Fl	2.17	諏訪星ヶ台群
ISM-33		1350	SB01	u.Fl	3.64	諏訪星ヶ台群
ISM-34		1356	SB01	u.Fl	1.21	諏訪星ヶ台群
ISM-35		1376	SB02	u.Fl	1.56	諏訪星ヶ台群
ISM-36		1394	SB04	u.Fl	0.36	諏訪星ヶ台群
ISM-37		1471	遺構外	楔形石器	0.57	諏訪星ヶ台群
ISM-38		1483	遺構外	楔形石器	1.17	和田鷹山群
ISM-39		1489	遺構外	楔形石器	1.02	諏訪星ヶ台群
ISM-40	33	1341	SB01	楔形石器	3.71	諏訪星ヶ台群
ISM-41		1404	SB05	楔形石器	0.98	諏訪星ヶ台群
ISM-42	34	1416	SK03	楔形石器	3.91	諏訪星ヶ台群
ISM-43	38	1384	SB02	原石	42.3	諏訪星ヶ台群
ISM-44		1385	SB02	原石	55.19	諏訪星ヶ台群
ISM-45		1508	遺構外	石核	3.23	諏訪星ヶ台群
ISM-46		1507	遺構外	石核	3.78	諏訪星ヶ台群
ISM-47		1338	SB01	石核	2.15	諏訪星ヶ台群
ISM-48		1364	SB02	石核	3.54	推定不可
ISM-49	35	1397	SB04	石核	9.06	諏訪星ヶ台群
ISM-50		1444	SD02	石核	5.23	諏訪星ヶ台群
ISM-51	36	1419	SK08	石核	5.68	推定不可
ISM-52		1351	SB01	剥片	1.18	諏訪星ヶ台群

分析番号	図版番号	管理番号	遺構名	器種	重量(g)	産地推定結果
ISM-53		1353	SB01	剥片	2.93	推定不可
ISM-54		1362	SB02	剥片	0.94	諏訪星ヶ台群
ISM-55		1363	SB02	剥片	1.19	諏訪星ヶ台群
ISM-56		1370	SB02	剥片	1.98	諏訪星ヶ台群
ISM-57		1371	SB02	剥片	1.05	諏訪星ヶ台群
ISM-58		1372	SB02	剥片	0.28	推定不可
ISM-59		1375	SB02	剥片	1.15	諏訪星ヶ台群
ISM-60		1377	SB02	剥片	0.71	諏訪星ヶ台群
ISM-61		1378	SB02	剥片	0.69	諏訪星ヶ台群
ISM-62		1379	SB02	剥片	0.97	諏訪星ヶ台群
ISM-63		1381	SB02	剥片	0.62	諏訪星ヶ台群
ISM-64		1383	SB02	剥片	0.27	諏訪星ヶ台群
ISM-65			SB01	剥片	2.84	諏訪星ヶ台群
ISM-66			SB01	剥片	0.11	諏訪星ヶ台群
ISM-67			SB01	剥片	1.84	諏訪星ヶ台群
ISM-68			SB01	剥片	0.35	諏訪星ヶ台群
ISM-69			SB01	剥片	0.72	諏訪星ヶ台群
ISM-70			SB01	剥片	0.46	和田土屋橋西群
ISM-71			SB01	剥片	0.76	諏訪星ヶ台群
ISM-72			SB01	剥片	0.87	諏訪星ヶ台群
ISM-73			SB01	剥片	0.91	諏訪星ヶ台群
ISM-74			SB01	剥片	0.27	諏訪星ヶ台群
ISM-75			SB01	剥片	0.39	諏訪星ヶ台群
ISM-76			SB01	剥片	0.18	諏訪星ヶ台群
ISM-77			SB01	剥片	0.15	諏訪星ヶ台群
ISM-78			SB01	剥片	0.6	諏訪星ヶ台群
ISM-79			SB01	剥片	1.17	諏訪星ヶ台群
ISM-80			SB02	剥片	3.4	諏訪星ヶ台群
ISM-81			SB02	剥片	1.79	諏訪星ヶ台群
ISM-82			SB02	剥片	0.42	諏訪星ヶ台群
ISM-83			SB02	剥片	1.27	諏訪星ヶ台群
ISM-84			SB02	剥片	2.48	諏訪星ヶ台群
ISM-85			SB02	剥片	1.12	諏訪星ヶ台群
ISM-86			SB02	剥片	3.24	和田鷹山群
ISM-87			SB02	剥片	0.49	諏訪星ヶ台群
ISM-88			SB02	剥片	0.38	諏訪星ヶ台群
ISM-89			SB02	剥片	0.64	諏訪星ヶ台群
ISM-90			SB02	剥片	0.37	諏訪星ヶ台群
ISM-91			SB02	剥片	0.43	諏訪星ヶ台群
ISM-92			SB02	剥片	0.4	推定不可
ISM-93			SB02	剥片	1.15	諏訪星ヶ台群
ISM-94			SB02	剥片	0.11	推定不可
ISM-95			SB02	剥片	0.34	諏訪星ヶ台群
ISM-96			SB02	剥片	0.5	推定不可
ISM-97			SB02	剥片	1.2	推定不可
ISM-98			SB02	剥片	0.22	諏訪星ヶ台群
ISM-99			SB02	剥片	4.51	諏訪星ヶ台群
ISM-100			SB02	剥片	1.37	推定不可
ISM-101			SB02	剥片	1.15	諏訪星ヶ台群
ISM-102			SB02	剥片	0.29	諏訪星ヶ台群
ISM-103			SB02	剥片	0.23	諏訪星ヶ台群

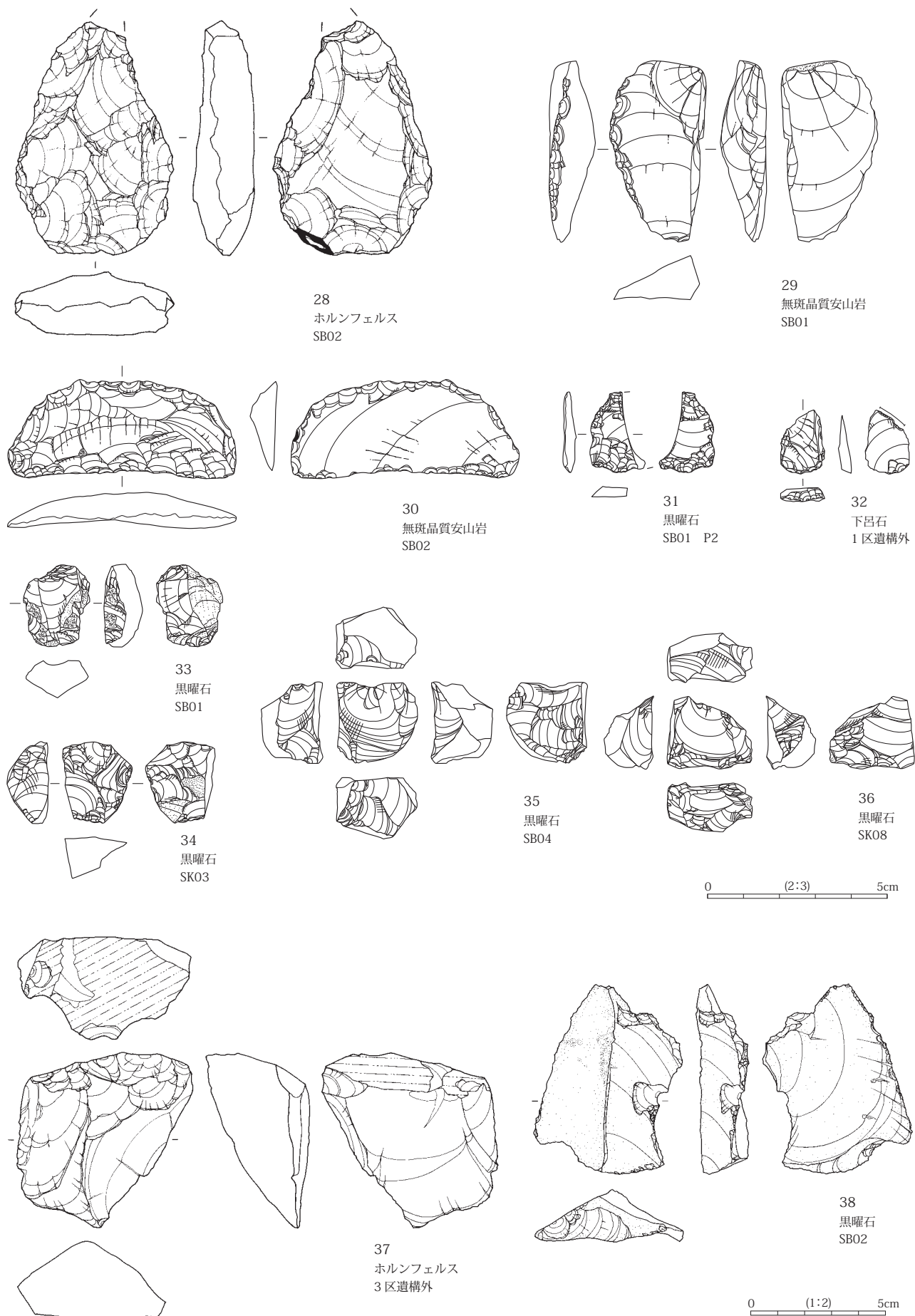
re.Flは二次加工がある剥片、u.Flは微細な剥離がある剥片

のなのか、今後検討していかねばならない課題であろう。

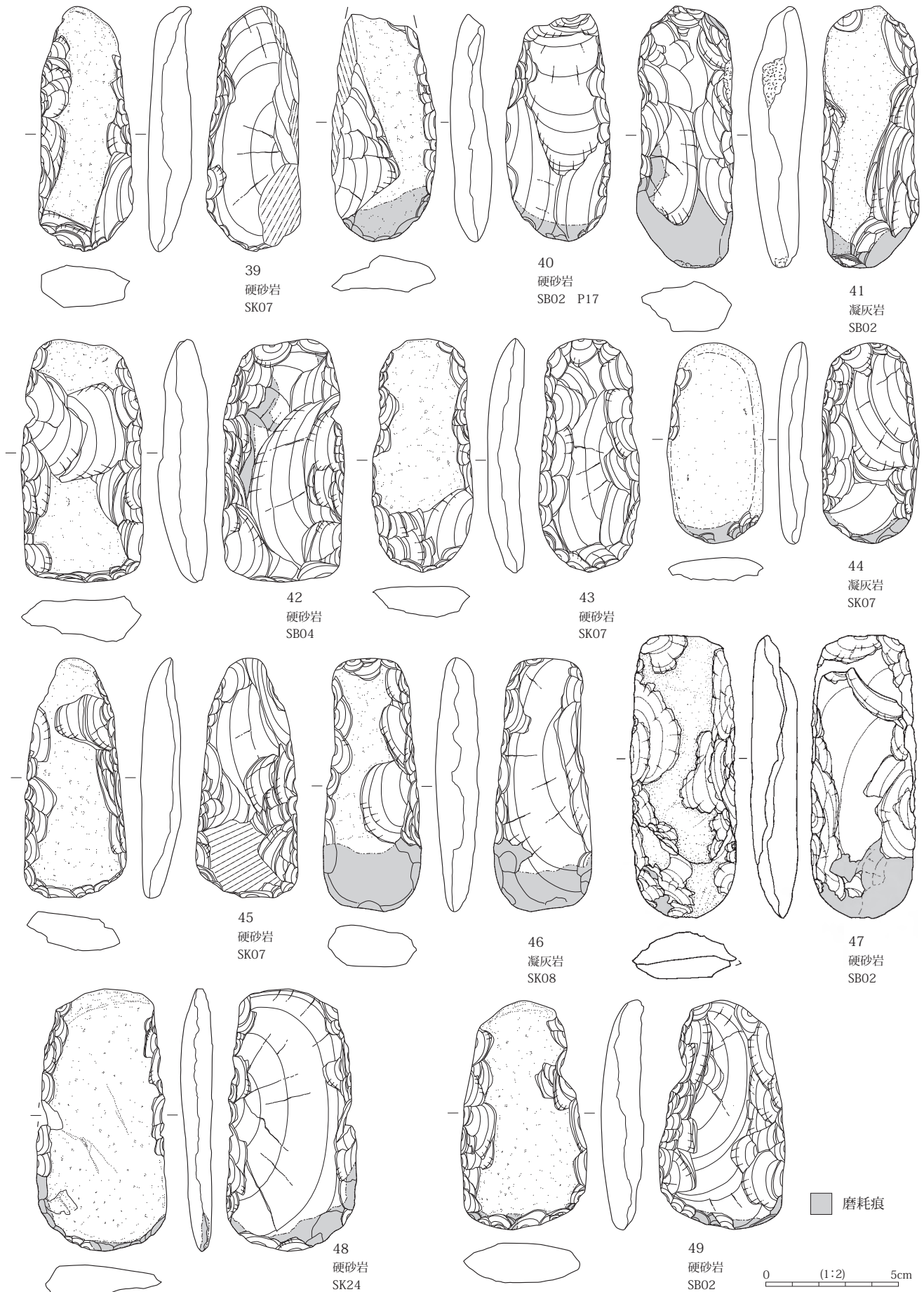
なお、望月教授による分析報告は付録CDに収録した。



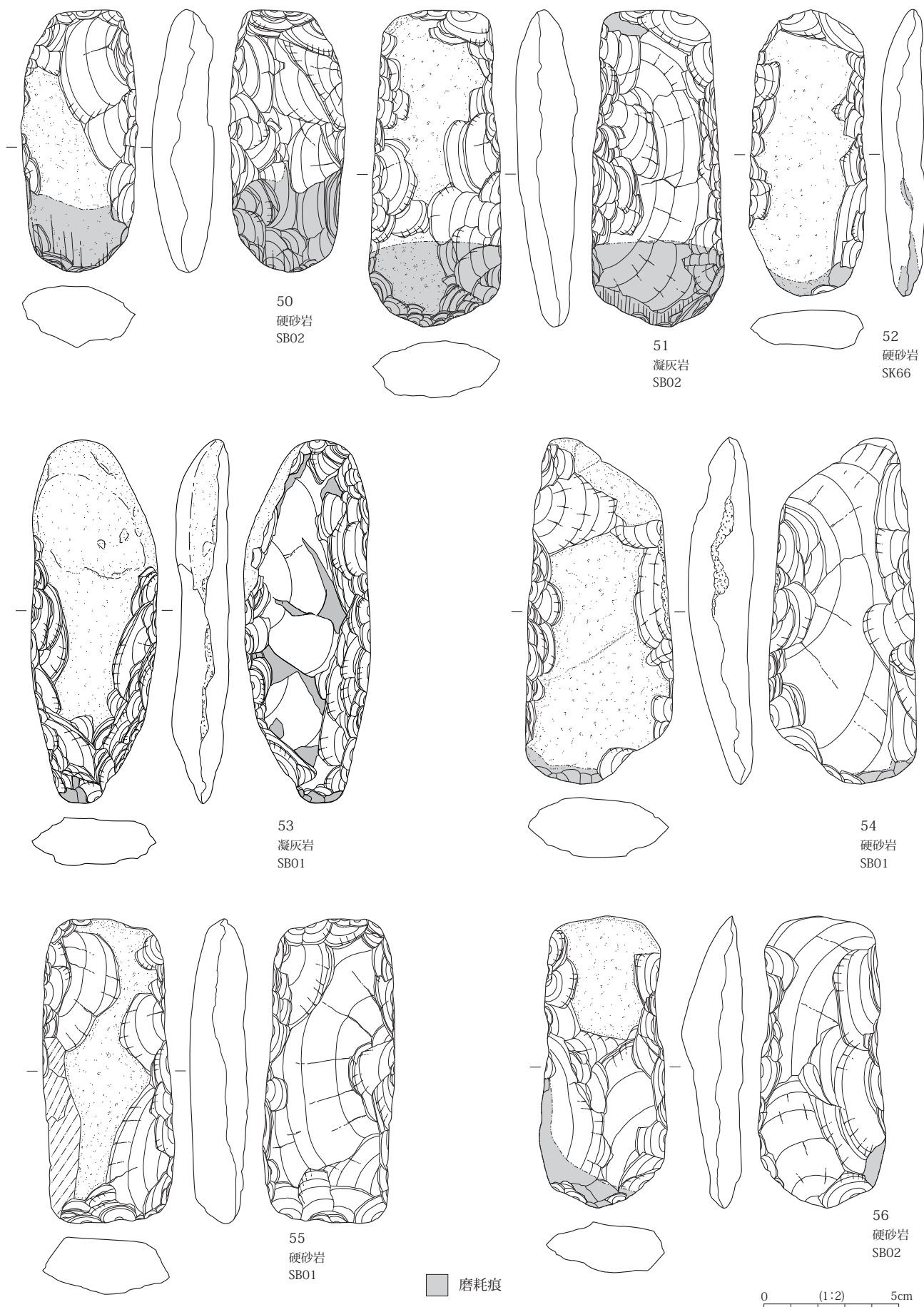
第77図 石器実測図 (1) (2:3)



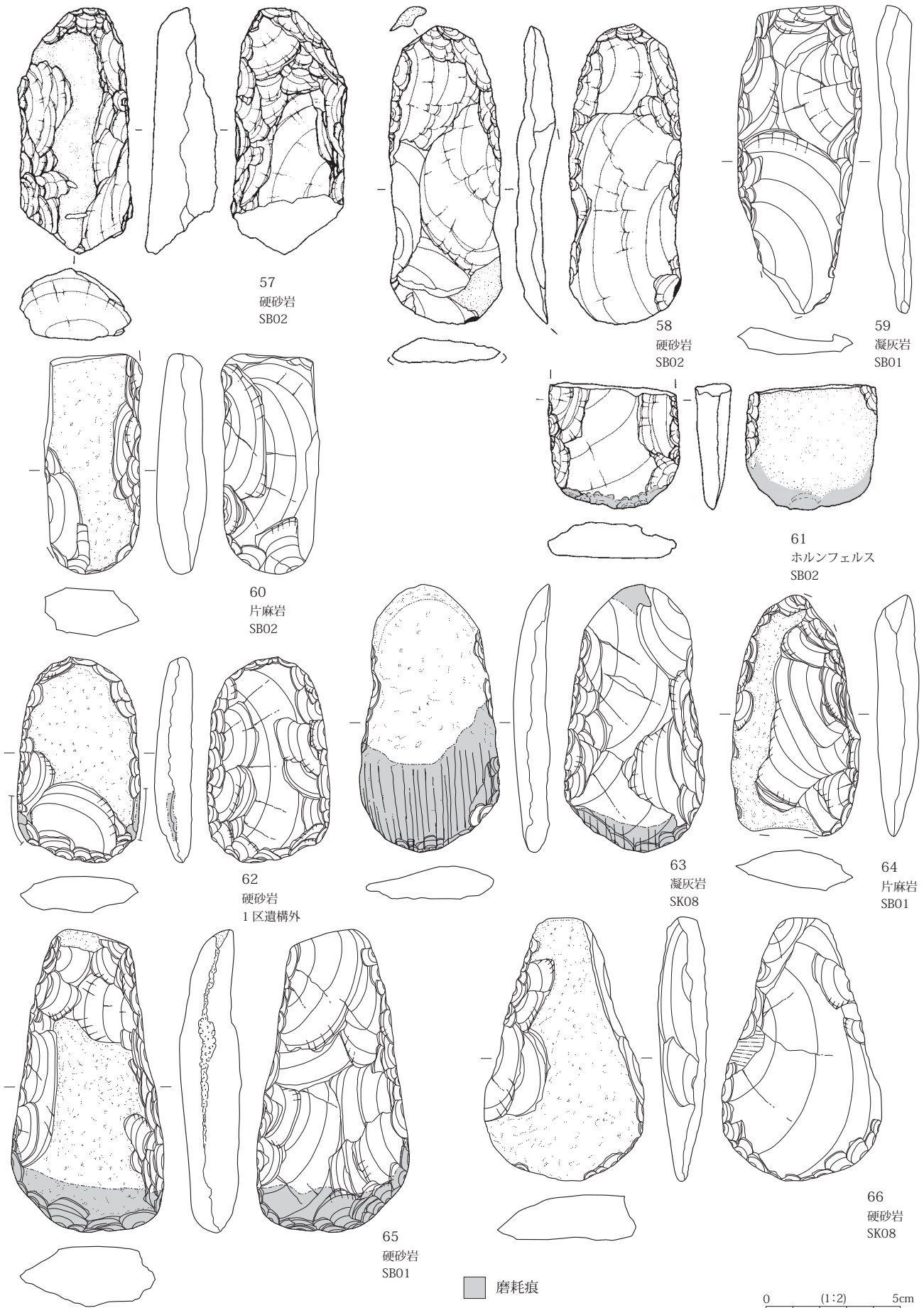
第78図 石器実測図(2) (2:3・1:2)



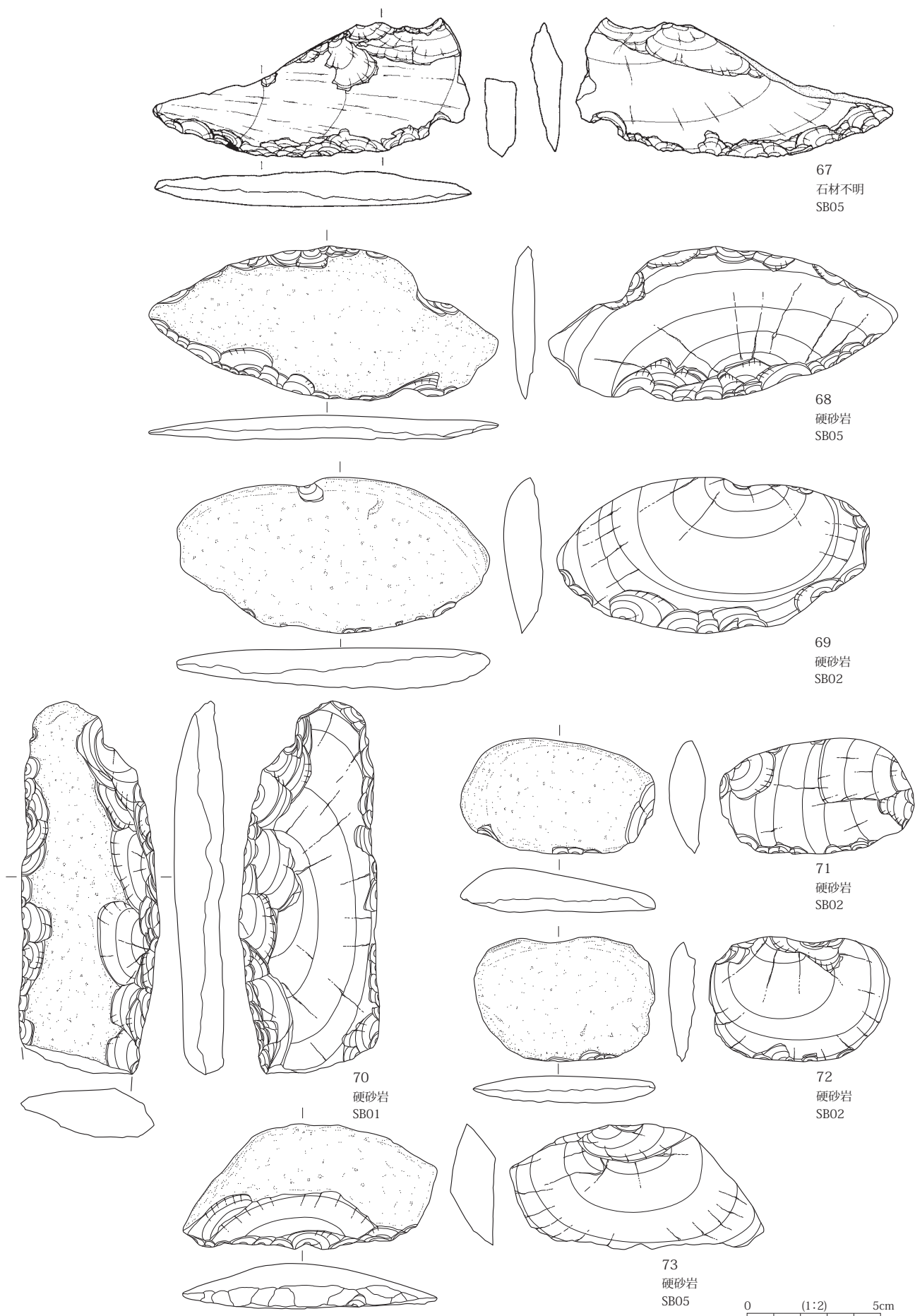
第79図 石器実測図(3) (1:2)



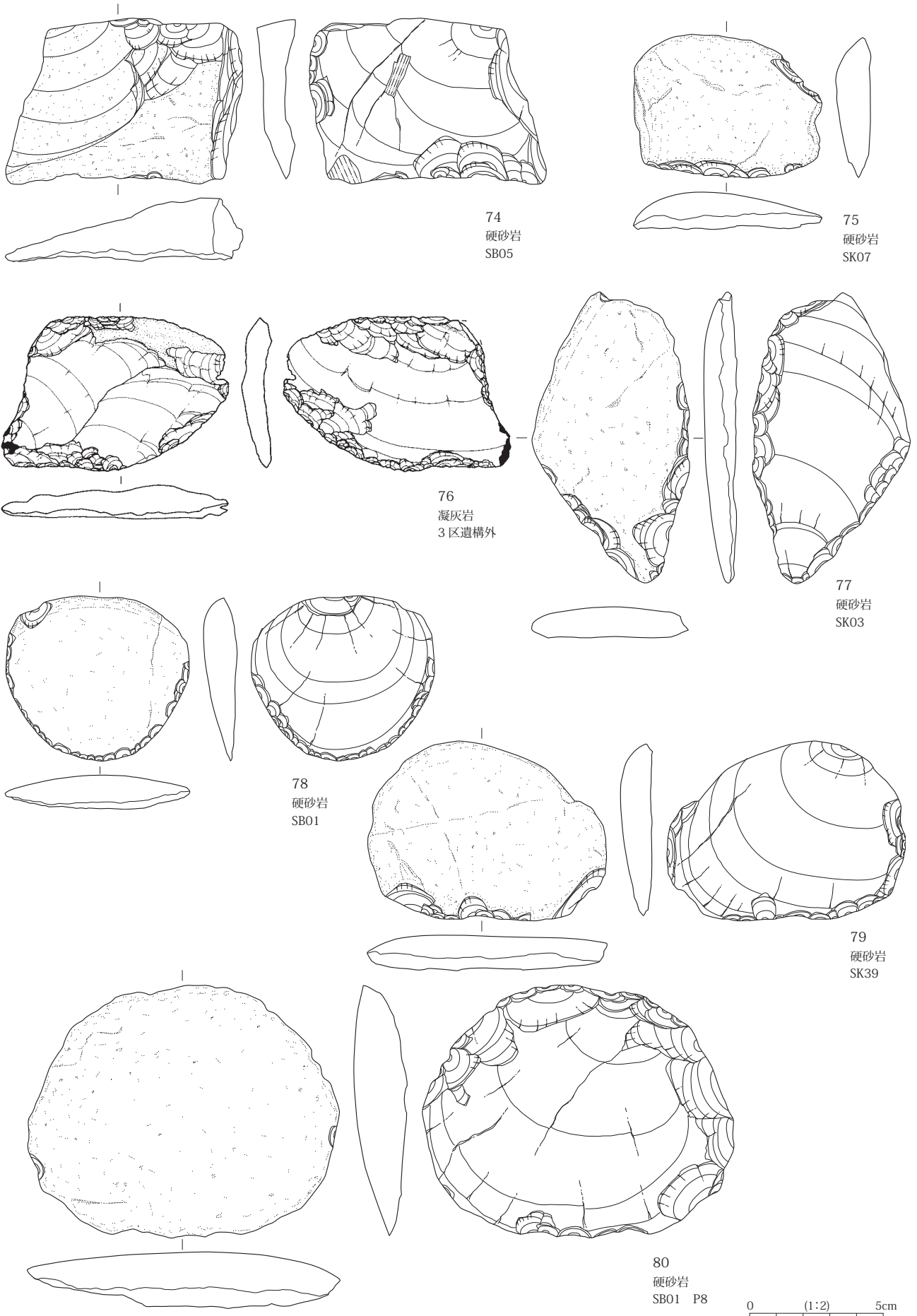
第80図 石器実測図(4) (1:2)



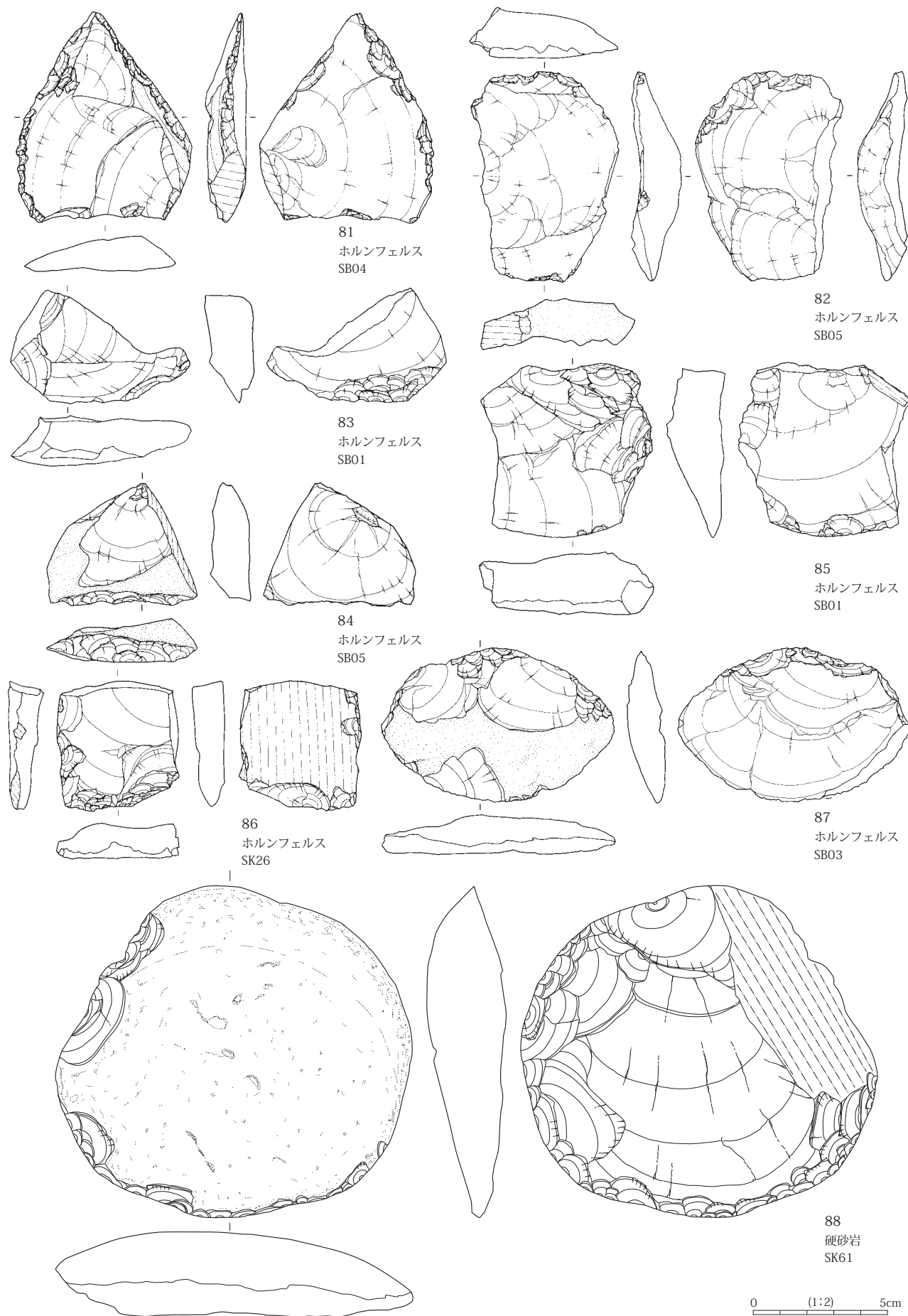
第81図 石器実測図(5) (1:2)



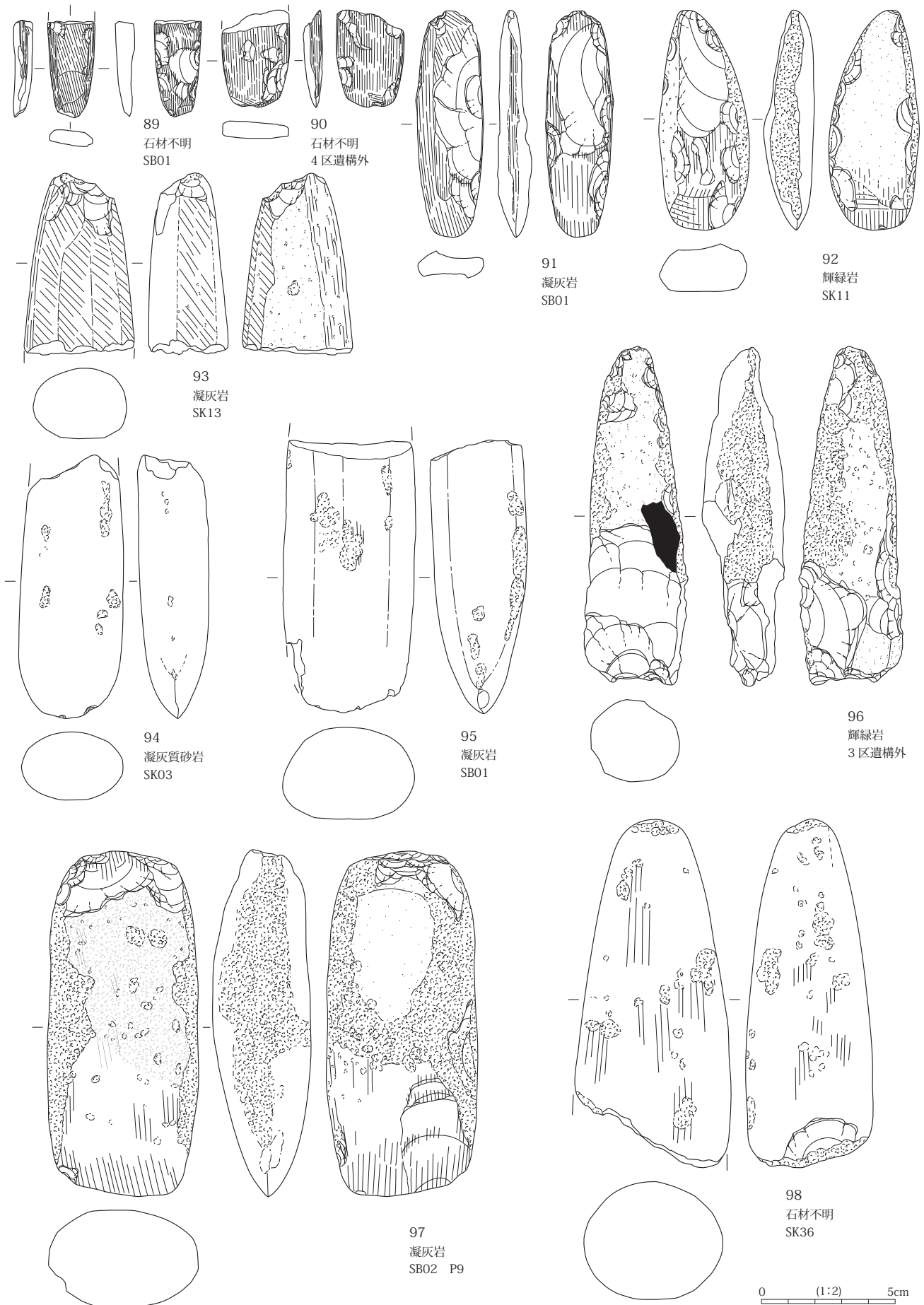
第82図 石器実測図(6) (1:2)



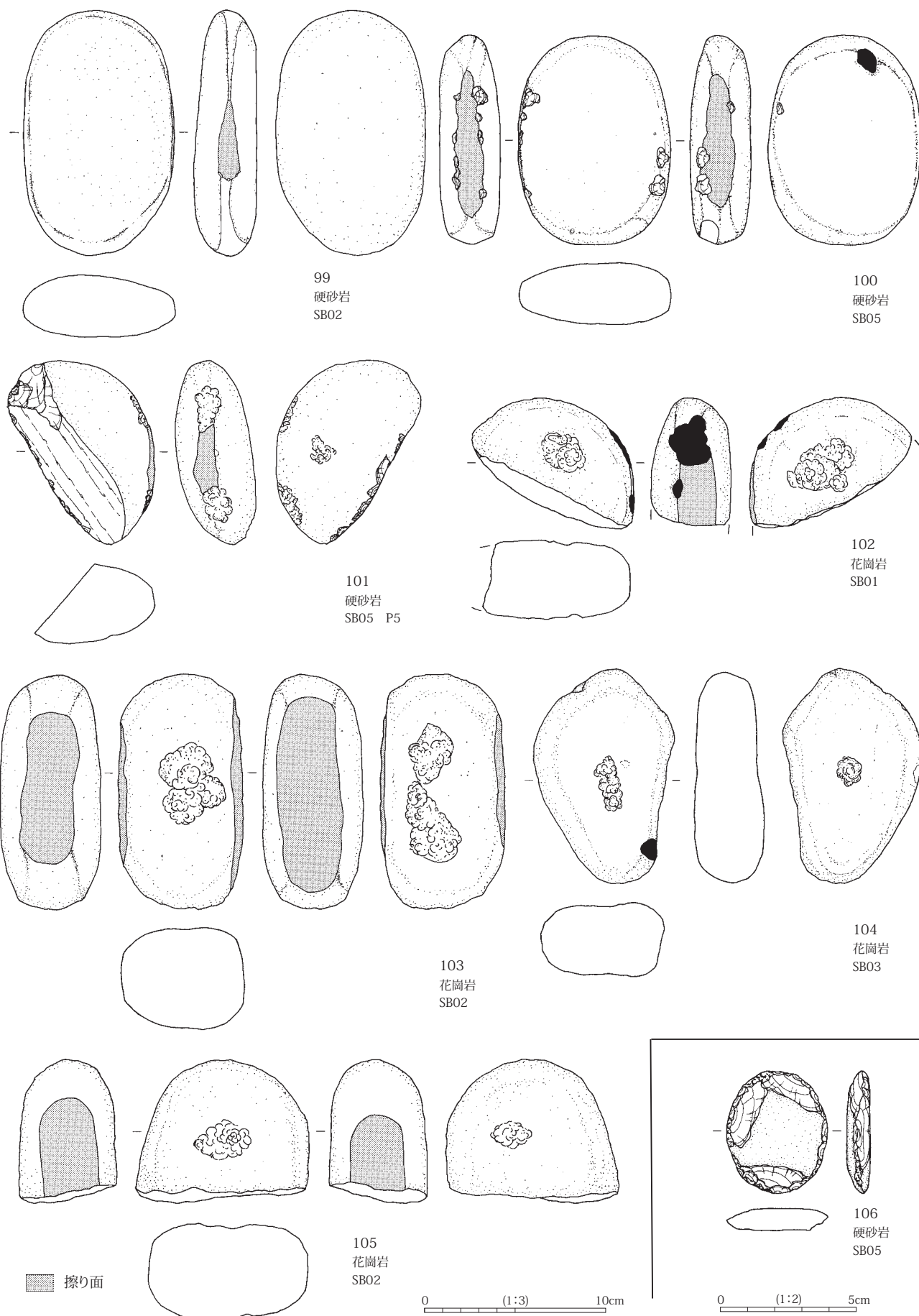
第83図 石器実測図(7) (1:2)



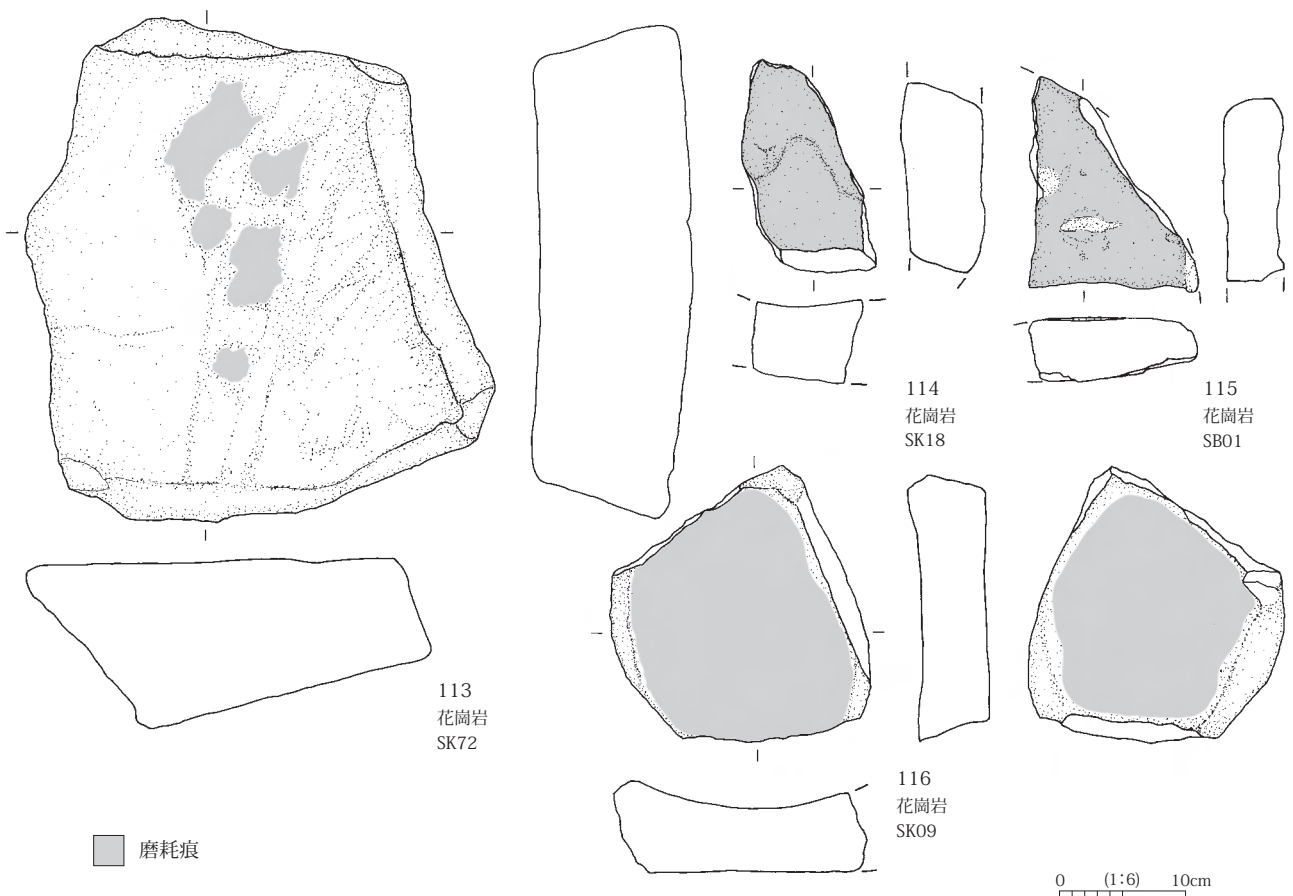
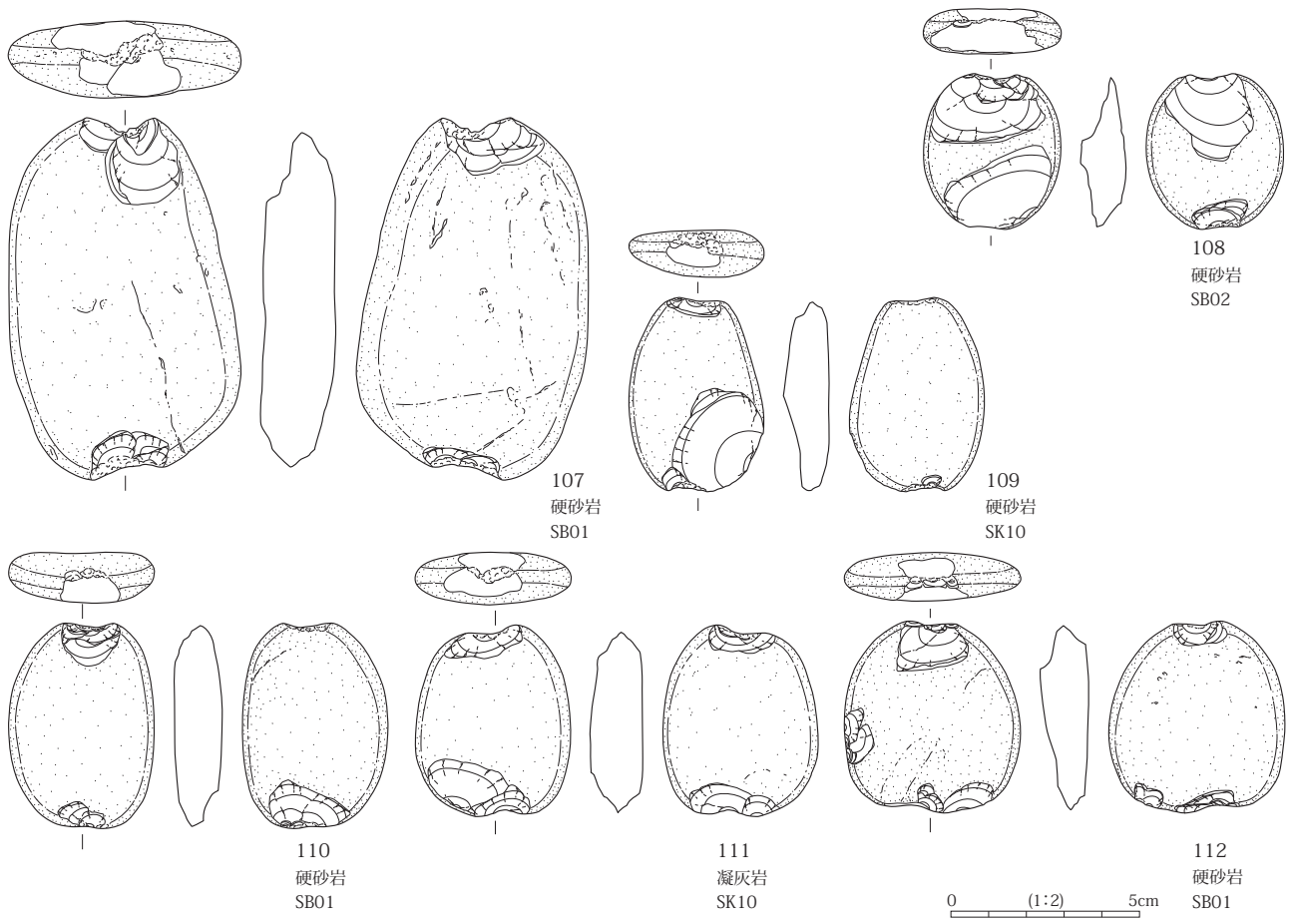
第84図 石器実測図(8) (1:2)



第85図 石器実測図(9) (1:2)



第86図 石器実測図(10) (1:2・1:3)



第87図 石器実測図(11) (1:2・1:6)

6 小結

今回の調査では、近世末～近代に埋没した自然流路跡と近世の遺物若干が検出されたものの、得られた資料のほとんどは縄文時代で、早期末葉～前期初頭、中期初頭～後葉の資料が確認された。

早期末葉～前期初頭は、東海系木島式と思われる土器と玦状耳飾が検出された。そのほか胎土に繊維を含む土器が出土しており、これも該期に属する可能性が高い。当時の人々の足跡がこの地に及んだことを示すが、断片的な資料であり、明確な遺構も確認されないため、その様相は不明瞭である。中期初頭についても、わずかな土器片が検出されたのみであり、ここで、いかなる活動が行われたのか判然としない。

中期中葉～後葉はこの地で本格的な居住活動が展開された時期である。検出された竪穴住居跡5軒、建物跡1棟はこの時期にあたる。出土土器からすると、帰属時期が不明確なS B 02を除いて、これらの遺構群は三つの時期に分けられる。第1の時期は中葉末～後葉I期で、S B 01・04・05が該当する。第2の時期は後葉II期で、S B 03が該当する。第3の時期は後葉III期で、S T 01が該当する。ただし、S B 04とS B 05の間隔は2mもなく、上屋の占める空間を考えると接近しすぎており、同時並存していた可能性は考えがたい。したがって、中葉末～後葉I期のなかで新旧があり、四時期の変遷が考えられる。さらに、S B 02が中葉IV～V期に帰属するとすれば、五時期となる。また、竪穴住居群は約120m離れた東西二つの群に分かれている。東群のS B 04・05と西群のS B 01はともに中葉末～後葉I期に属し、この時期には東西が並存していたことが考えられる。しかし、これを別集落とみるか、あるいは同一集落内に存在する二つのグループとして認識し得るのかについては、その判断材料を捉えることはできなかった。

土坑は詳細時期を特定し得ないが、出土遺物の総体的な時期が、竪穴住居跡出土遺物のそれとほぼ重なることから、竪穴住居群と時間的に併行すると考えられる。また、集落内の居住域に住居と隣接して群在しながら、かつ住居跡とほとんど切り合わないことは、土坑と竪穴住居の構築位置を選定するにあたって何らかの空間規制が働いていたことを推測させる。このことは、後葉II期までの集落が、同一集団あるいは強い親縁関係にある集団によって営まれたことを示しているのではあるまいか。

建物跡S T 01は土坑群と重複して築かれている。現実には切り合いの先後を確認することはできなかったものの、出土遺物からみて、土坑群より新しいとみてよい。後葉III期の遺構はS T 01のほかには確認されないため、単独で存在していた可能性がある。S T 01は、土坑と構築位置を分けるという規制が崩れており、集落が断絶した後に、それまでとは異なる背景の下に構築された施設であるのかもしれない。後葉III期より新しい縄文時代の資料は確認されなかった。

本遺跡の縄文時代中期集落は、1ないし2軒の竪穴住居に土坑群が伴う形態が中期後葉II期まで継続し、後葉III期に建物1棟が営まれるという変遷をたどったと考えられる。

本遺跡の周辺では、白山遺跡（飯田市教育委員会1981）、石子原遺跡（長野県埋蔵文化財センター2007b）、山本西平遺跡（飯田市教育委員会1998c）、竹佐中原遺跡（本書）、箱川原遺跡（下伊那誌編纂会1991）、湯川（柳田）遺跡（長野県教育委員会1973、飯田市教育委員会1997）で縄文時代中期中葉～後葉の集落跡の発掘調査が行われている。いずれも本遺跡と同様に、扇状地が開析された細長い台地上に立地する集落である。台地上を広く調査した石子原・竹佐中原遺跡を除き、集落の全容が判明したわけではなく、集落の規模や形態について踏み込んで言及することは難しいものの、現在のところ、比較的小規模な集落と予想している。

白山遺跡では、中葉の住居跡5軒が密集して検出されたが、遺構配置や出土遺物からみると少なくとも2時期には分かれそうである。湯川（柳田）遺跡では、中央自動車道建設地点と市道建設地点の2箇所が発掘調査がおこなわれた。両地点間の距離は約200mあり、同一集落として捉え得るか難しいところがある。前者では後葉の住居2軒が隣り合って検出され、報告書では同時並存とするが、2軒は2mしか離

れていない。後者では後葉の住居跡4軒がほぼ同じ場所に営まれており、一時期1～2軒の住居が三時期にわたって認められた。住居跡の近隣には土坑群が存在し、本遺跡と類似した状況が捉えられている。石子原・竹佐中原遺跡は台地上を広く調査したにもかかわらず、検出された住居跡は、前者が中葉末～後葉初頭、後者が後葉の1軒だけである。単独の住居から成る集落形態も存在したことを示している。

各集落の時期を概観すると、白山遺跡は中葉、本遺跡が中葉～後葉、石子原遺跡は中葉末～後葉初頭で、その他の遺跡は後葉である。本遺跡周辺では後葉に集落展開が活発化することが推測されるが、単なる形成時期の違いではなく、集団の移動、分散、回帰といったことが背景にある可能性も視野に入れて検討していく必要があるだろう。また、下伊那における中期の遺跡は後葉が大部分を占めており（飯田市教育委員会2003）、本遺跡周辺の動向もそれと共通する。しかし、現在のところ大規模集落は確認されておらず、飯田市内でも伊賀良地区や上郷地区などとは異なる状況にある。いまだ発見されていないだけなのか、そうでないのか。後者であるとすれば、小地域間において集落の在り方に違いをもたらした要因は何か。今後の調査・研究の進展に期待するところは大きい。

最後に、ホルンフェルス製石器について触れておきたい。今回調査地点からは竹佐中原遺跡の旧石器と同質のホルンフェルスを用いた石器が検出されており、ローム層出土ではないものの、発掘当初は旧石器時代の所産である可能性を考えた。しかし、検討の結果、縄文時代の石器である可能性が高いと判断した。このホルンフェルスは阿知川流域で採取される石材で、阿智村の平林遺跡（阿智村教育委員会1996）の縄文中期集落跡からは、この石材を使用した打製石斧などの石器が出土している（註2）。平林遺跡の報告書で、硬砂岩が少なく頁岩・領家系のものが多いという、阿智村・阿南町における石材組成上の特徴が指摘されているが、この「領家系」とされる石材が、本遺跡や竹佐中原遺跡のホルンフェルスに該当するのではないかと思われる。一方、飯田市内の他地域の遺跡からは発見されていない（註3）。このホルンフェルスを石器石材に使用することは、阿知川周辺における旧石器時代および縄文時代文化の地域的特色として把握し得ると考えられる。

註

- 1) 石材分類は信州大学原山智教授の指導により調査研究員鶴田典昭がおこなった。
- 2) 阿智村教育委員会のご厚意で、出土資料を実見した際の所見による。
- 3) 飯田市教育委員会のご教示による。

引用・参考文献

- 阿智村教育委員会 1996 『平林遺跡 阿智村特定環境保全公共下水道事業埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1981 『白山遺跡 長野県飯田市立山本小学校建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1996 『増泉寺付近遺跡 土地改良総合事業に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1997 『湯川遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998a 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1998b 『美女遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998c 『山本西平遺跡』
- 飯田市教育委員会 1999 『大門原遺跡』
- 飯田市教育委員会 2003 『城陸遺跡』
- 鵜飼幸雄 1977 「平出第三類A土器の編年的位置付けとその社会的背景」『信濃』第29巻 第4号 信濃史学会
- 神村透 1978 「結節縄文をつけた一群の土器」『中部高地の考古学』長野県考古学会15周年記念論文集 長野県考古学会
- 神村透 1986 「下伊那型櫛形文土器」『長野県考古学会誌』51 長野県考古学会
- 川崎保 1996 「の」字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター

第5章 本線部分および工事用道路部分の調査

- 小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」『歴史のものさし 縄文時代の考古学2』 同成社
- 小林達雄 編 2008 『総覧 縄文土器』『総覧 縄文土器』刊行委員会 アム・プロモーション
- 下伊那誌編纂会 1991 『下伊那史 第1巻』
- 下平博行 1999 「第IV章 1 縄文土器の概要」『大門原遺跡』 飯田市教育委員会
- 縄文セミナーの会 1998 『第11回縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相』
- 末木健 1978 「伊那谷中部縄文中期後半の土器群とその性格 - 予察 -」『信濃』 第30巻 第4号 信濃史学会
- 田中清文 1984 「伊那谷縄文中期後半土器編年への展開 - 第I期土器群の基礎的把握 -」『中部高地の考古学III』 長野県考古学会
- 戸沢充則 編 2001 『縄文時代研究事典』 東京堂
- 長野県教育委員会 1973 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 飯田市市内その2-』
- 長野県教育委員会 2003 『大規模開発事業地内遺跡 遺跡詳細分布調査報告書3』
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)』
- 長野県史刊行会 1989 『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 『国道474号(飯橋道路)埋蔵文化財発掘調査報告書 1 長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007a 『県道諏訪茅野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 駒形遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007b 『中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション埋蔵文化財発掘調査報告書 石子原遺跡・山本西平遺跡・辻原遺跡・赤羽原遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2009 未刊『国道474号(飯橋道路)埋蔵文化財発掘調査報告書 4 川路大明神原遺跡』
- 三上徹也 1986 「中部・西関東地方における縄文中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』 51 長野県考古学会
- 三上徹也 1998 「長野県における中期前半東海系土器」『縄文時代中期前半の東海系土器群 北屋敷土器の成立と展開 予稿集』 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
- 三上徹也・野村一寿・寺内隆夫 1988 「II. 2. (5) 縄文中期の土器」『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』 長野県史刊行会
- 吉川金利 2003 「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」『長野県考古学会誌』 102 長野県考古学会
- 吉川金利 2004 「伊那谷南部の中期中葉から後葉への移行期の土器について」『シンポジウム縄文集落研究の新地平3-勝坂から曾利へ- 発表要旨』 縄文集落研究グループセツルメント研究会
- 米田明訓 1980 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年 - 所謂「唐草文土器」を中心として -」『甲斐考古』 17の1 山梨県考古学会

第2節 ^{たいこぼら}太鼓洞遺跡・^{よこやま}横山遺跡

1 遺跡の概観 (第23図)

太鼓洞遺跡および横山遺跡は飯田市の西部、山本地区竹佐地籍に所在する。高鳥屋山の東南麓には、古期扇状地が小河川の浸食により分断されてできた、細長い残丘状台地が幾つか形成されている。そのひとつ、杵原台地が城山山塊に達する辺りの北斜面に、両遺跡は隣接して位置する。下り松遺跡からは北東に下った位置にあたる。台地北斜面は浸食作用により谷と尾根が入り組んでおり、両遺跡は谷部と尾根部にまたがって広がっている。

『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会 1998)によれば、太鼓洞遺跡は平安時代の遺物が確認されており、およそ170 m×90 mが遺跡範囲となっている。標高は573 m～589 mを測る。横山遺跡はおよそ230 m×90 mが遺跡範囲で、縄文時代中期の遺物が確認されている。標高は555 m～578 mである。両遺跡とも発掘調査が行われた経歴はなく、遺跡内容は明らかではない。

遺跡南西の台地頂部には下り松遺跡(本書)がある。北に谷を下った久米川沿いの低地部には、弥生時代後期の住居跡と中世の建物跡が発掘された沖平南遺跡(飯田市教育委員会 2006)が立地する。東側に連なる城山山塊はほぼ全域が久米ヶ城跡に指定されている(本書)。

2 調査の概要 (第88・89・90図、PL25・26)

飯橋道路は太鼓洞遺跡の中央部、横山遺跡の南部を通過する。両遺跡とも遺跡内容や遺構・遺物の分布状況が不明確であるため、まずトレンチ調査を行い、その状況・結果により、面的調査を実施するか否かを判断する計画を立てた。調査は平成16(2004)年4月13日～22日に実施した。両遺跡は隣接しており、一連の工程で調査を進めた。

(1) 太鼓洞遺跡

調査地は飯田市竹佐504-5地番ほか、調査面積は3,600 m²(トレンチ面積250 m²)である。調査前は、遺跡範囲のほぼ全域にわたって、台地斜面に四段の広い平坦地が造成されていた。最下段の平坦地は主に宅地、その他は畑地であった。飯橋道路本線建設部分、および関連する市道横山線改修部分を対象に、各平坦地に合計11本のトレンチ(1T～11T)を設定し、重機を用いて掘り下げた。

トレンチで確認した土層は以下のように整理される。

I層： 現畑耕作土 10YR4/1～4/2 灰褐色土

II層： 造成土および造成前の旧耕作土

II a層：造成土 1Tでは粗砂主体で黒色土・褐色土・礫混成。その他のトレンチでは、黄褐色土主体で暗褐色土ブロック・礫混成

II b層：10YR3/1～3/2 黒褐色土 旧畑耕土と思われる。8・9・11TではIV aに比べサラサラしている。3・4Tではシルト質で、砂を少し含み、しまりなし

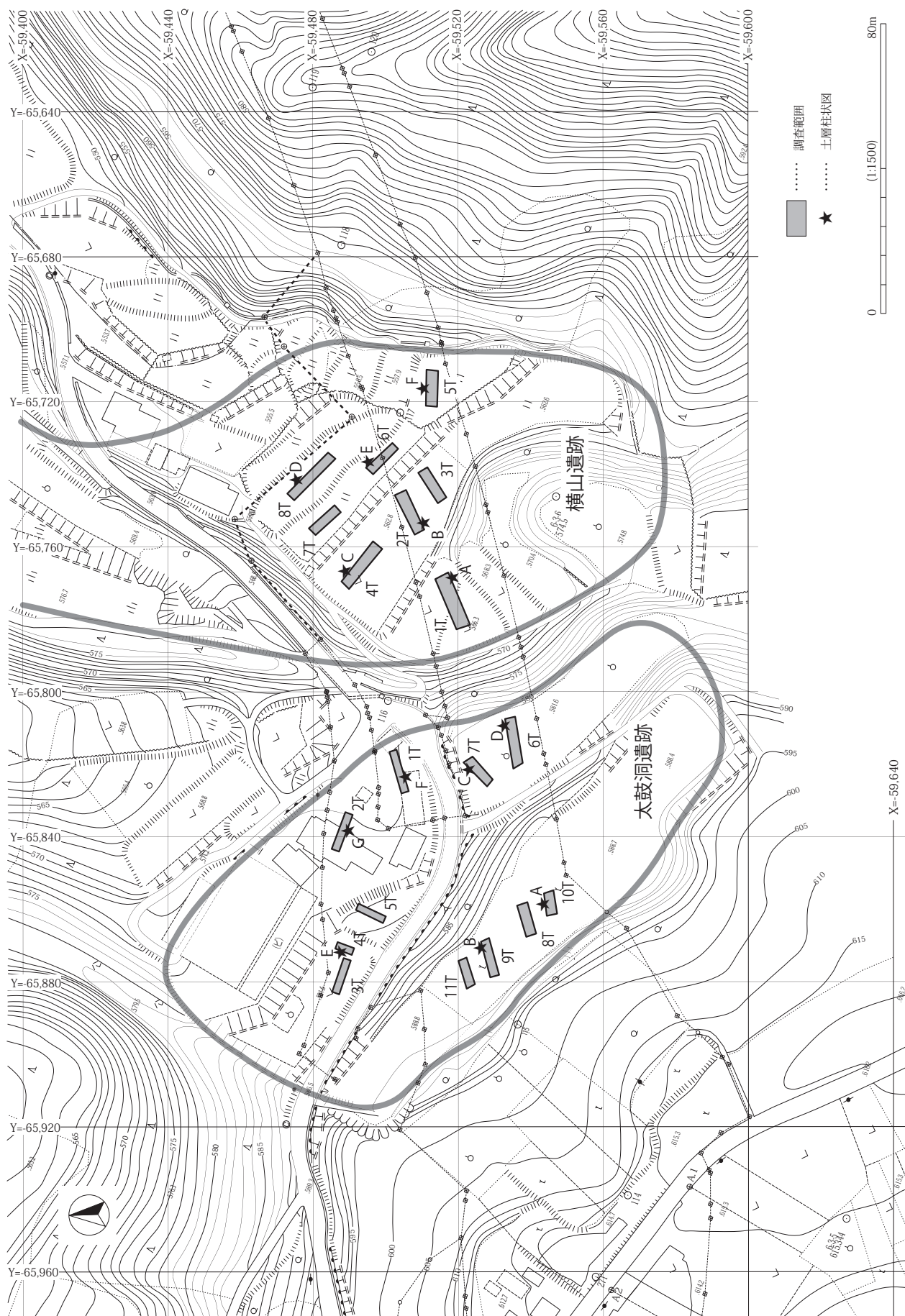
III層：谷部を埋める自然堆積層 7.5YR4/2～5/ 灰褐色シルト 草根多く炭粒も混じる。層厚1 m以上

IV層：地山

IV a層：旧表土 10YR2/1～3/2 黒色～黒褐色土 直下のIV dおよびIV c層が土壌化。2Tでは低位部(1T側)に向かうにつれ灰色化・シルト化してIII層土に近づく

IV b層：漸移層 上部ほど黒色が強く下部ほど黄色が強くなる(8・9・11T)

IV c層：10YR6/6～2.5YR6/6 黄褐色土 シルト質で粗砂が混じる



第 88 図 太鼓洞遺跡・横山遺跡調査範囲図 (1 : 1500)

IV d層：10YR5/6～10YR7/8 黄褐色～明黄褐色土 礫・粗砂が混じる。硬く、しまりあり。10Tでは赤褐色部分が脈状に入る。7Tでは風化花崗岩の岩盤ないし巨礫が入る

トレンチ調査の結果、山腹斜面を広範囲に切り開き、それにより生じた土砂を谷側斜面に押し出して土盛りを行い（II a層）、平坦地を造成していることが判った。10Tおよび7Tでは表土直下全面に基盤のIV d層が露出した。周囲の残地形を併せて勘考すると、10Tから7Tに向かって延びていた尾根状部が削平されたことが明らかであろう。また、6T南東側の谷状部や、1Tから2Tにかけての部分に北から入り込む谷は、ともに埋め立てられている。こうした大規模な削平を伴う地形改変が行われていること、いずれのトレンチでも遺構は認められず、トレンチ外を含めて遺物がまったく検出されなかったことから、面的調査を行う必要はないと判断した。

(2) 横山遺跡

調査地は飯田市竹佐497地番ほかである。北に下る谷の内部にあたり、棚状の水田が幾段にもわたって造られている。調査面積は3,600㎡（トレンチ面積300㎡）である。飯喬道路本線部分および工事ヤード部分にかかる水田面に合計8本のトレンチ（1T～8T）を設定し、重機を用いて掘り下げた。工事ヤードは、本線部分の北側、市道横山線との間を借地のうえ土盛りを行って造成し、工事終了後は盛土の上に新たな水田を造成して土地所有者に返還する計画であった。

トレンチで確認した土層は以下のように整理される。

I層：現水田層 2.5YR4/3～3/3 暗オリーブ褐色シルト

II層：現水田造成土および旧水田層・造成土

II a層：現水田造成土 4Tでは暗オリーブ褐色土とオリーブ黄色・オリーブ褐色ブロック土の互層。5Tでは黄褐色ブロックが混じる暗灰黄色シルト。6Tでは暗灰黄色土・砂礫・III fブロック混成。8TではIII eおよびII b類似のブロック

II b層：旧水田層 4Tでは黒褐色シルトで上面に植物腐食層形成。5Tでは暗オリーブ褐色シルトにオリーブ灰色がブロック状に入る。6T・8Tでは黄灰色シルト。マルチフィルムを含む

II c層：旧水田造成土 4Tではオリーブ黄色～にぶい黄褐色砂礫で鉄分沈着。5Tでは5～10cmの角礫が混じるオリーブ灰色シルトで暗オリーブ褐色が筋状に入る

II d層：最下水田層 オリーブ灰色砂質土 上面に植物腐食層形成。下面に黄褐色土のブロックが厚さ5cmで面的に広がる。5Tのみで確認

III層：開田前の谷状部を埋積するシルト・砂・砂礫層

III a層：2.5GY2/1 黒色シルト 粗砂混じり。植物片が多く混る（4T）

III b層：砂とシルトの互層（4T）

III c層：5G5/1 緑灰色シルト 礫砂混じり（4T）

III d層：10YR5/2 褐灰色シルト 若干の礫と粗砂が混じる。III eとの層界は漸移的（8T）

III e層：2.5Y5/2～5Y5/2 暗灰黄色砂礫 シルト混じり。主体は砂だが礫が多い部分が不規則なラミナ状に入る。下部はグライ化（8T）

III f層：2.5Y5/2～6/2 暗灰黄色シルト 下層との層界は漸移的（6T）

III g層：5G5/1 緑灰色砂礫 シルト混じり 本来2.5Y5/2 暗灰黄色がグライ化（6T）

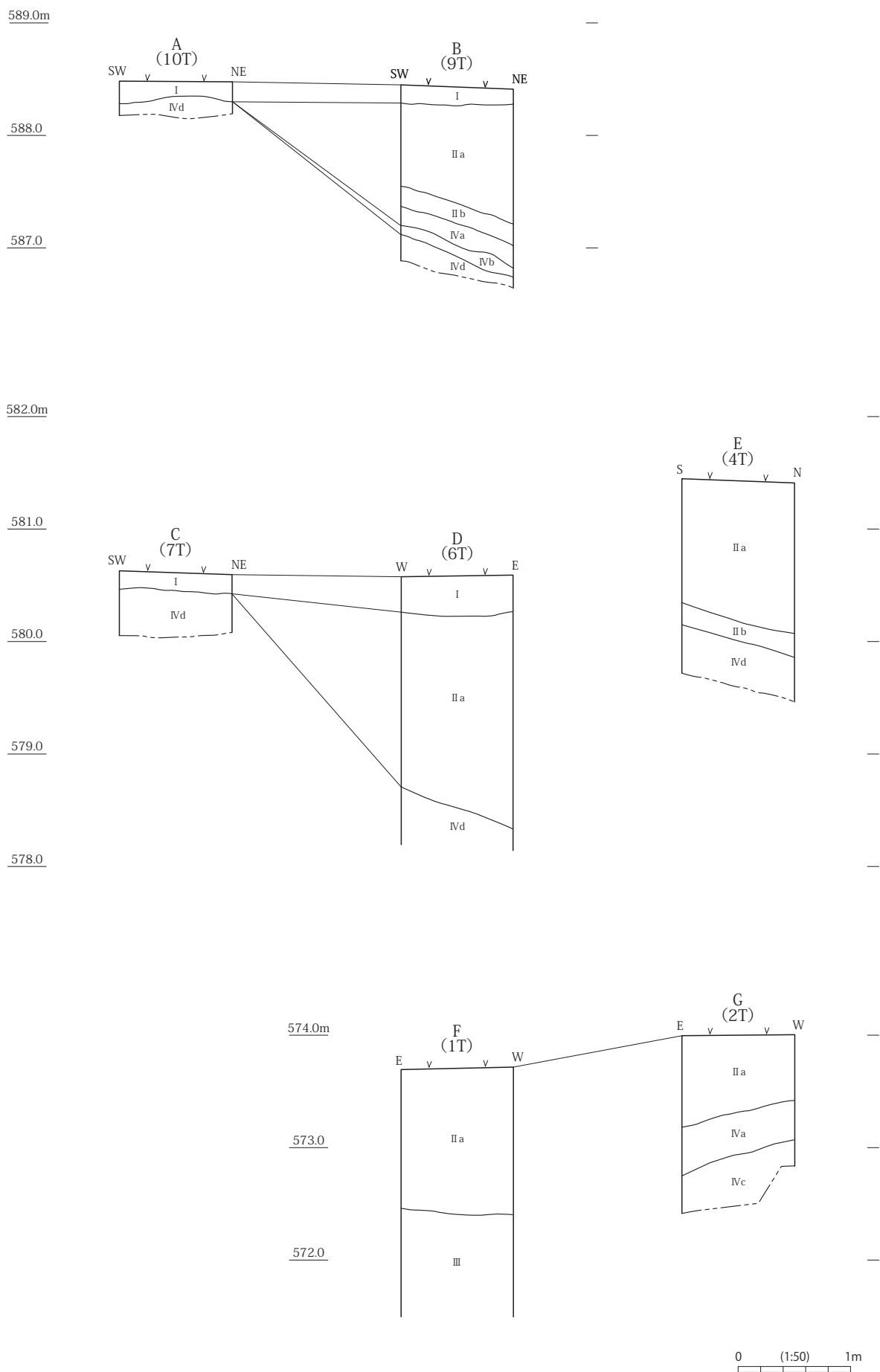
III h層：5Y3/1 オリーブ黒色シルト グライ化。黒色シルトブロック混。下部に5～10cmの礫混（5T）

III i層：2.5Y6/2 灰黄色砂・砂礫 黒褐色シルト層を挟む（5T）

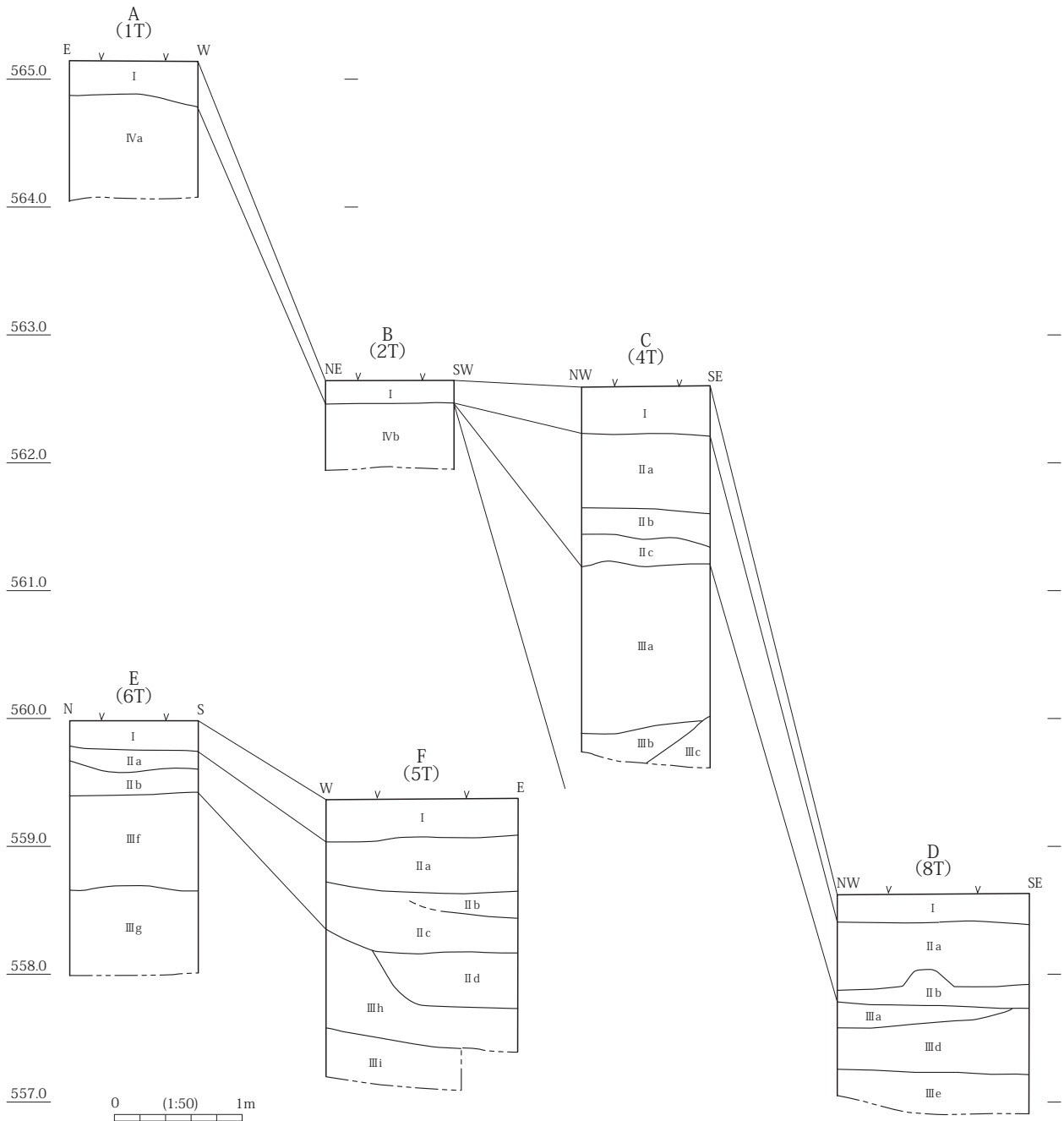
IV層：地山

IV a層：10Y5/6 黄褐色土 花崗岩起源の粗粒砂層 しまりあり（1T）

第5章 本線部分および工事用道路部分の調査



第 89 図 太鼓洞遺跡土層柱状図 (1 : 50)



第90図 横山遺跡土層柱状図 (1:50)

IV b層：2.5Y6/6 明黄褐色土 細砂質 しまりあり (2T)

現水田を含め3枚の水田を確認したが、2枚目の水田層(II b層)は、マルチフィルムを含むため現代に属する。最下の水田(II d層)も、2枚目水田造成土(II c層)に田面が覆われることから、現代まで機能していた水田とみてよいだろう。最下水田直下のIII層は谷底を埋めるシルト・砂・砂礫の不規則な堆積である。開田以前は、軟弱で不安定な土地環境にあったことが推測される。III層上面から最大1.5m掘り下げたが、遺構は検出されなかった。以上の状況、また、トレンチ外を含めて遺物がまったく検出されなかったことから、面的調査を行う必要はないと判断した。

引用・参考文献

飯田市教育委員会 1998 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
 飯田市教育委員会 2006 『沖平南遺跡』

第3節 城山山麓の調査

1 久米ヶ城跡^{くめがじょうせき} (第91図、PL26)

(1) 遺跡の概観

久米ヶ城は飯田市の西部、久米・竹佐・箱川・伊豆木地籍にまたがる城山に築かれた中世の山城である。『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会 1998)によれば、城山山塊のほぼ全域が城跡範囲に指定されており、その広さはおよそ東西 1.6 km、南北 1.3 kmに及ぶ。発掘調査が行われたことはないが、宮坂武男氏により詳細な縄張り図が作成されている(宮坂 1999)。その縄張り図をみると、久米ヶ城は標高 733 mの城山山頂に主郭を置き、二の郭さらに三の郭が南へ連なって主郭部を構成する。主郭部から伸びる主要な尾根には大小の郭が連続して築かれ、要所に堀切がある。堀切には土塁を伴うものや二重堀もみられる。城郭施設は主郭を中心に東西 350 m、南北 550 mにわたって延びており、最も低所にある西尾根最下段の郭は標高約 670 m、次いで低い北尾根最下段の郭は標高約 680 mを測る。

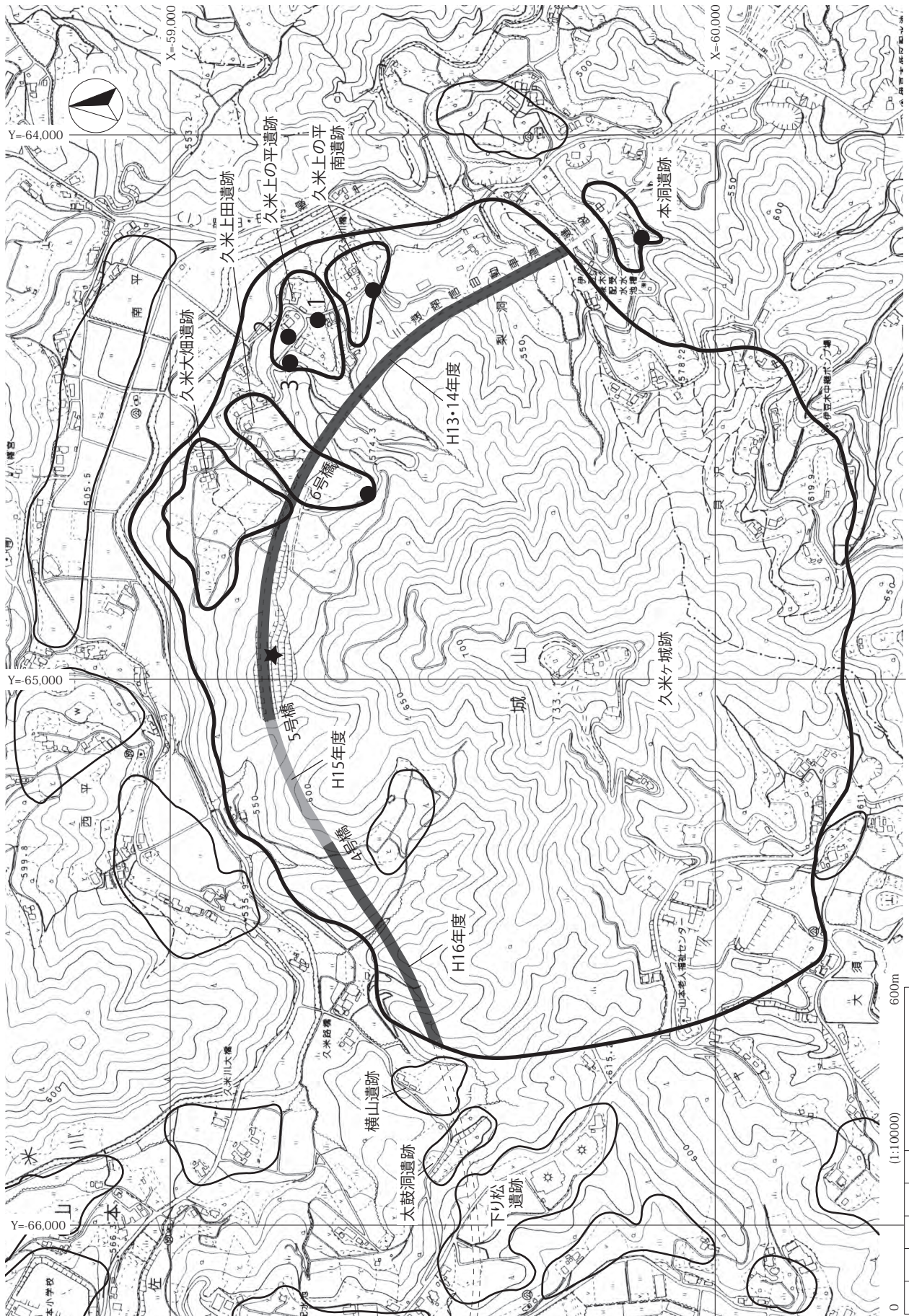
『山本村誌』(山本村誌編纂委員会 1957)では、開善寺にある小笠原氏系図により、久米ヶ城は、松尾城主小笠原貞宗の弟貞長を初代の城主として9代植盛まで、およそ200年近く、戦国時代の中頃までは存続したとする。そして、明応年間(1492～1501)、深志小笠原氏と下条氏の連合軍に松尾城が攻め落とされた時、松尾の支城であった久米ヶ城もまた落城したことを推測する。北尾根にある蔵屋敷と呼ばれる郭では焦げた米が発見されるという。ただし、現在に残る城郭遺構は16世紀後半の特徴を示している。16世紀後半は伊那地方が甲斐の武田氏の治下にあった時期と重なる。大島城(松川町)のように、武田氏により大規模な修築が行われた可能性が考えられよう。

周辺の中世城砦として、北方3kmの三つ山に茶臼ヶ城、その南の山本東平に麦種城、北西に3km離れた西平の城山に西平城がある。また、南に接する水晶山には水晶山砦、その南西に伊豆木城が位置している。『山本村誌』は、麦種城・西平城は久米ヶ城の支城として機能していたとの見解を示す。

(2) 調査の概要

飯喬道路は城山の北麓～東麓を巻くように通過してゆくが、久米ヶ城の城郭施設は、山頂付近に限られ、中腹～山麓部には確認されていない。しかし、平成6(1994)年に長野県教育委員会が実施した分布調査では、北麓の尾根部分にあたる用地内に「平坦地」が見つかり、段郭の可能性が指摘された(長野県教育委員会 1997)。長野県埋蔵文化財センターは、用地内の樹木伐採が進み、周辺地形を広く見渡せるようになった段階で、改めて現地踏査を行い、その結果に基づいて、その後の調査方針を立てることとした。

平成14(2002)年7月4日に、上記の「平坦地」を含む、6号橋(久米上田遺跡)から5号橋までの区間について現地踏査を実施した。「平坦地」は尾根状地形の斜面部にあり、山頂から北へおよそ550m、標高約590mの地点にあたる(第91図★地点、5号橋東側)。等高線に平行する方向での最大長8m、直交方向での最大長3mほどの三日月形を呈するようにも見えるが、周囲に障害物のない状況で詳しく観察すると、上下の斜面に比べてやや傾斜が緩くなった部分であり、人工的平坦地とは見做し難いものであった。斜面下方および側方には堀や土塁、郭などを推測させる地形変化はまったく認められず、上方へ距離100m、高さ30m程上って観察してみたが、同様な状況であった。この地点は、前述した宮坂氏作成の縄張り図に表示された北尾根の施設群の末端から300m離れた位置にあり、そこに小規模な郭が1基単独で存在することは、山城築城の論理上、不合理である。また、用地外を含め遺物は1点も採集されなかった。以上の状況から、「平坦地」は城郭施設ではなく、自然地形であると判断した。「平坦地」以外の部分



第 91 図 城山麓調査地点位置図 (1 : 10000)

においても同様である。

平成15(2003)年10月9日には、5号橋～4号橋間について踏査を実施した。この区間では道路用地は幅広い尾根状地形の先端斜面を横断する。地表面をくまなく観察したが、竪堀や横堀、郭などの遺構は認められなかった。用地範囲の上端あたりから傾斜は徐々にゆるくなり、平坦な尾根頂部に至るが、ここにも城郭施設を窺わせる状況を見出すことはできない。遺物は用地外を含め全く検出されなかった。

平成16年(2004)6月1日および7月8日には、最後に残った4号橋～3号橋(横山遺跡)間についての踏査を行った。樹木伐採の進捗状況との関係で、6月1日は東半部、7月8日は西半部を対象とした。地表観察を徹底し、とくに尾根部分については念入りに観察したが、城郭施設の存在をうかがわせる状況を見出すことはできなかった。遺物は全く発見されなかった。

なお、6号橋より東方の用地部分については、後述する久米上田遺跡～本洞遺跡の工事立会・トレンチ調査の折に、尾根部を主体に踏査を行ったが、城郭施設や遺物は確認されなかった。

2 久米大畑遺跡・久米上田遺跡(第91・92図、PL26)

(1) 遺跡の概観

久米大畑遺跡および久米上田遺跡は飯田市の西部、久米地籍に所在する。城山北東麓の傾斜地に隣接して立地し、北東に延びる細い尾根が両遺跡の境をなす。遺跡上部は傾斜がきつく、段切り造成がなされて棚状の水田・畑地が連続する現況となっている。下部は傾斜が緩やかとなり、宅地等に利用されている。

『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会1998)によれば、どちらも縄文時代中期の遺物が確認されているが、発掘調査歴はない。西側の久米大畑遺跡は、およそ310m×230mが遺跡範囲となっており、標高は515m～560mを測る。東側の久米上田遺跡はおよそ300m×100mが遺跡範囲で、標高は520m～570mである。傾斜地に立地するため比高差が大きい。

両遺跡の他にも城山には幾つかの遺跡が位置している。北西麓から中腹にかけての谷状部に立地する堀田の洞遺跡では縄文中期および中世の遺物が確認されている。北東～東麓には後述する久米上の平遺跡・久米上の平南遺跡・本洞遺跡が位置する。また、久米川を挟んだ対岸には、縄文時代中期の洞口遺跡、古墳時代後期の久米宮下遺跡がある。

(2) 調査の概要

① 工食用道路建設の立会

平成13(2001)年9月26日には久米上田遺跡における工食用道路造成の工事立会を行った。遺跡南端(最上部)をかすめるように、ほぼ等高線に沿って走る現道の改修工事で、現道北側(斜面谷側)に土盛りを行って拡幅するものであった。その拡幅部分に1箇所(第91図●・92図★地点)、重機により現道谷側の斜面を幅4m、深さ1.5mほど掘削し、掘削壁面を観察した。I層:表土(植食層。層厚30cm)の下に、II層:礫混じり暗褐色土(層厚80cm)、III層:花崗岩風化土が混じる褐色土(層厚15cm)、IV層:花崗岩由来の淡褐色砂質土(層厚20cm以上)の堆積が見られた。II層以下いずれもしまりなく、空隙が多い層で、上方からの崩落土と考えられる。遺物の包含・遺構は認められない。堅固な地盤まで掘削しなかったが、保安のためと、盛土工事であることを勘案して、この深度に止めた。遺跡内にかかる工事部分は長大であるが、観察された土層状況と現地地形から、これ以上の掘削は行わなかった。

② 本線部分の調査

平成14(2002)年5月16日には、久米大畑遺跡および久米上田遺跡における本線部分のトレンチ調査を実施した。調査地は、久米大畑遺跡が飯田市久米1920地番ほか、久米上田遺跡が同1962地番ほか



第 92 図 久米大畑遺跡・久米上田遺跡調査範囲図 (1 : 1500)

である。飯喬道路本線は久米大畑遺跡の南端部、久米上田遺跡の中央部を横断し、久米上田遺跡は6号橋部分にあたる。トレンチは久米上田遺跡に3箇所(1T～3T)、久米大畑遺跡に1箇所(4T)を設定し、重機を用いて掘り下げた。用地内では久米上田遺跡の東半部は上下二段の畑地になっているが、比較的自然地形の傾斜を残している。1Tは畑地上段から下段にかけて設定した。掘削深度は上段位置で1.8m、下段位置で50cmである。2Tは畑地上段に設定し、深さ70cmまで掘削した。一方、西半部は数段の水田が造成され、地形は大きく改変されている。3Tは水田の段の法面を削り込んで壁面を観察した。段の高さは約2mである。久米大畑遺跡も水田造成のため地形は大きく改変されているが、西部の一角に小範囲ながら自然地形の傾斜を留める部分があり、そこに4Tを設定し、深さ110cmまで掘削した。

1T～4Tで確認した土層は概ね共通しており、以下のように整理される。

I層：I層土とII層土のブロック。層厚は40cm。3Tのみ存在

II層：礫混じり暗褐色～黒褐色土。層厚は1Tが150cm、2Tが50cm、3Tが70cm、4Tが70cm

III層：礫混じり黄褐色土。層厚は1T・2T・4Tが30cm以上、3Tが90cm以上

I層は硬くしまりのある層で、水田の基盤となる造成土層と考えられる。II層は現表土層で、3Tではこの上にI層が盛られる。1Tでは他に比べ厚くなっているが、これは遺跡東縁を下る谷に近いことと関係する可能性がある。III層は、やや空隙があり堅固とはいえないが、各トレンチとも同じ性状を示している。

1T・2T・4Tにおいて、現表土層を剥いだIII層上面で平面的精査を行い、さらにIII層を30cmほど削り込んでみたが、遺構は検出されなかった。遺物は、I～III層からも、またトレンチ外においても発見されなかった。遺跡を決定付ける要因が認められなかったことから、面的調査は必要ないと判断した。

3 久米上の平遺跡・久米上の平南遺跡・本洞遺跡(第91図、PL26)

(1) 遺跡の概観

3遺跡は飯田市の西部に位置する。久米上の平遺跡・久米上の平南遺跡は久米地籍に所在し、城山北東麓の緩傾斜地に隣接して立地する。現況は宅地・水田および畑地となっている。本洞遺跡は伊豆木地籍に所在し、久米上の平南遺跡より南に500mほど離れた、城山東麓の尾根北斜面から谷部に立地する。現況は、谷底は水田、斜面部は樹林となっている。

『飯田の遺跡』(飯田市教育委員会1998)によれば、いずれの遺跡も縄文時代中期の遺物が確認されているが、発掘調査歴はない。久米上の平遺跡は、およそ200m×130mが遺跡範囲となっており、標高は500m～520mを測る。久米上の平南はおよそ200m×100mが遺跡範囲で、標高は500m～520mである。本洞遺跡はおよそ200m×100mが遺跡範囲で、標高は500m～525mを測る。

久米上の平遺跡の北西には前述した久米大畑遺跡・久米上田遺跡が位置する。本洞遺跡の東には縄文時代中期の野添遺跡がある。

(2) 調査の概要

① 久米上の平遺跡

調査は工事用道路建設に伴う立会である。工事用道路は現道を改修して造成される。改修部分にあたる第1～3地点の3箇所において立会を行った(第91図●1～3地点)。第1・3地点の立会は平成13(2001)年5月9日、第2地点は同年9月26日に実施した。

第1地点は遺跡南端部に位置し、東に下る谷にあたる。工事は南北に通る現道の西側に土盛りを行って拡幅し、道路脇にU字溝を掘削する。拡幅部分に、現道に沿う長さ6m、幅1.3mのトレンチを、重機を

用いて深さ 60 cm まで掘り下げた。土層は、Ⅰ層：表土（層厚 20 cm）、Ⅱ層：砂礫混じり灰褐色土（Ⅲ層土ブロック・灰色砂がラミナ状に入る。層厚 30 cm）、Ⅲ層：やや赤みを帯びた黄褐色土（花崗岩風化土主体で、20 cm 以上の灰黒色垂円礫が混じる。層厚 15 cm）が認められた。Ⅲ層から土器細片 3 点を検出したが、いずれも 1 cm 以下で、摩滅して丸くなっており、器種も帰属時期も明らかでない。Ⅱ層・Ⅲ層とも谷の内部に堆積した崩落土ないし流土で、土器片も流れ込みと判断される。遺構は検出されなかった。

第 3 地点は遺跡北西端に位置し、北東へ延びてきた尾根先端の斜面が平坦地へと変換する位置にあたる。工事は鋭角に屈曲する現道の内角部分の斜面を切り広げて拡幅する。拡幅部分に重機を用いて、およそ東西方向に長さ 6 m、幅 1.5 m のトレンチを深さ 1.2 m まで掘削した。土層は、Ⅰ層：表土（層厚 20 cm）、Ⅱ層：客土（東半部のみ存在。層厚 60 cm）、Ⅲ層：橙褐色土（花崗岩由来の極小礫を多く含み、Ⅳ・Ⅴ層土ブロックが混じる。層厚 30 cm）、Ⅳ層：暗褐色土（花崗岩由来の極小礫が混じり、粘性あり。Ⅴ層との層界は漸移的。層厚 15 cm）、Ⅴ層：褐色土（粘性・しまりあり。層厚 40 cm 以上）が認められた。Ⅱ層の存在から、平坦地は人為的な造成によることが判った。Ⅳ層は造成以前の旧表土と考えられたため、その直下で平面的な精査を行ったが、遺構は確認されなかった。各層とも出土遺物は皆無である。

第 2 地点は、第 3 地点から続く平坦地が第 1 地点の谷へと傾斜を強めてゆく、その落ち際にあたる。現況は水田となっている。工事は道路改修に伴う暗渠排水管の付け替えで、旧暗渠を撤去して、ほぼ同じ位置に新たな暗渠を設置する。旧暗渠掘り方埋土を除去した状態で、その壁面を観察した。土層は、Ⅰ層：水田土層（層厚 40 cm）、Ⅱ層：黄褐色～青灰色砂・粘土の互層（層厚 100 cm 以上）が認められた。遺構・遺物とも検出されなかった。

② 久米上の平南遺跡

調査は、平成 13（2001）年 4 月に現地踏査を行った。現地は、東に延びてきた尾根先端の急斜面が平坦地へと変換する位置にあたる。尾根の南斜面を走る現道が、ここで尾根先端を回りこんで北に向きを変えるが、工事はその屈曲部の内側を切り広げて路幅を拡張するものであった。しかし、工事で削られる尾根先端はもともとかなりの傾斜があるうえ、現道の造成によってある程度削られていること、掘削部分の上部には城郭施設等の遺構を推測させる状況が認められないことから、この踏査をもって調査を終了した。

③ 本洞遺跡

平成 13（2001）年 5 月 9 日に工事用道路建設の工事立会を行った。現地は東北に下る深い谷にあたる。工事は谷の右岸斜面を通る現道の改修で、現道の山側を切り広げて路幅を拡張する。拡幅範囲の大部分は、崖に近い急斜面で、遺構や遺物包含層が存在しないことは明白と思われたが、一箇所、支谷が切れ込む部分は幅 10 m ほど、奥行 20 m ほどの緩傾斜地となっていた。この箇所の道路拡幅部分に、およそ支谷延長方向に平行して長さ 2.5 m、幅 70 cm トレンチを 2 本設定し、重機で掘り下げた（第 91 図●地点）。掘削深は工事最大深度（U 字溝底）の深さ 50 cm とした。観察された土層は両トレンチとも同じで、Ⅰ層：淡褐色砂（層厚 10 cm）の下に、Ⅱ層：灰色砂・粘土互層が堆積していた。遺構・遺物とも検出されなかった。

同日、工事用道路の立会終了後に、本線部分について踏査を行った。久米ヶ城跡に隣接するため、特に谷兩岸の尾根頂部において、特に城郭施設の有無に留意して観察したが、城郭施設等の遺構を推測させる状況は認められなかった。遺物は谷部を含めて確認されなかった。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1998 『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
 長野県教育委員会 1997 『大規模開発事業地内遺跡 遺跡詳細分布調査報告書』
 宮坂武男 1999 『図解 山城探訪 下伊那資料編』 長野日報社
 山本村誌編纂委員会 1957 『山本村誌』

第6章 結語

飯喬道路の建設に関連して発掘調査された15遺跡の報告をおこなってきた。そのなかで、白山・寺沢・並松・太鼓洞・横山・久米ヶ城跡・久米大畑・久米上田・久米上の平・久米上の平南・本洞の11遺跡については、遺構・遺物が確認されないか、僅かな遺物が出土したにとどまった。しかし、今回の調査部分が遺構分布の空白域であることは、集落や城郭の範囲を考えるうえで重要な情報となろう。その他の4遺跡、山本大塚遺跡、竹佐中原遺跡、森林遺跡、下り松遺跡では良好な資料を得ることができた。以下、時代別にその成果を振り返り、結語としたい。

旧石器時代 竹佐中原遺跡・森林遺跡で旧石器時代の石器が出土している。特に、竹佐中原遺跡で出土した石器群は、日本列島における旧石器文化の始源に関わる重要な資料である。ただし、これらについては、『国道474号（飯喬道路）埋蔵文化財発掘調査報告書2』で詳細な報告をおこなう。

縄文時代 竹佐中原遺跡・森林遺跡・下り松遺跡で遺構が確認され、該期の集落形態や生業活動のあり方に関する資料を提供した。竹佐中原遺跡では、陥し穴と中期後葉に属する住居跡が検出され、時期的に異なると考えられるが、遺跡の立地する台地上が狩猟域と居住域として利用されていたことが明らかになった。森林遺跡で確認された住居跡は、通常の住居と異なって小形で簡素な構造をもち、住居内での石鏃製作が想定されることから、集落から離れた土地で狩猟活動をおこなう際の出小屋的な性格を推定した。

下り松遺跡では、中期中葉から後葉にかけて、一時期1～2軒の住居に土坑群が伴う集落形態が複数時期にわたって継続する状況を捉えることができた。なお、竹佐中原遺跡の旧石器と同質のホルンフェルス製石器については、検討の結果、縄文時代の所産である可能性が高いと判断した。この石材の使用は阿知川周辺の地域的特色として把握し得る。

弥生時代 竹佐中原遺跡・森林遺跡で後期の住居跡が確認された。後期における天竜川に近い低位地帯から、より高位の地帯への集落展開という下伊那全体の動向に連動して成立した集落として理解されるが、特に、森林遺跡は、拠点集落に特徴的な大形住居を含むことが注意される。大形住居自体の性格とともに、該期の集落構造や、拠点集落と周辺集落の関係を考えていくうえで興味深い事例となろう。竹佐中原遺跡・森林遺跡の弥生集落を支えた農耕については、水田遺構、畑遺構とも確認されず、それらの検出は今後の課題として残された。

古代 竹佐中原遺跡で住居跡が確認された。山本・竹佐地域では古代遺構として初めての検出例となる。当地の古代の状況は不明な部分が多いけれども、令制東山道が当地を通過していた可能性は高く、阿知駅の維持・運営を支える地域であったことも推測される。東山道との関連を含め、今回の発見は当地における古代の歴史様相を考えていくうえでの資料蓄積の端緒となる。

近世 山本大塚遺跡で近世前半の墓が確認された。そのうち1基は出土遺物に恵まれ、六道銭の扱い方を含めた副葬品の在り方など、当時の葬送儀礼に関する貴重な資料となるであろう。また、火打金と伴出した火打石は、近世のみならず、ともすれば見過ごされがちなこの種の資料について、注意を喚起することとなった。

今回得られた資料には、多くの様々な課題が含まれている。しかしながら、担当者の努力不足により、そうした課題を充分引き出すことができなかつた点、また、応えることができなかつた点、反省したい。これらの資料が公開され、多くの人々によって活用されて、はじめて成果は生きてくると思う。担当者としてそれこそが願いである。

白山遺跡
寺沢遺跡

左：白山遺跡
1トレンチ
の掘削
(南東から)
右：白山遺跡
1トレンチ
(南東から)



左：白山遺跡
2トレンチ
(北から)
右：寺沢遺跡
北低位部
(西から)



左：寺沢遺跡
1トレンチ
西壁断面
(東南東から)
右：寺沢遺跡
2トレンチ
(南から)



左：寺沢遺跡
南高位部
(北東から)
右：寺沢遺跡
5トレンチ
(東南東から)



左：寺沢遺跡
5トレンチ
拡張部
西壁断面
(東から)
右：寺沢遺跡
7トレンチ
(北東から)



山本大塚遺跡



左：SK01 断面
（南西から）
右：SK02 完掘
（北から）



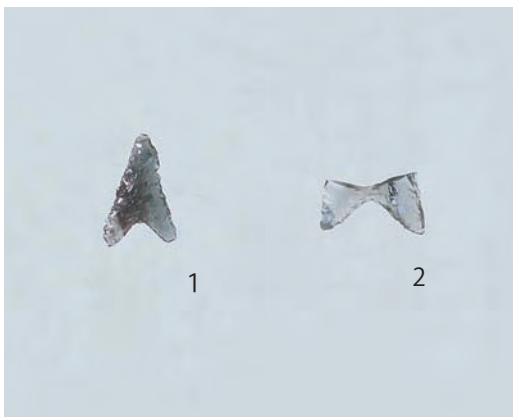
左：SK03・SK04
完掘
（北から）
右：SK04
副葬品出土状況
（北から）



左：SK05・SK06
完掘
（北西から）
右：SK07
土器出土状況
（北から）



左：4区南全景
（東から）
右：SD03～06
完掘
（東から）



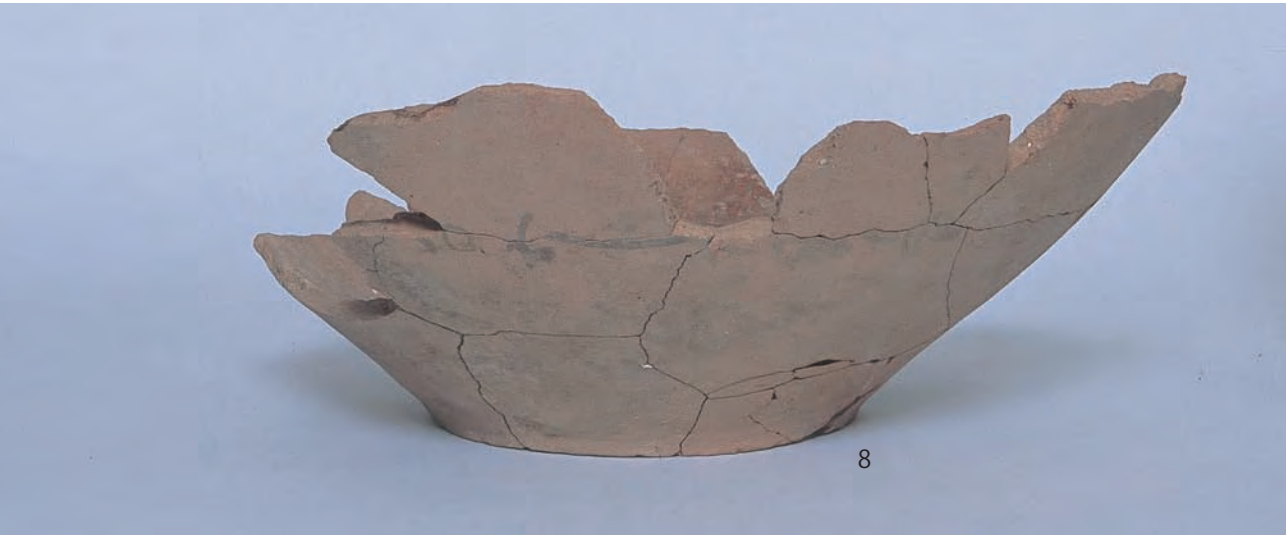
左：石鏃
右：打製石斧

山本大塚遺跡

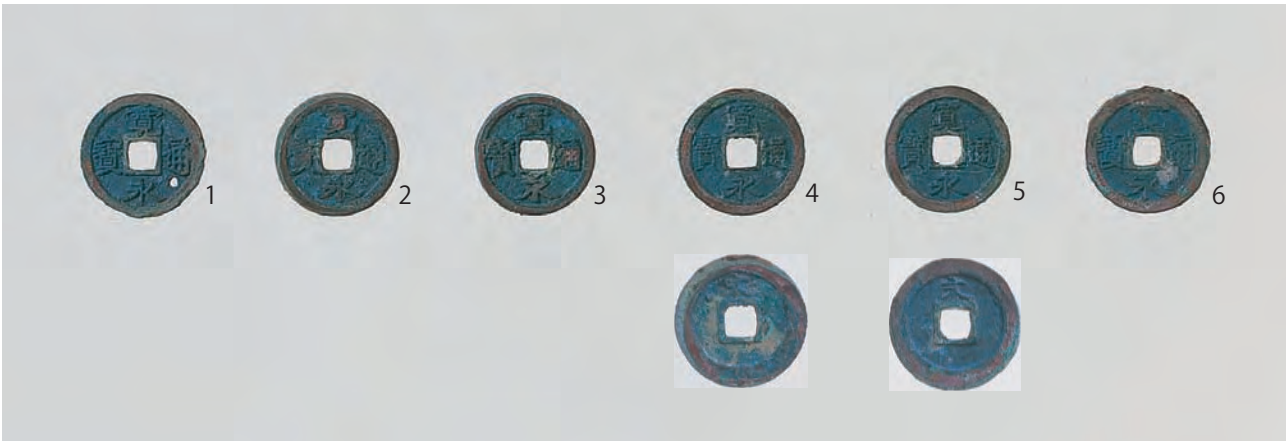
土器
陶器



SK07
埋設土器



SK03
副葬品
錢貨



SK04
副葬品
錢貨





SK04
副葬品
砥石
硯
丸石
火打石
キセル
火打金
釘



並松遺跡

左：1トレンチ
（南から）
右上：3トレンチ
（南南西から）
右下：4トレンチ
（南南西から）



左：4トレンチ
断面
（北東から）
右：石鏃

竹佐中原遺跡



北西上空から
竹佐中原遺跡
を望む

左：SB03 完掘
（東から）
右：SB03 炉
（南南西から）



左：SB03 炉
遺物出土状況
（南南西から）
右：SK10
遺物出土状況
（西から）



左：SK11
遺物出土状況
（西から）
右：SB02 完掘
（南から）



竹佐中原遺跡



左：SB02 炉断面
(西から)
右：SB02 北東部
石片出土状況
(南から)



左：SB01 完掘
(西から)
右：SB01
遺物出土状況
(西から)



左：SB01
カマド脇
遺物出土状況
(西から)
右：ST01
検出状況
(北西から)



石鏃
有茎尖頭器
搔器
有孔石製品



磨製石斧破片
打製石斧
横刃型石器

竹佐中原遺跡

SB03
土器



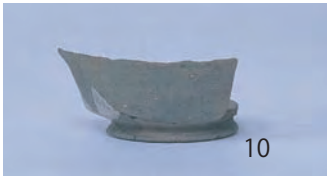
SK01・10
土器



SK11
土器



左・右：SB01
土器



左・右：SB01
土器



森林遺跡



東北東上空から
森林遺跡
を望む



左：SB01 完掘
(西から)
右：SB03 完掘
(東から)



左：SB02 完掘
(南西から)
右：SB02
P1 完掘
(北西から)



左：SB02
遺物出土状況
(南から)
右：SB04
遺物出土状況
(北西から)

森林遺跡

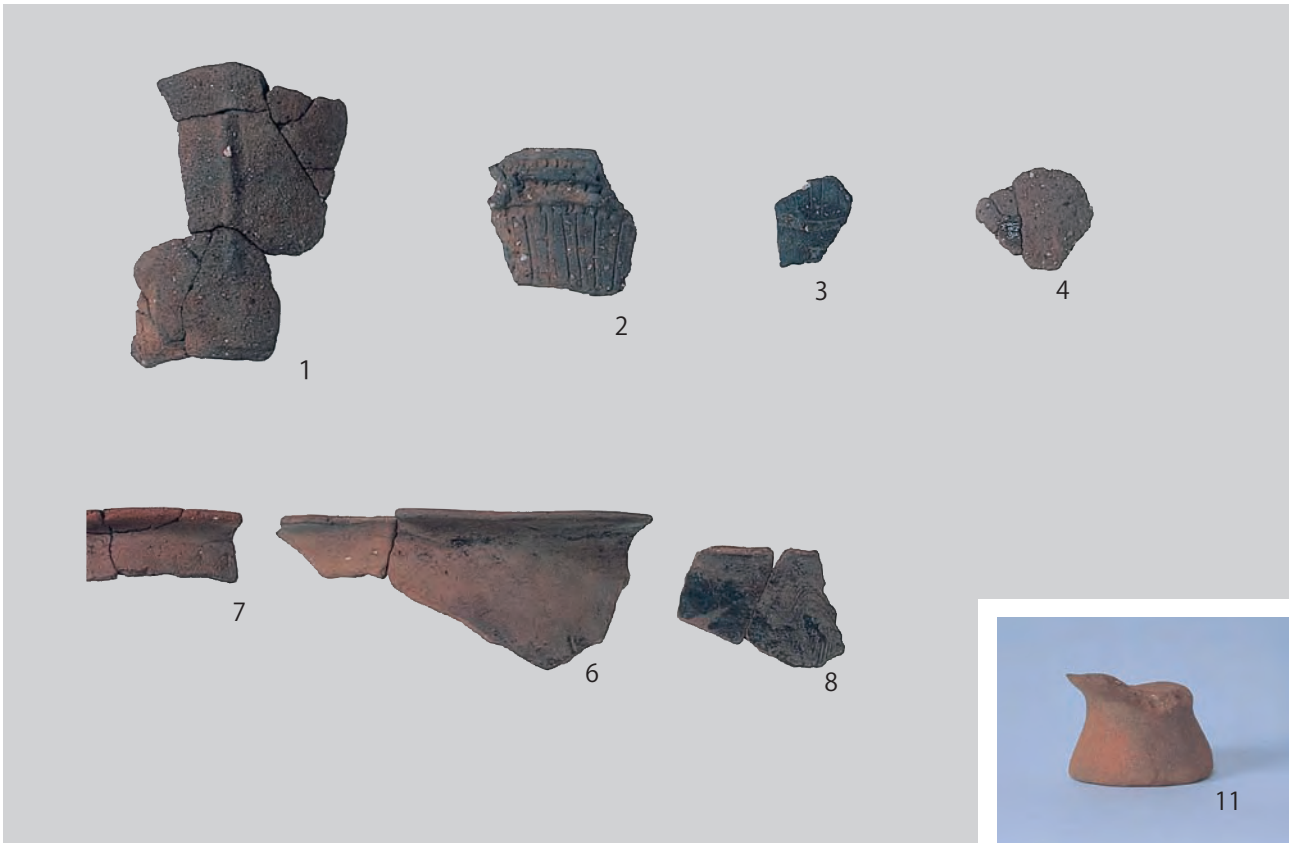
左：SB04 完掘
（南西から）
右：SB04 炉
（西から）



左：SB04
炉体土器外体
（南西から）
右：SK01 完掘
（北西から）



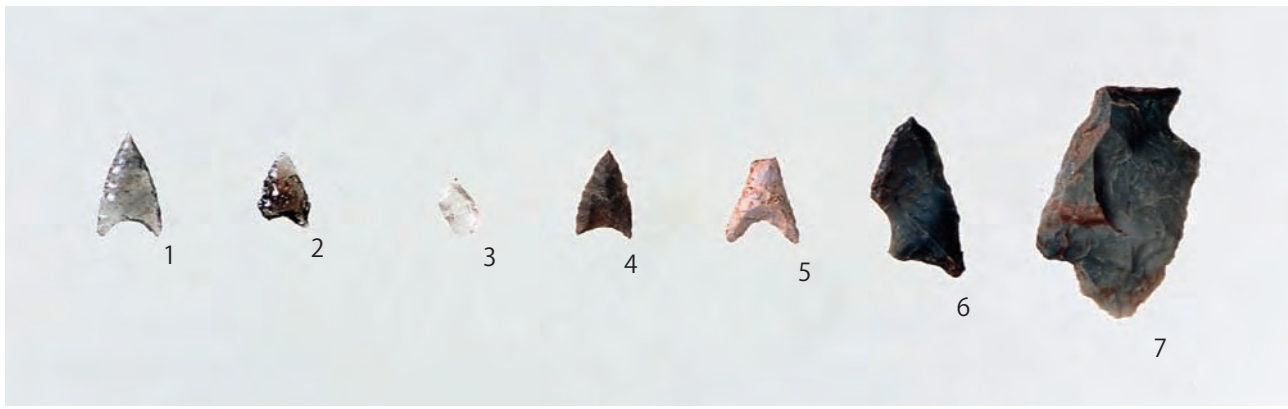
SB01・03・02
土器



右下：SB02
土器

左・中：SB04
炉体土器
右：SB04
土器





石鏃
石匙



打製石斧
橫刃型石器
刃器
敲石



石庖丁
敲石
石製紡錘車

下り松遺跡

南西上空から
下り松遺跡を
望む



3区
遺構群
北東から



下り松遺跡



左：SB01 完掘
（北東から）
右：SB01 炉 1
（東から）



左：SB01
遺物出土状況
（南西から）
右：SB01
遺物出土状況
（南から）



左：SB02 完掘
（北から）
右：SB02
遺物出土状況
（南から）



左：SB03 完掘
（南から）
右：SB03
埋甕
（北東から）



左：SB04 完掘
（南西から）
右：SB04 炉完掘
（北東から）

下り松遺跡

左：SB05 完掘
（南から）
右：SB05 炉
（東から）



左：ST01 完掘
（西から）
右：SK03 断面
（南西から）



左：SK25・26・27
完掘
（北北東から）
右：SK62
遺物出土状況
（北西から）



左上：SK73
遺物出土状況
（南東から）
左下：3区南壁
土層断面
（北から）
右：SD02
（西北西から）

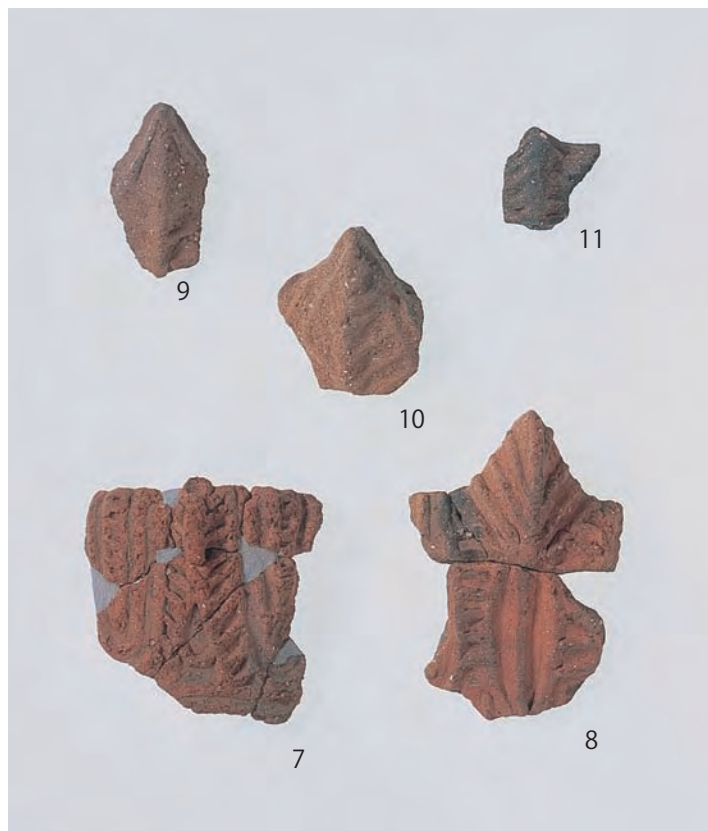




SB01
土器



左・右：SB01
土器



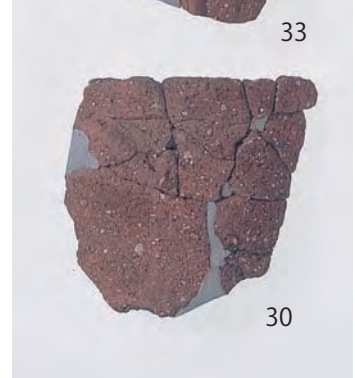
左・右：SB01
土器

下り松遺跡

SB01
土器

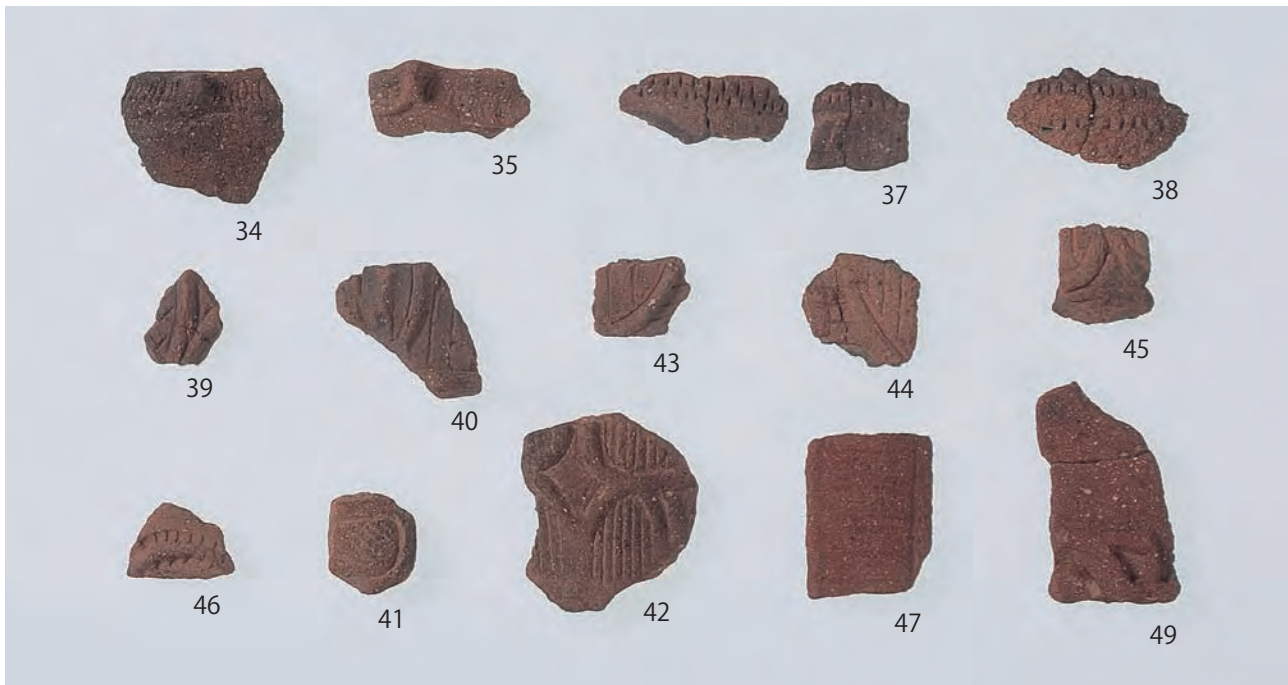


左上下・右
: SB01
土器

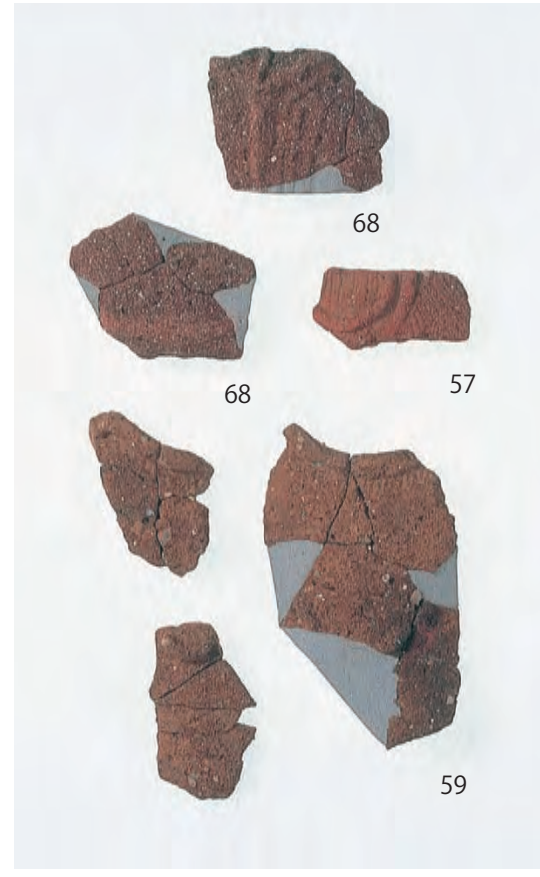


SB01
土器

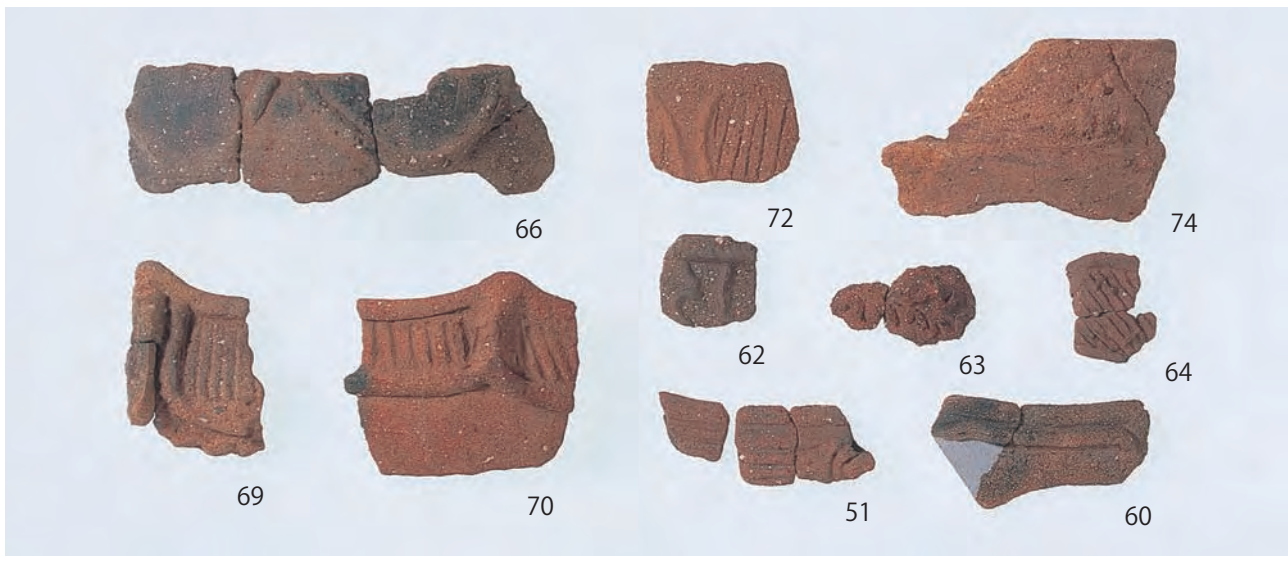




SB01
土器



左上下・右
: SB02
土器



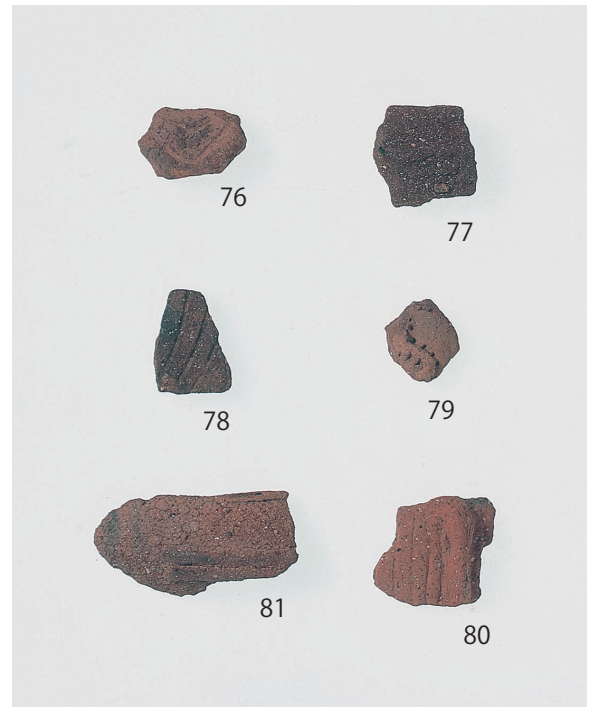
SB02
土器

下り松遺跡

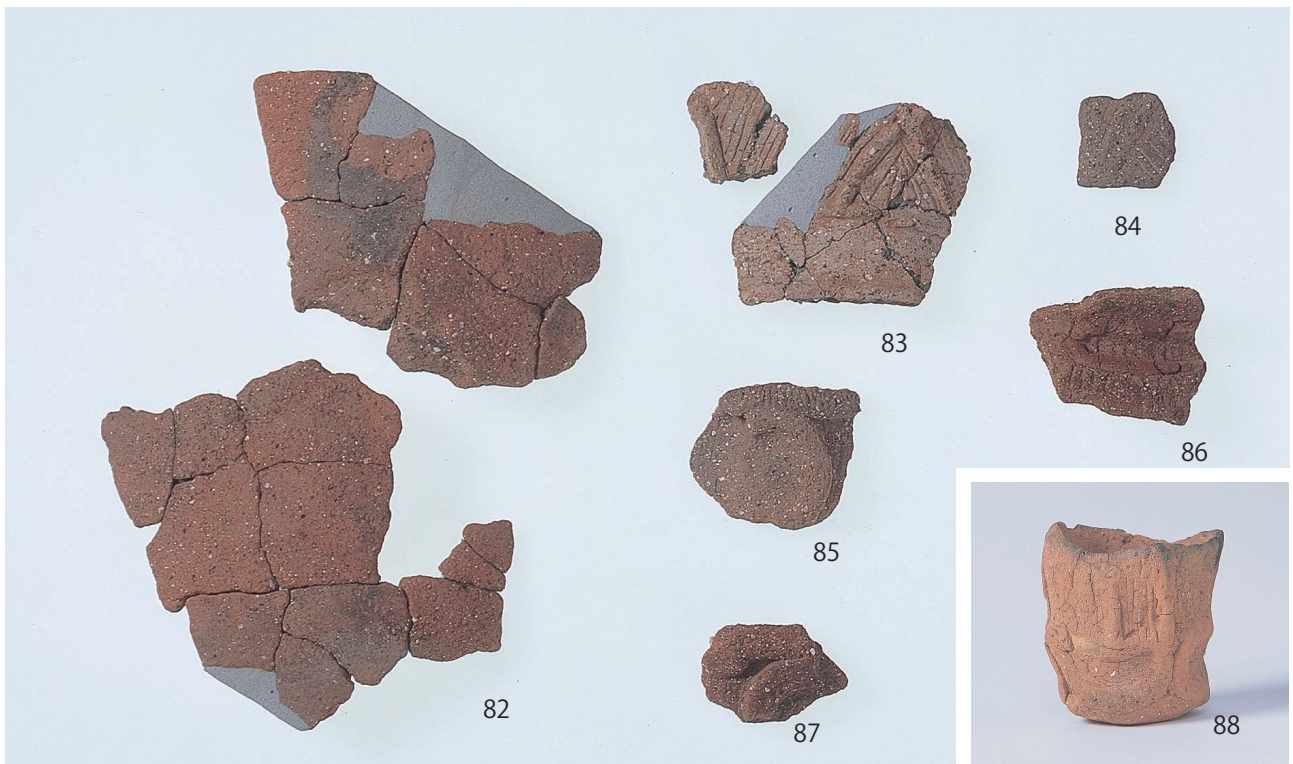
SB02
土器



左：SB03
埋甕
右：SB03
土器



SB04
土器



右下：SB04
土器





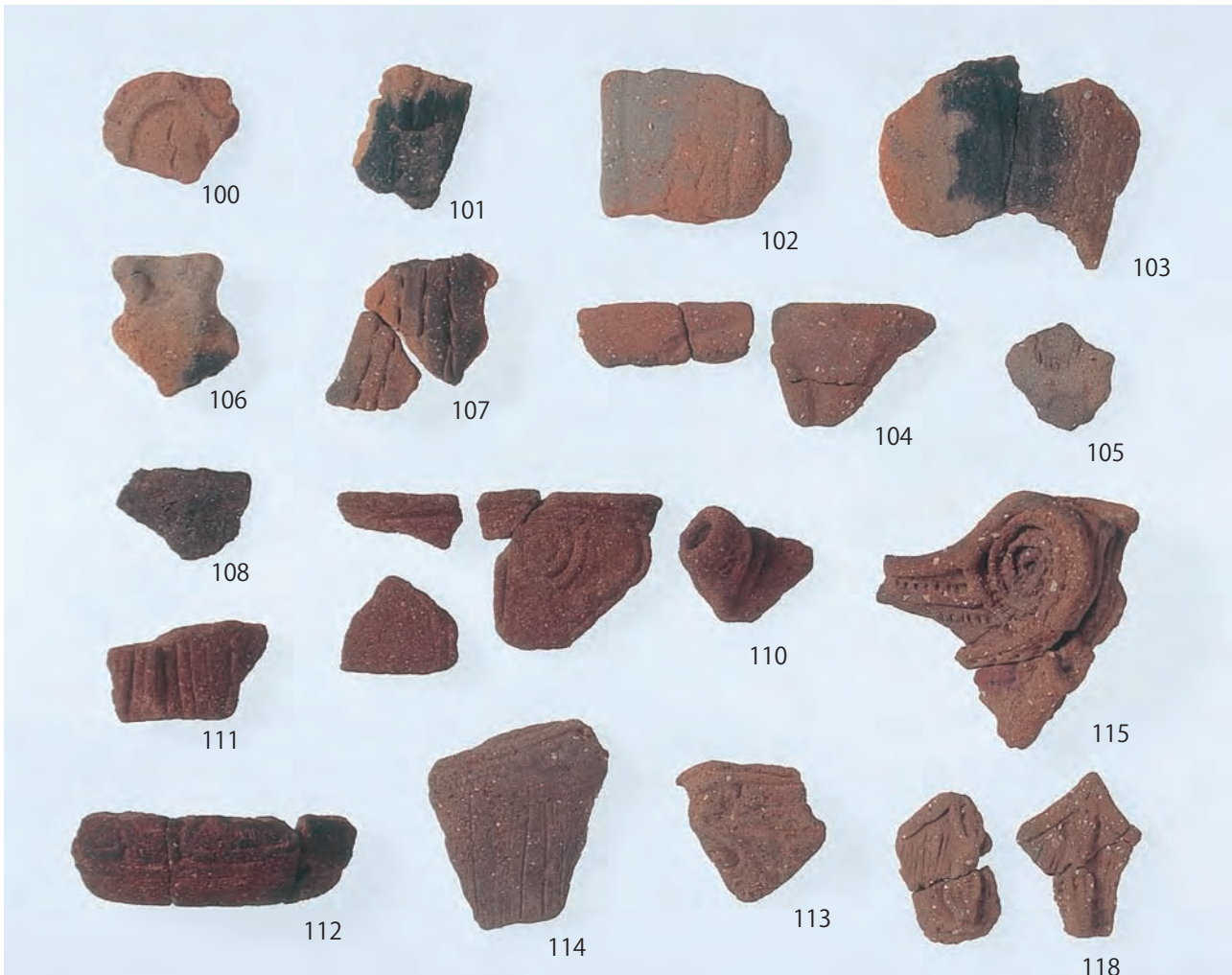
左・右：SB05
土器



SB05
土器



右下：SB05
土器



ST01
SK01・06
08・18
土器

下り松遺跡

左：SK34
中：SK32
右：SK25
土器



120



123



125

SK21・27
30・32
41・48
52
土器



119

124

128

129

121

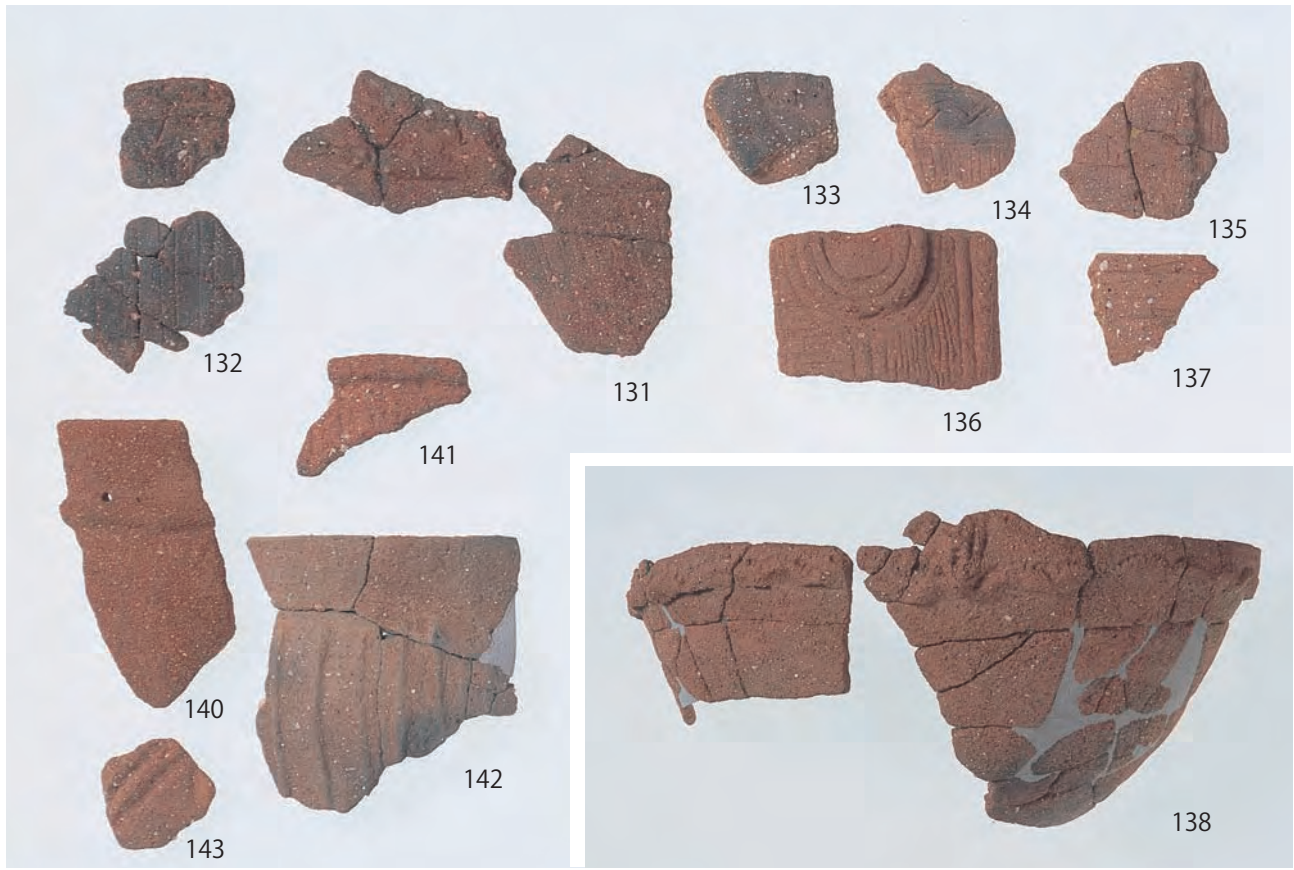
122

126

127

130

SK62・64
66・71
75・76
80・86
土器



132

133

134

135

131

136

137

141

140

142

143



138

右下：SK73
土器



144

148

147

149

150

146

145

151

1・3区遺構外
土器



3区遺構外
土器



3区遺構外
土器



石鏃
石鏃未成品

下り松遺跡

石匙
削器
石錐
搔器
楔形石器
块状耳飾



磨製石斧





67



68



69



70



71



72



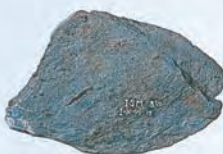
73



74



75



76



77



78



79



80



88

横刃型石器



28



81

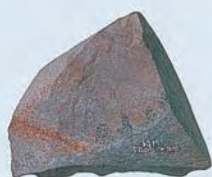


82



83

ヘラ状石器
削器
横刃型石器
二次加工がある剥片



84



86



85



87

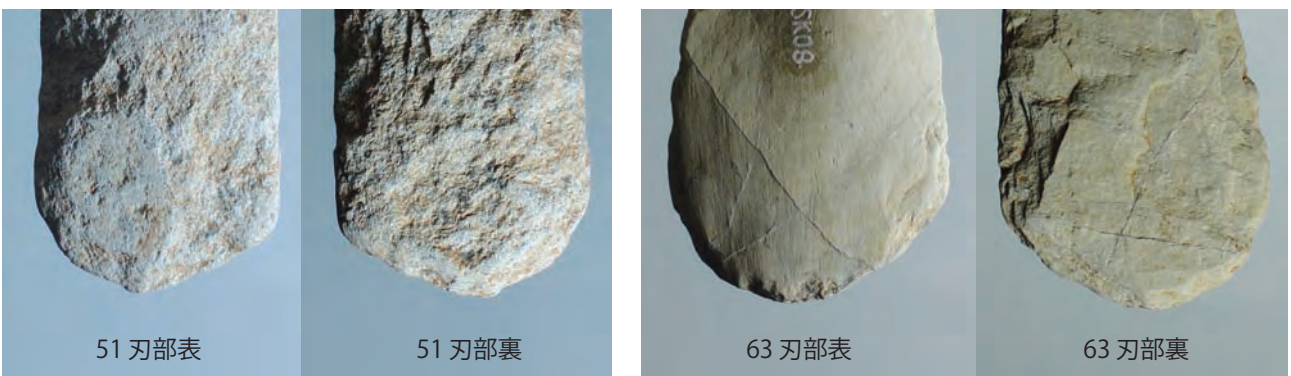
下り松遺跡



打製石斧



打製石斧



打製石斧
磨耗痕

51 刃部表

51 刃部裏

63 刃部表

63 刃部裏



99



100



101



102



103



105

磨石



107



108



109



110



111



112

石錘



113



106



116

左：石皿
右上：敲石B
右下：石皿

太鼓洞遺跡
横山遺跡

左：太鼓洞遺跡・
横山遺跡を
望む
(東から)
右：太鼓洞遺跡
2トレンチ
(北東から)



左：太鼓洞遺跡
3トレンチ
(北東から)
右：太鼓洞遺跡
6・7トレンチ
(西南西から)



左：太鼓洞遺跡
9トレンチ
(南西から)
右：太鼓洞遺跡
8・10
トレンチ
(西から)



左：横山遺跡
1トレンチ
(北東から)
右：横山遺跡
2・3トレンチ
(南西から)



左：横山遺跡
4トレンチ
(西から)
右：横山遺跡
4トレンチ
深掘り部
土層断面
(南西から)





横山遺跡
久米ヶ城跡
城山山麓
の遺跡

左：横山遺跡
5トレンチ
(南西から)
右：横山遺跡
8トレンチ
(西から)



左：久米ヶ城跡の
踏査1
(西から)
右：久米ヶ城跡の
踏査2
(北東から)



左：久米大畑遺跡・
久米上田遺跡
を望む
(東から)
右：久米大畑遺跡
トレンチ
(南東から)



左：久米上田遺跡
2トレンチ
(南南東から)
右：久米上の平遺跡
2トレンチ
(南東から)



左：久米上の平遺跡
3トレンチ
南西壁土層断面
(東から)
右：本洞遺跡
2トレンチ
(北から)

報告書抄録

ふりがな	こくどう 474 ごう (いいたかどうろ) まいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしよ
書名	国道 474 号 (飯橋道路) 埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	白山遺跡 山本大塚遺跡 寺沢遺跡 並松遺跡 竹佐中原遺跡 森林遺跡 下り松遺跡 太鼓洞遺跡 横山遺跡 久米ヶ城跡 久米大畑遺跡 久米上田遺跡 久米上の平遺跡 久米上の平南遺跡 本洞遺跡
巻次	3
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	86
編著者	若林 卓 鶴田典昭
編集機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒 388 - 8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963 - 4 Ⅱ: 026 - 293 - 5926
発行年月日	2009 年 (平成 21 年) 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度 (世界測地系)	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
しろやまいせき 白山遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市竹佐	20205	322	北緯 35 度 28 分 19 秒 東経 137 度 45 分 56 秒	2003.7.4	40	国道建設に伴う事前調査
やまもとおほつかいせき 山本大塚遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市竹佐		324	北緯 35 度 28 分 15 秒 東経 137 度 45 分 53 秒	2001.6.25-7.5、11.26-12.21 2003.8.5-9.17	1,400 4,400	
てらさわいせき 寺沢遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市竹佐		325	北緯 35 度 28 分 10 秒 東経 137 度 45 分 50 秒	2003.7.1-2003.7.4	260	
なまついせき 並松遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市竹佐		330	北緯 35 度 28 分 03 秒 東経 137 度 45 分 47 秒	2001.6.1-6.13 2002.7.24	200 240	
たけさなかはらいせき 竹佐中原遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市竹佐		331	北緯 35 度 27 分 56 秒 東経 137 度 45 分 44 秒	2000.11.30-12.8 2001.7.4-12.21 2002.4.11-12.20 2003.5.12-10.23 2004.10.13-11.29 2005.4.18-9.3 2006.9.4-11.14	4,860 6,500 13,250 12,500 2,100 1,600 2,740	
もりやししいせき 森林遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市竹佐		332	北緯 35 度 27 分 49 秒 東経 137 度 45 分 55 秒	2001.7.13-7.18 2002.9.3-12.20 2003.4.8-5.23	1,300 9,350 4,300	
さがりまついせき 下り松遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市竹佐		329	北緯 35 度 27 分 51 秒 東経 137 度 46 分 08 秒	2001.8.2-8.10、11.12-12.19 2003.4.3-6.13	5,700 4,500	
たいこぼらいせき 太鼓洞遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市竹佐		328	北緯 35 度 27 分 52 秒 東経 137 度 46 分 17 秒	2004.4.13-4.22	250	
よこやまいせき 横山遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市竹佐		327	北緯 35 度 27 分 52 秒 東経 137 度 46 分 20 秒	2004.4.13-4.22	300	
くめがじょうせき 久米ヶ城跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市久米		21	北緯 35 度 28 分 03 秒 東経 137 度 46 分 52 秒	2002.7.4 2003.10.9 2004.6.1、7.8	踏査	
くめおほたいせき 久米大畑遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市久米		345	北緯 35 度 28 分 03 秒 東経 137 度 47 分 02 秒	2002.5.16	15	
くめうたせき 久米上田遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市久米		346	北緯 35 度 28 分 03 秒 東経 137 度 47 分 04 秒	2001.9.26 2002.5.16	立会 45	
くめうえのたいらいせき 久米上の平遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市久米		347	北緯 35 度 28 分 01 秒 東経 137 度 47 分 17 秒	2001.5.9-9.26	立会	
くめうえのたいらみなみせき 久米上の平南遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市久米		348	北緯 35 度 27 分 01 秒 東経 137 度 47 分 17 秒	2001.4	立会	
ほんぼらいせき 本洞遺跡	ながのけんいいたかどうろ 長野県飯田市伊豆木	385	北緯 35 度 27 分 41 秒 東経 137 度 47 分 22 秒	2001.5.9	立会		

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白山遺跡	集落	縄文中期	なし	なし	
山本大塚遺跡	墓	縄文中期 中世 近世	近世墓 2	縄文土器・石器 中世焼物 銭貨、キセル、火打金、釘、火打石、硯、砥石	近世墓に伴う豊富な副葬品(火打金と火打石が共伴)
寺沢遺跡	散布地	縄文中期	なし	なし	
並松遺跡	散布地	縄文中期	なし	縄文土器・石器	
竹佐中原遺跡	集落	旧石器 縄文中期 弥生後期 古代	旧石器集中 4 縄文陥し穴 1 縄文中期住居跡 1 弥生後期住居跡 1 古代住居跡 1	旧石器、縄文中期・弥生後期・古代土器、石器	古代住居跡は山本・竹佐地域では初見
森林遺跡	集落	旧石器 縄文中期 弥生後期	縄文中期住居跡 2 弥生後期住居跡 2	旧石器、縄文中期・弥生後期土器、石器	縄文中期建物内での石鏃製作 弥生後期の大型住居
下り松遺跡	集落	縄文中期	縄文中期住居跡 5 土坑 77	珧状耳飾 縄文中期土器、石器	縄文早期末～前期初頭の珧状耳飾 縄文中期の小規模集落
太鼓洞遺跡	散布地	平安	なし	なし	
横山遺跡	散布地	縄文中期	なし	なし	
久米ヶ城跡	城館	中世	なし	なし	
久米大畑遺跡	散布地	縄文中期	なし	なし	
久米上田遺跡	散布地	縄文中期	なし	なし	
久米上の平遺跡	散布地	縄文中期	なし	摩滅した土器細片 3 点	
久米上の平南遺跡	散布地	縄文中期	なし	なし	
本洞遺跡	散布地	縄文中期	なし	なし	

長野県埋蔵文化財センター発掘報告書 86

国道 474 号（飯喬道路）
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

－飯田市内その 3－

白山遺跡 山本大塚遺跡 寺沢遺跡 並松遺跡
竹佐中原遺跡（縄文時代以降） 森林遺跡 下り松遺跡
太鼓洞遺跡 横山遺跡 久米ヶ城跡 久米大畑遺跡
久米上田遺跡 久米上ノ平遺跡 久米上ノ平南遺跡 本洞遺跡

発行 平成 21（2009）年 3 月 31 日

発行者 国土交通省中部地方整備局

（財）長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒 388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157

E-mail maibun@grn.janis.or.jp

印刷 富士印刷株式会社

〒 380-0911 長野県長野市稲葉 909

Tel 026-221-2141（代）